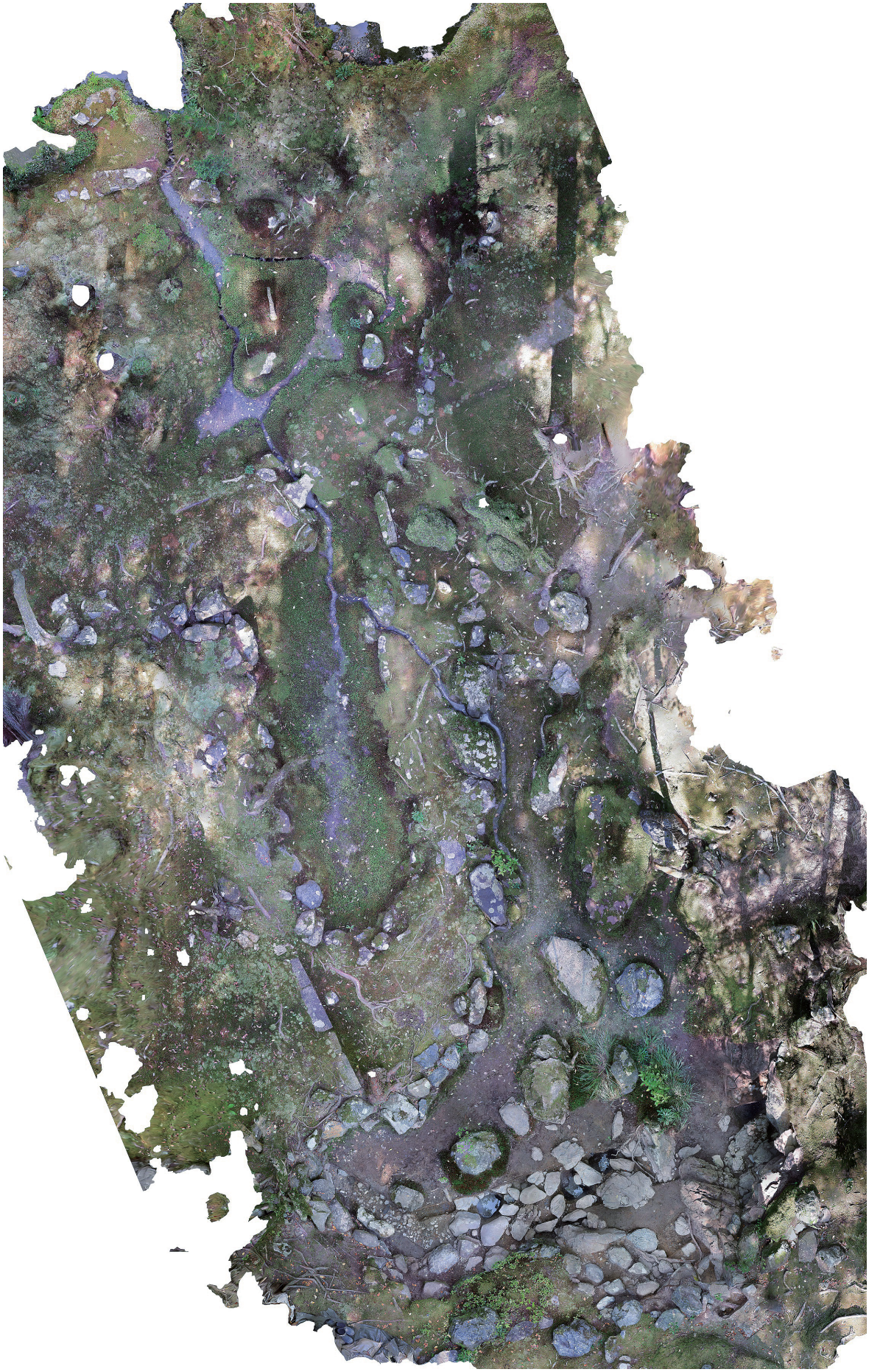
京都市内遺跡試掘調査報告

令和四年度

2023年3月

京　都　市　文　化　市　民　局



１　Ⅲ- ８　６～８区オルソ写真



１　Ⅲ- ８　６区近世池底検出状況（北西から）



２　Ⅲ- ８　７区南端断割状況（北から）



３　Ⅲ- ８　８区及び滝石組（東から）



４　Ⅱ- １　石垣検出状況　（西から）

例　言

1　本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した令和 4 年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。令和 4 年 1 月から令和 4 年 12 月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果のあったものについて本文で報告している。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、原則一覧表にのみ掲載している。

試掘調査を実施したすべての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載している（76 ～ 82 頁）。なお、各章表題末尾の番号と調査一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。

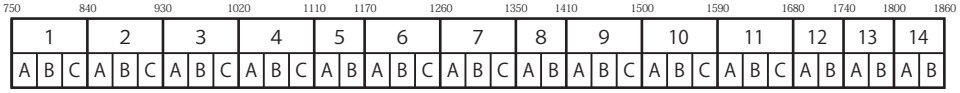
2　本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。

3　本書報告の調査のうち、基準点測量を実施した調査の方位及び座標は、世界測地系平面直角座標系Ⅵによる。標高は T.P.（東京湾平均海面高度）による。また、これ以外の場合は、既存公共物などを仮基準点（KBM）として用いている。

4　本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺 1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。

図版 1 ～ 13　1/8,000　　図版 14 ～ 20　1/10,000

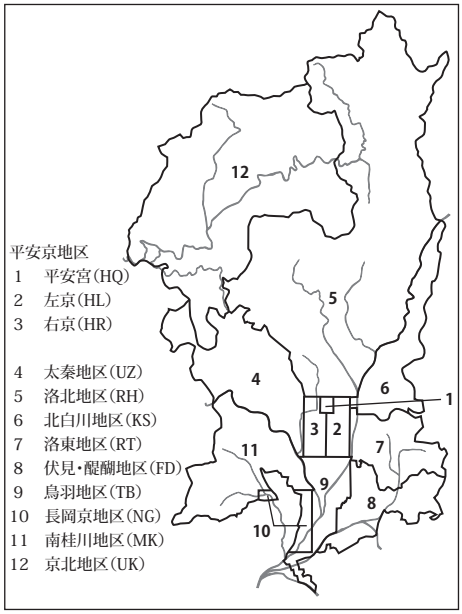
5　本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は、一部を除き、平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第 12 号　（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2019 年に準拠する。



6　本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。

7　調査及び整理にあたっては、飯沼俊哉・上茶谷美保・上別府亜紀・早川仁志・林友紀・松本和子・山口大地・吉本健吾の協力を得た。

8　調査及び本書作成は、京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課が担当し、（公財）京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。



調査地区割図

本　文　目　次

Ⅰ　試掘調査の概要 …… 1

Ⅱ　平安左京

1　一条四坊十町跡、公家町遺跡、京都新城跡（上京区京都御苑２の一部）…… 4
2　五条二坊十一町跡、烏丸綾小路遺跡（下京区吉水町地内）…… 14
3　七条三坊八町跡（下京区八百屋町 264 他）　…… 18
4　九条一坊九町跡、教王護国寺旧境内（南区八条通大宮西入八条町 438 他）　…… 24

Ⅲ　その他 市内遺跡

1　円宗寺跡（右京区御室小松野町 18 他）　…… 26
2　嵯峨遺跡、清涼寺境内（右京区嵯峨釈迦堂藤ノ木町 29-2 の一部他）　…… 31
3　寺町旧域、公家町遺跡（中京区関東屋町）　…… 34
4　大宅廃寺、大宅廃寺境内瓦窯跡、大宅遺跡（山科区大宅鳥井脇町 6-1 他）　…… 45
5　伏見城跡（伏見区御堂前町 616-1 他）　…… 52
6　鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡（伏見区竹田田中殿町 95 他）　…… 59
7　長岡京左京四条三坊十五町跡（伏見区羽束師菱川町 545 他）…… 64
8　史跡・特別名勝　西芳寺庭園（西京区松尾神ヶ谷町 56）　…… 67

Ⅳ　試掘調査一覧表 …… 76

報告書抄録 …… 83

挿　図　目　次

Ⅰ　試掘調査の概要

図１　年次別・地区別試掘調査実施件数 …… 1

Ⅱ - １　平安京左京一条四坊十町跡、公家町遺跡、京都新城跡

図２　調査位置図 …… 4
図３　調査区配置図 …… 5
図４　１区平・断面図 …… 7
図５　石垣平・立面図 …… 8
図６　２・３区平・断面図 …… 8
図７　土器類実測図 …… 9
図８　瓦類実測図及び拓影 …… 10
図９　遺構変遷図 …… 11
図 10　京都新城堀推定図 …… 12
図 11　１区石垣検出状況 …… 12
図 12　矢穴 …… 12

Ⅱ - ２　平安京左京五条二坊十一町跡、烏丸綾小路遺跡

図 13　調査位置図 …… 14
図 14　調査区配置図 …… 15
図 15　２区掘削状況 …… 15
図 16　調査区断面図 …… 16
図 17　出土遺物実測図 …… 17

Ⅱ - ３　平安京左京七条三坊八町跡

図 18　調査位置図 …… 18
図 19　調査区配置図 …… 18
図 20　遺構面平面断面図① …… 20
図 21　遺構面平面断面図② …… 21
図 22　出土遺物実測図 …… 22

Ⅱ - ４　平安京左京九条一坊九町跡、教王護国寺旧境内

図 23　調査位置図 …… 24

図 24　調査区配置図 …… 24
図 25　調査区平・断面図 …… 25

Ⅲ - 1　円宗寺跡

図 26　調査位置図 …… 26
図 27　調査区配置図 …… 26
図 28　1 区平・断面図 …… 27
図 29　2 区断面図 …… 28
図 30　遺物実測図及び拓影 …… 28
図 31　遺物実測図及び拓影 …… 29
図 32　遺物実測図及び拓影 …… 30

Ⅲ - 2　嵯峨遺跡、清凉寺境内

図 33　調査位置図 …… 31
図 34　調査区配置図 …… 31
図 35　1・2 区断面図 …… 32
図 36　3 区平・断面図 …… 32
図 37　2・3 区平面図 …… 33

Ⅲ - 3　寺町旧域、公家町遺跡

図 38　調査位置図 …… 34
図 39　調査区配置図 …… 34
図 40　1・2 区断面図 …… 35
図 41　3 区断面図 …… 36
図 42　3 区第 4・5 面平面図 …… 36
図 43　3 区第 2・3 面平面図 …… 37
図 44　SK3 断面図 …… 38
図 45　3 区・4 区第 1 面平面図 …… 38
図 46　出土遺物実測図 1 …… 39
図 47　出土遺物実測図 2 …… 40
図 48　暗渠検出地点位置図 …… 41
図 49　№ 2 地点暗渠 1 平・断面図 …… 41
図 50　№ 5 地点暗渠 2 平・立・断面図 …… 42
図 51　詳細分布調査出土遺物実測図 …… 43
図 52〔校正〕「内裏細覧之図」 元治元年刊 …… 44

Ⅲ - 4　大宅廃寺、大宅廃寺瓦窯跡、大宅遺跡

図 53　調査位置図 …… 45
図 54　調査区配置図 …… 46
図 55　1 ～ 10 区断面図 …… 48
図 56　№ 1・3・4 平・断面図 …… 49
図 57　丸・平瓦実測図及び拓影 …… 50
図 58　鴟尾実測図及び拓影 …… 51

Ⅲ - 5　伏見城跡

図 59　調査位置図 …… 52
図 60　調査区配置図 …… 52
図 61　1 ～ 10 区柱状断面図 …… 53
図 62　10 区遺構検出 …… 53
図 63　10 区完掘状況 …… 53
図 64　10 区平面図 …… 54
図 65　10 区壁・土坑 8 断面図 …… 55
図 66　3・5・6・8・9 区断面図 …… 56
図 67　遺物実測図 …… 57

Ⅲ - 6　鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡

図 68　調査位置図 …… 59
図 69　試掘調査位置及び壁面断面図 …… 60
図 70　周辺の調査事例 …… 61
図 71【参考】第 72 次発掘調査区東壁断面図 …… 63

Ⅲ - 7　長岡京左京四条三坊十五町跡

図 72　調査位置図 …… 64
図 73　長岡京跡条坊推定線と試掘調査区 …… 65
図 74　10・11・12 区平・断面図 …… 65

Ⅲ - 8　史跡・特別名勝　西芳寺庭園

図 75　調査位置図 …… 67
図 76　調査区配置図 1 …… 67
図 77　導水路跡の凹み …… 68
図 78　調査区配置図 2 …… 68

図 79　挿石検出状況 …… 69
図 80　５区実測図 …… 70
図 81　１・６～８区平面図 …… 71
図 82　１・６～８区断面図 …… 72
図 83　遺物実測図 …… 73
図 84　溝１・２・４断面模式図 …… 74

表　目　次

表１　出土遺物概要表 …… 3
表２　周辺調査一覧表 …… 4

図　版　目　次

巻頭図版１　遺構
　　１　Ⅲ - ８　６～８区オルソ写真
巻頭図版２　遺構
　　１　Ⅲ - ８　６区近世池底検出状況（北西から）
　　２　Ⅲ - ８　７区南端断割状況（北から）
　　３　Ⅲ - ８　８区及び滝石組（東から）
　　４　Ⅱ - １　石垣検出状況（西から）

図版１　　平安宮
図版２　　平安京左京北辺～三条　一・二坊
図版３　　平安京左京北辺～三条　三・四坊
図版４　　平安京左京　四～六条　一・二坊
図版５　　平安京左京　四～六条　三・四坊
図版６　　平安京左京　七～九条　一・二坊
図版７　　平安京左京　七～九条　三・四坊

図版８　平安京右京北辺～三条　三・四坊
図版９　平安京右京北辺～三条　一・二坊
図版 10　平安京右京　四～六条　三・四坊
図版 11　平安京右京　四～六条　一・二坊
図版 12　平安京右京　七～九条　三・四坊
図版 13　平安京右京　七～九条　一・二坊
図版 14　観空寺跡、名勝大沢池附名古曽滝跡、史跡大覚寺御所跡、嵯峨院跡、清涼寺境内、嵯峨遺跡、嵯峨北堀町遺跡、嵯峨野高田町遺跡、史跡名勝嵐山
図版 15　醍醐ノ森瓦窯跡、栗栖野瓦窯跡、北野遺跡、北野廃寺、上終町遺跡、北白川廃寺、上京遺跡、御土居跡、白河街区跡、六波羅政庁跡、法住寺殿跡、音羽・五条坂窯跡
図版 16　四手井城跡、山階寺跡、芝町遺跡、大塚遺跡、法性寺跡、大宅廃寺、大宅廃寺境内瓦窯跡、大宅遺跡、法界寺旧境内、史跡・特別名勝西芳寺庭園、上久世遺跡
図版 17　伏見城跡
図版 18　鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡、下鳥羽遺跡
図版 19　長岡京跡、東土川遺跡
図版 20　中久世遺跡、大藪遺跡、円宗寺跡
図版 21　Ⅲ - ３　寺町旧域、公家町遺跡
　１　３区第２面　全景　（南から）
　２　３区第３面　遺構検出状況　（西から）
図版 22　Ⅲ - ３　寺町旧域、公家町遺跡
　１　№２地点　暗渠１検出状況（南東から）
　２　№２地点　暗渠１検出状況（北西から）
　３　№２地点　暗渠１内部（北西から）
　４　№５地点　暗渠２検出状況（北西から）
図版 23　Ⅲ - ８　史跡・特別名勝　西芳寺庭園
　１　溝１完掘状況（西から）
　２　溝２検出状況（北から）
　３　溝２完掘状況及び５区西壁（南東から）
図版 24　Ⅲ - ８　史跡・特別名勝　西芳寺庭園
　１　６区西半及び７区全景（北から）
　２　泉３湧水状況（西から）

Ⅰ　試掘調査の概要

1．京都市内の埋蔵文化財行政

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡という。）は、京北町との合併に伴う遺跡地図の改訂を経て、933件を数える。その範囲内でおこなわれる土木工事に対しては、遺跡の重要度と工事規模に応じて「慎重工事」・「詳細分布調査」・「試掘調査」・「発掘調査」の４種の行政指導をおこなっている。この指導業務は、当初は文化財保護課が担い、昭和55年の京都市埋蔵文化財調査センター設立以後はセンターが担当してきた。しかし、センターが平成18年４月１日付けで文化財保護課と統合され、現在は文化財保護課埋蔵文化財係（以下、保護課）が担当している。

行政指導に基づいて実施される調査には、国庫補助による調査と原因者負担による調査があるが、詳細分布調査と試掘調査、発掘調査の一部については国庫補助事業として実施している。詳細分布調査と発掘調査は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下、「埋文研」という。）へと委託してきたが、平成26年４月１日から保護課が担当し、その成果は別冊の報告書により報告される。

本報告書は、令和４年１月～12月に保護課が実施した、国庫補助事業による試掘調査をとりまとめたものである。保護課で実施する試掘調査は、届出や通知を受けた工事予定地内における遺跡の有無、または遺跡の残存状況やその範囲を把握し、遺跡が良好に存在し、工事がその遺跡を破壊する場合には発掘調査を指導し、設計変更などが可能であれば開発者に対して遺跡保護の措置を指示するなど、文化財保護行政上、非常に重要な業務であり、現在は11名の技師が常時、従事する。

令和４年１月～12月に文化財保護法に基づいて提出された届出（文化財保護法第93条）・通知

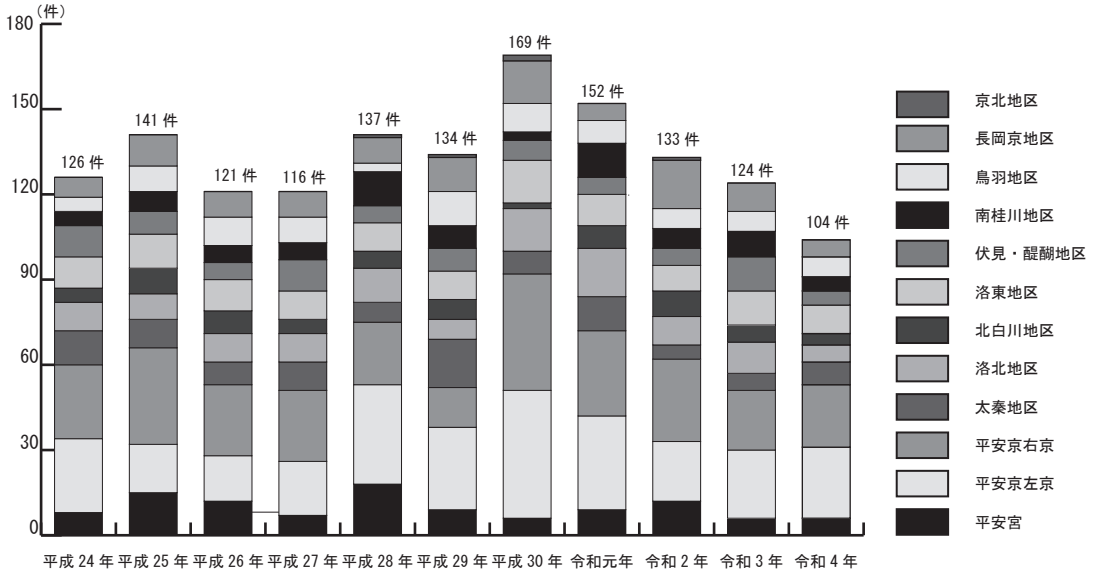


図１　年次別・地区別試掘調査実施件数

（同法第94条）件数は、総数で1455件になる。これは、前年比で237件（14%）の減少である。

令和２年の新型コロナウィルス感染症のパンデミック宣言以降、様々な対策が講じられてきた。しかし、「Withコロナ」生活様式の浸透やそれに伴う需要の変化など未だ影響は色濃い。更に、ウクライナ情勢の影響もあり建築資材を含む様々な材料の不足や物価の上昇が認められる。これらの影響は、経済活動を通して届出件数やその工事内容にも及んでいる。

これらの届出・通知に対して、保護課は発掘調査14件（前年11件、27％増）試掘調査126件（同133件、５％減）、詳細分布調査553件（同670件、15%減）、慎重工事762件（同878件、13%減）の指導をおこなった。指導内容別では、発掘・試掘調査件数に大きな変動はないが、比較的小規模な工事に対して指導する詳細分布調査及び慎重工事の件数は大幅に減少している。

２．令和４年１月～12月の試掘調査概要

試掘調査の実施件数は104件（前年124件、16％減）で、地区ごとに見ると平安宮域６件（前年６件、増減なし）、平安京左京域26件（前年24件、４％増）、平安京右京域21件（前年21件、５％増）、太秦地区８件（前年６件、33％増）、洛北地区６件（前年11件、45％減）、北白川地区４件（前年６件、33％減）、洛東地区10件（前年12件、17％減）、伏見・醍醐地区５件（前年12件、58％減）、南桂川地区６件（前年９件、33％減）、鳥羽地区５件（前年７件、29％減）、長岡京地区７件（前年10件、30％減）である。平安京域など特定の地域に大規模な開発工事が集中する傾向が強い。なお、実施件数は数字上では前年度比16％減となるが、直前での試掘調査のキャンセル・日程延期などが多数あり、これらを含めると総件数は126件となり、昨年度と比して同水準の件数を維持している。これは、先に述べた届出・通知に対する試掘調査の指導件数が前年度とほぼ同じ件数を維持していることからも追認できよう。

工事目的は多種にわたるが、割合の多いものを挙げると共同住宅が34％、宅地造成が16％、テナント・店舗などが８％、事務所が８％、学校関連７％、それ以外の合計が27％で、一時増加していたホテルは１％にも満たない。

104件の試掘調査のうち21件（Ⅳ章・試掘調査一覧表参照）については発掘調査を指示した。今年実施した発掘調査は、京都市が２件（№７・45）、埋文研が４件（№32・55・60・61）、（株）文化財サービスが３件（№９・77・87）、古代文化調査会が２件（№18・49）、（株）四門が１件（№41）、(株)地域文化財研究所が１件（№10）の計13件で、11件が現在協議中である。以上の他に、設計変更等により遺跡の保存が図られたなどの理由から、発掘調査に至らなかった例が７件（№６・20・28・35・90・92・94）ある。

本報告では、保存措置が講じられなかったものの報告すべき成果のあった調査を６件（№21・25・40・47・74・89）、設計変更等で保存されたものの顕著な成果のあった調査を４件（№６・14・28・97）、発掘調査の補足成果となるもの１件（№36）、範囲確認調査の成果を１件（№99）報告する。

（熊井　亮介）

表１　出土遺物概要表

	Ａランク点数（箱数）	内訳	Ｂランク点数（箱数）	Ｃランク点数（箱数）	出土箱数合計
点数及び箱数	181点(5箱)	土師器112点、白色土器1点、東播系須恵器3点、瓦器8点 灰釉陶器2点、緑釉陶器1点、焼締陶器2点、施釉陶器18点 白磁7点、青磁3点、磁器1点、輸入陶磁器1点、軒丸瓦4点 軒平瓦2点、平瓦4点、丸瓦6点、鴟尾1点、石製品2点、 金属製品1点、銭貨2点	6 箱	17 箱	28 箱

Ⅱ-1　平安京左京一条四坊十町跡、公家町遺跡、京都新城跡　№36（20H631）

1．はじめに（図２・３、表２）

調査経緯　本件は仙洞御所消化設備埋設管工事の計画変更に伴う試掘調査である。当計画の試掘調査は令和３年３月24日に実施したが[1)]、今年度になり計画の一部が変更されたことを受けて、改めて記録保存を前提とした試掘調査及び詳細分布調査を実施することになった。令和４年８月22・23日に計画地にある樹木抜根時の立会調査、24～26日にかけて埋設管敷設予定地の試掘調査を行い、仙洞御所に関わる溝・石室のほかに、京都新城の堀を確認した。京都新城跡に関わる遺構は、地中保存の措置がとられていることから、本計画も京都新城関連遺構に影響を与えないように変更された。そのため、同年９月15・16・28日に、埋設管敷設工事の掘削が変更計画通りに実施されていることを確認するための詳細分布調査を実施した。

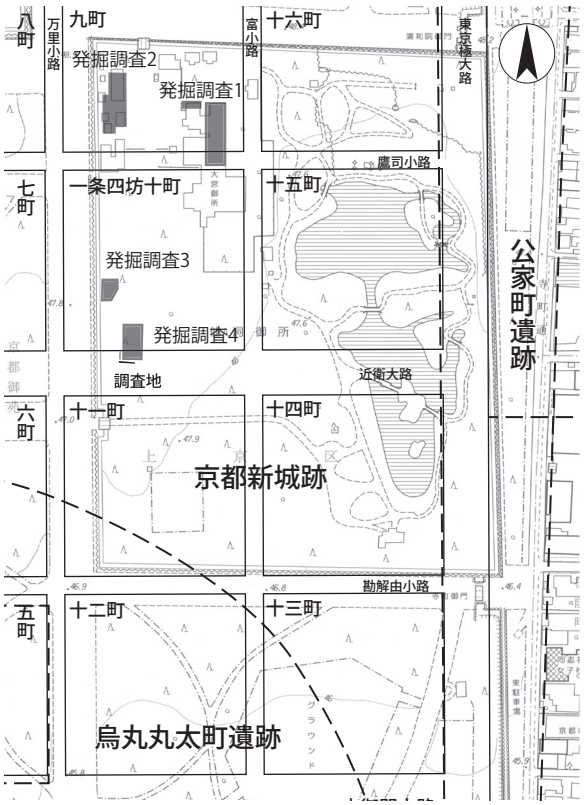


図2　調査位置図（1：5,000）

なお、試掘調査区（１区）及び詳細調査の２箇所（２・３区）において顕著な遺構を確認した。

周辺調査　これまでに仙洞・女院御所内では４回の発掘調査が行われ、京都新城跡、仙洞・女院御所、大嘗宮に関する遺構群が確認されている（表2）。このうち、本調査地の北隣接にあたる発掘調査４の成果が本調査に大きく関わることから、以下でその成果を確認する（以下、とくに断わりのない限り「発掘調査」は発掘調査４の成果を指すこととする）。

表2　周辺調査一覧表（図２に対応）

番号	調査期間	調査概要	文献番号
1	2006/01/06 ～ 01/23	18 世紀第３四半期を中心とした多量の遺物を含む土坑を検出。	1
2	2015/09/07 ～ 12/18	寛永度の仙洞・女院御所の塀基礎、宝永度埋甕・石組溝、延享度の井戸及び苑池として利用されていたことを確認。文化・慶応度の建物跡・地下道、排水溝・井戸などを確認。	2
3	2019/11/05 ～ 2020/03/26	仙洞御所に関する複数の遺構面を確認。地表下‐1.75 mで京都新城堀の西肩石垣を確認。	3
4	2022/06/06 ～ 08/12	仙洞御所に関する複数の遺構面を確認。断割り調査区で京都新城堀跡を確認。	4

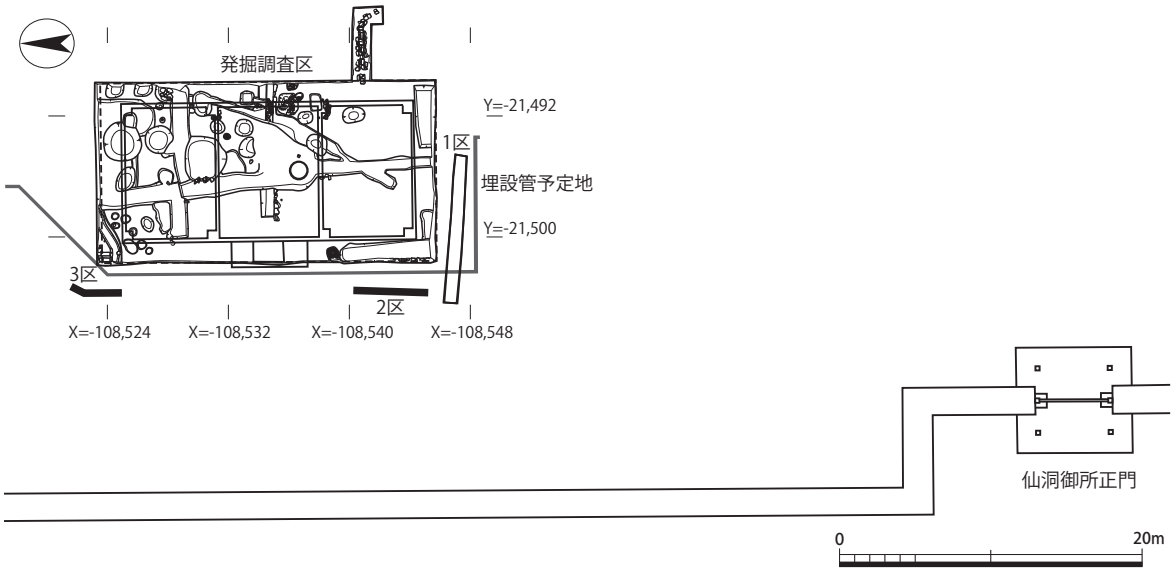


図3　調査区配置図（1：500）

発掘調査は断割り部分も含めてⅠ～Ⅷの整地層を確認し、発掘調査3の成果も踏まえた上で第1期～第7期に分けて報告している。最も新しい時期にあたる第7期は大正天皇の大嘗宮造営時頃、第6期（整地層Ⅱ）が19世紀前半頃、第5期（整地層Ⅲ）が18世紀後半～19世紀、第4期（整地層Ⅳ）が18世紀半ば、第3期（整地層Ⅴ・Ⅵ）が17世紀後半～18世紀半ば、第2期（整地層Ⅶ）が17世紀前半～後半、第1期（整地層Ⅷ）が15世紀～17世紀とする。また、第2期（整地層Ⅶ）を覆う鴨川の洪水堆積層も確認している。なお、第1・2期の整地土は部分的な断割り調査での確認にとどまる。

主だった遺構は、第7期で土管の設置溝、第6期で区画のための石組溝、礎石、集石土坑、第5期で石室や溝、第4期で石室、石製階段、第3期で礎石列、地下室など、仙洞御所の各時期に関わる遺構群を確認している。なかでも、第5期にあたる遺構が、第4期までに比べて調査区の北側に偏って分布していることから、この段階で土地利用の変化があったこと、第4期の石室が特定の場所に繰り返し構築されていることなどを明らかにしている。また、第2期（整地層Ⅶ）では、寛永度仙洞御所造営時の整地層や京都新城堀埋土などを確認している。第1期では室町時代の土取り土坑を検出している。

文献一覧　（表2　周辺調査一覧表の文献番号に対応する）

1　木下保明『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査調査報告2005‐14（財）京都市埋蔵文化財研究所　2006年。

2　持田透『平安京左京一条四坊九町跡・公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査調査報告2015‐13（財）京都市埋蔵文化財研究所　2016年。

3　小檜山一良『平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査調査報告2019‐11（公財）京都市埋蔵文化財研究所　2020年。

4　中谷俊哉『平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査調査報告2022‐2（公財）京都市埋蔵文化財研究所　2022年。

２．遺構（図４～６）

１区（試掘調査）

基本層序（図４）

１区の基本層序は北壁断面を代表させて述べる。GL-0.06ｍで整地層１、-0.15ｍで整地層２、-0.2ｍで整地層３、-0.7ｍで整地層４、-0.8ｍで氾濫堆積層、-1.46ｍで整地層５、-1.6ｍで京都新城跡の石垣石抜き取り埋土となる。発掘調査（以下、発掘調査で確認した遺構を〔遺構名〕で表記する）の成果を踏まえるならば、整地層１・２は、溝６・７が、〔溝７・13〕と同一遺構であることから、〔整地層Ⅰ〕に相当する。整地層３と整地層４は発掘調査では確認されていない。しかし、整地層２と鴨川氾濫堆積層に挟まれていることと検出深度から、前者が〔整地層Ⅱ〕、後者が〔整地層Ⅴ〕に相当する。氾濫堆積層は17世紀前半～後半頃の〔鴨川洪水堆積層〕と同一層であり、氾濫堆積層の下位にあたる整地層５が〔整地層Ⅶ〕に相当する。なお、京都新城期の遺構検出面は、〔整地層Ⅷ〕に相当する。

以上のことから、整地層１・２が近代〔整地層Ⅰ〕、整地層３が江戸時代後期〔整地層Ⅱ相当〕、整地層４が江戸時代前期〔整地層Ⅴ相当〕、整地層５が寛永度仙洞御所造営時〔整地層Ⅶ〕に比定することができる。

遺構（図４・５）

調査は各整地層の直上を遺構面として捉え遺構検出を実施した。主な遺構は整地層１～３及び最下層の上面で確認した。

１面

整地層１・２　調査区のほぼ全域で確認した明黄褐色泥砂（図４北壁断面２層）、にぶい黄褐色泥砂（北壁断面５層）、黄橙色シルト（図４南壁断面５層）、黒褐色泥砂（図４南壁断面６層）からなる整地土である。部分的に上下２層になる箇所があり、上層が溝７を覆っている。大正４年（1915）の大嘗宮造営時の整地層と推測できる。

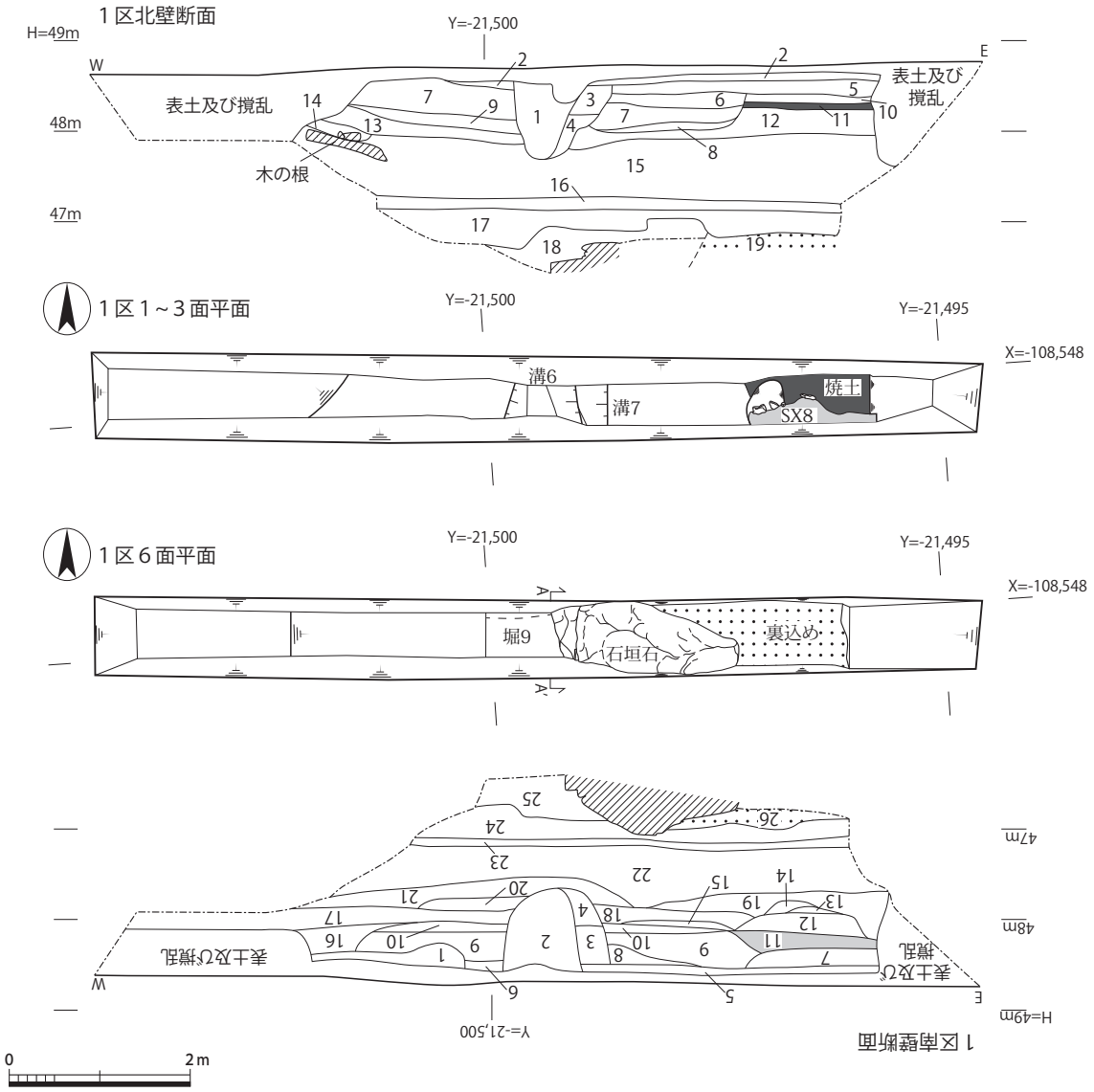
溝６　調査区の中央で検出した北東から南東に傾いた素掘り溝である。幅約0.80～1.16ｍ、深さ約0.8～0.9ｍである。〔溝７〕と同一遺構である。

溝７　溝６と重複するように検出した溝である。溝６によって掘り込まれている。幅約0.36～0.50ｍ以上、深さ約0.8ｍ以上である。〔溝13〕と同一遺構である。

２面

整地層３　調査区中央で検出した整地土である。層厚は約0.40～0.56ｍで、大きく２～３層に分層（図４北壁６～９層・南壁９・10層）できる。整地土は地面を掘り込み、最下層に層厚約0.05ｍのシルト（図４北壁９層・南壁10層）を入れた後に、砂泥土や泥砂土で丁寧に埋め戻している。

SX８　調査区東南端で検出した黄色シルト（図４南壁11層）である。整地層３によって掘り込まれている。検出面で長辺約1.42ｍ、短辺約0.3ｍの範囲に広がり、層厚約0.24ｍである。下層には土坑状の落込み（図４南壁12～14層）があり、埋土には礫が含まれている。このようなこと



1区北壁断面

1 7.5YR4/1褐灰色砂泥【溝6】
2 10YR7/6明黄褐色泥砂【整地層1】
3 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 ┐【溝7】
4 2.5Y5/3黄褐色泥砂 ┘
5 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂【整地層２】
6 2.5Y5/4黄褐色泥砂 ┐
7 10YR7/4にぶい黄橙色砂泥 │【整地層３】
8 10YR7/6明黄褐色シルト │
9 2.5Y5/4黄褐色シルト ┘
10 2.5Y5/4黄褐色泥砂(拳大礫多く含む)
11 5YR5/6明赤褐色泥砂【焼土】
12 2.5Y5/3黄褐色泥砂(大礫少量含む) ┐【整地層４】
13 7.5YR5/6明褐色泥砂(焼土・炭化物多く含む) ┘
14 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂
15 2.5Y5/3黄褐色砂礫【氾濫堆積】
16 5Y6/1灰色泥砂(上面良く締まる) ┐【整地層５】
17 2.5Y5/4黄褐色泥砂(礫混) ┘
18 7.5Y5/1灰色砂礫(φ20cmの礫多量に含む)【石垣石抜取り】
19 7.5Y5/2灰オリーブ色砂礫(φ20cmの礫多量に含む)【石垣石裏込め】

1区南壁断面

1 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
2 7.5YR4/1褐灰色砂泥【溝６】
3 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 ┐【溝７】
4 2.5Y5/3黄褐色泥砂 ┘
5 10YR7/8黄橙色シルト ┐【整地層１】
6 10YR3/2黒褐色泥砂 ┘
7 7.5YR4/1褐灰色砂泥
8 10YR4/1褐灰色泥砂(礫混)
9 10YR7/4にぶい黄橙色砂泥 ┐【整地層３】
10 10YR7/6明黄褐色シルト ┘
11 2.5Y7/8黄色シルト【SX8】
12 10YR4/1褐灰色砂泥(拳大礫混) ┐
13 10YR3/1黒褐色砂礫 │【落込み】
14 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂 ┘
15 10YR7/6明黄褐色シルト ┐
16 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 │
17 10YR5/2灰黄褐色砂泥(礫混) │【整地層４】
18 2.5Y5/4黄褐色砂泥 │
19 2.5Y6/4にぶい黄色泥砂 ┘
20 2.5Y6/3にぶい黄色砂礫 ┐
21 2.5Y6/6明黄褐色砂礫 │【氾濫堆積】
22 2.5Y7/6明黄褐色粗砂 ┘
23 5Y6/1灰色泥砂(上面良く締まる) ┐【整地層５】
24 2.5Y5/4黄褐色泥砂(礫混) ┘
25 7.5Y5/1灰色砂礫(φ20cm礫混)【堀９埋土】
26 5Y5/2灰オリーブ砂礫(φ20cmの礫多く含む)【石垣石裏込め】

図４　１区平・断面図（１：80）

から、調査時には落込み部分の不等沈下対策としてシルトを面的に補填したと考えたが、部分的な確認に留まったことから、性格不明の遺構として報告する。

3面

整地層4　調査区のほぼ全域で確認した整地土（図4北壁12・13層、南壁15～19層）である。2～5層に分層することができ、層厚0.20～0.32ｍで、部分的に焼土や炭などを多く含む。

4面

氾濫堆積層　調査区全域で確認した氾濫堆積層（図4北壁15層、南壁20～22層）である。砂礫が水平に堆積していることから氾濫堆積と判断した。層厚は0.60～0.74ｍと厚く、大規模な氾濫があったことが窺える。17世紀前半～後半の鴨川の氾濫層に比定できる。

5面

整地層5　調査区全域で確認した整地土である。大きく上下2層（北壁16・17層、南壁23・24層）からなり、上層は層厚が約0.1ｍで非常に固く締まっている。仙洞御所創建期にあたる寛永4年（1627）～寛永7年（1630）までに整地されたと推測できる。

6面

堀9　調査区中央から西側で確認した堀である。仙洞御所創建期の整地土の下層で確認したことから、京都新城の堀と推測

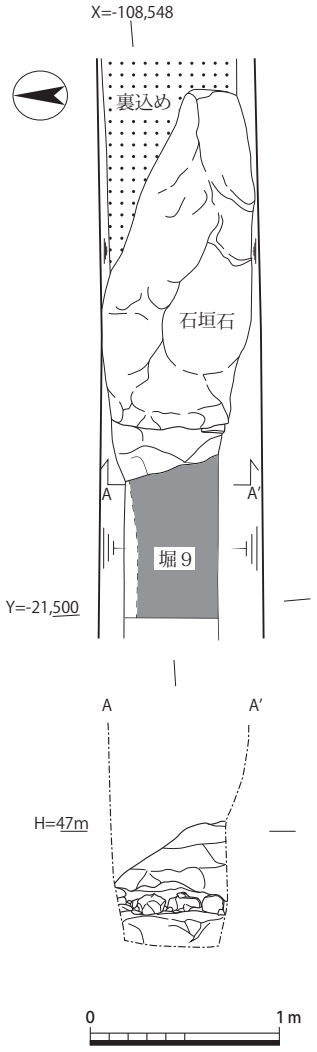
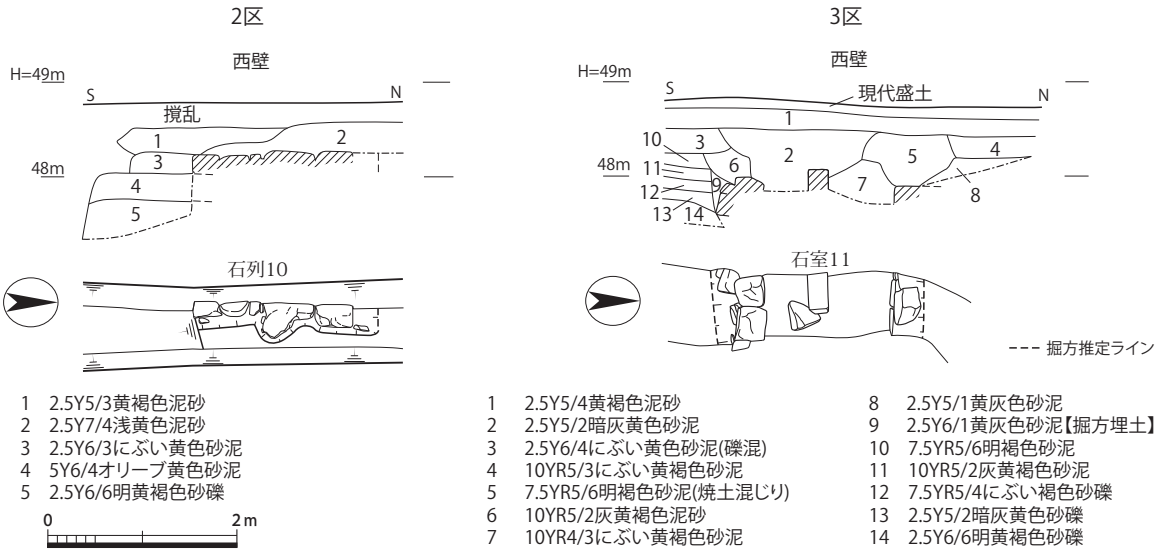


図5　石垣平・立面図（1：40）



1　2.5Y5/3黄褐色泥砂
2　2.5Y7/4浅黄色泥砂
3　2.5Y6/3にぶい黄色砂泥
4　5Y6/4オリーブ黄色砂泥
5　2.5Y6/6明黄褐色砂礫

1　2.5Y5/4黄褐色泥砂
2　2.5Y5/2暗灰黄色砂泥
3　2.5Y6/4にぶい黄色砂泥(礫混)
4　10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
5　7.5YR5/6明褐色砂泥(焼土混じり)
6　10YR5/2灰黄褐色泥砂
7　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
8　2.5Y5/1黄灰色砂泥
9　2.5Y6/1黄灰色砂泥【掘方埋土】
10　7.5YR5/6明褐色砂泥
11　10YR5/2灰黄褐色砂泥
12　7.5YR5/4にぶい褐色砂礫
13　2.5Y5/2暗灰黄色砂礫
14　2.5Y6/6明黄褐色砂礫

図6　2・3区平・断面図（1：80）

できる。堀の東肩に西に面を揃えた野面積みの石垣がある。石垣は東に向かって傾斜する。検出面で２段分の石（上段・下段）を確認した（図５）。上段と下段の間に拳大の間詰石がある。上段の石は長辺（東西）約1.3ｍ、短辺（南北）約0.78ｍで、東端下部に長辺10㎝、短辺4.0㎝、深さ6.0㎝の矢穴が２か所で認められた（図12）。石質は上段が花崗岩、下段がチャートである。石の東側に10～20㎝程度の河原石が東西1.2～2.1ｍ、南北0.7ｍの範囲で多量に敷き詰められている。西に面を持つ石垣であることから、石垣の裏込めと判断した。また、上段の石の上面が平坦ではなく、裏込めも露出していることから、上部の石垣石が抜き取られている可能性が高い。石垣の西側には裏込め石が多量に混在する灰色砂礫土の堀埋土が堆積している。石を抜き取る際に、多量の裏込め石が堀に崩落したと推測できる。埋土からは瓦類も出土した。

２・３区（詳細分布調査）

遺構（図６）

２区で石列10、３区で石室11を確認した。

石列10　２区で確認した南北方向の石列である。遺構検出面は１区整地層４〔整地層Ⅴ〕直上に相当する。石材は検出面で５石分あり、南側は削平されている。石列及び掘方が北端で途切れることから、遺構は西側に屈曲する可能性が高い。掘方の検出長は約1.9ｍである。石材は一辺が約0.3～0.6ｍ、厚さ0.2ｍあり、上面が平坦である。一部に被熱痕が認められ、石列の東側に焼土や炭化物が堆積している。検出標高などから発掘調査で確認した〔石列121〕と同一遺構の可能性がある（図９第３期）。ただし、石列10は東に面を持たないことから、〔石列121〕と組み合う石組溝にはならない[2)]。

石室11　３区で確認した石室である。遺構検出面は１区では確認できていないが〔整地層Ⅳ〕直上に相当する。検出面で東西約1.32ｍ、南北約0.64ｍ以上であり、石積は２段分まで確認した。ただし、底部は確認できておらず、石積みは２段以上ある。また、調査時には北面の石積みの掘方部分が埋戻されていたことから、平・断面ともに把握することができなかった。石室11の東側には石組み〔階段113〕が確認されており（図９第４期）、〔階段113〕が石室11に降りるための階段と考えられる。ただし、階段幅と石室東西幅がほぼ一緒であることから、渡り廊下などによって遮られる場所をつなぐための地下道の可能性もある[3)]。

３．遺物（図７・８）

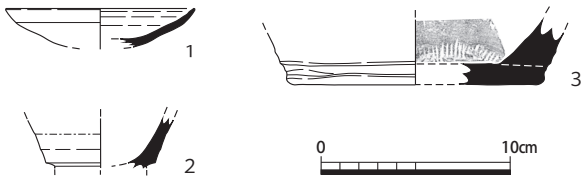


図７　土器類実測図（１：４）

１は土師器皿S、２は天目茶碗、３は擂鉢である。擂鉢の摺り目は摩滅している。土器類は10～11段階に属する。４は軒丸瓦で外区に珠文が巡る。瓦当裏面の側面付近は外縁に沿ってナデ。側面ナデ。５は唐草文軒平瓦である。唐草は独立し先端が巻込む。瓦当凹面ケズリ。顎部凸面ケズリ後横ナデ、裏面ケズリ後横ナデ。６・７は丸瓦である。６は凸面格子叩き痕、

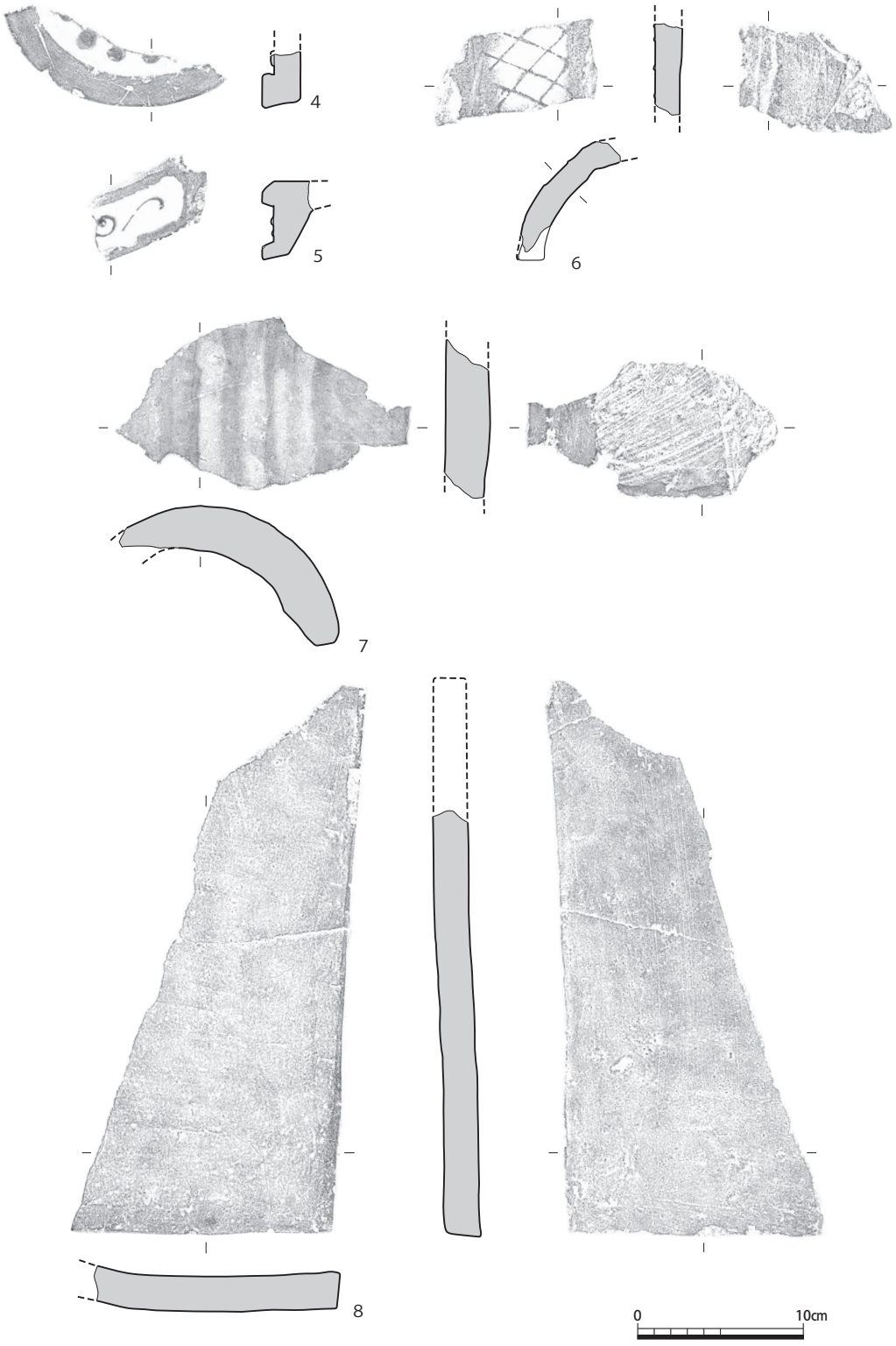


図８　瓦類実測図及び拓影（１：４）

側面付近ナデ。凹面細かい布目。７は凸面縦ケズリ、凹面糸切痕と布目、側面付近縦ケズリ。側面ケズリ。８は平瓦である。凸面はケズリ後縦ナデ。凹面ケズリ後横ナデ。側面ケズリ後ナデ、狭端面ケズリ後ナデ。一部に布目。１～３は整地層５、４・７・８は堀９、５・６は北壁16・17層から出土した。４・５・７・８は安土桃山時代～江戸時代初頭、６は中世に属する。

4．まとめ

本調査では仙洞御所及び京都新城に関わる遺構を確認した。発掘調査成果も踏まえて、各時期別に遺構の変遷を述べる（図９）。なお、時期設定は、発掘調査成果に準じた。

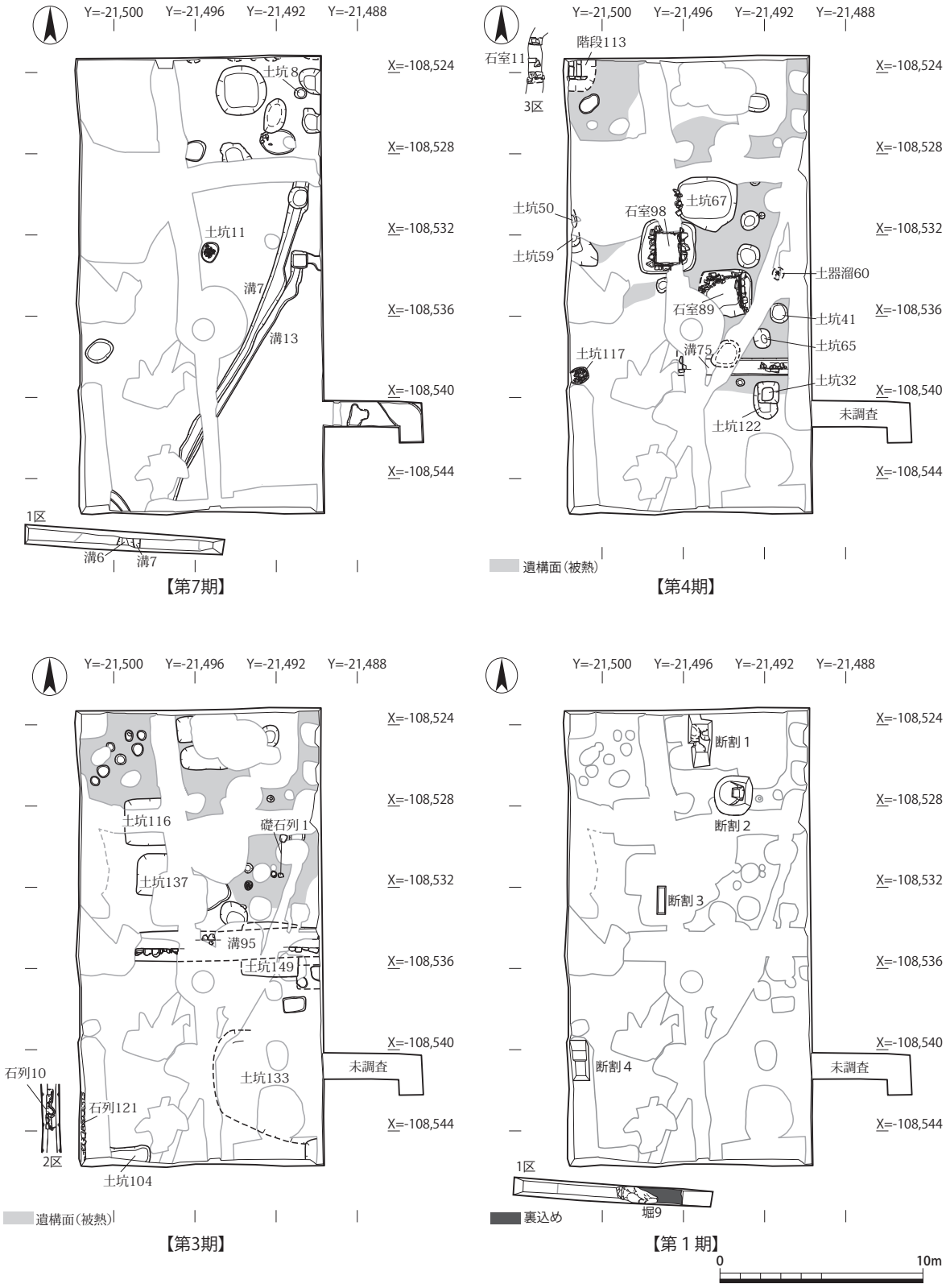


図９　遺構変遷図（１：300）

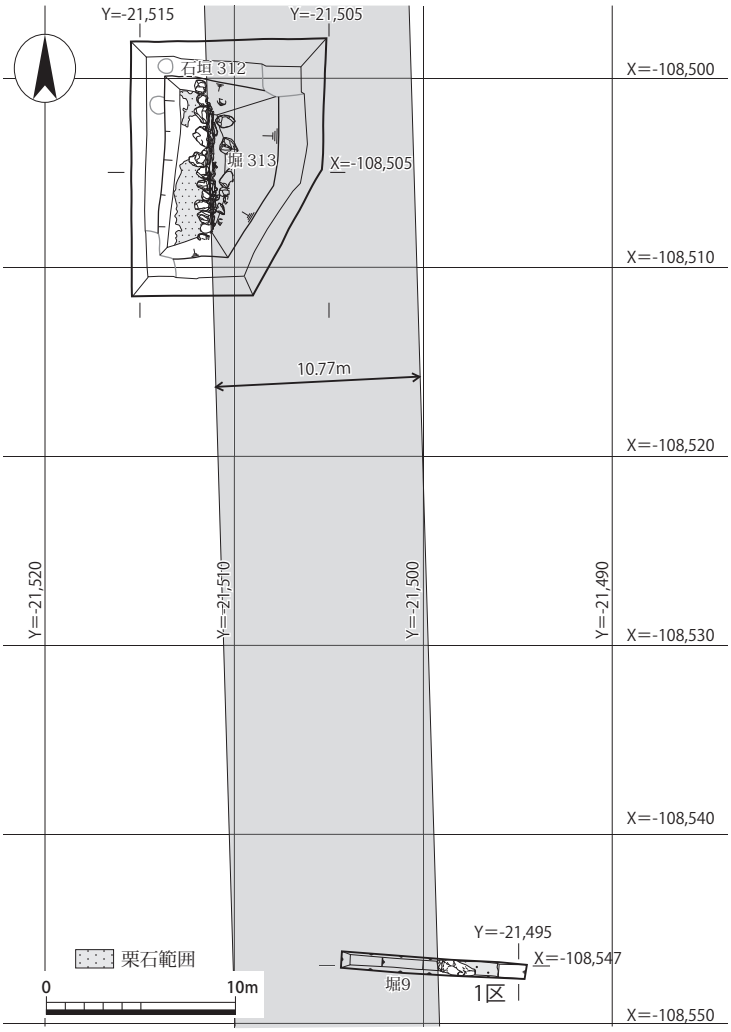


図10　京都新城堀推定図（1：400）※ただし、直線的な堀であった場合

第7期（近代）　溝6・7は、〔溝7〕・〔溝13〕と同一の遺構である。〔溝13〕は開削途中で石組溝と接触したことにより放棄され、新たに〔溝13〕と重複するように〔溝7〕を開削したとする。本調査で確認した溝6も、溝7によって切られ大正4年（1915）の大嘗宮造営時の整地層1に覆われるなど、発掘調査成果と矛盾はない。

第6期（江戸時代後期）　整地層3は発掘調査で確認できていないことから、1区南西側に向かって展開する可能性が高い。また、その他の整地層とは異なり、一度地面を掘り込んだ後に、シルトなどを用いて埋め戻すなどの工法が、建物下部に見られる掘込地業に類似する。江戸時代後期の仙洞御所を描いた『仙洞御所御構内惣絵図』を見ると、整地層3の範囲が建物部分と重複しており、建物下部の地盤改良を目的とした整地土の可能性が高い。

第4期（江戸時代中期）　3区で検出した石室11が当該期にあたる。石室11の東側には〔階段113〕があり、階段が取り付く石室と考えられる[4)]。発掘調査3・4で確認している当該期の石室は5基あるが、階段が取り付くものは石室11のみである。

第3期（江戸時代前期）　整地層4には礫や焼土・炭化物が含まれるなど、発掘調査で確認した18世紀頃の〔整地層Ⅵ〕の様相と類似する。発掘調査では〔石列121〕が整地層4を掘り込んで

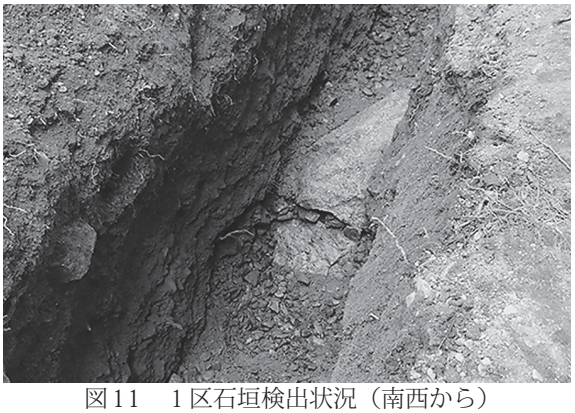


図11　1区石垣検出状況（南西から）



図12　矢穴（南西から）

成立していることから、同一遺構と考えた石列10も当該期に属する可能性が高い。

第２期（江戸時代前期）　整地層５は17世紀後半頃の鴨川氾濫堆積層の直下にあり、京都新城の堀を覆っていることから、仙洞御所創建期（寛永度）の整地土と推測できる。

氾濫堆積　発掘調査でも同様の堆積層を確認しており、鴨川の氾濫堆積層と判断している。仙洞御所の広範囲に被害が及んでいたことが分かる。

第１期（室町時代～江戸時代前期）　今回、初めて京都新城堀跡の東肩を確認することができた。図10に示したように発掘調査３で確認した西肩の石垣と１区で確認した東肩の石垣がそれぞれ直線的に伸びると仮定すれば、堀幅が約10.77ｍに復元できる。ただし、発掘調査３の隣接地で行われた高精度表面波探査成果では堀幅を約20ｍとしており、今回想定した規模と大きく異なる。したがって、図10のように直線的な堀でなく、本調査区から発掘調査３までの間で堀幅が狭くなる可能性も考えられる。また、石垣裏込めの奥行き規模も、発掘調査３が約0.5ｍであったのに対し、本調査では1.2～2.1ｍ以上もあり、当該地付近で石垣が屈曲する可能性も想定できる。このように、現況の成果のみでは正確な堀の想定図は描くことができない。ただし、冒頭で述べた通り京都新城跡に関する遺構は、基本的には地中保存の対象となる。したがって、今後も仙洞御所の整備計画などに注視する必要がある[5)]。　（鈴木　久史）

註

１）鈴木久史「２平安京左京一条四坊十町跡、公家町遺跡、京都新城跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和３年度』京都市文化市民局、2022年。

２）石列は北端で西側に屈曲し、石は西面する。石材の一辺が約0.3ｍ、厚さ約0.2ｍで上面は平坦で被熱しており、直上に炭と焼土が堆積する。また、石列西側にも炭と焼土が堆積していることから、石組溝の東肩と想定している（文献一覧４）。

３）発掘調査２で文化度造営の地下道170-２、地下道190-2と慶応度造営の地下道170-１、地下道190-１を確認している。この時の地下道と階段の幅はほぼ同じである（文献一覧２）。

４）これまで階段が取り付く石室は、平安京左京三条四坊十町跡（竪穴542）と平安京左京四条四坊一町跡（石室２）で検出されている。
前者が上村和直ほか『平安京左京三条四坊十町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2004-10、（財）京都市埋蔵文化財研究所　2004年。
後者が松永修平『平安京左京四条四坊一町・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-7、（公財）京都市埋蔵文化財研究所、2020年。

５）いずれにせよ、図10に示した推定位置付近に石垣が遺存している可能性がきわめて高い。本文中でも述べた通り堀の復元は慎重に判断しなければならないが、将来の仙洞御所整備に対する文化財保護の指導方針を示すために、今回堀の推定図を提示した。

Ⅱ-2　平安京左京五条二坊十一町跡、烏丸綾小路遺跡　№40（21HO75）

1．調査の経緯（図13）

本件は、公共下水道工事に伴う試掘調査である。京都市上下水道局が南区西九条比永城町地内から下京区吉水町地内において、鳥羽第３導水きょ公共下水道工事を計画した。この計画について、令和３年５月６日付けで文化財保護法第94条に基づく通知がなされ、分水施設である立坑部分の試掘調査を行うことになった。調査地は下京区吉水町地内に所在し、堀川通上で堀川高辻交差点の北側に位置する。周知の埋蔵文化財包蔵地である「平安京跡」及び「烏丸綾小路遺跡」に該当する。条坊では左京五条二坊十一町の西側で堀川小路内に比定される。

堀川小路は、物資運搬用の人工河川（堀川）の両側に道路を配する形態で、朱雀大路を挟んで左右対称の位置にある西堀川小路と同規模・構造をしている。堀川小路内では、本調査地より南側で過去に調査が行われており、中世から近世の遺構などを確認している。主要な調査事例を挙げると、堀川五条交差点の北側で実施された調査①[1)]では、近世土坑及び中世から近世の遺物包含層を検出した。また、堀川五条交差点の南側で実施された調査②[2)]では、調査区全域で中世から近世にかけての堀川河道を確認している。

以上の既往調査成果を踏まえ、本調査では堀川小路に関する遺構の確認を主目的とした。

調査は、立坑の西端部で行った。令和４年７

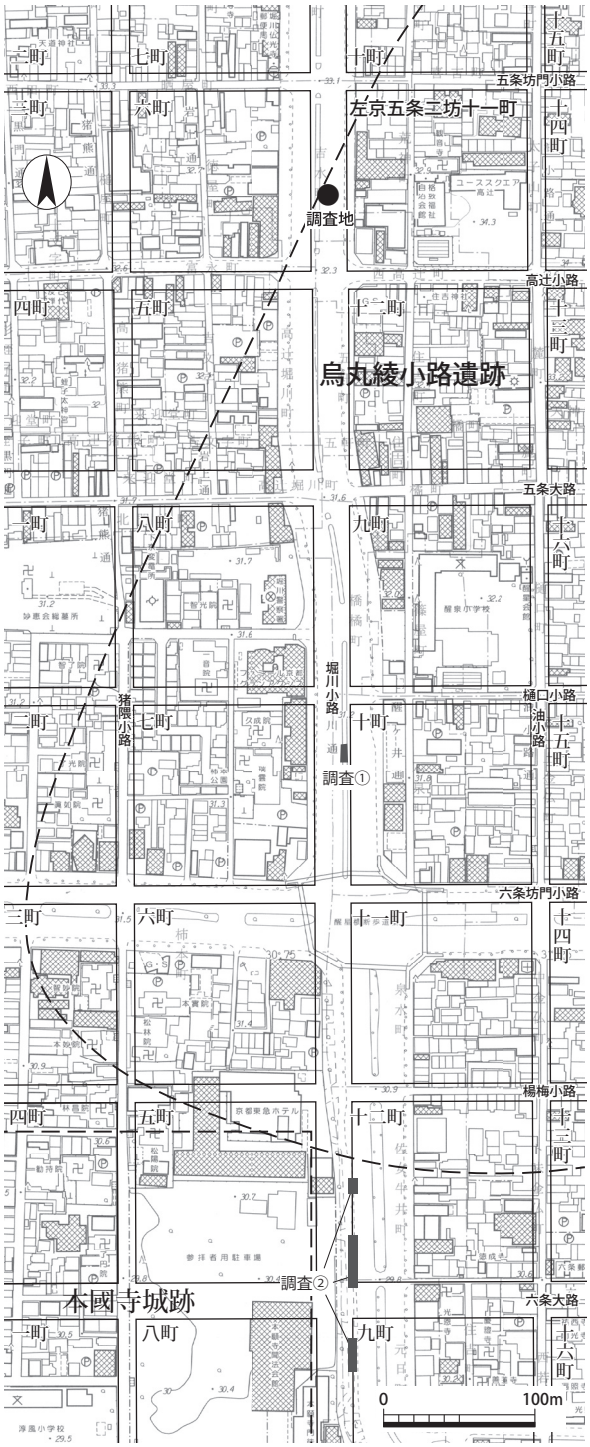


図13　調査位置図（１：5,000）

月11日に１区で調査を実施し、GL-2.55mまで掘削した。その結果、中世以降の堀川小路に伴う路面を確認した。また、下層の状況を確認するために、同年12月５日に補足調査（２区）を実施し、GL-3.5mまで掘削した。なお、調査に際しては、１・２区ともに堀川通下り線の一部を通行止めにし、安全を確保した上で調査を行った。

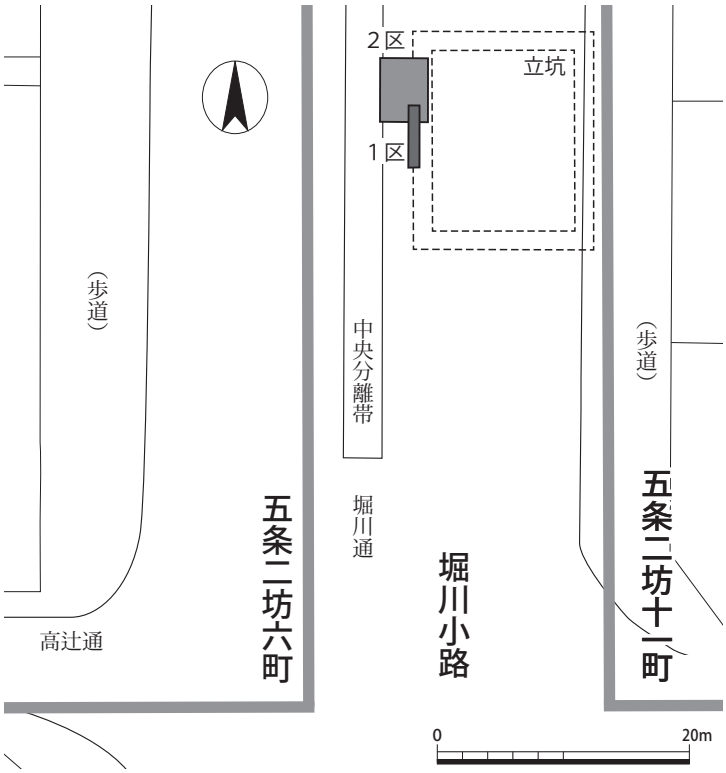


図14　調査区配置図（１：600）

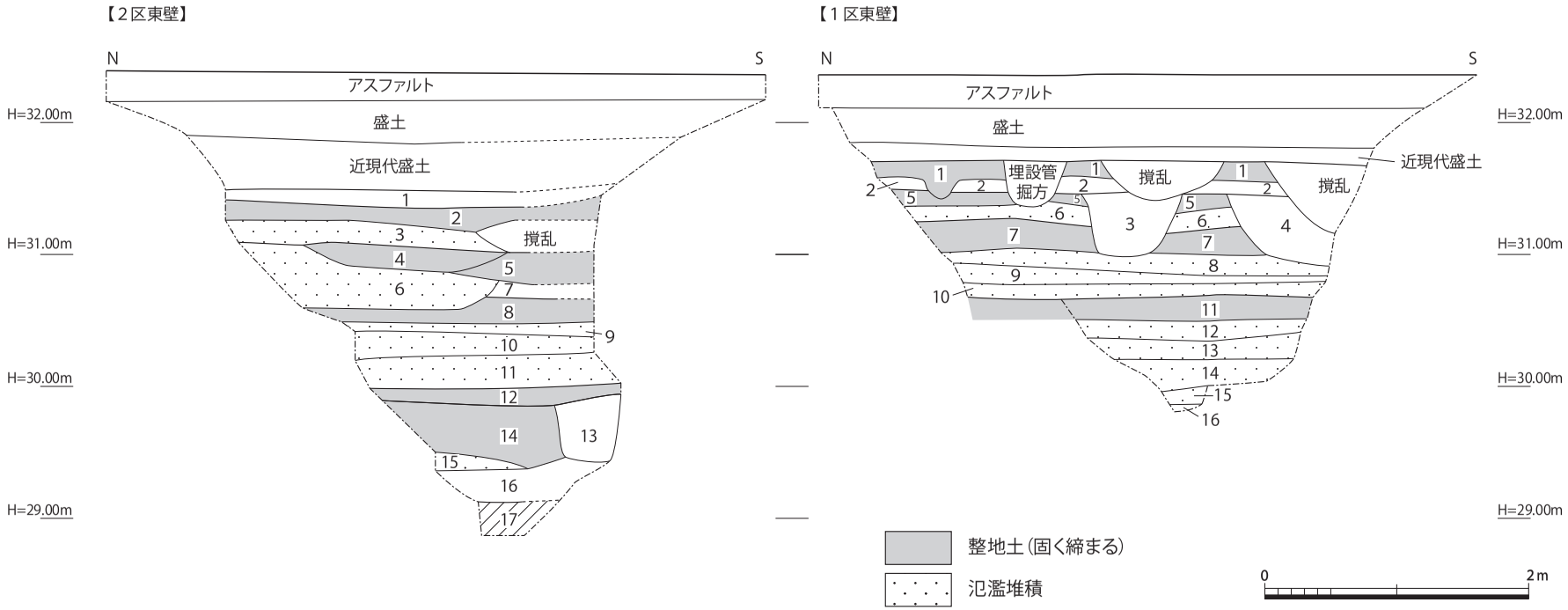
２．遺構（図14～16）

基本層序は、アスファルト・近現代盛土以下、GL-0.65mで暗灰黄色礫混じり砂質土などの近代整地土・焼土、-0.9mで黄褐色礫混じり砂質土の近世～近代整地土・氾濫堆積、-1.1mでにぶい黄褐色砂質土の近世初頭～前半整地土・氾濫堆積、-1.7mで暗灰黄色砂質土の中世整地土・氾濫堆積、-2.4mで暗灰黄色砂質土の中世整地土、-2.5mで褐灰色砂泥の中世整地土、-3.25mでオリーブ色粗砂の基盤層となる。



図15　２区掘削状況（北から）

上面が固く締まる路面と考えられる整地土を６箇所（Ⅰ～Ⅵ層）で確認した。Ⅰ層は近代の整地土で、礫を入れ固く締めている。厚さ約0.1ｍで、近代焼土の上に見られる。Ⅱ層は近世～近代の整地土で、礫を入れ固く締めている。厚さ約0.1ｍで、氾濫堆積の上に見られる。磁器などの細片が出土した。Ⅲ層は近世の整地土で、砂質土を固く締めている。厚さ約0.2mで、砂礫と泥砂～粗砂の互層である氾濫堆積の上に見られる。土師器、施釉陶器、焼締陶器などの細片が出土した。Ⅳ～Ⅵ層は中世の整地土である。Ⅳ層は、厚さ約0.2ｍの整地土で、砂質土を固く締めている。一部で平面検出を行い、この固く締まった整地土が面的に展開することを確認した。なお、土師器などの細片が出土した。Ⅴ層は厚さ約0.1ｍの整地土で、Ⅵ層の整地土の上に見られる。Ⅵ層は、厚さ0.3～0.4mの整地土で、氾濫堆積と思われる砂の上に見られる。15世紀代の土師器が出土した。また、Ⅵ層を切り込んで成立するピットを検出した。



1　5YR5/6 明赤褐色砂質土　【近代焼土】（１区東壁２）
2　2.5Y5/3 黄褐色礫混じり砂質土（固く締まる）　【近世～近代整地土】（１区東壁５）　Ⅱ層
3　10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫　【近世～近代氾濫堆積】
4　7.5YR3/4 暗褐色礫混じり砂質土　【近世整地土】
5　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土（固く締まる）　【近世整地土】（１区東壁７）　Ⅲ層
6　10YR7/3 にぶい黄橙色礫混じり細砂　【近世氾濫堆積】
7　5YR4/8 赤褐色砂質土（炭層あり）　【近世焼土か】
8　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土（固く締まる）　【中世整地土】（１区東壁11）　Ⅳ層
9　2.5Y7/4 浅黄色礫混じり細砂
10　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色礫混じりシルト　【中世氾濫堆積】（１区東壁12～14）
11　10YR5/6 黄褐色シルト混じり砂礫
12　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土（固く締まる）　【中世整地土】　Ⅴ層
13　5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（拳大の礫多量、細片の遺物含む）　【ピット】
14　10YR4/1 褐灰色砂泥（土器含む、固く締まる）　【中世整地土】　Ⅵ層
15　10YR6/6 明黄褐色礫混じり砂　【氾濫堆積】
16　7.5YR4/1 褐灰色礫混じり粘質土（土器含む）
17　5Y5/4 オリーブ色粗砂　【基盤層】

1　2.5Y5/2 暗灰黄色礫混じり砂質土（固く締まる）　【近代整地土】　Ⅰ層
2　5YR5/6 明赤褐色砂質土　【近代焼土】
3　10YR4/2 灰黄褐色礫混じり砂質土【近代撹乱】
4　10YR2/2 黒褐色粘質土【近代埋設管掘方】
5　2.5Y5/3 黄褐色礫混じり砂質土（固く締まる）　【近世～近代整地土】　Ⅱ層
6　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂礫　【近世氾濫堆積】
7　10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土（固く締まる）　【近世初頭～前半整地土】　Ⅲ層
8　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂礫
9　2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂～粗砂　【近世初頭～前半氾濫堆積】
10　2.5Y6/2 灰黄色砂礫
11　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土（固く締まる）　【中世整地土】　Ⅳ層
12　2.5Y7/4 浅黄色礫混じり細砂
13　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト
14　10YR5/6 黄褐色シルト混じり砂礫　【中世氾濫堆積】
15　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
16　2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫

図16　調査区断面図（１：50）

3．遺物（図17）

遺物は、土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などが出土した。細片がほとんどであったため、一部図化できたものを報告する。

１・２は、土師器の皿Ｓである。口縁部が肥厚する。１はほぼ完形で、口径14.2㎝、高さ2.6mである。ともに15世紀代に属する。３は、施釉陶器の唐津焼の鉢か。低い高台を有する。内面全面及び外面体部は緑釉、外面底部は無釉である。１・２は２区東壁14層、３は２区東壁６層から出土した。

4．まとめ

今回の調査では、平安時代に遡る遺構は確認できなかったものの、中世以降の堀川小路及び堀川通に関する整地土及び氾濫堆積を検出した。土層からは、氾濫堆積と整地土が交互に堆積する状況が認められる。これと堀川小路の構造を勘案するならば、堀川の氾濫と道路の整備が繰り返し行われてきた状況が認められ、現在に至るまでこの地域の主要道路の一つとして、災害などを乗り越えて維持・管理されてきた歴史の一端を確認する事が出来た。

（八軒　かほり）

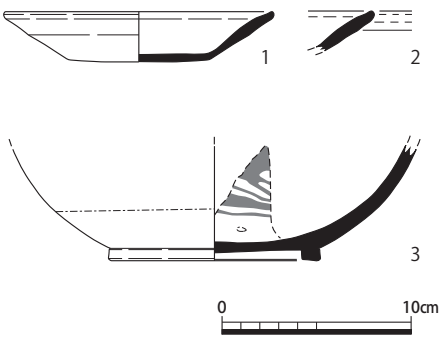


図17　出土遺物実測図（１：４）

註

１）「21　平安京左京四条二坊六町・六条二坊十町」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2011年。

２）「13　平安京左京六条二坊」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1991年。

Ⅱ-３　平安京左京七条三坊八町跡　№６

（21H455）

１．調査に至る経緯と経過（図18）

調査地は、烏丸通と花屋町通の交差点より西に位置する。平安京左京七条三坊八町の東辺部に相当し、敷地の一部が室町小路の路面にかかる。今回、この区画に大型店舗の建設が計画されたため、１月４・５日の２日間にわたり試掘調査を実施した。

この町域には、東半部に平安時代中～後期に右衛門権佐を勤めた藤原季綱の邸があり、その後、常陸介源某、越後守藤原某へ所有者が移ったとする地歴が残る。うち町域の東南部はさらに細かく所有者が変わり、前常陸介某から修学院阿闍梨、備中守藤原某、近江守藤原某、女院庁官志摩時直へと相続もしくは売買されている。

調査地の周辺では、平成３年度に西隣接地で試掘調査が行われており（図18調査①）、GL-0.7ｍで近世整地層、-1.1～-1.5ｍで平安時代～鎌倉時代の整地層、-1.8ｍで地山が確認されている[1)]。地山上面で室町時代の東西溝や土坑が検出されており、居住域として整備されたと推測される。

また、室町通の東側では、平成25年度に試掘調査が行われており（調査②）、GL-0.7ｍで近世整地層、-1.0ｍで中世整地層、-1.2ｍで地山が確認されている[2)]。調査①と同じく地山上面で室町時代の土坑が検出されたが、いずれも遺構密度が希薄であり、工事施工時の立会を指導している。

以上の情報から、今回の調査地においても遺構面が連続する可能性は十分に予測された。調査の結果、GL-1.0～-1.4ｍ以下において平安時代中期～室町時代後期の遺構面を複数確認した。この成果に基づき事業者と協議を重ねた結果、設計変更により遺構面は概ね保存されることとなった。

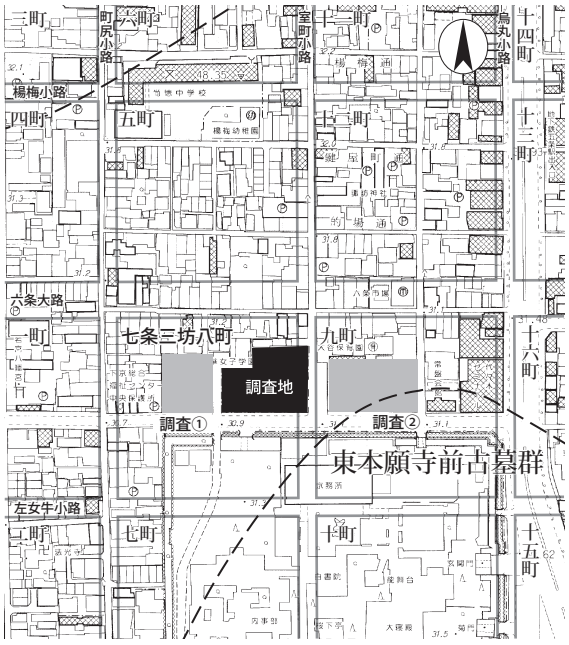


図18　調査位置図（１：5,000）

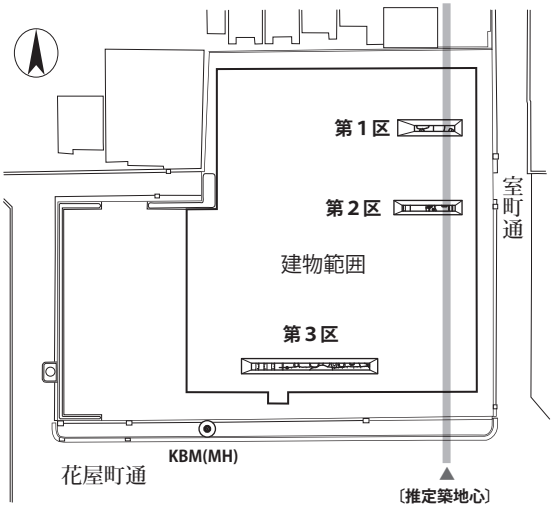


図19　調査区配置図（１：1,000）

２．調査成果（図19～21）

調査区は、室町小路との境界ラインを把握することを目的として、対象地の北東部に２本の調査区を設定した（図19第１区・第２区）。また、遺構面の広がりを確認するため、南辺部にも１本設定した（第３区）。

第１区

GL-1.2ｍで黒褐色礫混じりシルトの近世堆積層、-1.7ｍで黒褐色細砂混じりシルトの室町時代包含層、-1.8ｍでオリーブ褐色砂礫を主体とする地山に至る。地山上面は東へ向かって下がり、その落込みには暗オリーブ褐色礫混じりシルト（平安時代末期～鎌倉時代初頭整地土）を充填して平坦地を作る。整地層上面及び地山上面で遺構検出を行ったところ、平安時代中期のピット１基、室町時代前期のピット２基、南北溝２条、近世の土坑１基を検出した。

ピット1-3　平面形状は円形、直径は0.6ｍに復元できる遺構で、最大深度0.2ｍを測る。断面形状は深い皿形であり、埋土は黒褐色細砂混じりシルトを主体とする。溝1-4とは切り合い関係にあり、こちらが古い。遺構内からは土師器皿の小片（11世紀）が多量に出土した。

溝1-4　調査区東端で検出した南北方向にのびる溝である。検出長0.8ｍ、検出幅1.5ｍを測る。埋土は、シルトブロックを含む暗灰黄色粗砂混じりシルトを主体とする。拳大の礫が均等に混ぜ込まれており、人為的に埋め戻した様相を示す。室町小路西側築地心の想定ラインに近く、条坊側溝にあたる可能性がある。遺構内からは須恵器鉢（図22-1）、軒平瓦（図22-2）、土師器皿（図22-3）、灰釉陶器碗、青白磁合子の小片が出土した。12世紀～13世紀に埋没した遺構である。

溝1-5　調査区西端で検出した南北方向にのびる溝である。検出長0.8ｍ、検出幅0.75ｍを測る遺構で、町内の内溝である可能性が考えられる。埋土は黒褐色細砂混じりシルトで小礫を多量に含む。土師器皿（図22-４～8）、須恵器杯の小片が多量に出土した。14世紀の遺構である。

第２区

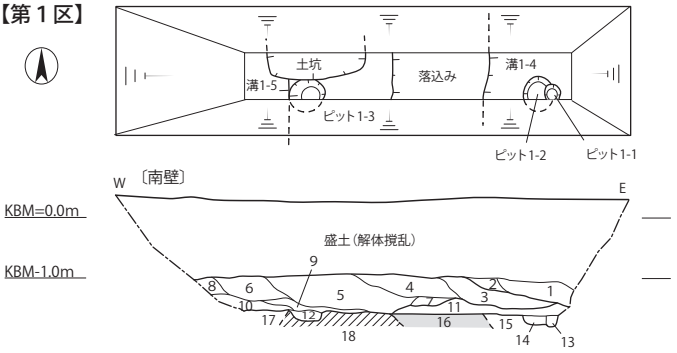
GL-0.7ｍで黒褐色粗砂混じりシルトの近世包含層、-1.1ｍで黒褐色礫混じりシルトの室町時代包含層、-1.3ｍでオリーブ褐色粗砂混じりシルトの平安時代末～鎌倉時代整地層、-1.8ｍで地山に至る。整地層の上面で遺構検出を行ったところ、平安時代末期のピット２基、室町時代前期の溝２条、ピット３基、近世の溝１条を検出した。

ピット2-1　調査区中央で検出した遺構である。平面形状は直径0.25ｍを測る円形を呈する。埋土は暗灰黄色粗砂混じりシルトを主体とし、平安時代末期整地層の上面において成立する。遺構内からは東播系須恵器鉢と土師器皿の小片が出土した。12～13世紀の遺構である。

ピット2-2　調査区中央で検出した遺構で、ピット2-3に切られる位置にある。埋土は暗褐色細砂混じりシルトを主体とする。平面形状は直径0.35ｍ程度の円形に復元できる。遺構内から白磁碗（12世紀）と土師器皿（12世紀）の破片が出土した。

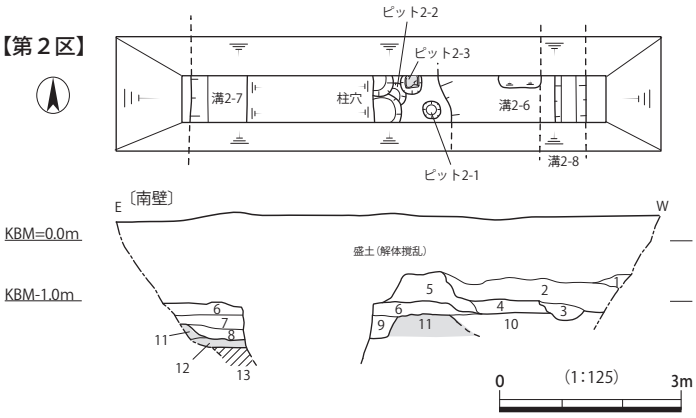
ピット2-3　平面形状は径0.25ｍの円形を測る遺構で、掘方の中央に１辺20cmを測る扁平な角礫を据える。礎石を備える柱穴と考えられる。埋土は黒褐色細砂混じりシルトを主体とする。土質

【第１区】



1）10YR2/3　黒褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る
　拳大の礫少量入る　土器片入る　しまり悪い【近現代堆積層】
2）10YR3/1　黒褐色礫混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る　土器片入る
　【近現代堆積層】
3）10YR3/2　黒褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る
　土器片・炭化物入る　しまり悪い
4）2.5Y3/2　黒褐色礫混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る　土器片入る
　ややしまり悪い【近世前期堆積層】
5）2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粗砂混じりシルト　径3cm未満の礫多量入る
　拳大の礫少量入る　土師器・瓦器片入る　ややしまり悪い
6）2.5Y3/3　暗オリーブ褐色礫混じりシルト～細砂　径2cm未満の礫少量入る
　炭化物多量入る
7）2.5Y4/2　暗灰黄色砂礫　土器片入る　ややしまり悪い
8）10YR2/2　黒褐色粗砂混じり粘土質シルト
　径1cm未満の礫微量入る　炭化物・土器片・陶磁器片入る
　しまり悪い【近世包含層】
9）5Y4/3 暗オリーブ色細砂～礫混じり微砂　径1cm未満の礫少量入る　ラミナあり　しまり悪い
10）10YR2/2　黒褐色粗砂混じり粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　炭化物・壁土・土器片入る　しまり悪い
11）2.5Y3/2　黒褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る
　土器片入る　しまり悪い
12）2.5Y3/2　黒褐色細砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る
　土師器皿片入る　しまりやや悪い【ピット】
13）5Y3/1　オリーブ黒色細砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る　ややしまり悪い【ピット】
14）5Y3/2　オリーブ黒色微砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い【ピット】
15）2.5Y4/2　暗灰黄色粗砂混じりシルトに
　5Y5/3　灰オリーブ黄色シルトブロック20%程度入る
　径2cm未満の礫少量入る　拳大の礫少量入　しまりやや悪い
　【溝埋土】
16）2.5Y3/3 暗オリーブ褐色礫混じりシルトに
　5Y4/3　暗オリーブ色シルトブロック10%程度入る
　径2cm未満の礫少量入る　土器片入る　固くしまる
　【平安時代末期整地層】
17）2.5Y3/1　黒褐色細砂混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る
　炭化物・土器片多量入る　しまり良い
18）2.5Y4/4　オリーブ褐色砂礫　径2cm未満の礫多量入る
　鉄分沈着　固くしまる【旧流路・地山】

【第２区】



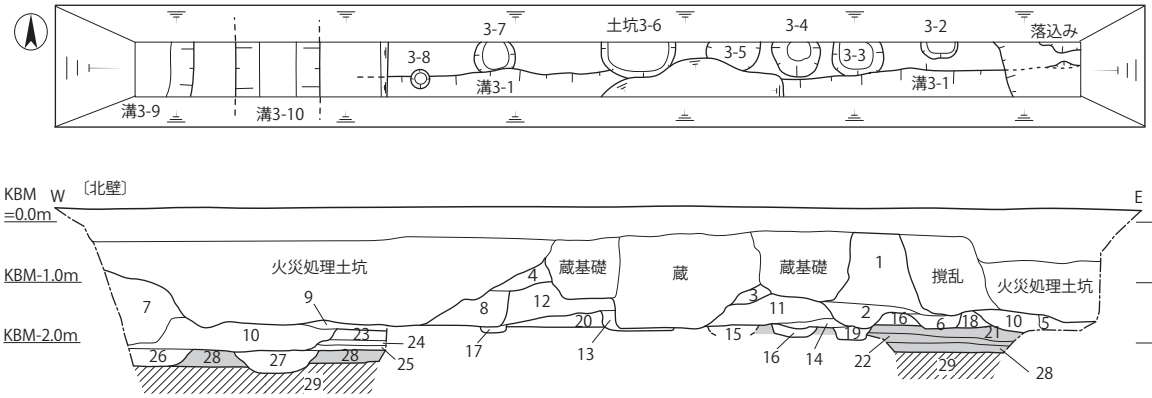
1）10YR2/2　黒褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る
　炭化物・土器片入る　しまり悪い【近世包含層】
2）10YR2/1　黒色粗砂混じりシルト　径3cm未満の礫少量入る
　焼土・炭化物・土器片入る　しまり悪い【近世包含層】
3）2.5Y4/2　暗灰黄色砂礫　径3cm未満の礫多量入る　土器片・青磁片入る
　しまり悪い【近世溝埋土】
4）2.5Y3/1　黒褐色粗砂混じり砂質シルト　径3cm未満の礫多量入る
　炭化物・土器片入る　しまり悪い【近世包含層】
5）2.5Y4/3　オリーブ褐色礫混じりシルトに
　5Y4/4　暗オリーブ色シルトブロック5%程度入る
　径2cm未満の礫多量入る　炭化物・土器片入る
　ややしまり悪い【室町時代包含層】
6）2.5Y3/1　黒褐色礫混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る
　炭化物・土器片入る　やや軟質　ややしまり悪い
　【室町時代包含層】
7）2.5Y4/2　暗灰黄色礫混じり砂質シルト
　径3cm未満の礫多量入る　拳大の礫少量入る　土器片入る
　やや軟質　ややしまり悪い【室町時代包含層】
8）10YR2/2　黒褐色礫混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る　炭化物・土器片多量入る（鎌倉～室町時代遺構埋土】
9）2.5Y3/2　黒褐色細砂混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る　土器片入る【ピット埋土】
10）2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粗砂混じりシルト　径3cm未満の礫少量入る　土器片入る　鉄斑沈着　しまり良い【鎌倉～室町時代落込み）
11）2.5Y4/4　オリーブ褐色粗砂混じり粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　しまり良い【平安時代末期整地層】
12）5Y4/3　暗オリーブ色粗砂混じりシルトと
　2.5Y4/2　暗灰黄色細砂混じりシルトの互層
　径1cm未満の礫少量入る　やや軟質　ややしまり悪い
　【平安時代末期整地層】
13）2.5Y4/1 黄灰色細砂～粗砂　しまり良い【旧流路・地山】

図20　遺構面平面断面図①（１：125）

及び切り合いから室町時代の遺構と推測される。

溝2-6　調査区の東半部で検出した遺構で、検出幅は2.7ｍを測る。埋土は暗オリーブ褐色粗砂混じりシルトを主体とし、やや軟質で水分を含む。室町小路の側溝である可能性があるものの、遺構内から出土する遺物は室町時代に下がるものが多く、第１区の溝1-4に直接連続するとは考えにくい。遺構内からは土師器皿（図22-17･18）、瓦質土器羽釜、東播系須恵器鉢の小片が出土した。

【第３区】



1）2.5Y3/2　黒褐色粗砂混じり粘土質シルト
　径5cm未満の礫多量入る　炭化物・土器片入る　ややしまり悪い
2）2.5Y3/2　黒褐色粗砂混じり粘土質シルト　径2cm未満の礫多量入る
　炭化物・陶磁器片入る　軟質　しまり悪い
3）2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る
　炭化物・土器片入る　しまり悪い
4）2.5Y4/2　暗灰黄色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る
　瓦片入る　しまり悪い【近世包含層】
5）10YR3/2　黒褐色粗砂混じり粘土質シルト　径3cm未満の礫少量入る
　炭化物・土器片多量入る　軟質　しまり悪い
6）2.5Y3/1　黒褐色粗砂混じり粘土質シルト　径2cm未満の礫多量入る
　炭化物・陶磁器片入る　軟質　しまり悪い
7）2.5Y4/1　黄灰色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る
　やや軟質　ややしまり悪い
8）10YR2/2　黒褐色粗砂混じり粘土質シルト　径3cm未満の礫多量入る
　炭化物・土器片入る　しまり悪い【近世包含層】
9）10YR3/3　暗褐色粗砂混じりシルト
　径3cm未満の礫多量入る　やや軟質　しまり悪い
10）5Y4/3　暗オリーブ色微砂混じりシルト　径2cm未満の礫微量入る
　軟質　ややしまり悪い
11）2.5Y3/2　黒褐色粘土質シルトに
　2.5Y5/3　黄褐色粗砂ブロック20%程度入る
　径2cm未満の礫多量入る　しまり悪い
12）2.5Y3/2　黒褐色細砂混じりシルト　径2cm未満の礫下位に少量入る
　しまり悪い【近世包含層】
13）2.5Y3/1　黒褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る
　土師器片多量入る　ややしまり悪い【室町時代遺構】
14）10YR2/2　黒褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る　しまり悪い
15）5Y3/1　オリーブ黒色粗砂混じりシルトブロックと
　5Y3/2　オリーブ黒色粗砂混じりシルトブロックの混合層　やや軟質
　ややしまり悪い
16）2.5Y4/3　オリーブ色粗砂混じり粘土質シルト
　径1cm未満の礫多量入る　土器片微量入る　軟質　しまり悪い
17）2.5Y3/2　黒褐色細砂混じりシルト　径5cm未満の礫少量入る
　炭化物・土器片入る　しまり悪い
18）2.5Y4/2　暗灰黄色　粗砂混じり粘土質シルト　径2cm未満の礫多量入る
　炭化物・陶磁器片入る　軟質　しまり悪い
19）2.5Y3/1　黒褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る
　炭化物・土器片多量入る　ややしまり悪い
20）2.5Y3/2　黒褐色細砂混じりシルト　径5cm未満の礫少量入る
　炭化物・土器片入る　しまり悪い【中世包含層】
21）5Y3/2 オリーブ黒色細砂混じりシルトブロックと
　5Y4/1　灰色シルトブロックの混合層　径3cm未満の礫多量入る
　しまり良い【平安時代末期整地層】
22）5Y4/3　暗オリーブ色礫混じり細砂～シルト　径2cm未満の礫多量入る
　ややしまり悪い
23）2.5Y3/1　黒褐色礫混じり粘土質シルト　径5cm未満の礫多量入る
　ややしまり悪い
24）5Y3/1　オリーブ黒色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る
　やや軟質　しまり悪い
25）5Y3/2　黒褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る　やや軟質
　しまり悪い
26）5Y3/1　オリーブ褐色粗砂混じりシルトブロックと　5Y3/2　オリーブ黒色粗砂混じりシルトブロックの混合層　やや軟質　ややしまり悪い
27）2.5Y2/1　黒色粗砂混じり粘土質シルトに　5Y3/1　オリーブ黒色粗砂混じりシルトブロック10%程度入る　軟質　ややしまり悪い
28）5Y3/1　オリーブ黒色粗砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る
　炭化物・土器片入る　軟質　ややしまり悪い
29）5Y4/3-4/4　暗オリーブ色砂礫～粗砂【地山】

図21　遺構面平面断面図②（１：125）

溝2-7　調査区西端で検出した遺構である。南北方向にのびる溝で、検出幅は0.9ｍを測る。東方を撹乱で失うが、第１区の溝1-5に連続する位置にある。埋土は黒褐色礫混じりシルトを主体とし、多量の炭化物と土器片を含む。遺構内からは瓦器椀（13世紀）、土師器皿（15世紀）の小片が出土した。

第３区

第３区は、近世に設けられた蔵の基礎や火災処理土坑による削平が大きく、中世包含層はほとんど残っていない。しかしこれより下層の平安時代末～鎌倉時代初頭の包含層及び整地層の残存状態は良好である。GL-1.1ｍで黒褐色粗砂混じり粘土質シルトを主体とする中世包含層、-1.6ｍでオ

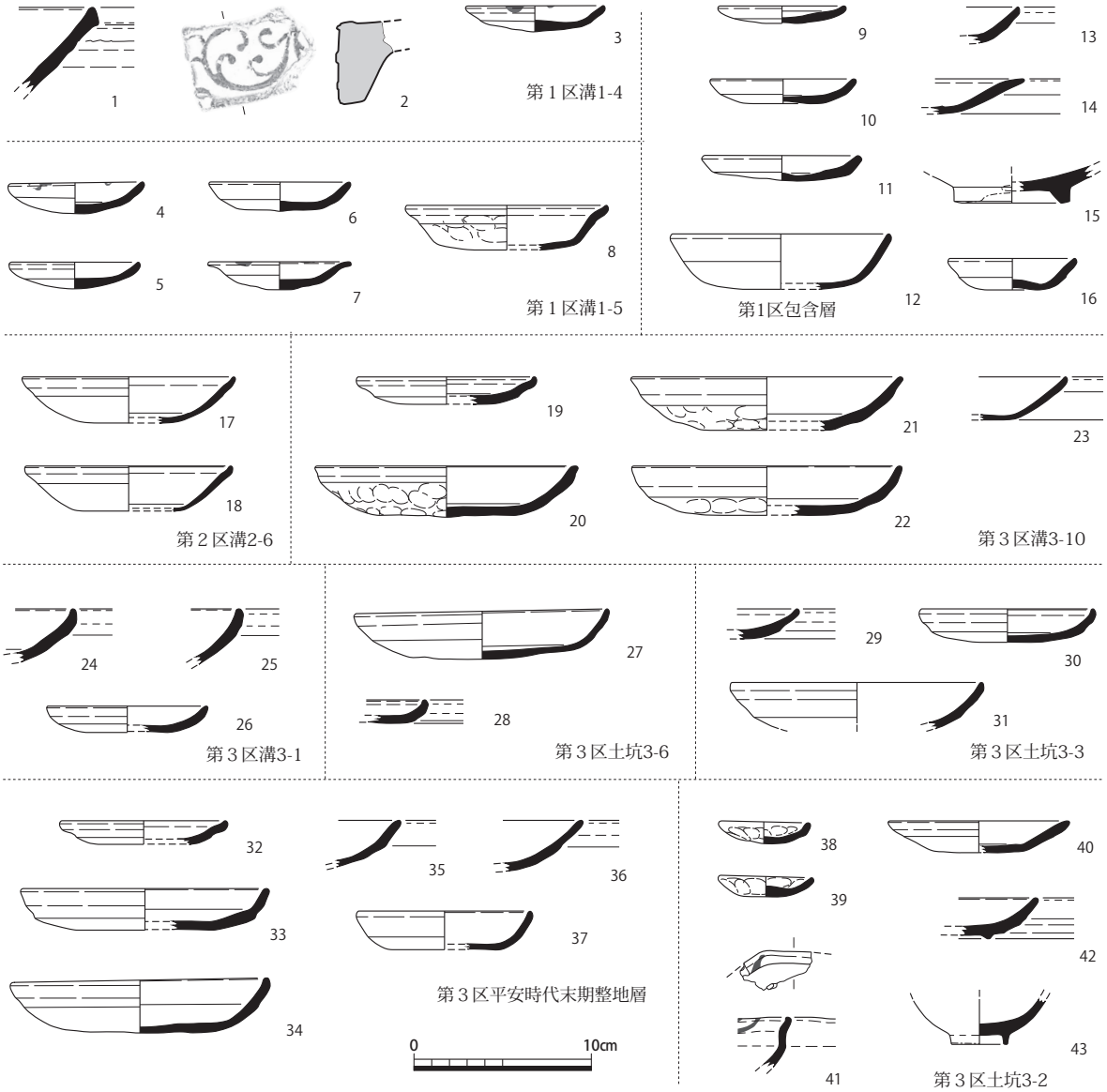


図22　出土遺物実測図（１：４）

リーブ黒色細砂混じりシルトブロックを含む平安時代末期整地層、-2.0ｍで暗オリーブ色砂礫～粗砂の地山に至る。整地層上面で遺構面を検出したところ、平安時代後期の南北溝２条、ピット１基、室町時代の土坑１基、ピット１基、東西溝１条、近世のピット２基と落込みを検出した。

溝3-1　調査区の南辺を東西方向にのびる遺構である。検出長は11.6ｍ、検出幅は0.5ｍを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを主体とする。遺構内からは土師器皿（図22-24～26）、須恵器鉢（13世紀）、鉄釉を塗布した施釉陶器合子、丸瓦片が出土した。中世以後の遺構である。

土坑3-2　調査区北東部で検出した遺構である。埋土は黒褐色粗砂混じり粘土質シルトを主体とする。埋土から土師器皿（図22-38～40）、施釉陶器（図22-41～43）が出土した。16世紀の遺構である。

土坑3-3　調査区北東部で検出した遺構である。平面形状は不定形で最大径は0.9ｍを測る。埋

土は黒褐色粘土質礫混じりシルトを主体とする。遺構内からは高台に離れ砂が付着する染付盃、土師器皿（図-29～31）が出土した。17世紀の遺構である。

土坑3-4　調査区北東部において検出した遺構で、平面形状は直径0.7ｍを測る歪な円形を呈する。埋土は暗オリーブ色黒褐色粗砂混じり粘土質シルトを主体とする。遺構内から白磁椀（12世紀）、土師器皿（12世紀）、土師質土器釜の破片が出土した。

土坑3-5　調査区北東部において検出した遺構で、平面形状は直径0.8ｍを測る円形を呈する。埋土はシルトブロックを含むオリーブ褐色粗砂混じりシルトを主体とする。遺構内からは白磁皿（12世紀）、土師器皿（12世紀）が出土した。

溝3-9・3-10　調査区西半部を南北方向にのびる溝状遺構で、断面形状はいずれも浅い杯形を呈する。流水痕跡は認められないが、埋土にブロック土を含むため、人為的に埋め戻された可能性がある。溝3-10からは、土師器皿（12世紀）、白磁皿（12世紀）が出土した。

３．まとめ

以上、左京七条三坊八町跡の調査成果を記述した。これまでこの町域は、広大な寺域を占める東本願寺の存在により、大規模な開発を免れてきたという経緯がある。このため、発掘調査の事例は少ないが、逆に地中に多くの情報が残されている地域であるともいえる。今回の調査では、調査対象地のほぼ全域に、平安時代～近世の遺構群が良好に残存することが明らかとなった。これらの情報を集積することが、地域の解明につながることに期待したい。

（黒須　亜希子）

註

１）「試掘調査一覧」『平成３年度　京都市内遺跡試掘調査概報』京都市文化観光局、1992年。

２）「試掘調査一覧」『平成25年度　京都市内遺跡試掘調査報告』京都市文化観光局、2014年。

Ⅱ-4　平安京左京九条一坊九町跡、教王護国寺旧境内

№47（22H184）

1．調査経緯（図23）

本件は、研修センター建設に伴う試掘調査である。周知の埋蔵文化財包蔵地である「教王護国寺旧境内」と「平安京跡」に該当する。対象地は左京九条一坊九町に相当し、計画地の北側で八条大路南築地心が想定される（図23）。九町には平安時代から江戸時代に、教王護国寺の子院や関連諸施設が所在したと伝わる。

周辺では、複数の調査が行われている。調査1では壬生大路東築地内溝の可能性のある南北溝を[1]、調査2では大宮大路西側溝を確認している[2]。ただ、調査2では八条大路南側溝の検出も想定されたが確認できず、同様に想定された調査3でも、確認できていない。周辺で、八条大路築地の関連遺構は確認されていない状況にある。

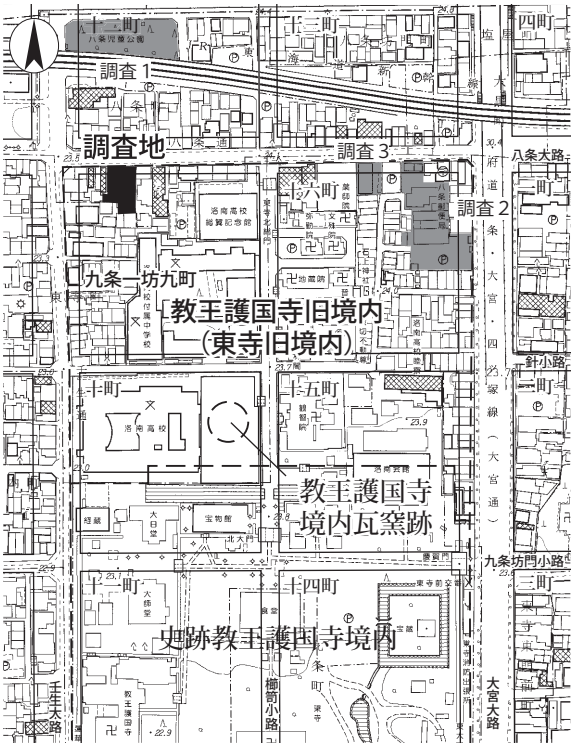


図23　調査位置図（1：5,000）

2．基本層序と遺構（図24・25）

基本層序は、GL-0.35mで近代整地層、-0.5mで時期不明包含層、-0.7mで地山に至る。

溝1　調査区の北側で検出した。検出長で東西1.3mを測る。南肩は2つの土坑に切られており、検出できた南北幅は1.6mを測る。調査区北東側の断ち割り部で深さを確認しており、0.3mを測る。地山を切り込んで成立する。出土遺物は細片で、図化に耐えないが、中世頃の特徴を持つ。

柱穴4　調査区の中央で検出した。平面形は円形で、径0.5mを測る。中央に根石が据えられており、

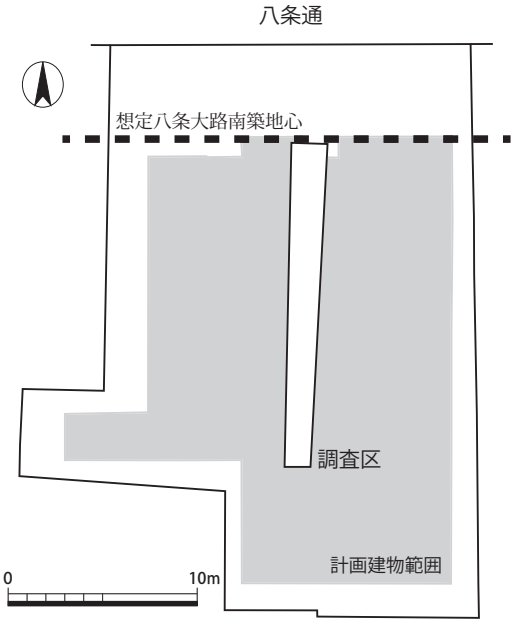


図24　調査区配置図（1：400）

柱穴と思われる。遺物は出土せず、時期は不明である。

他にも複数の遺構を確認しているが、いずれも成立層や出土遺物から、近代以降の遺構と判断できる。

溝1は地山上面で検出しており、中世以前に掘削された可能性がある。また、北肩が八条大路南築地心から南に1.7mに位置し、築地内溝の可能性があげられる。しかし、出土遺物は細片で、正確な時期比定は困難であった。また、南肩は土坑に切られていることから、正確な規模もわからず、性格は断定できない。ただ、周辺ではこれまでに八条大路南築地に関連する遺構は検出されておらず、今回の調査で確認した溝1が南内溝にあたるのであれば、条坊復元に必要な手掛かりの一端になる。

3．まとめ

今回の調査では、これまで未確認であった八条大路築地内溝の可能性のある東西溝を検出した。しかし、これはあくまで検出状況からの推測にすぎない。今後、より蓋然性の高いデータを積み重ね、本調査成果を補完し、再検討する必要がある。

（佐藤　拓）

註

1）『京都市内遺跡試掘調査報告　平成30年度』京都市文化市民局、2019年。

2）『平安京左京九条一坊十六町　東寺旧境内遺跡』古代文化調査会、2009年。

3）『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』京都市文化市民局、2006年。

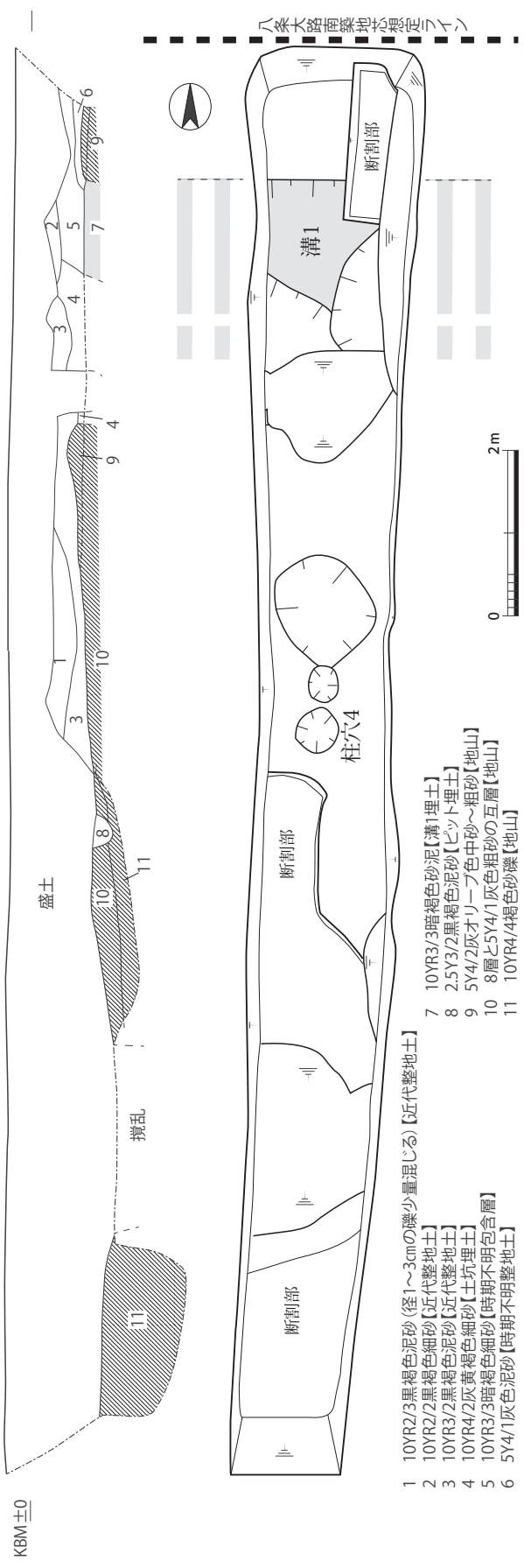


図25　調査区平・断面図（1：80）

Ⅲ-1　円宗寺跡　№14（21S537）

1．調査の経緯（図26）

本件は宅地造成工事に伴う試掘調査である。調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「円宗寺跡」に該当する。円宗寺は延久２年（1070）に後三条天皇の発願で建立された寺院である。円宗寺とその近隣に造営されていた円融天皇の円融寺、一条天皇の円教寺、後朱雀天皇の円乗寺という天皇発願寺院群を「四円寺」と総称している。円宗寺は『朝野群載』記載の供養願文「仁和寺之南傍、有一吉土」から、仁和寺南の今回調査地付近に所在したと考えられてきた。これまで発掘調査によって直接的に円宗寺の存在を示す遺構は確認できていないが、調査地周辺で実施した立会調査（図26-調査１）[1]では、今回調査地点の北側道路で多量の瓦が出土しており、近接地に寺院遺構が展開する可能性が高いとされた。円乗寺跡にあたる敷地北東の発掘調査（同調査２）[2]では平安時代中期から後期の遺構・遺物を確認している。なお、円宗寺は応安２年（1369）の大風で倒壊した後は復興されなかったようである。試掘調査は令和４年３月15日に実施した。

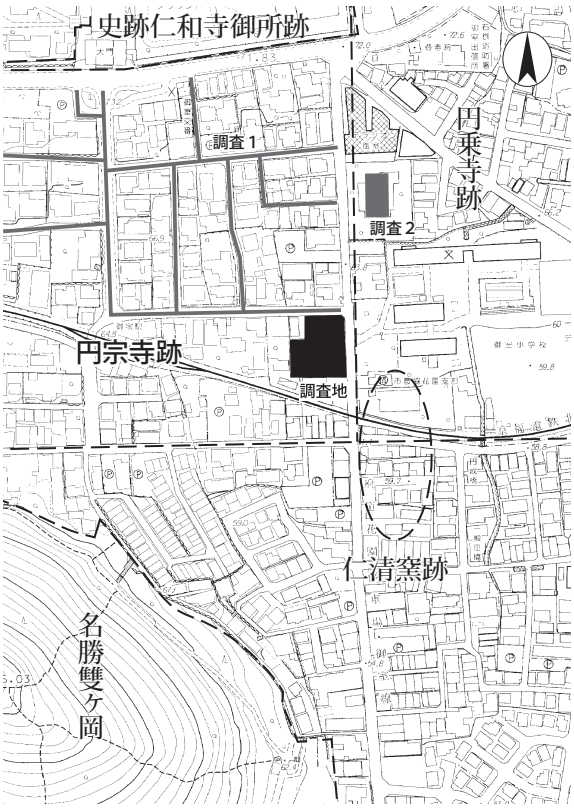


図26　調査位置図（１：5,000）

2．遺構（図27～29）

対象地は北から南へと落ちていく地形であり、敷地北側が一段高い雛壇状となっていた。敷地北半は調査区を設けようと試みたが、固い地盤改良により、掘削することが困難であった。そのため、北半については造成の切り土時に立会を実施し、結果として平安時代の遺構が展開しないことを確認した。

敷地南半で、造成に伴う擁壁設置予定箇所（１区）及び埋設管設置予定箇所（２区）に試掘調査区を設定した。１区ではGL-0.33ｍで黄褐色泥砂の整地層（６層）となり、調査区北端の整地層上面で礫が多量に詰まった溝状遺構を検出した。性格は不明だが、地業の可能性もある。その近接地にて平安時代中期の瓦が多量に入った土坑を検出した。調査区は南北方向

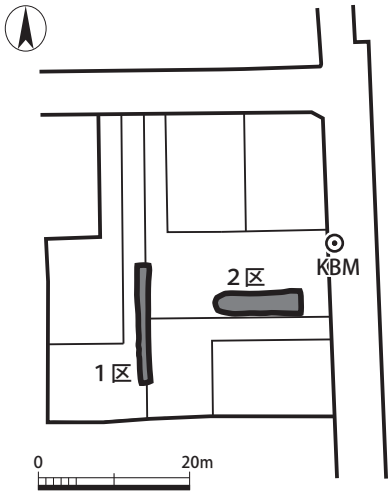


図27　調査区配置図（１：1,000）

に長さ15.5ｍまで延ばし、中央付近と調査区南端の２箇所で深掘りした。中央部では整地土下で４段階（11世紀）の土師器や炭化物を多量に含んだ厚さ５cmのにぶい黄褐色シルト層（７層）、GL-0.7ｍでにぶい黄褐色シルト層（11層）、-0.9ｍでにぶい黄褐色粘質土（12層）となる。調査区南端ではGL-0.7ｍで黄褐色泥砂の整地層を切って瓦片を含む暗灰黄色砂泥（10層）、-1.1ｍでにぶい黄色粘質土（13層）と黒褐色粘質土（14層）となり、ここに11世紀の土師器片が含まれる。さらに掘り下げたGL-1.5ｍで浅黄色シルトの地山（15層）となる。

２区はGL-0.3ｍで粘性のある黄橙色砂礫となるが、大半は解体建物の影響でGL-1.4ｍ以上まで削平されていた。調査区東端で近世の桟瓦片を含む土坑を検出したが、遺構はこれのみであった。

３．遺物（図30～32）

１区から土師器、瓦が出土した。１～10は７層から出土した土師器皿である。器壁が薄く、破片が細かいため、口径の復元が難しい。１～４は口縁端部が「て」字状の皿Ａであり、平安時代中期、４段階の特徴を有する。５～10は皿Ｎで口縁部が外反する。こちらも４段階の特徴を有する。10は復元口径14.8cmだが、大半は口径が復元できないため、年代の絞り込みは難しい。11層や14層でも11世紀ごろの土師器皿が出土したが、図化に耐える大きさの破片がなかった。11～13は軒丸瓦である。11は単弁十二葉蓮華文で、中房に５つの蓮子をおく。11世紀の所産で、産地は不明である。12は複弁蓮華文で、間弁を配し、中房には蓮子を置く。遺存する２葉の位置関係から八葉と推定する。11世紀後半の大和産である。13も蓮華文だが、残りが悪く、文様は不詳である。14～16は丸瓦である。14と16は玉縁が遺存し、16は両端部が遺存することから全長35.6cmであることが分かる。15と16は凸面縄叩き調整、14は凸面調整をナデ消している。いずれも凹面は布目を残す。17・18は平瓦である。ともに凹面に布目と糸切痕、凸面は縄叩き調整である。18は全長が分かり、33.3cmである。11～14・16は９層、15は５層、17・18は遺構検出中に出土したものである。

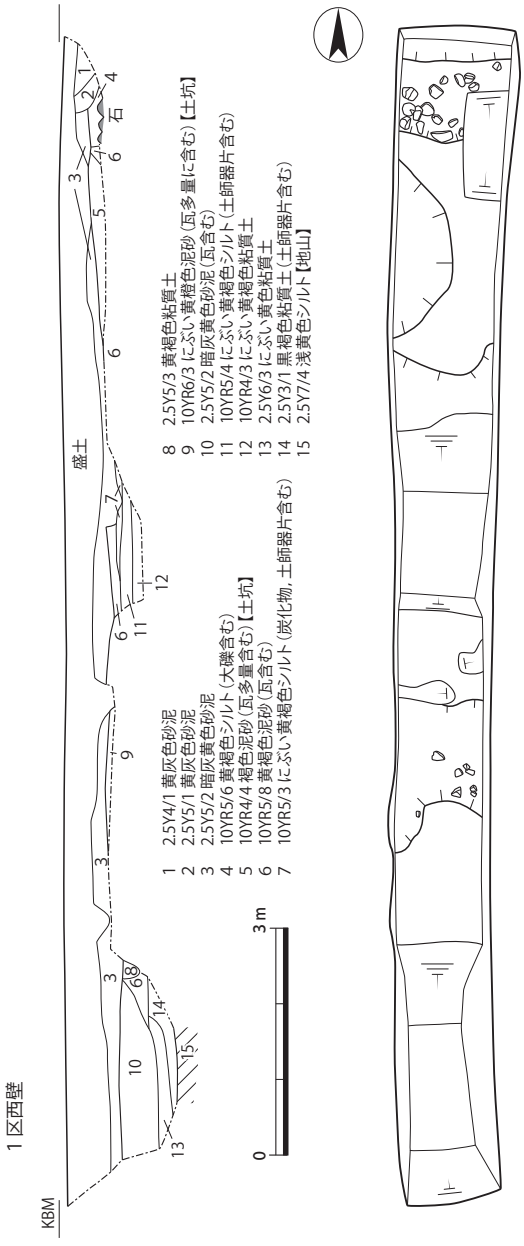


図28　１区平・断面図（１：100）

4．まとめ

円宗寺跡において、円宗寺の創建・存続時期から大きく外れないとみられる遺物が遺構に伴って出土したことは特筆に値する。これまでの調査では円宗寺の実態を直接的に示す資料を得ておらず、今回の調査が円宗寺解明の橋頭堡となりうる。造成に伴う遺跡への影響部分については試掘調査によって記録を図り、造成後の住宅建設のうち遺跡への影響が大きい計画については別途発

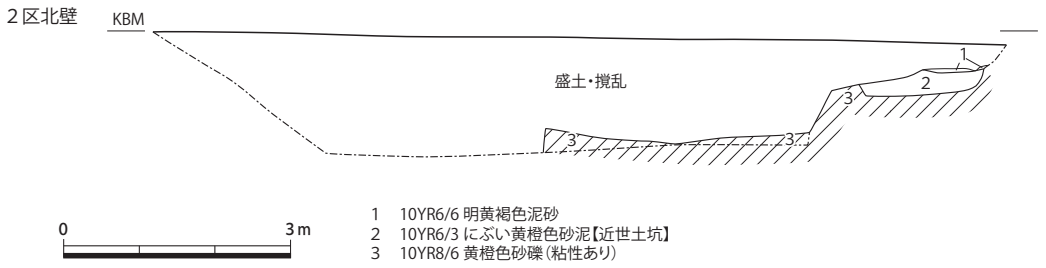


図29　2区断面図（1：100）

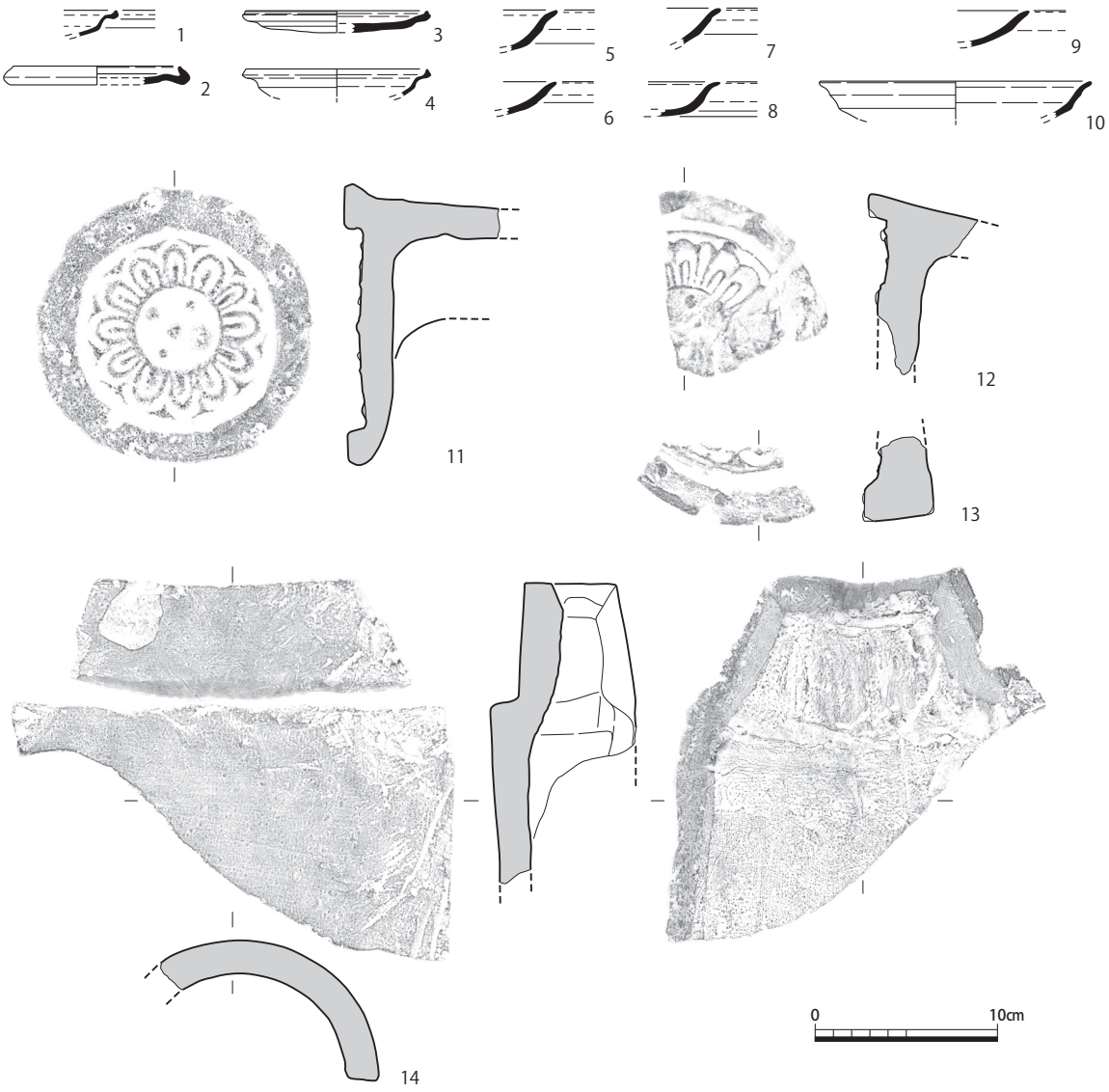


図30　遺物実測図及び拓影（1：4）

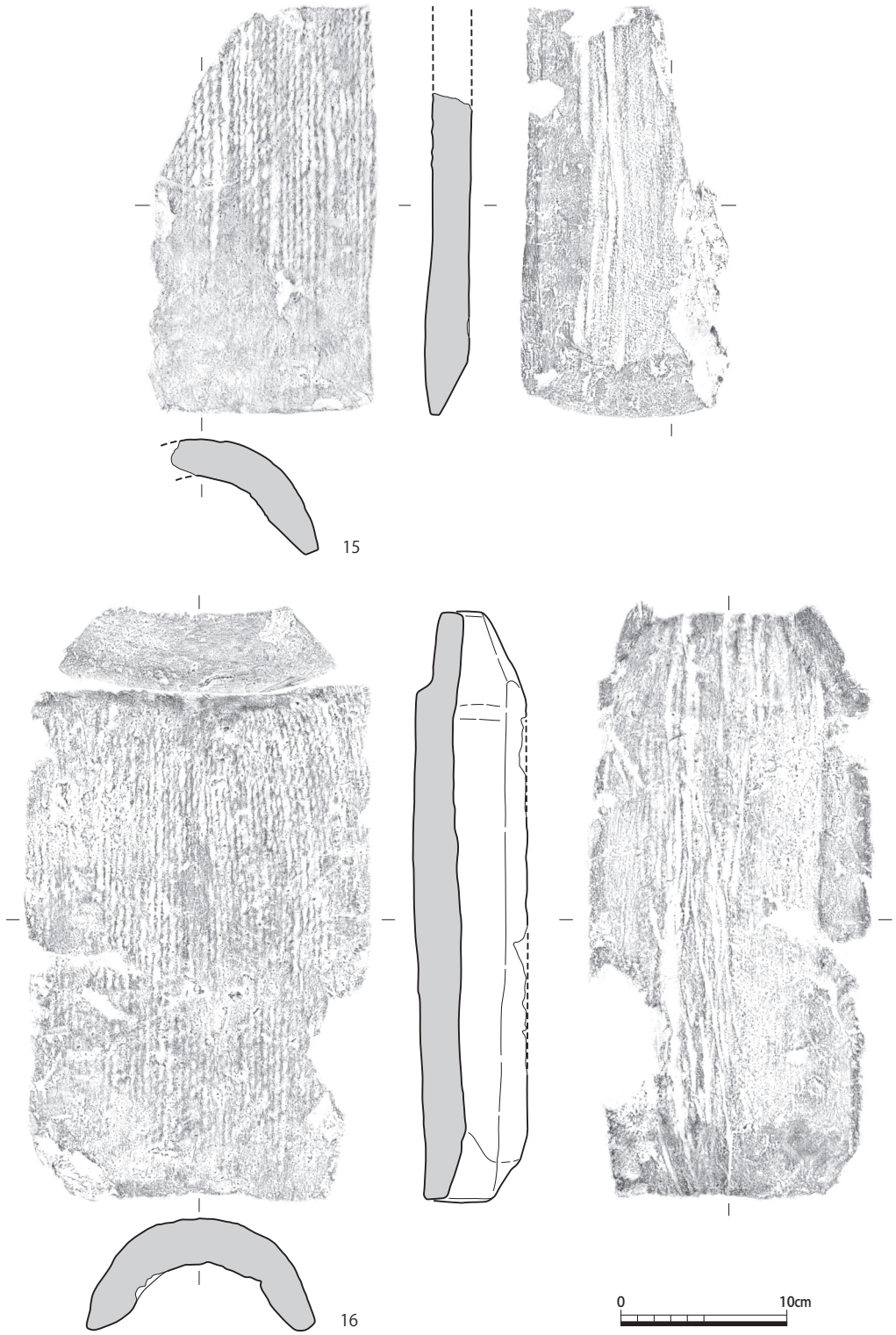


図31　遺物実測図及び拓影（1 ： 4）

掘調査を指導した。その成果については次年度以降の『京都市内遺跡発掘調査報告』にて報告予定である。

（新田　和央）

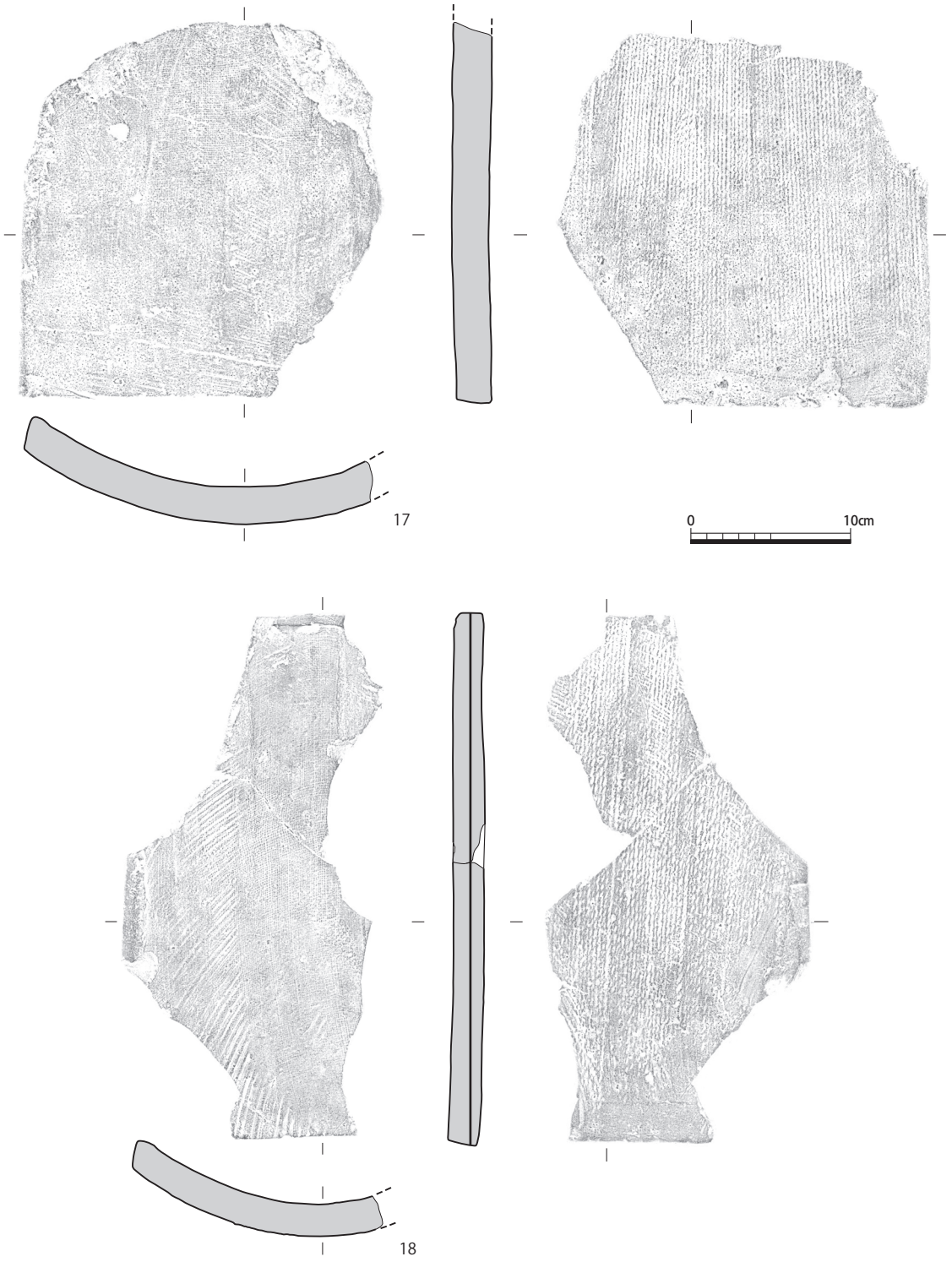


図32　遺物実測図及び拓影（1 ： 4）

註

1）　加納敬二「円宗寺跡」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1989年。

2）　平田泰「円乗寺跡」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1991年。

Ⅲ-2　嵯峨遺跡、清涼寺境内　№74（22S285）

1．調査経緯（図33・34）

本件は、住宅型老人ホーム建設に伴う試掘調査である。調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地「嵯峨遺跡」に該当し、調査地のほぼ中央から西側は、「清涼寺境内」にも該当する。多数の寺社や関連諸施設が集中したエリアである嵯峨において、清涼寺はその中心に位置づけられてきた。現在は、通称「嵯峨釈迦堂」として存続する。



図33　調査位置図（1：5,000）

調査地は鎌倉時代や室町時代に描かれた絵図によると、「今林殿」や「蓮華清浄寺」が所在したとされる[1)]。また、応仁の乱以降は、往時の隆盛は影を潜めるが、複数の「洛中洛外図屏風」に、主要道路沿いに町屋が建ち並ぶ様子が描かれている。調査地の東に隣接する嵯峨経176号線は、少なくとも江戸時代には機能していたとみられ、明治期の嵯峨地籍図によると、この道に沿って短冊状の区画が並んでいる[2)]。

調査地周辺では、複数の調査が行われているものの、目を引く成果はあげられていない。よって、今回の調査は嵯峨遺跡・清涼寺境内に関連する遺構・遺物の遺存状況の確認を目的とした。

調査は令和4年10月17日に実施した（1・2区）。また、2区で確認された溝1の性格を明らかにするために、同年11月7日に追加調査を実施した（3区）。

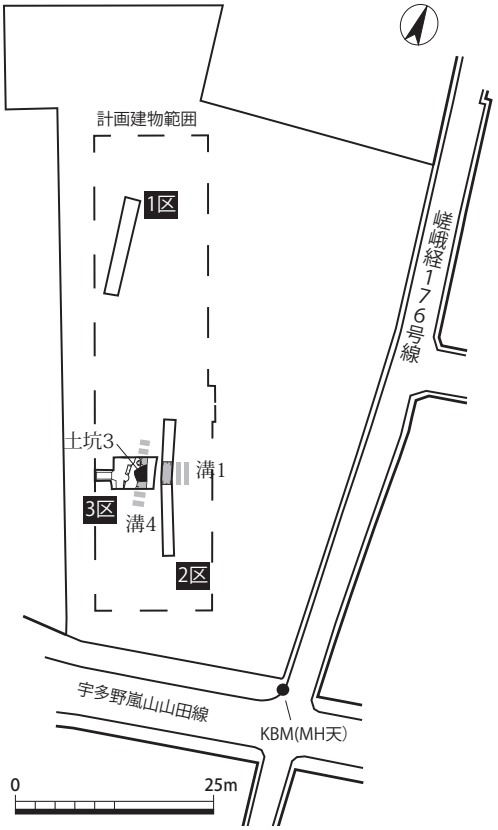


図34　調査区配置図（1：1,000）

2．調査概要

（1）基本層序

最も地層の遺存状況が良好なのは、調査地北側に設けた1区である。現代耕土以下GL-0.3mで旧耕土、-0.4～0.5mで時期不明整地土①、-0.8mで時期不明整地土②、-1.0mで地山に至る。

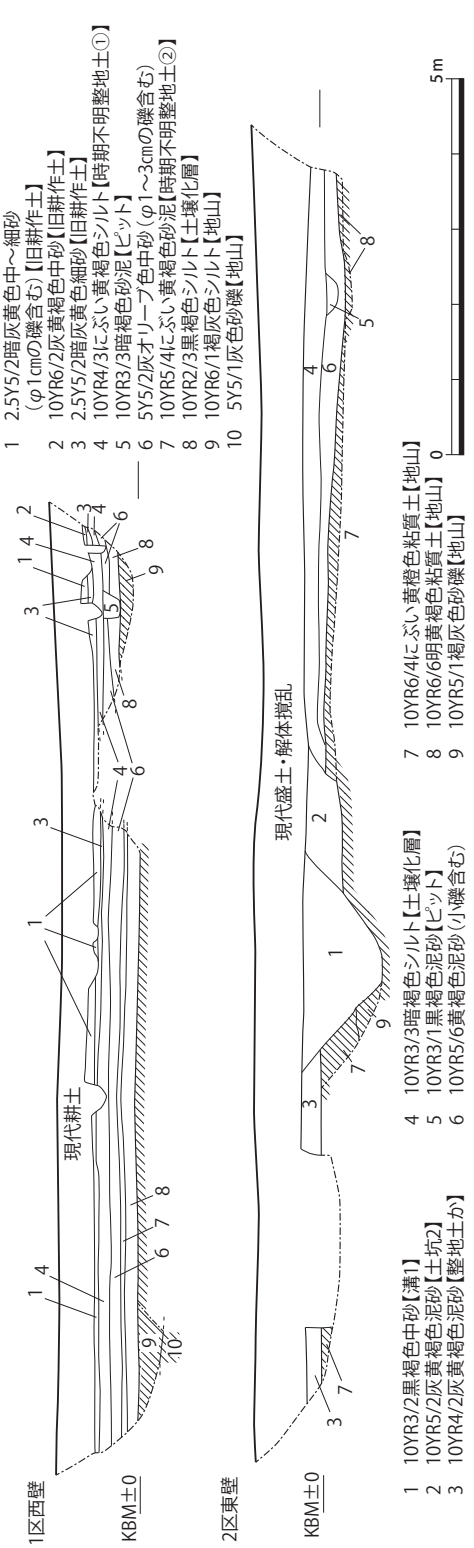


図35　1・2区断面図（1：100）

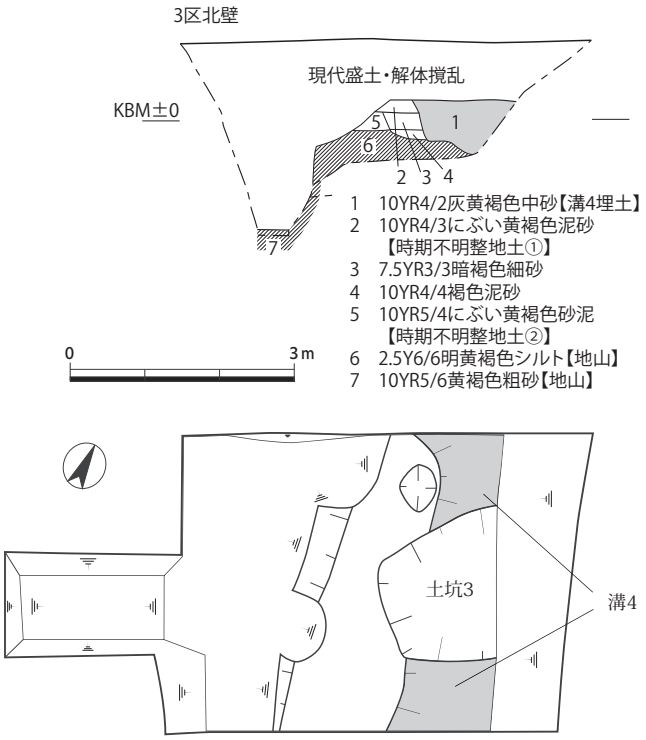


図36　3区平・断面図（1：100）

（2）遺構（図35・36）

溝1　2区の中央北寄りで確認した。概ね東西方向に延びるが、東北に約20度振れている。幅2.9m以上、深さ1.05m以上を測る。埋土は単層で、締まりがないことから、人為的に埋め立てられたとみられる。15世紀頃の特徴を持つ土師器皿片が出土した。

土坑3　3区の中央東側で確認した。平面形は不整円形で、径は2.0m程度を測る。完掘していないため、深さはわからない。埋土は灰黄褐色粘性中砂で、黄褐色粘性中砂がブロック状に混じる。染付片が出土した。

溝4　3区の東端で確認した。概ね南北方向に延びるが、北西に約10度振れている。東肩は調査区外に続く。検出長4.9m、幅1.4m以上を測る。調査終了直前に断割を行い、深さ0.75mであることを確認した。埋土は単層で、中世の白磁片が出土した。

3．まとめ（図37）

本調査では、2・3区で複数の遺構を検出した。溝1・4、土坑3はその遺構配置から、（1）溝1

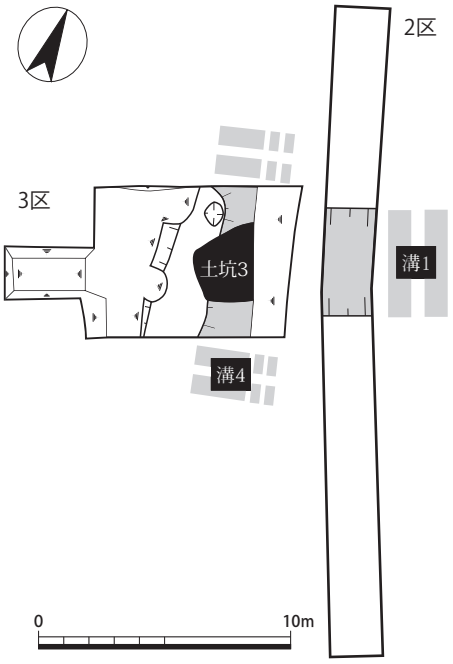


図37　2・3区平面図（1：200）

と土坑3が同一遺構である、（2）溝1と溝4が同一遺構である、（3）溝1は3区まで延びず、それぞれが独立した遺構である、という関係が考えられる。しかし（1）については、土坑3は埋土には黄褐色粘性中砂がブロック状に入るのに対し、溝1にはそれが認められない。むしろ、埋土の質感は溝1・4が類似する。これは（2）である可能性が示唆される。この場合、溝1と溝4は同時期の遺構であり、溝1と溝4が合流する地点に、土坑3が溝廃絶後に掘り込まれたものと想定される。溝1・4からは中世の遺物が、土坑3からは近世の遺物が出土していることも、この想定を裏付ける。しかし、溝1の底はKBM-0.8m、溝4はKBM-0.5mと深さが異なる。また、出土遺物はいずれも細片で、数も限られる。中世の遺物が後世の混入である可能性もあるため、溝1・4が同一の遺構である積極的な根拠にはならず、想定に留まる。なお、（3）については検証ができず、可能性の提示に留めたい。

本調査は土地的・時間的制約から、狭少な面積の調査に留まった。このため、この溝が何を意図して設けられたものかを判断できなかった。しかし、実態が不明瞭であったこの地で、決して小規模とは言えない溝の存在を確認したのは、特筆すべき成果だろう。

調査地が所在する嵯峨遺跡では、室町時代前半に幅3m、深さ1mを超える規模の溝が増加するとされており、これらは寺院の区画溝として報告されている[3)]。溝1がこの規模に類似するのは興味深い。ただ、この報告は検出状況や史資料を総合的に判断した結果であり、溝1がこれに相当するかは、本調査成果のみをもって判断することは出来ない。

嵯峨遺跡は平安時代以降、天皇の別院や大規模な寺社が集中した遺跡である。また、関連諸施設や人々が居住域を形成し、京の「衛星都市」と評価されることもある[4)]。今後、この地域一帯での調査事例を積み重ね、その実態を明らかにすることが求められるだろう。今後の調査成果を注視したい。

（佐藤　拓）

註

1）後宇多天皇皇后の御所である「今林殿」の中に、彼女の死後山陵が築かれ、「蓮華清浄寺」となったようである。現在でも、調査地の60m東方に今林陵が現存する。

2）山田邦和『日本中世の首都と王権都市-京都・嵯峨・福原-』平安京・京都研究叢書2、文理閣、2012年。

3）馬瀬智光「洛外における堀の変遷」『京都市文化財保護課研究紀要』創刊号、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、2018年。

4）註2文献

Ⅲ-3　寺町旧域、公家町遺跡　№21（20H502）

1．はじめに（図38・39）

本件は下水道工事に伴う調査である。工事は御所の東側に設けた発進竪坑からシールド工法で丸太町通を西へ進み堀川通まで掘削する計画であったため、遺跡への影響が大きい発進竪坑および土砂ピットについて試掘調査を行った。

発進竪坑・土砂ピットが掘削されるのは京都御苑の東駐車場で、周知の埋蔵文化財含蔵地「公家町遺跡・寺町旧域」に該当する。周辺では京都御所及び京都御苑内の工事に伴って試掘・立会調査が行われており、各時代の地層が良好な状態で残っていることが確認されている。また、東近接地の京都府立鴨沂高校の建て替え工事でも寺町旧域に伴う近世墓などが確認されている[1)]。

試掘調査はまず遺跡の有無を確認するための調査を令和３年9月３・６日に行った（1区・2区）。この結果、複数の遺構面を検出した。土砂ピットについては、遺跡への影響が大きいと判断されたため、追加の調査を令和４年1月24日～同月31日に行った（3・４区）。なお、試掘調査に先立ち、工事ヤードに伴う仮設水道管工事が行われた。この掘削時に、江戸時代の石組暗渠を確認したため、詳細分布調査を行った。この成果についても合わせて報告する。

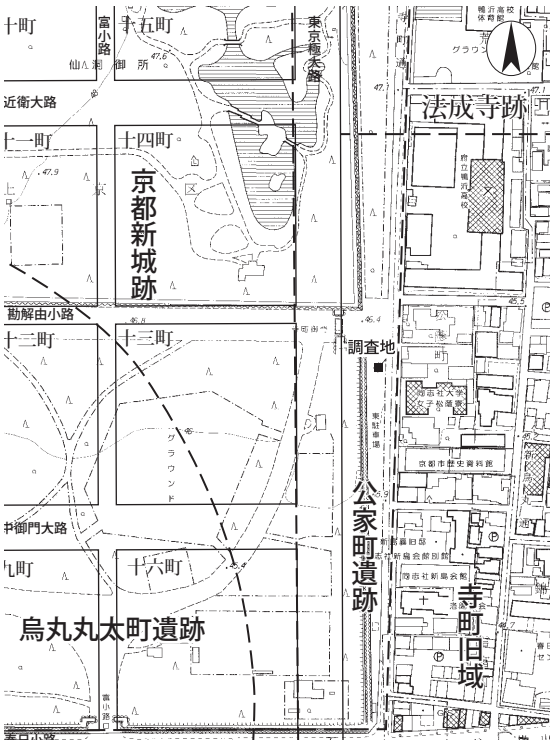


図38　調査位置図（１：5,000）

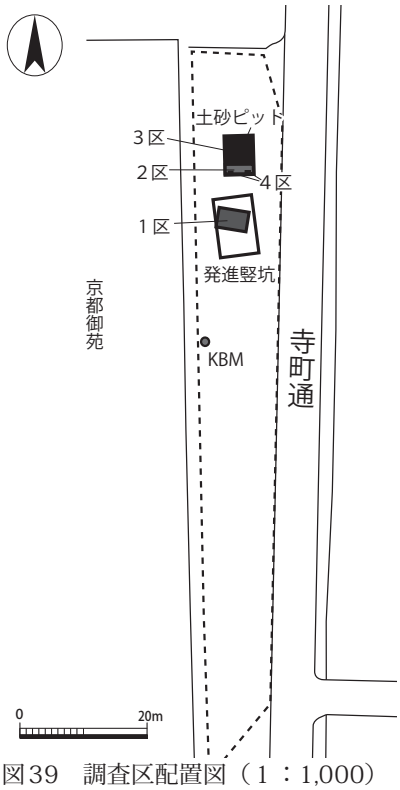


図39　調査区配置図（１：1,000）

2．遺構（図40～図45）

層序

当該地は鴨川に近く、全体的に度重なる氾濫堆積層を母材とした砂質の強い地質であった。GL-1.5～-2.0ｍで検出した無遺物層も水成堆積による砂礫層である。洪水後のやや安定した段階で

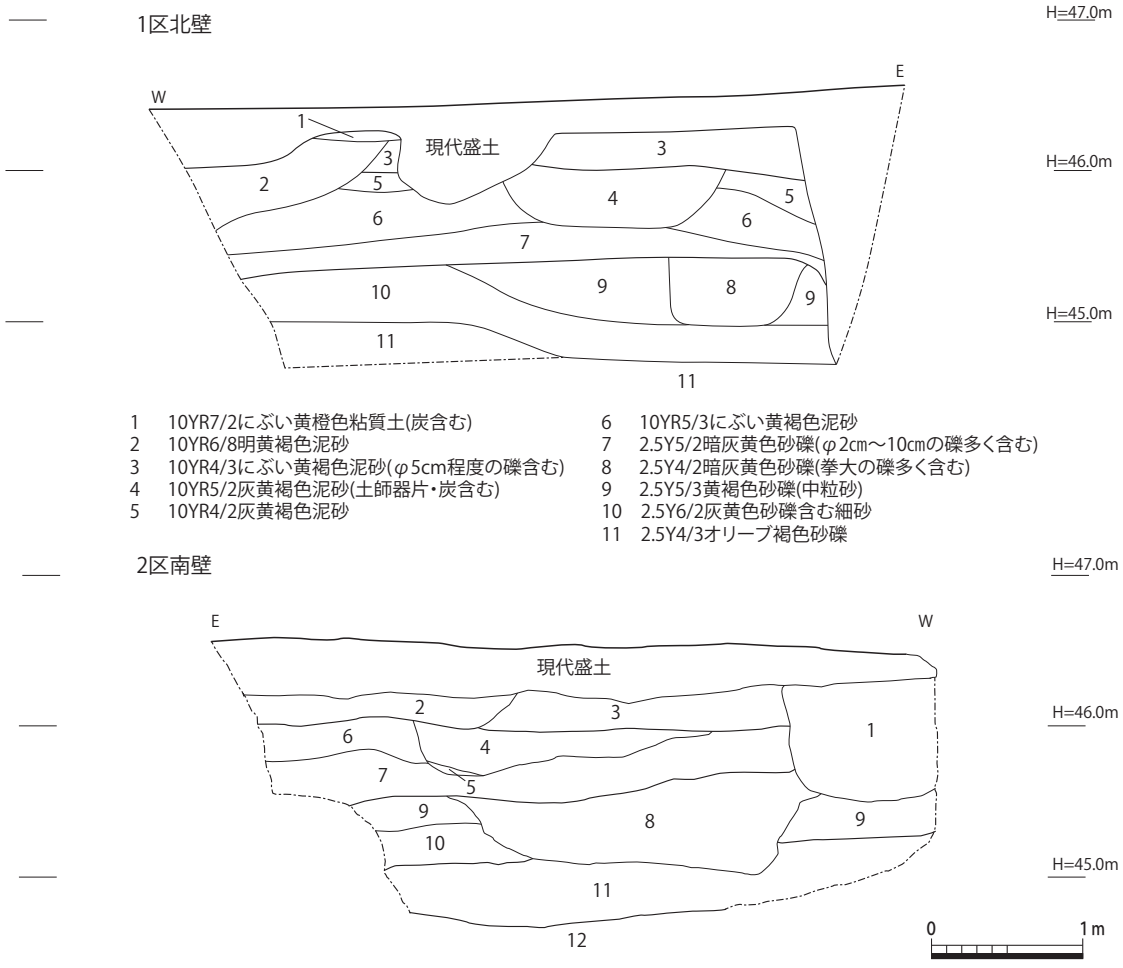
遺構が展開する様子を確認し、本調査では鎌倉時代から江戸時代にかけての遺構を検出した。

3区北壁を基準とした当該地の層序は現代盛土以下GL-0.35ｍで暗灰黄色砂泥からなる近世後期整地層(層3)、-0.45ｍで暗灰黄色泥砂からなる近世整地層（層4)、-0.6ｍでにぶい黄褐色砂泥からなる中世整地層（層５)、-0.70ｍで灰黄褐色砂泥（層６)、-0.75ｍでにぶい黄褐色泥砂からなる中世整地層（層10)、-0.8ｍで灰黄褐色泥砂（層12)、-1.0～1.1ｍで黄灰色泥砂からなる中世包含層（層19)、-1.4ｍでオリーブ褐色砂礫（層20)、-1.7ｍ以下黄灰色シルト～砂礫の河川堆積層であった。3区ではこのうち5面で、平面的な遺構検出及び掘削調査を実施した（図41)。なお、2区ではGL-1.0ｍで鎌倉時代の遺構を検出した。

遺構（図40～45）

2区

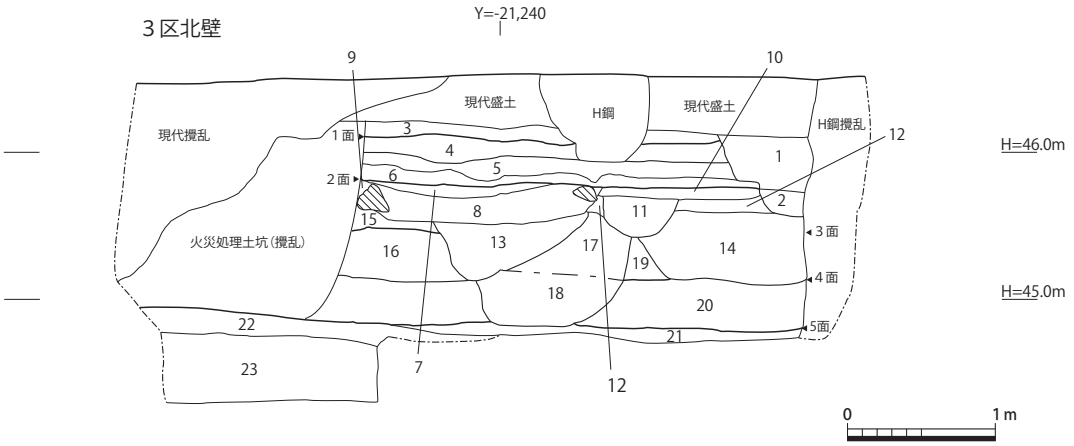
土坑3　南壁で土坑3基を確認した。土坑３は南壁GL-1.0ｍで確認した土坑（南壁層８）で東西2.5ｍ、深さ0.4ｍ、埋土は褐灰色泥砂であった。鎌倉時代の土師器が出土した。



1　10YR7/2にぶい黄橙色粘質土(炭含む)
2　10YR6/8明黄褐色泥砂
3　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂(φ5cm程度の礫含む)
4　10YR5/2灰黄褐色泥砂(土師器片･炭含む)
5　10YR4/2灰黄褐色泥砂
6　10YR5/3にぶい黄褐色泥砂
7　2.5Y5/2暗灰黄色砂礫(φ2㎝～10㎝の礫多く含む)
8　2.5Y4/2暗灰黄色砂礫(拳大の礫多く含む)
9　2.5Y5/3黄褐色砂礫(中粒砂)
10　2.5Y6/2灰黄色砂礫含む細砂
11　2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫

1　2.5Y4/2　暗灰黄色泥砂(拳大の礫多量に含む)【土坑１】
2　2.5Y4/1　黄灰色泥砂
3　10YR6/6　明黄褐色泥砂
4　2.5Y7/6　明黄褐色微砂 ┐【土坑2】
5　2.5Y5/2　黄褐色微砂 ┘
6　5Y4/2　灰オリーブ色泥砂
7　2.5Y3/2　黒褐色泥砂
8　10YR4/1　褐灰色泥砂【土坑３】
9　2.5Y4/2　暗灰黄色微砂
10　2.5Y4/1　褐灰色微砂(5㎝程の小礫含む)
11　5Y4/2　灰オリーブ色砂礫(10～20㎝)の礫含む
12　2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫

図40　1・2区断面図（1：50）



1　2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂(拳大の礫・炭多く含む)
2　2.5Y3/2黒褐色泥砂(土師器含む)　【土坑近世】
3　2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(2～3cm, 20cm大の礫含む)【近世整地層】
4　2.5Y5/2暗灰黄色泥砂(炭・焼土塊少量含む)【近世整地層】
5　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(土師器細片含む)【中世整地層】
6　10YR4/2灰黄褐色砂泥(土師器細片含む)【中世整地層】
7　10YR4/1褐灰色砂泥【SK1の最上層】
8　10YR3/2黒褐色砂泥(土師器多量に含む)【SK1】
9　10YR4/1褐灰色砂泥
10　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂(5cm大の礫含む)
11　10YR4/1褐灰色泥砂(2～3cm大の礫含む、土師器細片含む)
12　10YR4/2灰黄褐色泥砂(5cm大の礫含む)
13　10YR3/2黒褐色泥砂(2～3cm大の礫含む)
14　10YR3/2黒褐色泥砂(2～5cm大の礫含む)
15　10YR4/1褐灰色泥砂(5～10cm大の礫含む)
16　10YR3/3暗褐色泥砂(5～10cm大の礫含む)
17　10YR3/2黒褐色泥砂(2～3cm大の礫含む)
18　2.5Y4/2暗灰黄色泥砂(20～30cm大の礫含む)
19　2.5Y4/1黄灰色泥砂【中世整地層】
20　2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫
21　2.5Y4/1黄灰色シルト～粗砂　【洪水堆積】
22　2.5Y4/1黄灰色シルト～中砂
23　2.5Y5/4黄褐色砂礫【河川堆積】

図41　3区断面図（1：50）

3区

3区ではGL-1.4ｍのオリーブ褐色砂礫上面を第4面、GL-1.7ｍの黄灰色シルト～粗砂の上面を第5面として遺構検出を行ったが両面とも遺構・遺物は検出されなかった。第5面は平面的にみても水成堆積層の特徴を呈しており、広義の氾濫原であったと推測される。第4面はやや安定した砂礫層であるがこの面についても人為的な痕跡は確認できなかった。

第3面

3区で遺構が検出されたのは第3面よりも上位の面である。GL-1.0ｍで検出した第3面では主に室町時代の遺構を検出したが、2区では同じ高さで鎌倉時代の遺構を確認しており、広くは鎌倉時代から室町時代の遺構が展開する遺構面であったと推測される。

SK3　調査区の南東端で検出した土坑で東西1.4ｍ南北1.3ｍ以上あり調査区の南側に延びる。最上部には炭・焼土を多量に含む褐色泥砂が堆積

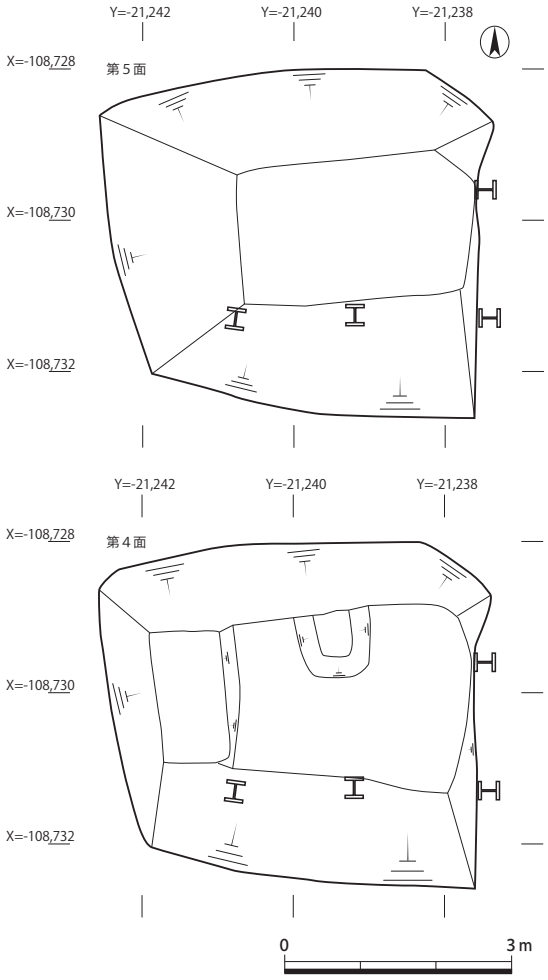


図42　3区第4・5面平面図（1：100）

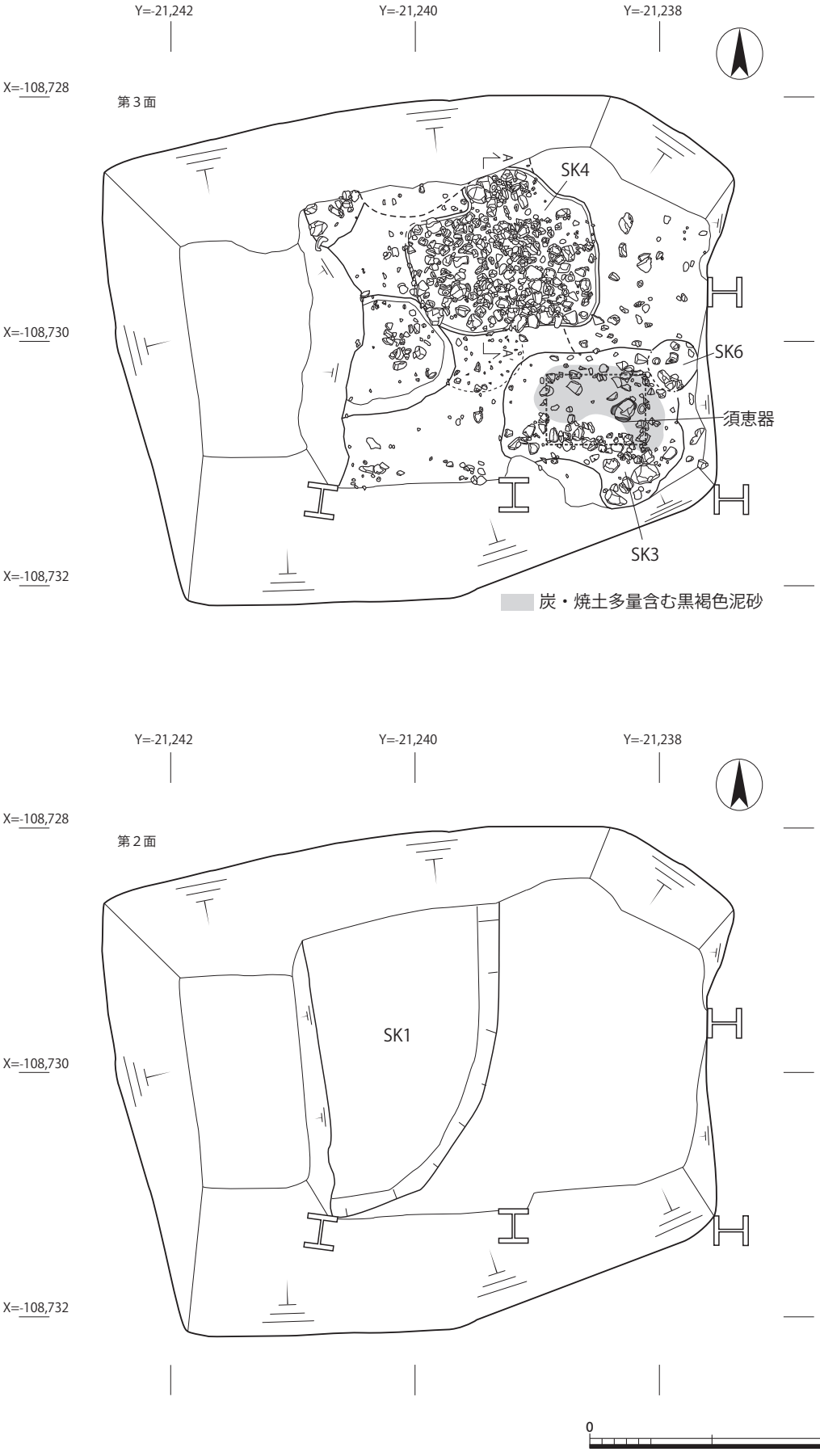


図43　3区第２・３面平面図（1：50）

しており、それを除去すると東西0.9ｍ、南北0.6ｍの長方形石列及び東播系須恵器鉢の底部を検出した。深さは0.2ｍで埋土は多量の礫を含む黒褐色泥砂であった。15世紀前半の土師器皿が出土した。

SK４　調査区の北側で検出した集石土坑で東西1.5ｍ南北1.3ｍ、深さは0.5ｍで拳大の礫で埋められていた。礫の間にみられる埋土は暗灰黄色シルト～粗砂であった。遺物量は少ないが15世紀代の土器が出土した。

SK６　調査区の南東で検出した土坑でSK3を切る。直径0.5ｍの不定円形で深さは0.2ｍ、埋土は暗灰黄色泥砂であった。瀬戸の灰釉卸目皿が出土した。15世紀中葉の土器が出土した。

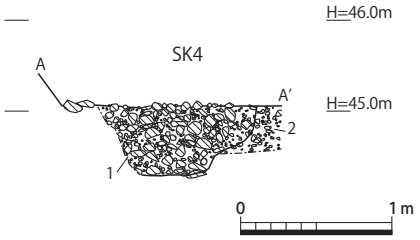
第2面

GL-0.8ｍのにぶい黄褐色泥砂上面で第2面を検出し、土坑を確認した。

SK１　調査区の中央で検出した土坑で東西1.3ｍ以上南北2.5ｍ以上ある。西を攪乱に切られており、北は調査区外に延びる。深さは0.3ｍ埋土は主に褐灰色砂泥（3区北壁層９）であった。15世紀後葉の土器が出土した。

第1面

GL-0.4ｍの暗灰黄色泥砂上面で江戸時代の遺構を検出し（第１面）、礎石の可能性がある石を確認した。また2区の補足調査として矢板の間で一部遺構検出を行い、土坑の可能性がある地層を確認したが範囲が狭く詳細は不明である。



1　2.5Y4/2　暗灰黄色シルト～粗砂
(拳大の礫多量に含む)
2　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色泥砂

図44　SK3断面図（1：50）

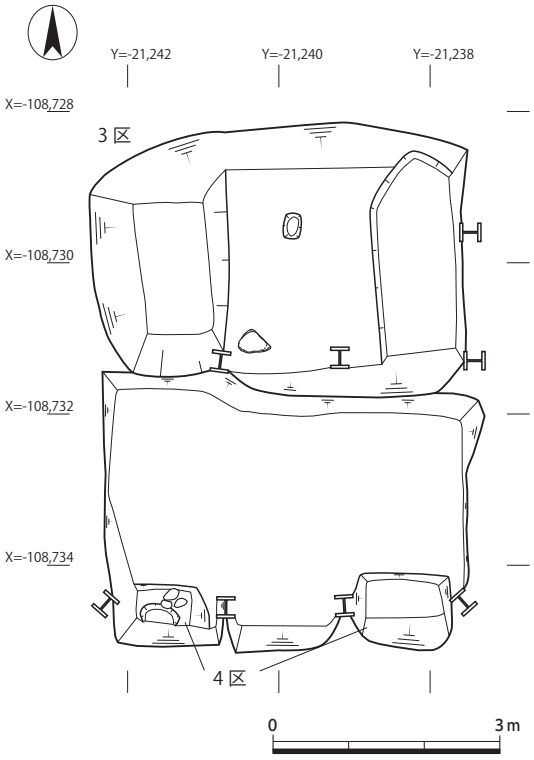


図45　3区・4区　第１面平面図（1：100）

以上のように今回調査では、狭小な範囲ではあったが鎌倉時代から江戸時代の遺構を検出することができた。

３．遺物（図46・47）

2区11層　１は灰釉陶器椀である。今回では最も古い時期のもので、平安時代の遺物である。

2区土坑３　２～４は土師器皿N、５～７は土師器皿Sである。13世紀後半の遺物と考えられる。

3区第3面掘り下げ　８は瓦器火鉢、９は青磁椀、10・11は白磁皿である。

3区SK3　12～18は土師器皿、19は瀬戸の天目椀、20は東播系須恵器鉢である。15世紀前半の遺物と考えられる。

3区SK6　21・22は土師器皿S、23は灰釉陶器卸目皿である。15世紀中葉のものである。

3区SK4　24・25は土師器皿で24は皿N、25は皿Sｈである。26は混入品で緑釉陶器皿である。

3区SK1　27～32は土師器皿Nで27～29は口径7.4～7.8㎝、30は口径8.4㎝、31は口径10.7㎝、32は口径10.8㎝である。33～38は土師器皿Shで口径6.4～7.2㎝、39～52は土師器皿Sで39は口径6.0㎝、40～42は口径8.2～8.8㎝、44～48は口径11.6～12.6㎝、49～52は口径14.0～14.9㎝の４法量ある。53・54は瓦器羽釜、55・56は瓦器鍋、56は鍋の柄である。両側に柄が付くタイプと考えられる。57・58は火鉢である。59～63は瀬戸でいずれも灰釉がかかる。59・60は椀、61は鉢、62・63は香炉である。64は青磁椀で無文である。65・66は白磁皿、67は白磁で多角形の小杯である。68は砥石、69は錆がすすんでいるが鉄製鍋の口縁部である。これらは9C段階（1470～1500年）の遺物と考えられる。

第１・２面掘り下げ　70・71は土師器皿Sである。72・73は瀬戸美濃の椀で72は長石釉がかかる。73は灰釉である。74は唐津の椀である。75は輸入陶磁器の施釉陶器で鉄釉の壺である。76・77は銭で76は紹聖元宝、77は判読不明である。78は青磁の盤で龍泉窯産である。第一面掘り下げ時に出土した。　（赤松　佳奈）

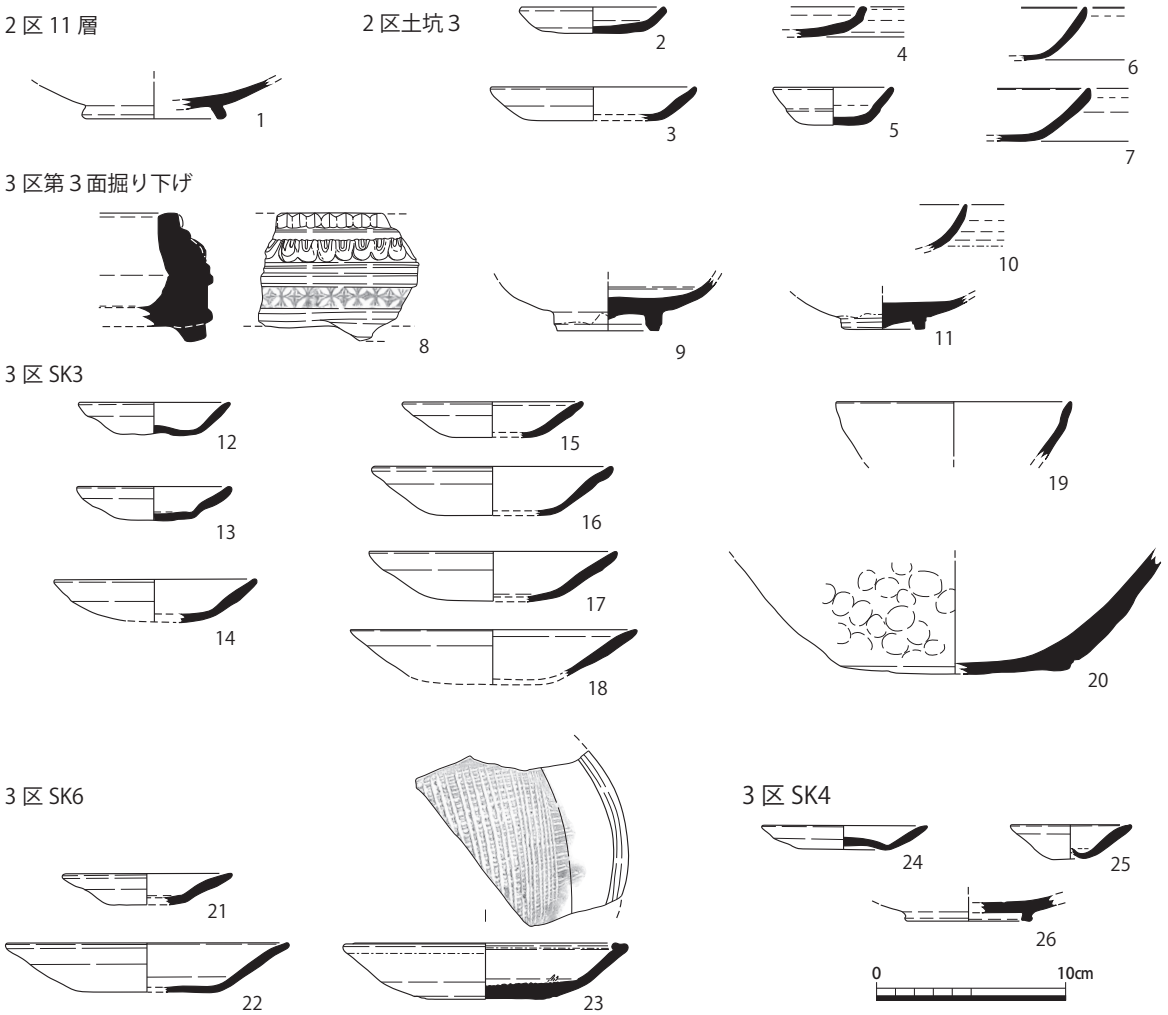


図46　出土遺物実測図1（1：4）

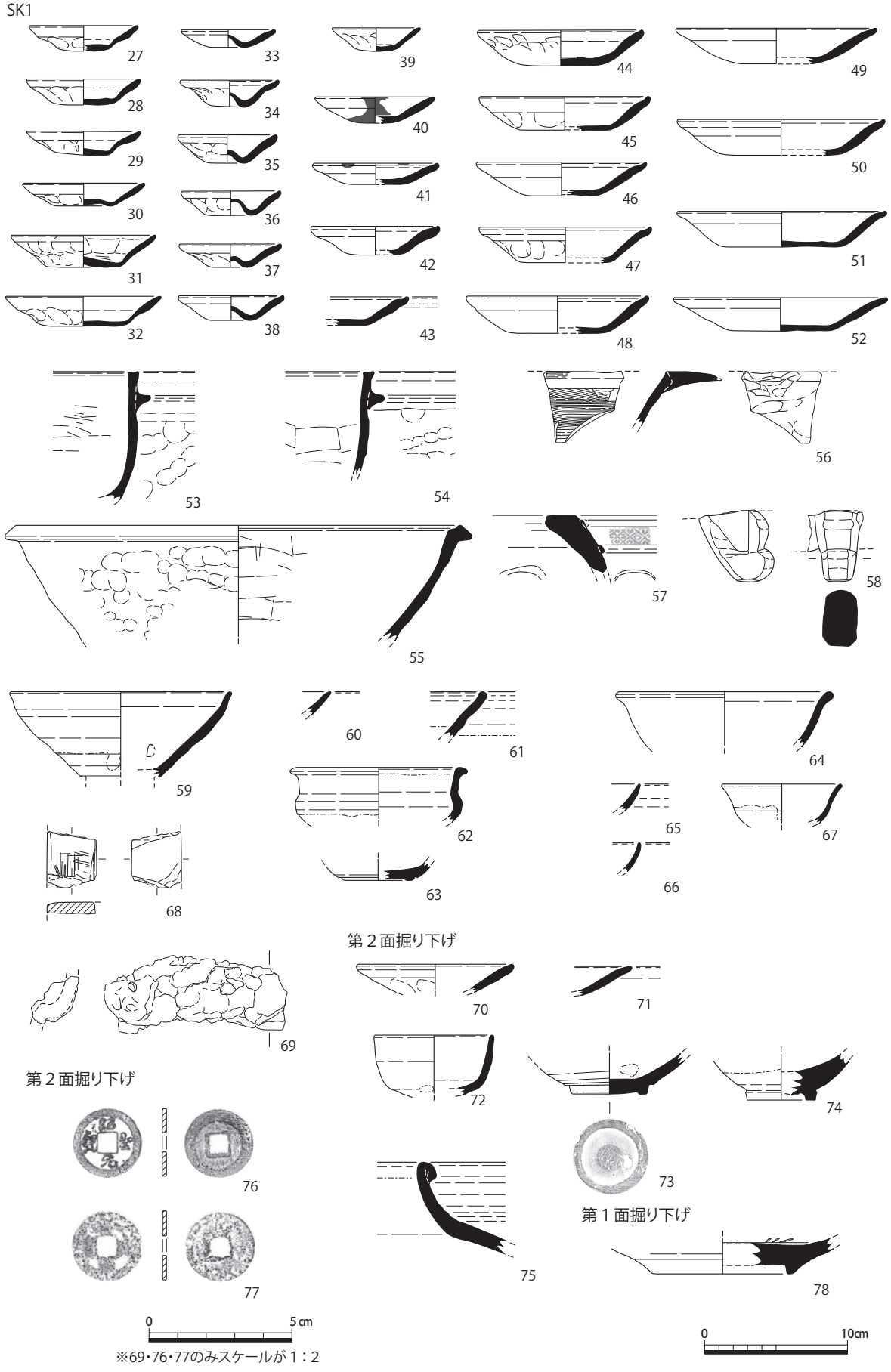


図47　出土遺物実測図２（1：4、1：２）

4．詳細分布調査の成果

試掘調査に先立って生じた掘削工事に際して、令和３年６月21日から７月26日にかけて詳細分布調査を実施した。この調査では江戸時代の石組暗渠を検出したため、ここで合わせて報告する。

ⅰ．遺構（図48～図50）

暗渠１

掘削範囲北東隅（詳細分布調査№２地点）において、盛土直下で石組暗渠を検出した。北で西に25°振っており、蓋石が完全に遺存している状況で4.0ｍ分を確認した。この状況で一旦写真撮影及び図面作成を行った。今回の工事で影響を



図48　暗渠検出地点位置図（１：600）

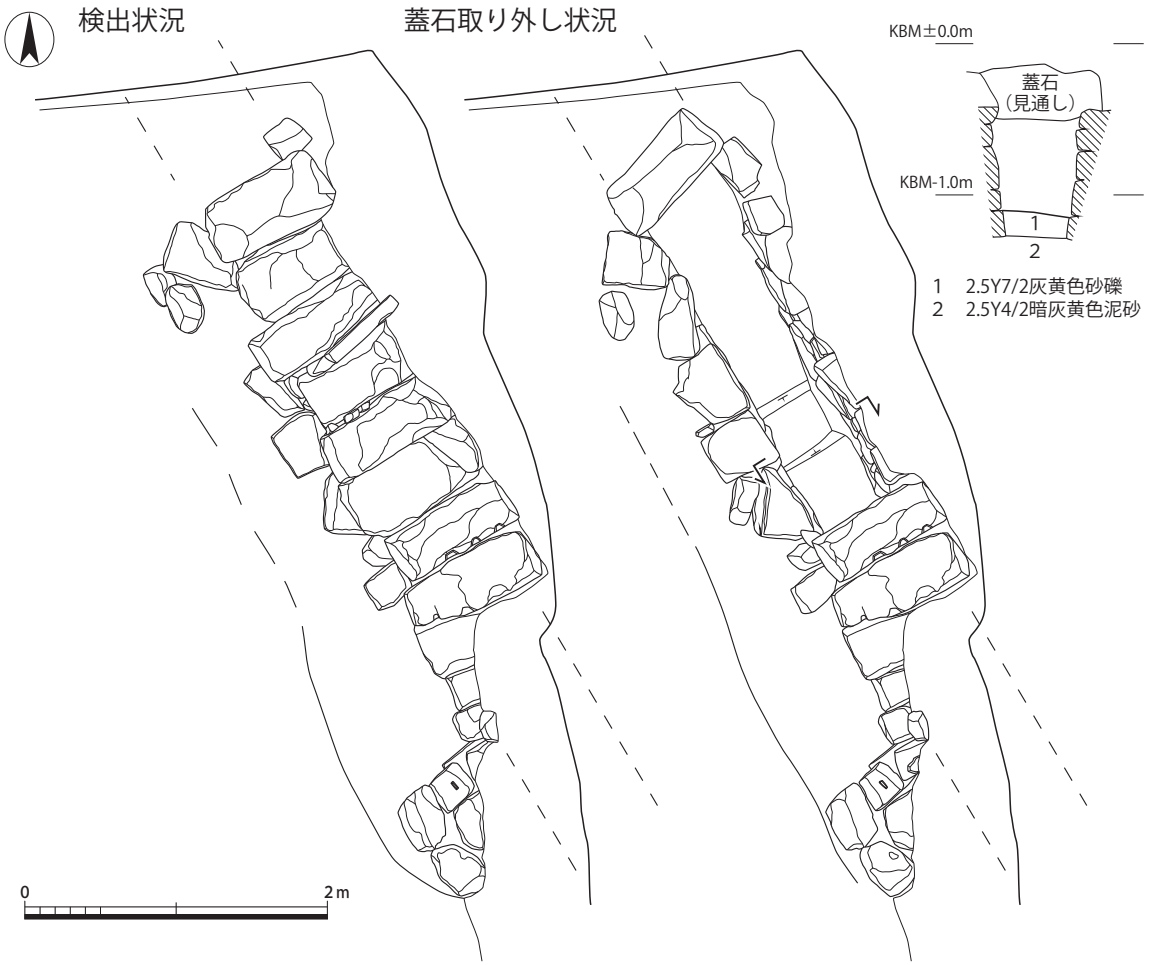


図49　№２地点暗渠１平・断面図（１：50）

免れない蓋石については、やむを得ず除去した後、改めて写真撮影及び図面作成を行うとともに、底部を一部断ち割り、堆積状況を確認した。溝は表面を平坦に整えた１辺20～50cm程度の石材を４～５段、高さ0.9ｍ程度積んで構築している。積んだ石材間には溝内部の表面において、やや隙間があった。溝幅は上端で0.6ｍ、下端で0.5ｍを測る。溝を構築した後、長辺80cm以上、短辺35～45cm程度の石を、長辺が溝を跨ぐように並べ蓋石とする。蓋石には矢穴が遺存しており、石材を蓋石にできる大きさに加工して用いたことが分かる。蓋石の隙間には、ところどころに小さな石材を間詰めに用いている。溝内は１石分に相当する15～20cm程度の厚みで灰黄色砂礫が堆積し、これを除去すると暗灰黄色泥砂となる。暗灰黄色泥砂は固く締まっており、ここが溝底として機能したと判断できる。砂礫層上部は空洞であり、近年になって水が流れた痕跡はない。底面を確認した長さが短いため、底面レベルのデータも少なく断言はできないが、北から南へと水が流れた暗渠であろう。

暗渠２

掘削範囲南端（詳細分布調査№５地点）で検出した暗渠である。東西方向の暗渠であり、北辺を縦断面で検出した。東西の両壁面で、暗渠構築のための掘方が盛土直下で成立することを確認し

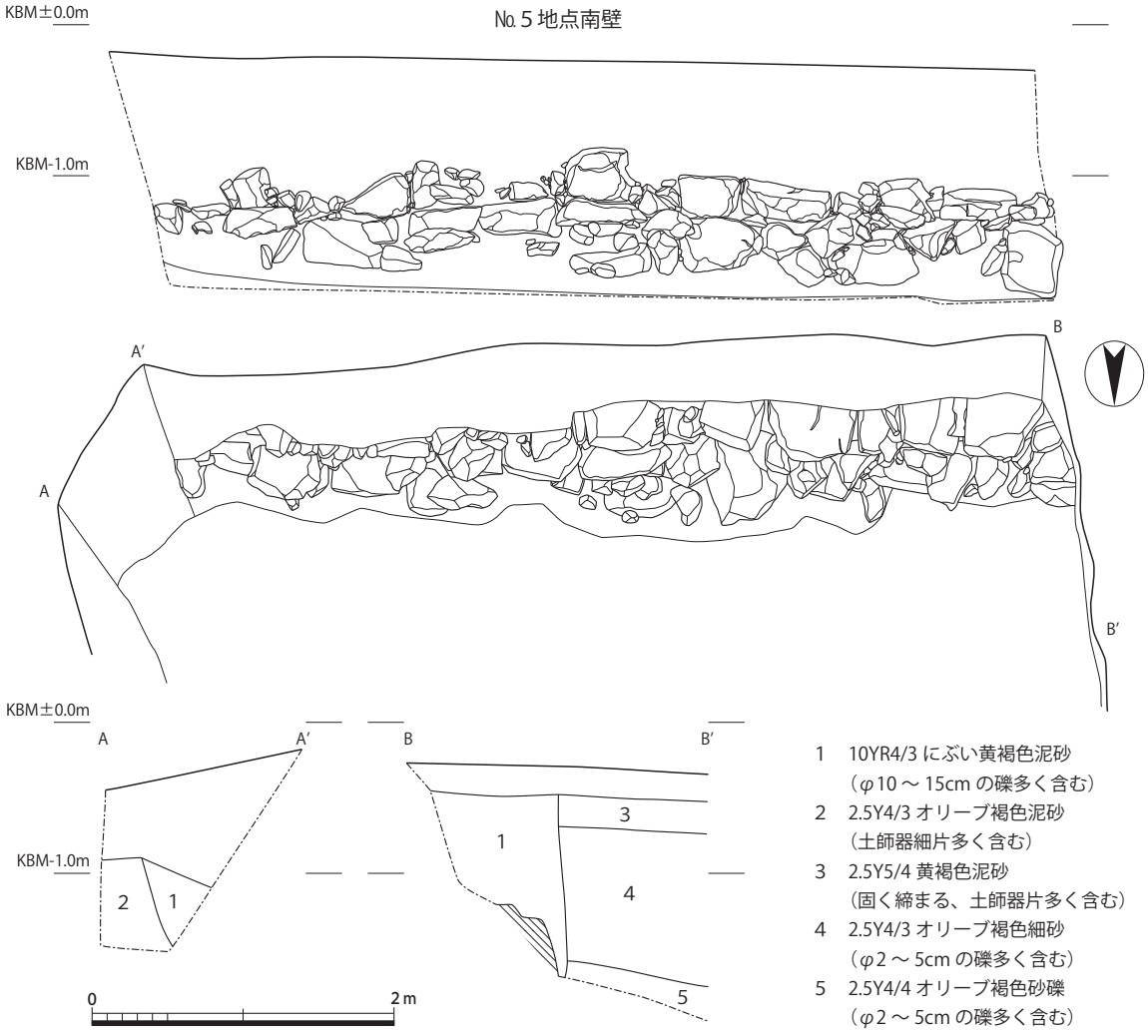


図50　№５地点暗渠２平・立・断面図（１：50）

た。暗渠の上部は現地表面から0.9m程度と推定され、その上に蓋石を据えている。暗渠南北軸の半分以上が壁面内にあると推定され、蓋石を動かすことはできなかったことから、内部の状況確認はできなかった。内部の底面を確認できていないため、流れの方向は不明だが、現在の京都御苑から寺町通（西から東）への排水を担ったものであろう。

ii．遺物（図51）

№２地点、№５地点とも遺物が出土した。１は京焼の徳利である。暗渠の石材の外側に付着した状態で出土した。軟質で外面に黒色釉を施す。№２地点の石組に付着した状況で検出した。２は白色土器の皿もしくは椀である。中実の高台で回転台成形だが、底部は摩耗しており、切り離し技法は不詳である。平安時代中期から後期の所産であろう。３は白磁の椀である。薄い水色の釉調で、高台は畳付から内面が露胎である。２・３は№５地点の暗渠裏込めから出土した。遺物から暗渠の構築年代を絞り込むには材料に欠ける。（新田　和央）

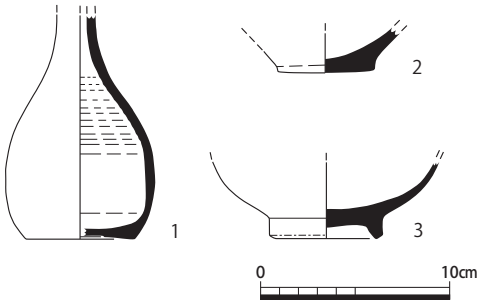


図51　詳細分布調査出土遺物実測図（１：４）

5．まとめ（図52）

今回の調査では中世から近世にかけての各遺構を検出することができた。近世末の石組暗渠は現代盛土直下で検出されたことから、当該地では現在も地層がほとんど攪乱されることなく良好な状態で遺存していると考えられる。試掘調査でも鎌倉時代から江戸時代の各遺構面のほか、下位の水成堆積層までの全ての層を良好な状態で確認することができた。

試掘調査では、平安時代の遺構を検出することはできなかった。しかし、北方には藤原道長によって法成寺が造営され、その南には東朱雀大路が敷設されるなど、平安時代中期以降に平安京の都市域が東方に拡張されたことは確実である。京都府立鴨沂高校構内の発掘調査では、立会時に法成寺所用の緑釉瓦が出土しているが、平安時代の遺構面はなく、豊臣秀吉の寺町造営に伴う整地層以下は河川由来の砂礫層であった[2)]。平安時代後期以降の大規模な洪水によって、法成寺期の遺構面が削平されている可能性が高い。今回の調査では、鎌倉時代の遺構を確認できたことから、再び土地利用を開始できる程度に鴨川の氾濫が落ち着いたのは、鎌倉時代であったのであろう。

詳細分布調査で検出した両暗渠は、ともに遺物から構築年代を絞り込むには材料不足だが、盛土直下での構築であることから、幕末から近代初頭に設けたものと推定する。いずれも京都御苑、すなわちかつての公家町から寺町通への排水のために設けられたものだと考えられる。特に№２地点の暗渠１は、そのまま北北東方向に直線を引くと、仙洞御所へと通じることとなる。その仙洞御所には巨大な池を有する庭園がある。推測の域を出ないが、この暗渠が仙洞御所の排水の一部を担っ

た可能性もあろう。幕末の御所・公家町とその周辺を描いた絵図（図52）[3]では、寺町御門の南には高丘家（閑院流・羽林家）、山井家（水無瀬流・羽林家）の邸宅が並ぶ。現在の寺町通と、当時の寺町通の位置関係や寺町御門の位置が一致するか否かという点に課題は残るが、山井家はその立地から寺町通に門を開いていたと推定でき、今回の調査地点も両家の屋敷地に含まれる可能性がある。そうであれば、暗渠の整備は屋敷地内部の建物等の整備に先行して行っていたこととなる。公家町の再編や公家衆への屋敷地給付には、幕府及び京都所司代の意向も強く働いていた[4]。暗渠の構築は、必ずしもそこに居住した公家衆の意向を反映していないと思われる。検出した暗渠が屋敷地内部のものであれば、公家町の屋敷地に対し、公家衆がどのように権利を有し、所有したのかを解き明かす材料となるかもしれない。

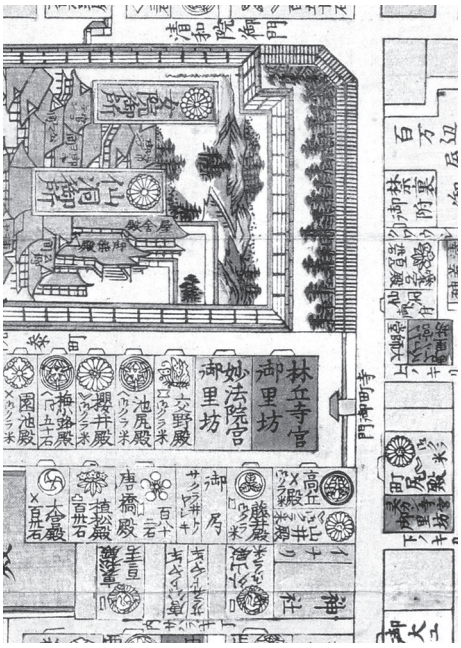


図52 〔校正〕「内裏細覧之図」
元治元年刊（註１文献より引用）

今回の調査は狭小な範囲であったが検出遺構や遺物から15世紀代には活発な利用があったことが読み取れる。豊臣秀吉による都市整備以降は、当該地は寺町・公家町として栄えたようで、公家町旧域にかかわる石組暗渠が検出されたことも、御所の東側地域の変遷を考える上で重要な成果といえよう。

（赤松　佳奈・新田　和央）

註

1）中川和哉ほか『京都府遺跡調査報告集』第172冊　寺町旧域・法成寺跡、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、2018年。

2）1）に同じ。

3）『内裏図集成　京都御所と公家町』叢書京都の史料14、京都市歴史資料館、2016年。

4）登谷伸宏『近世の公家社会と京都　集住のかたちと都市社会』思文閣出版、2015年。

Ⅲ-4　大宅廃寺、大宅廃寺境内瓦窯跡、大宅遺跡

№25（21S384）

1．はじめに（図53・54）

今回、山科区大宅鳥井脇町から大宅山田において歩道拡幅工事が計画され、当地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「大宅廃寺」、「大宅廃寺境内瓦窯跡」及び「大宅遺跡」に該当することから、令和４年１月24日に文化財保護法93条第１項に基づく届出がなされた。これに対し、市文化財保護課は遺跡の状況を把握する必要があると判断し、同年２月１日から４日にかけて試掘調査を実施した。調査では大宅廃寺所用瓦が一定量出土したが、上記の３遺跡に関連する遺構は確認することができなかった。また、瓦類の出土地点が石積擁壁によって土留めされた場所であり、発掘調査などの際の安全確保が困難でもあった。以上の理由から、安全管理がなされた工事施工時に当課職員が立ち合い、詳細分布調査を実施した。

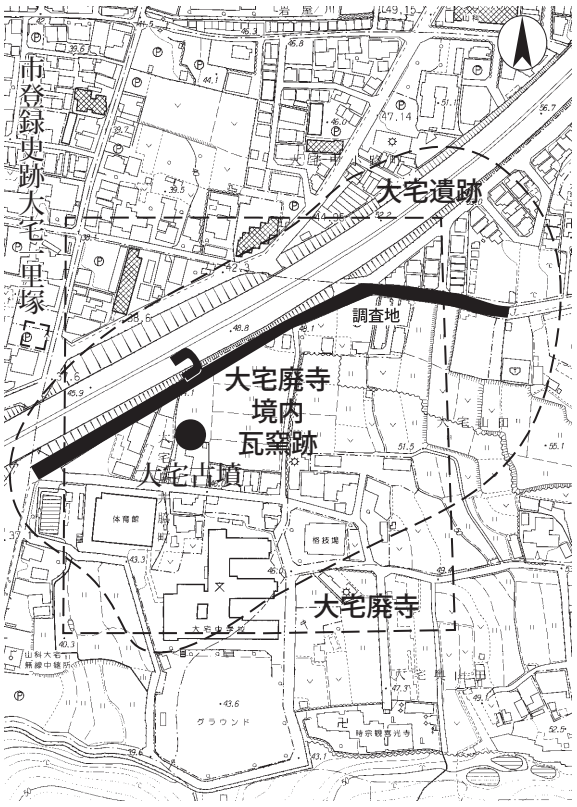


図53　調査位置図（１：5,000）

詳細分布調査は令和４年７月５日から実施した。調査は継続中ではあるが奈良時代から平安時代の遺構・遺物を確認したため、試掘調査成果と併せて報告する。

大宅廃寺は７世紀後半頃に創建され、10～11世紀頃に廃絶した寺院跡である。昭和33年以来の数回の発掘調査によって、おおよその伽藍配置が明らかにされている（図54）[1)]。伽藍中軸は南北方向で、築地に囲われた空間の南西に金堂（南西建物）、南東に塔（南東建物）、中央やや北よりに講堂（中央建物）が配された。北面築地の外側には東西棟の僧房（北方建物）と細殿があり、時代は降るものの、中心伽藍南西と南東の外側で掘立柱建物が確認されている。このことから、本調査地が推定僧房の北側にあたり、中心伽藍の外側に位置することが分かる。

また、これまで調査地周辺では中世墓と瓦窯が確認されている[2)]。中世墓は礫で墓壙を覆ったものと、木炭を入れたものがあり、出土遺物から室町時代には築造されていたとする。同寺院が平安時代末には廃絶したことを踏まえるならば、寺院廃絶後に墓域が形成されたことになる。他方、瓦窯は西に焚口を設けた有牀式平窯で、検出面で奥行き３ｍ以上、幅約２ｍある。構造上の特徴から、奈良時代後期から平安時代初頭に築かれたと考えられている。同寺院ではこれまでの発掘調査

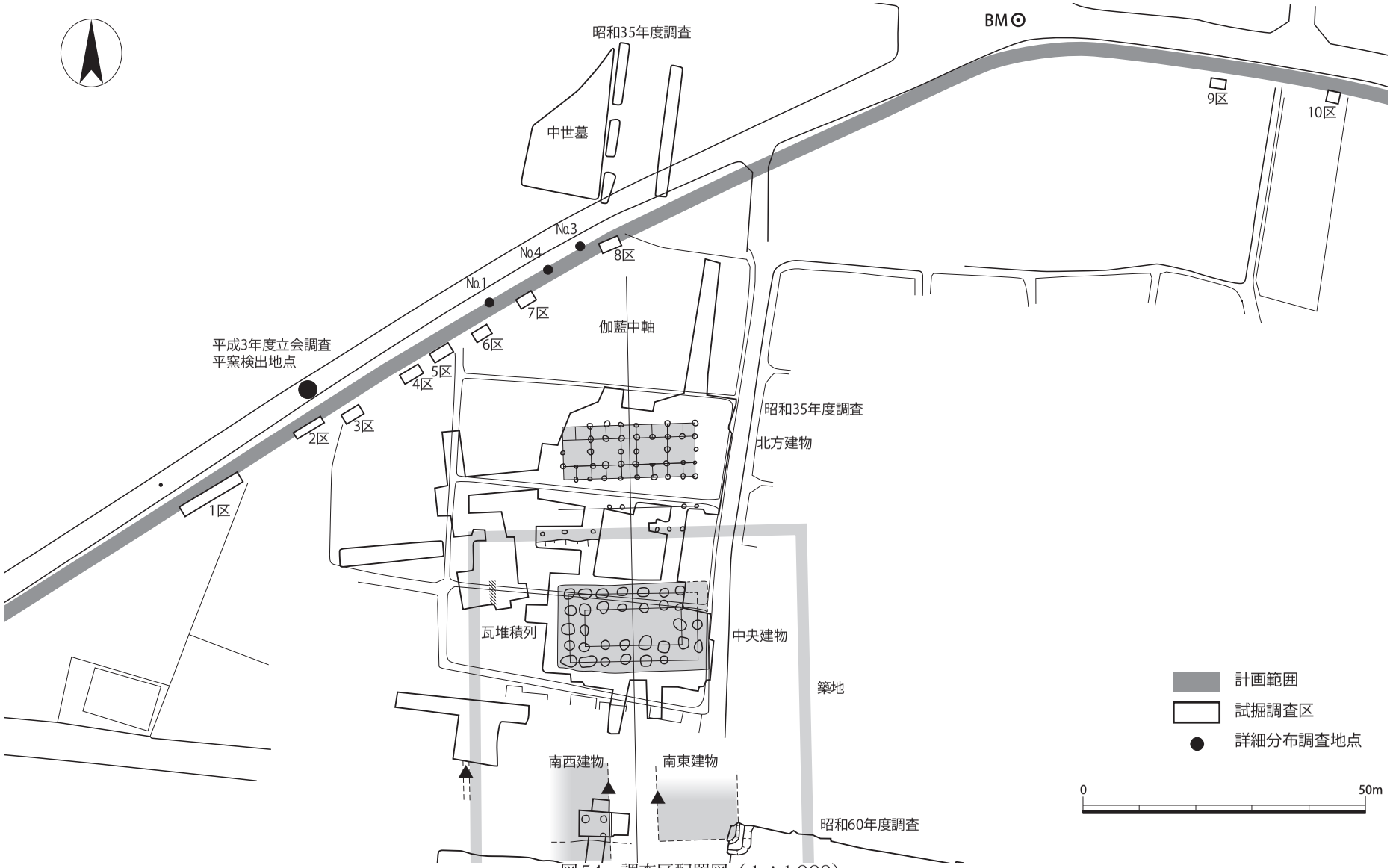


図54　調査区配置図（1：1,000）

成果によって奈良時代末から平安時代にかけて修理が行われたことが明らかにされている。したがって、瓦窯もこの修理に伴って寺域内に築かれたと推測できる。

このように、推定僧房より北側では寺院に関係する建物遺構などは確認されておらず、当該地は空閑地であったことが予想された。そこで試掘調査は当該地の土地利用状況の把握を目的に実施した。

２．遺構（図54～56）

試掘調査（図55）

試掘調査区は計画地に近接した耕地及び駐車場に設定した（１～10区）。なお、１区は寺域西側の把握、２・３区は大宅廃寺境内瓦窯跡関連遺構の把握、４～８区は寺域北側の把握、９・10区は大宅遺跡関連遺構の確認を目的とした（図54）。

調査地は西が低く東が高い傾斜地で、西端と東端（１区と10区）では約10ｍの高低差がある。

１区　現代盛土直下が褐色シルトの地山となる。地山の上面には凹凸があり、部分的に黒褐色シルトやにぶい黄褐色粘質シルトが堆積する。また、地山は西から東に向かって緩やかに高くなる。

以上の通り、大宅廃寺に関する遺構はなく、また土壌化層も認められないことから、遺構面は削平されている可能性が高い。

２・３区　２区基本層序は、アスファルト及び現代盛土直下が明黄褐色泥砂ないし砂礫の地山となる。調査区東端で地山が落ち込み、灰黄褐色泥砂、褐灰色泥砂、にぶい黄褐色泥砂が堆積する。これらの土層には遺物が含まれておらず性格は不明である。３区は現代耕作土以下、GL-0.27ｍで近世造成土、-1.4ｍで古代遺物包含層、-1.7ｍで褐色シルトの地山となる。地山直上でピットを検出した。ピットは検出面で約0.4ｍ、深さ0.2ｍで時期不明である。

３区にて古代遺物包含層・ピットを検出したが、大宅廃寺境内瓦窯跡に関連する遺構は確認することが出来なかった。

４～８区　４区基本層序は現代耕作土以下、GL-0.2ｍで近世造成土、-1.0ｍでシルトの地山となる。一方、５～８区は、現代耕作土以下、近世造成土、古代遺物包含層、地山となる。

３区も含め近世造成土の検出高が、３・４区BM-4.0ｍ前後、５・６区BM-4.0～-4.2ｍ前後、７・８区BM-3.5ｍ前後と、現況耕地と同様に西から東に向かって緩やかに高くなる。また、現耕地所有者より「耕地化に際して周辺の土を集めて造成していた」との証言を得ることができた。このようなことから、近世造成土は耕地化に際して盛られた土と判断した。

古代遺物包含層は地山直上にほぼ水平に堆積していることから、当初は整地層と考えた。しかし、土に締まりがなく遺構も確認することができなかったことから、大宅廃寺存続期または廃絶後に時間をかけて堆積した土層と判断した。また、３区、№１地点（詳細分布調査）でも同様の土層を確認しており、一定の広がりが認められる。

地山検出高は５・７区がBM-4.25ｍ前後であることから、現地形と異なり平坦であったことが分

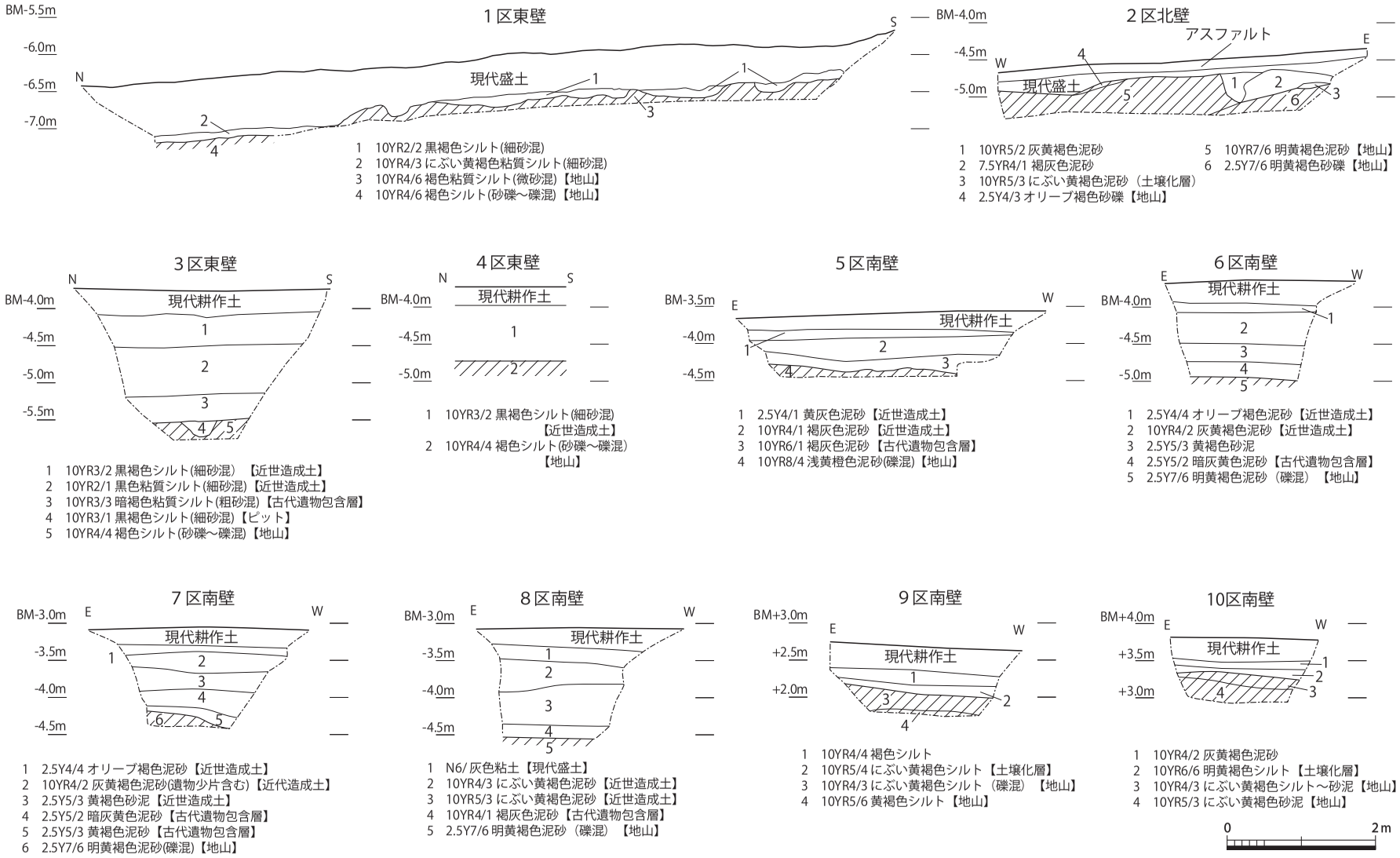


図55　1～10区断面図（1：80）

かる。ただし、６・８区はBM-4.5・-5.0m前後であることから、若干の起伏も窺える。

９・10区　９・10区の基本層序は共通し、現代耕作土以下、時期不明盛土、土壌化層、地山となる。地山は礫が混じるシルト質で岩盤の様相を呈す。

大宅遺跡に関する遺構・遺物は確認することが出来なかった。

詳細分布調査（図56）

３箇所（№１・３・４）で遺構・遺物を確認した。

落込み１　№１地点で確認した落込みである。検出面で東西約1.4ｍ、深さ0.2ｍある。埋土は黒褐色砂泥で瓦片が出土した。

溝２　№３地点で確認した溝である。方位は北に対して東に振れる。検出面で幅0.4～0.8ｍ、深さ約0.6ｍ以上あり、埋土が上下２層に分かれ瓦片が出土した。

土坑３～５　№４地点で確認した土坑である。土坑はそれぞれ検出面で、土坑3が東西約1.8ｍ、深さ約0.45ｍ、土坑４が東西約0.55ｍ、深さ約0.4ｍ、土坑５が東西約0.45ｍ、深さ約0.4ｍである。土坑から奈良時代後半～平安時代の土師器・瓦片が出土した。

３．遺物（図57・58）

出土遺物のほとんどが瓦類で占めるが、僅かに土師器片が含まれる。また、多くが近世造成土から出土した。

１は丸瓦である。狭端部は無段式であ

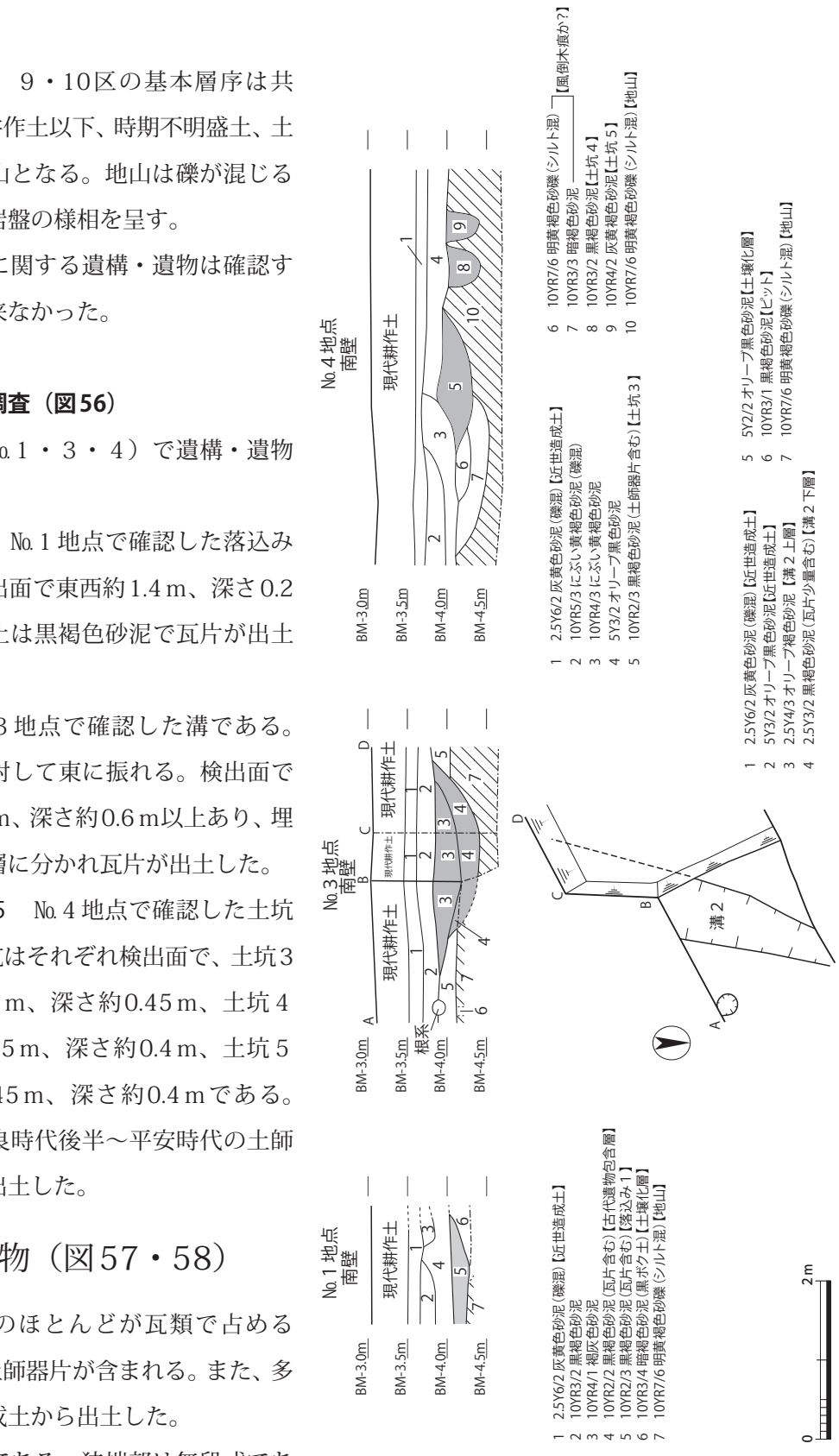


図56　№１・３・４平・断面図（１：80）

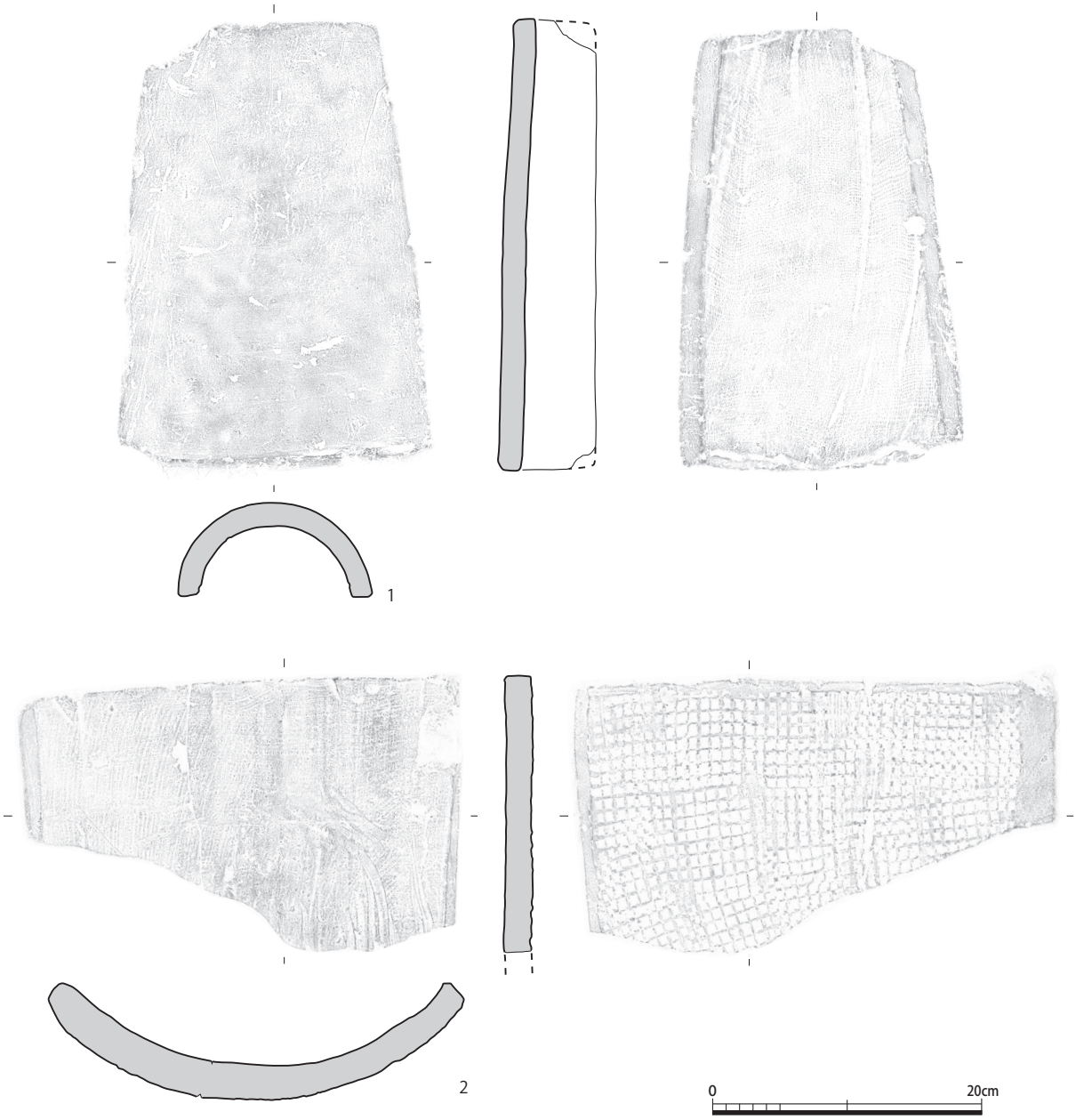


図57　丸・平瓦実測図及び拓影（１：5）

る。丸瓦凸面は、縄叩き後に工具を用いて横ナデを施す。凹面は布目がある。側面はケズリを施す。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は硬質である。２は平瓦である。粘土板桶巻き作りによって製作されている。凸面は狭端面に向かって叩き締め円弧を描く格子叩き後に側面付近のみケズリを施す。凹面は布目・枠板圧痕・粘土板接合痕跡があり、所々にナデによる調整が認められる。また、片側のみケズリによる面取りを施す。側面はケズリを施す。胎土は砂粒を含み、焼成は硬質である。３は鴟尾で鰭部から縦帯までの破片である。鰭部は正段で突帯が巡る。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は硬質である。これまで、大宅廃寺では２種類の鴟尾が確認されており、両類ともに縦帯に文様が施文されている。本資料は破片ではあるが縦帯に文様を確認することができないことから、新たな型式の可能性が高い。

１は詳細分布調査№４地点の表土、２は落込み１、３は２区現代盛土から出土した。

4．まとめ

本調査では、５～８区・№１・３・４地点で溝や土坑、瓦類の出土を確認した。ただし、溝２の方位は伽藍中軸（南北方向）に対し傾いていることから、寺域内を区画する溝とは考え難く寺院廃絶後の土地利用に伴って開削された可能性が高い。一方、土坑３～５には瓦とともに、奈良時代後半～平安時代に属する土師器片が投棄されている。同寺院は奈良時代から平安時代にかけて修理が行われていることから、用途不明ながら修理に関わる土坑の可能性が高い。

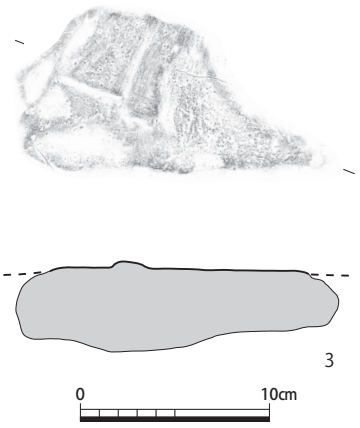


図58　鴟尾実測図及び拓影（１：４）

以上の通り、詳細分布調査において大宅廃寺関連遺構を検出したものの、堂舎に関わる遺構や寺域を限る溝などは確認することができなかった。したがって、当該地は想定通り空閑地であった可能性が高い。ただし、出土瓦類の中には鴟尾片も含まれていることから、近辺に瓦葺施設があったことが分かる。伽藍復元によれば推定僧房が調査地に最も近いが、近世の耕作地化の際に、周囲の土が集められていることを勘案すれば、調査地近辺に別の瓦葺施設があった可能性も考えられる。

また、５区から８区にかけて起伏があるものの、比較的平坦な地形が展開していた可能性が高まった。斜面地を掘り窪めて構築する平窯が、２区の北東側に築かれていることも踏まえれば、４区付近に斜面地があり、同調査区から伽藍中軸にかけて平坦面が展開していたと想定できる。

これまで、大宅廃寺は中心伽藍の様相が明らかにされているが、寺院経営を支える家政機関や寺域などは未確認である。このような中、断片的ではあるが推定僧房の北側の様相を把握する資料を得ることができたことは、大きな成果と言える。引き続き、縁辺部の開発にも留意する必要がある。

（鈴木　久史）

註

１）有光教一・坪井清足「大宅廃寺の発掘調査概報」『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』京都府教育委員会、1959年。平方幸雄・菅田薫「大宅廃寺」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1988年。網伸也「大宅廃寺・大宅遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局 2005年。堀大輔『飛鳥白鳳の甍－京都市の古代寺院－』京都市文化財 ブッ クス第24集京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、2010年。

２）有光教一・坪井清足「大宅廃寺の発掘調査概報」『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』京都府教育委員会、1959年。
竜子正彦・尾藤徳行「大宅廃寺・大宅遺跡」『平成３年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1993年。

Ⅲ-5　伏見城跡　№89（21F494）

1．はじめに（図59）

調査地は伏見区御堂前町内に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地である「伏見城跡」に該当する。当該地において、店舗兼共同住宅建設が計画され、令和３年11月８日付で文化財保護法第93条第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出がなされた。これを受け、当課は令和４年５月９日から12日にかけて試掘調査を実施し、計画地北東隅に伏見城跡に関わる遺構が部分的に遺存していることが判明した。届出された掘削深度が遺構面に抵触することから、補足調査が必要と判断し、７月４日から13日にかけて実施した。調査面積は試掘調査区、補足調査区と合わせて251㎡である。

計画地は徳川期以降の城下を復元したものによれば中川忠勝、柘植正俊の屋敷地となっているが[1)]、寛延～宝暦年間（1748～1763）に描かれたとされる「皇州諸餘撰部京師内外地図 第三 紀伊郡 城南」では、既に武家屋敷の姿はなく町家が建ち並んでいる[2)]。したがって、遅くとも18世紀中頃に家屋敷から町家へと変化したことが予想された。

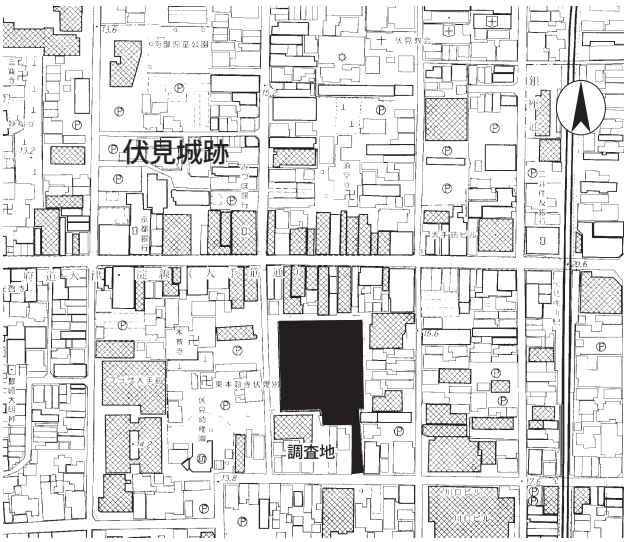


図59　調査位置図（１：5,000）

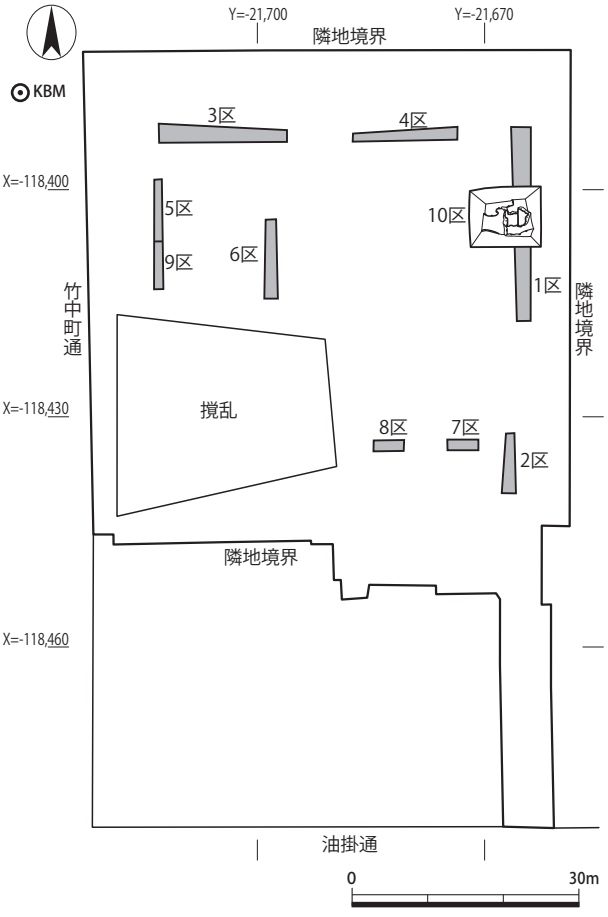


図60　調査区配置図（１：10,000）

2．遺構（図60～66）

試掘調査区は敷地全域の遺構状況を把握することを目的に、９ケ所（１～９区）設定した。また、補足調査は遺構面を確認した１区と重複するように、東西9.8ｍ・南北8.0ｍの調査区（10区）を設定した。なお、既

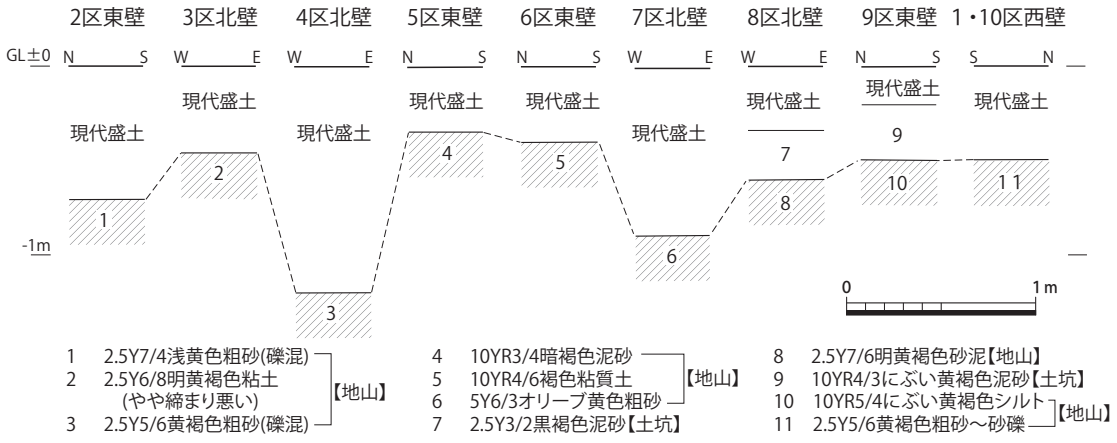


図61　1～10区柱状断面図（1：40）

存建物の地下躯体があり、敷地南西には大規模な撹乱があった。

①基本層序

基本層序は概ね共通し、現代盛土直下が地山となる。地山の深度は５区のGL-0.35ｍが最も高く、泥砂・粗砂・砂礫などの砂質土が主体である。地山直上を遺構検出面とし、1（10）・３・５・６・８・９区において古代から近世遺物を含む土坑を確認した。ただし、既存建物の解体の影響が著しく、大部分が撹乱であった。



図62　10区遺構検出（北西から）



図63　10区完掘状況（北西から）

②遺構

土坑１～７（図66-３区１～７層、５区１層、６区１・２層、８区１層、９区１層）

３・５・６・８・９区で確認した土坑である。検出面で幅1.4～3.8ｍ以上、深さ0.6～1.4ｍ以上ある。いずれも部分的な断面観察に留まるが、肩口が緩やかであることから土坑と判断した。遺構は調査区外に展開する。これらは同一土坑ではなく、複数の土坑を確認した可能性が高い。埋土から小片の土師器や陶磁器などが出土した。

土坑８（図64・65）　１・10区で検出した土坑である。平面は楕円形で、検出面で東西辺が3.6ｍ以上、南北辺が2.5ｍ以上、深さが0.75ｍ以上を測る。埋土は南北断面（図65B-

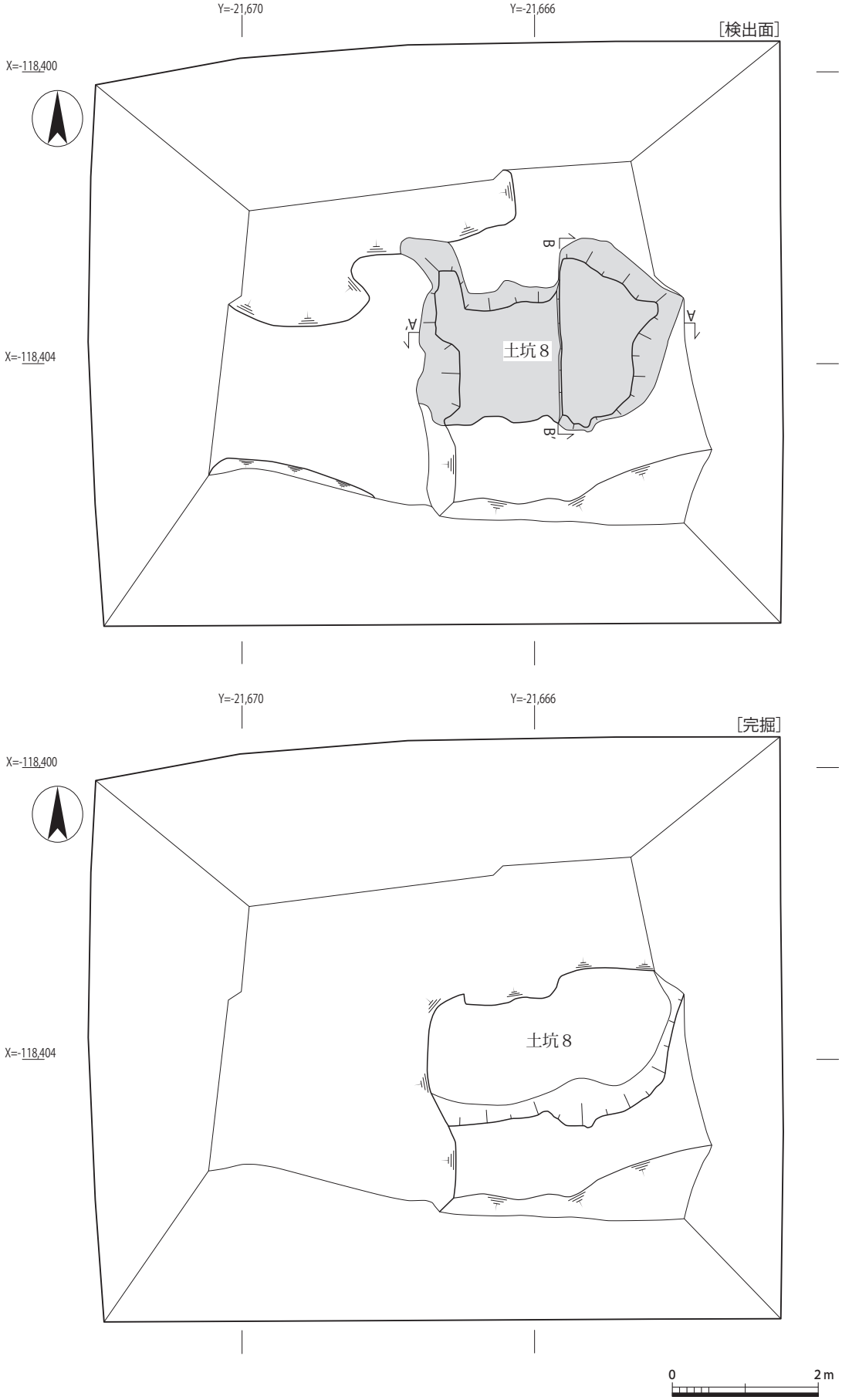


図64　10区平面図（１：80）

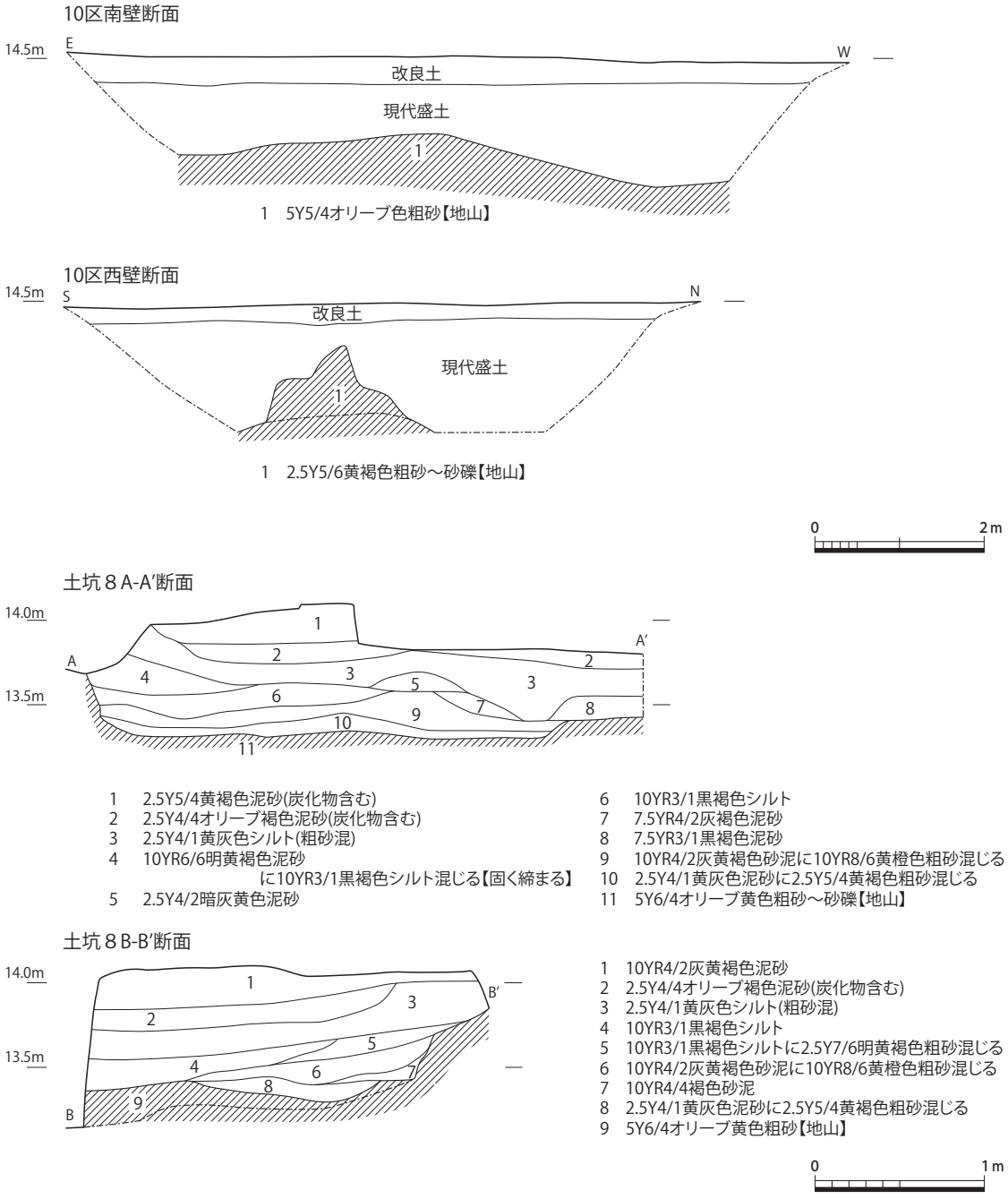


図65　10区壁・土坑８断面図（１：80・１：40）

B'）を見る限り、中央がレンズ状に凹み、黒褐色泥砂や黄褐色泥砂が主体に堆積している。また、東肩口の東西約0.9ｍ、南北約1.8ｍの範囲に締まりのある黒褐色シルト混じりの明黄褐色泥砂（図65A-A'４層）が面的に認められた。出土遺物は16世紀後半～17世紀初頭の土師器や陶磁器が大半を占め、僅かながら古代や中世の遺物が混在している。

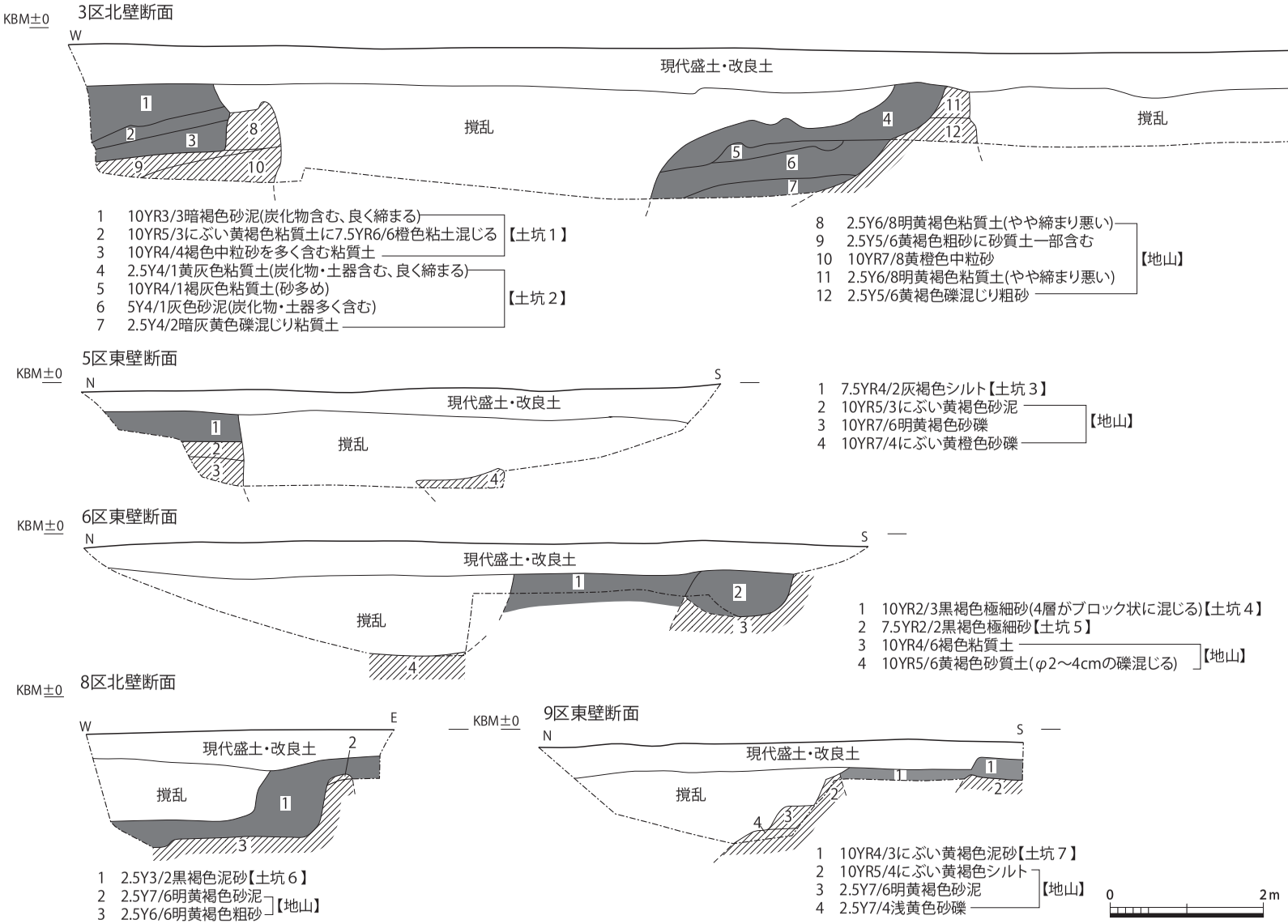


図66　３・５・６・８・９区断面図（１：80）

3．遺物（図67）

遺物の大半が江戸時代初頭に属する土器・陶磁器類で、僅かに古代の須恵器などがある。全て土坑８から出土した。１～８は土師器皿である。皿には皿S（５～８）、皿Sb（１・２）があり、３・４は洛中ではほとんど確認されておらず、伏見城下での出土例が散見される[3)]。９～12は施釉陶器である。９は椀、10は皿で唐津産である。11は軟質施釉陶器、12は陶磁器皿である。13は焼締陶器の擂鉢で備前産である。14は瓦質風炉である。上部に円形の透かしがあり、口縁端部に段差と受けがある。

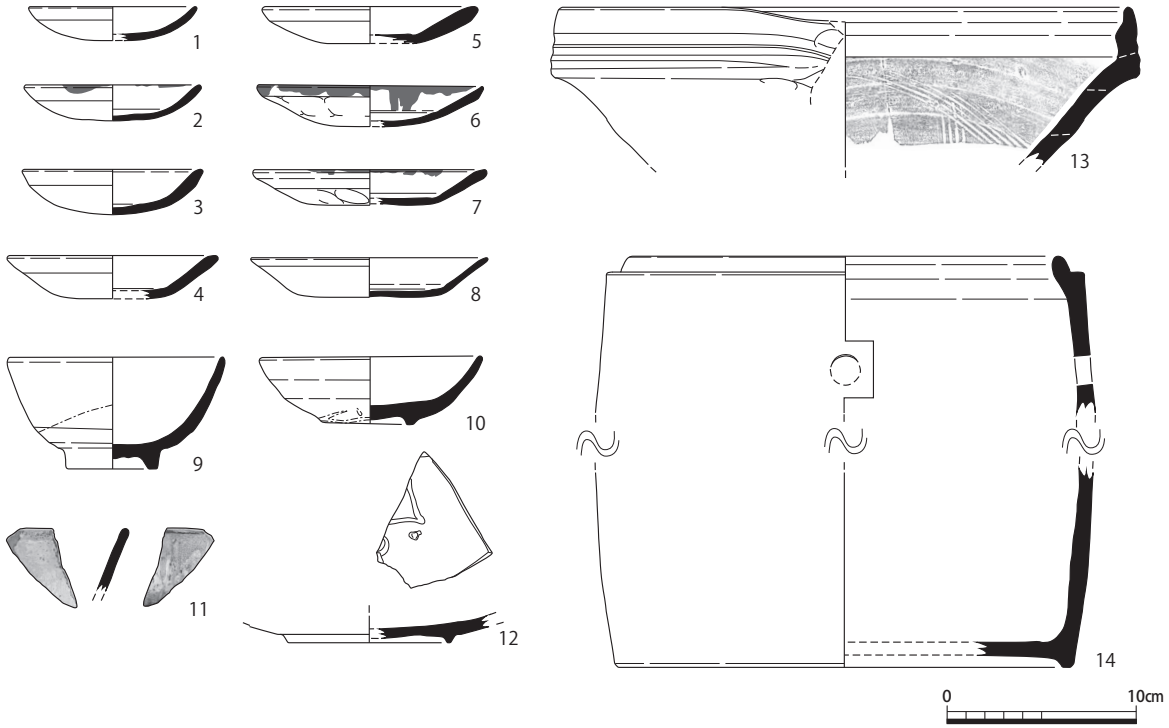


図67　遺物実測図（１：４）

4．まとめ

今回の調査では武家屋敷に関わる遺構はなく、近世遺物を含む土坑（１～８）を８基確認した。これらの土坑は調査地内の各所で開削されていると考えられ、土坑１～３・６～８には掘方を切り合わない特徴が認められる。同様の特徴を持つ土坑が、京都大学本部構内で多数確認されており、近世の砂取り土坑と報告している[4)]。砂取りは土取りと異なり砂質土を掘り進めることから、土坑肩口が崩壊する恐れがあり、土坑同士の掘方が重複しないように開削していたとする。当該地の地山は砂質が中心であり、土坑８は掘方の肩口付近を先行して埋戻し、東肩口の一部には締まりのある黒褐色シルト混じりの明黄褐色泥砂（図65A-A’４層）を用いて埋戻すなどの肩口崩落に注意した様相も窺える。このようなことから、本調査で確認した多くの土坑は砂取りのために開削されたと考えられる。ただし、土坑４・５の掘方は切り合い関係にあり様相が異なる。部分的な確認であるが、土坑４・５の周囲の地山が粘質土（６区３層）であることから、砂ではなく粘質土の採

取を目的とした土取り穴の可能性がある。

以上のように、当該地では広範囲で砂取りや土取りが行われたと推定できる。土坑からは江戸時代初頭の遺物が出土しており、当該地周辺の土地利用状況が著しく変化した時期に相当する。とくに、伏見城下では各所で大規模な造成の痕跡などが確認されており、建物建設を含めた伏見城及び城下の整備に必要となった砂や土が採取されたと考えられる[5)]。

（鈴木　久史）

註

1）山田邦和「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都 -聚楽第・御土居と伏見城-』日本史研究会、2001年。

2）辻垣晃一・森洋久『森幸安の描いた地図』『日文研叢書29』国際日本文化研究センター、2003年。

3）平尾政幸「伏見城跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概要2004-18』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2005年。

4）五十川伸也「第2章 京都大学本部構内AX28区の発掘調査」『京都大学遺跡調査研究年報 昭和56年度』京都大学埋蔵文化財研究センター、1983年。

5）調査事例は少ないが、同様の砂取りや土取りは推定伏見城下の西側で確認されている（上村憲章・小森俊寛「39 伏見城跡1」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所1988年や註3平尾2005で確認されている）。とくに、註3の報告では、江戸時代の早い段階に土取りが行われていたとしており、伏見城下西端の一部が空閑地であった可能性を述べている。

Ⅲ-6　鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡　№28（21T640）

1．調査の経緯（図68・70）

調査地は伏見区竹田田中殿町 95 他で、周知の埋蔵文化財包蔵地「鳥羽離宮跡」及び「鳥羽遺跡」に該当する。今回、事務所の建築が計画されたことから試掘調査を実施した。

なお、調査時点で耕作地として利用されていたことから、現地で協議を行い建築計画範囲の東端部に２箇所の調査区を設けた。調査は２月 28 日に実施し、鳥羽離宮跡に関する可能性の高い遺構を確認した。本調査成果を踏まえて協議を行った結果、事業者の協力により建物の設計変更が行われ、遺跡は地中保存されることとなった。

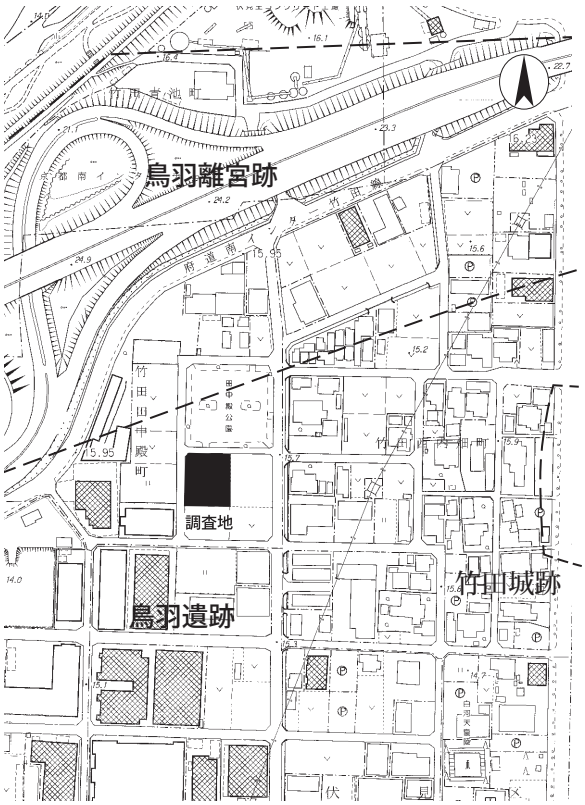


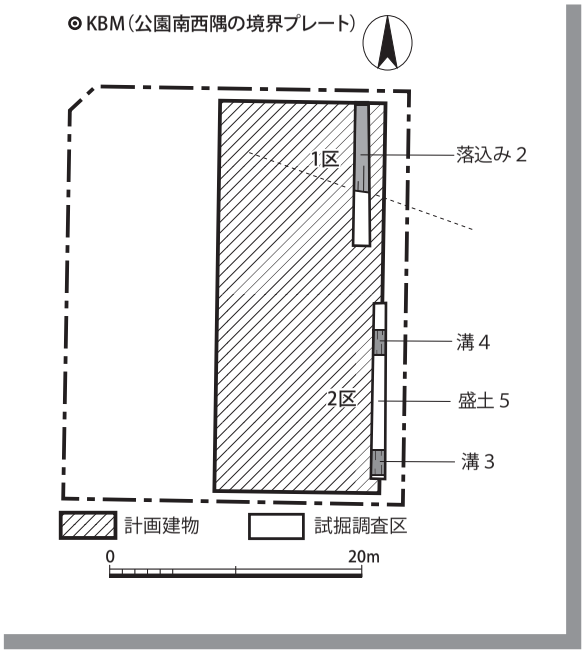
図68　調査位置図（1：5,000）

鳥羽離宮は、天皇及び上皇の居所である御所と祈りの場である御堂が結合している点が特徴であり、応徳３年（1086）に造営された南殿を端緒とする。地名から仁平２年（1152）に造営された田中殿が本調査地付近に想定されており、既往の調査ではそれを裏付ける平安時代後期の遺構・遺物群が確認されている。また、本調査地の南西では久寿元年（1154）に造営された金剛心院を発掘調査により確認している[1)]。

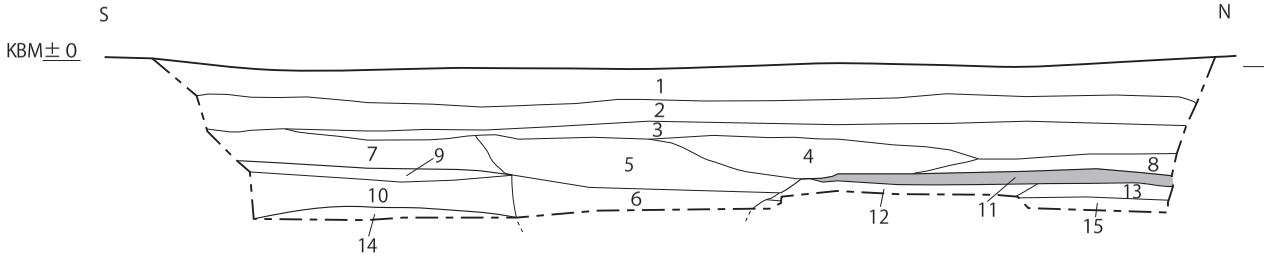
近辺の主要な調査事例としては、昭和 35 年に北側の田中殿児童公園で実施された第２次調査、昭和 49 年に本調査地東側で実施された第 14 次調査が挙げられる[2)]。これらの調査では、本調査地の北側に接する東西方向の道路以北で複数の地業、そして以南では園池を確認している。これらの地業は大型のもので、田中殿の建築物に伴うものと考えられるが、礎石等は殆ど遺存しておらず、現状では具体的な建物の復元にまでは至っていない。

更に、本調査地から西へ 60m の場所で昭和 56 年に実施された第 72 次調査も注目される[3)]。ここでは、東西方向の溝２条とそれに挟まれた路面と思われる礫敷きの平坦面を確認している。規模は、北溝が幅６ｍで深さ 1.2m、南溝が幅４ｍ以上で深さ 1.3m、路面は幅 9.5m ～ 10.2m である。

本調査地は、前述の第 14 次と第 72 次発掘調査地点の中間に位置し、かつ第 72 次調査の道路遺構の東延長線上にあたる。ただし、第 14 次調査では道路遺構は認められず、田中殿に伴うと考えられる園池を確認したのみである。これを踏まえるならば、本調査地付近で道路遺構の様相が変化する可能性が高く、田中殿や鳥羽離宮の地割を復元するうえで重要な地点と言える。

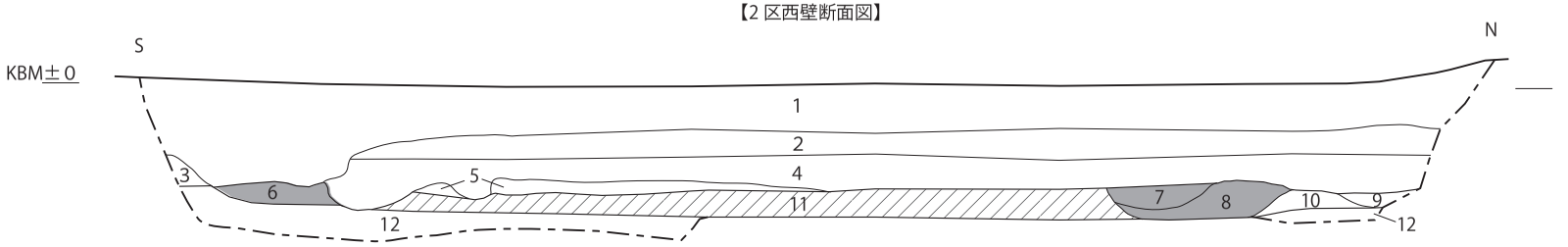


【1 区西壁断面図】



1	10YR4/1	褐灰色泥砂	【現代耕作土】
2	10YR3/1	黒褐色砂質土	
3	10YR2/1	黒色シルト	
4	2.5Y4/1	黄灰色砂礫【耕作に伴う暗渠か】	
5	5Y5/2	灰オリーブ色泥砂（小礫含む）	【土坑１】
6	2.5Y5/3	黄褐色粘質土	
7	5Y5/2	灰オリーブ色粘土（粗砂含む）【中世耕作土】	
8	10YR4/4	褐色泥砂（小礫含む）	
9	2.5Y4/1	黄灰色粘土（小礫含む）	【陸部か】
10	2.5Y3/1	黒褐色粘土（小礫含む）	
11	2.5Y4/2	暗灰黄色粗砂（小礫多量に含む）【落込み２】	
12	5Y6/3	オリーブ 黄色細砂	
13	N5/	灰色粘土	【湿地状堆積】
14	5G6/1	緑灰色粘土	
15	5G4/1	暗緑灰色粘土（遺物含まない）	

【2 区西壁断面図】



1	10YR4/1	褐灰色泥砂	【現代耕作土】
2	10YR3/1	黒褐色砂質土	
3	10YR2/1	黒色シルト	
4	5Y4/1	灰色細砂【中世耕作土】	
5	5Y4/1	灰色シルト（小礫多く含む）	
6	N7/	灰白色粗砂【溝３】	
7	2.5Y4/1	黄灰色泥砂（粗砂含む・土師器片含む）	【溝４】
8	2.5Y6/1	黄灰色シルト	
9	2.5Y6/2	灰黄色シルト【落込み６】	
10	2.5Y3/2	黒褐色砂礫	
11	5Y5/3	灰オリーブ色粘土（灰白色粘土ブロック含む）【盛土５】	
12	N4/	灰色粘土（遺物含まない）【湿地状堆積】	

図69　試掘調査位置（1：600）及び壁面断面図（1：80）

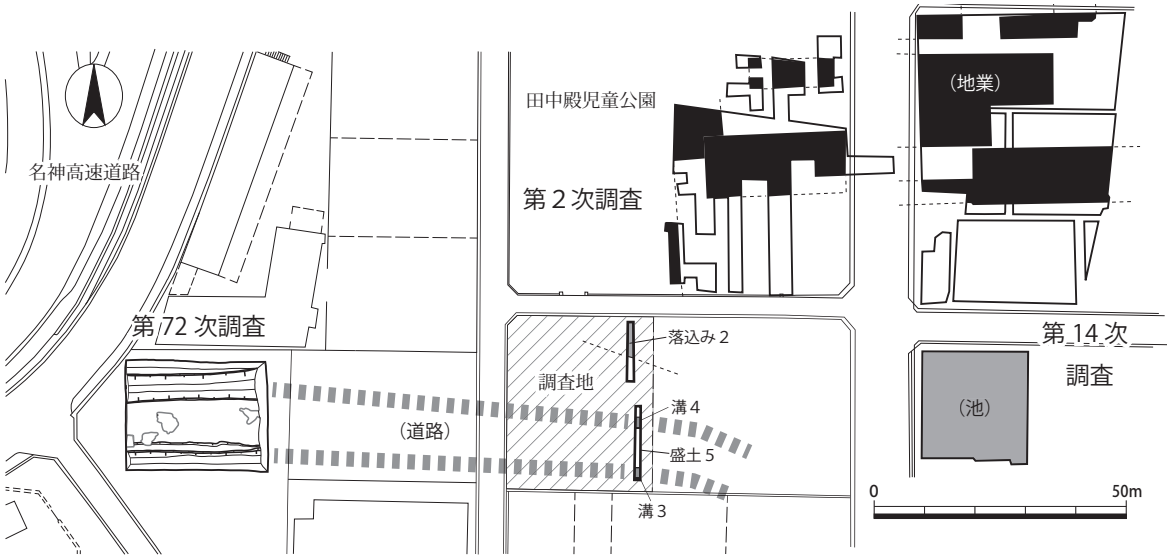


図70　周辺の調査事例（1：1,500）

２．層序と遺構（図69）

層序は、現代耕作土（１区１～３・2区１～２層）があり、その下のGL-0.75mで中世耕作土（1区７・２区４層）がある。この直下の-1.05mには黄灰色粘土（１区９層）や灰オリーブ色粘土（2区11層）が面的に広がり、この上面が遺構面となる。この下、-1.25mで無遺物の湿地状堆積である灰色粘土（1区13～15・２区12層）に至る。なお、グライ化や鉄分沈着が著しく遺構の形状が不明瞭であったことから、遺構検出は湿地状堆積上面で実施した。

落込み２　１区の北端部で検出した北に向かって下がる落込みで、植物遺体を多く含む暗灰黄色粗砂である。中央に土坑１があり、南側の黄灰色粘土との関係は調査区壁面で確認できないものの、黄灰色粘土が安定していること、そして周辺調査事例等から、落込み２は園池の汀の一部、その南の安定した黄灰色粘土が陸部である蓋然性が高い。なお、遺物は出土していない。

溝３・４及び盛土５　溝３・４は２区で確認した東西方向の溝である。南側が溝３で、幅1.4m以上、深さ0.2m。北側が溝４で幅２m、深さ0.4m。溝の埋土にはごく少量の土師器細片が含まれるが、時期を判別できるようなものは確認できない。この２条の溝の間には、精良な灰オリーブ色粘土（盛土５）が南北8.25mにわたり、約0.3mほどの厚さで広がる。この盛土５からは遺物を確認することができなかったものの、僅かに灰白色粘土ブロックを含むこと、１区では同様の土層が確認できない事、下層との層界が極めて明瞭であったことから、人為的な盛土層と判断した。位置や規模に若干の差異があり、また明確に時期を判別できる遺物も現状では認められないことから断定はできないものの、溝３・４及び盛土５は昭和56年の発掘調査で確認されている道路及び側溝の延長部である可能性が想定できる。

落込み６　溝４の北側に位置し、幅0.8m以上で深さは0.1mの落込みである。溝の肩口のように見えるものの、溝３・４とは埋土の様子が異なり、土質的には１区南端で確認できるやや安定した黄灰色粘土や黒褐色粘土層に近い。これを踏まえるならば、土塁（小丘）を複数設けてその間に土を充填していく造成の単位を確認している可能性が想定できる。

3．まとめ（図70・71）

以上、本調査の所見について述べた。付近では多くの調査が実施されており、田中殿やその周辺の様相については徐々に明らかになりつつある。しかし、その一方で復元を行う上での課題も多く、その１つとして道路と田中殿の園池の関係があげられる。

第72次調査の報告書では、確認した道路遺構を文献等にみられる「北大路」と推定している。この「北大路」は、鳥羽作道から東に向かって伸びる道路であり、鳥羽離宮の北門から鴨川まで通じていたものと考えられる[4)]。ただし、既往の調査成果を踏まえるならば、第72次調査で確認した道路の東延長線上には田中殿の園池が展開していることが判明しており、道路が鴨川までは到達していない可能性が高い。したがって、この道路については「北大路」以外の「中大路」や「田中新御所南大路」がその候補としてあげられる。

今回確認した溝３・４や盛土５については、第72次調査で確認されている道路の推定延長線上に当たるものの、やや南に寄っており、かつ溝の規模などが異なる。この点については遺構の遺存状況や側溝の排水方向などを加味したうえで総体的に判断する必要があるものの、位置関係や周辺調査事例を踏まえ、現状では同一の道路の蓋然性が高いものと考えたい。

本調査で確認した遺構を鳥羽離宮跡に伴う道路や汀として捉えた場合、周辺の調査成果を踏まえ地割について大きく２つの可能性が想定できる。まず、一つ目は東に向かって幅が狭まっていることから、田中殿の園池に向かって道路の幅員が減少し、その手前で道路が途切れる可能性である。

二つ目は、位置がやや南にずれることから園池の手前で道路が南に向かって屈曲する可能性である。田中殿の南西には金剛心院が所在するが、この東境界を北へ延長すると本調査地付近につき当たる。第106次調査では、金剛心院の北限より北側で雑舎や東境界を区切る区画溝と思われる遺構が展開することを確認している[5)]。これらを踏まえるならば、本調査地付近で南に屈曲した道路が金剛心院の東境界とつながり、鳥羽離宮の区画を形成していた可能性が想定できる。

以上、限られた面積の調査成果をもとに推論を重ねた。課題が依然として多く残る現状を踏まえるならば、鳥羽離宮の地割を復元するうえで可能性の一つを提示する事にも若干の意義はあろう。

（熊井　亮介）

註

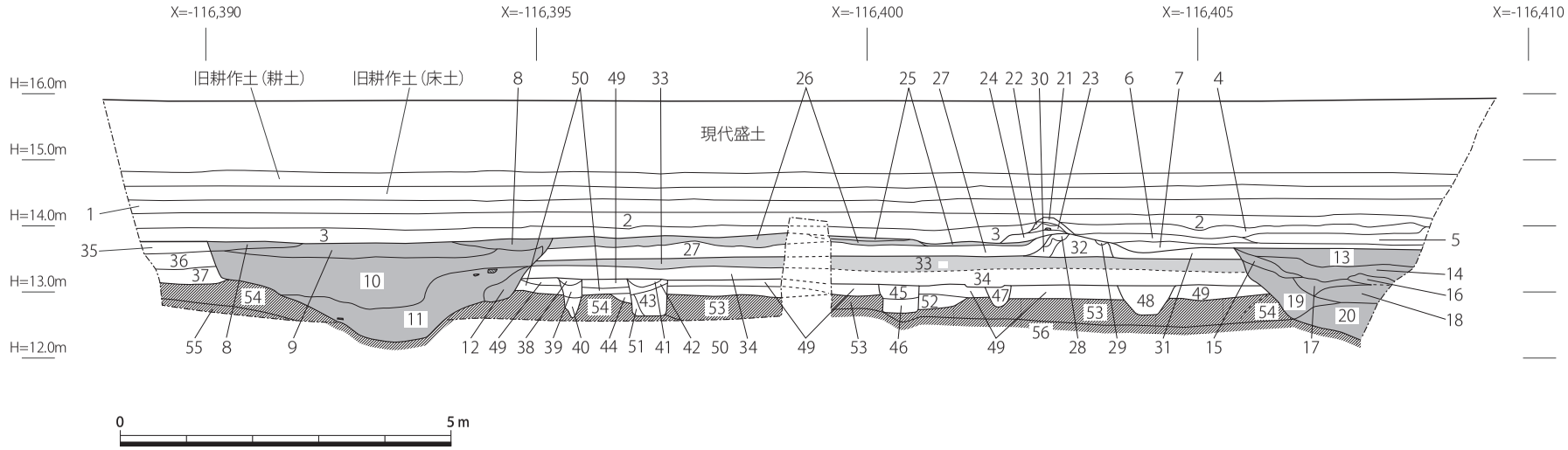
１）『鳥羽離宮跡Ⅰ　金剛心院跡の調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊、（財）京都市埋蔵文化財研究所、2002

２）杉山信三『院の御所と御堂』1960
『鳥羽離宮跡・史跡西寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974-Ⅳ、京都市文化観光局文化財保護課、1975。

３）『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1983。
なお、当調査については概報の報告に留まっており、現時点では断片的な情報しか公表されていない。しかし、本報告の内容にも深く関わることから、参考として調査区東壁断面図を付載しておく。

４）堀内明博「第３章　鳥羽殿の成立と展開」『日本古代都市史研究』2009

５）註１と同じ



1 茶灰色砂土
2 茶灰色砂泥
3 灰色砂泥
4 黄色泥土
5 淡青灰色粘土
6 灰色粘土
7 灰色砂泥
8 褐灰色泥土【北溝埋土】
9 灰色泥土（遺物多量）【北溝埋土】
10 暗褐色泥土【北溝埋土】
11 黒灰色砂泥（遺物、砂、木質多量）【北溝埋土】
12 黒灰色砂泥と灰色粘土の混合層【北溝埋土】
13 暗灰色砂泥【南溝埋土】
14 暗灰色泥土【南溝埋土】
15 灰色粘土【南溝埋土】
16 灰色砂と灰色粘土の互層【南溝埋土】
17 暗灰色泥土【南溝埋土】
18 灰色砂と灰色粘土の互層【南溝埋土】
19 淡灰色泥土【南溝埋土】
20 暗黄灰色泥土（木質多量）【南溝埋土】
21 灰色泥土
22 褐色砂土
23 褐灰色粘土
24 褐色砂泥
25 礫面【路面】
26 褐色土【路面】
27 灰色砂泥
28 褐色土
29 褐色土
30 灰色砂土
31 褐灰色土
32 淡褐色砂泥
33 褐色土【路面】
34 褐色土（下層に灰色が多い）
35 褐灰色土
36 灰色泥土
37 茶褐色土
38～40 層名不明【土坑】
41～44 層名不明【土坑】
45・46 層名不明【土坑】
47 層名不明【土坑】
48 層名不明【土坑】
49 淡黄灰色土
50 淡黄灰色土（下層に灰色が多く粘質）
51 層名不明
52 層名不明
53 淡黄灰色砂土【地山】
54 暗青灰色泥土【地山】
55 暗灰色砂泥【地山】
56 層名不明【地山】

図71 【参考】第72次発掘調査区東壁断面図（1：100）

Ⅲ-7　長岡京左京四条三坊十五町跡　№97

（22NG384）

1．はじめに（図72）

調査地は羽束師小学校の西に位置し、長岡京左京四条三坊十五町跡に該当する。周辺では当該地の南で中世城館である羽束師菱川城跡に関する堀が検出されており[1]、羽束師菱川城の北限が明らかになった。長岡京跡に関する遺構は、調査地の東側に位置する羽束師小学校で行われた1977年の調査[2]で、四条坊間小路側溝と長岡京期の掘立柱建物などが確認されたほか、561次調査でも四条条間南小路の北側溝を検出した。また2016年の調査[3]でも長岡京期の柱列を検出している。

今回の調査地では宅地造成が計画され、令和4年10月24日に文化財保護法第93条第1項にもとづく届出が提出された。これを受け、開発道路敷地予定部分を対象として同年24日～31日に試掘調査を行った。調査は12箇所のトレンチを設けて遺構の有無を確認した。調査面積は221㎡である。

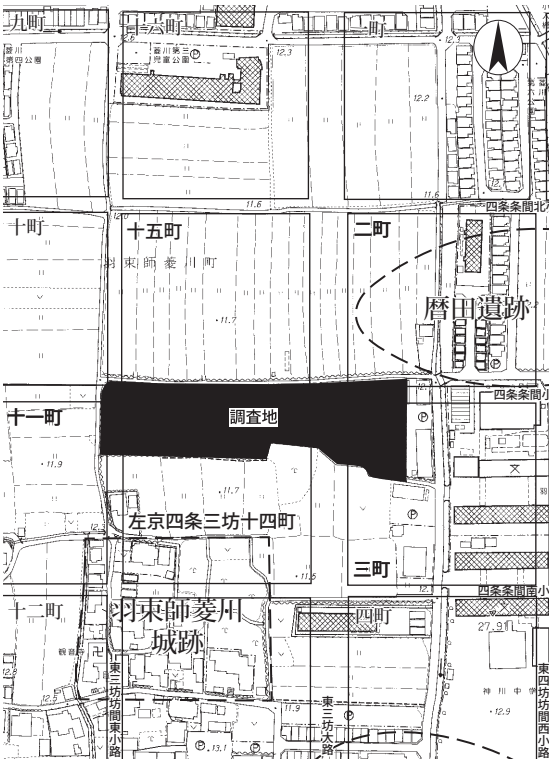


図72　調査位置図（1：5,000）

2　遺構（図73・74）

調査地の現地形は南隣接地より低く、周辺の調査事例との高低差が大きいため長岡京期の遺構面の深さが不明であった。このためトレンチ毎に検出面の高さを変えながら平面精査を行った。この結果、GL-0.5ｍで長岡京の条坊側溝を検出した。計画道路のうち敷地東部については長岡京期の遺物が出土したため発掘調査を指導した。本報告では、発掘調査範囲に含まなかったが、長岡京跡の側溝を検出した10～12区について報告する。

当該地の基本層序は現代耕土以下GL-0.2ｍでにぶい黄色粘質土、-0.5ｍで黄灰色シルト、-0.6ｍで灰黄色シルト、-0.7ｍで黄褐色微砂、-0.9ｍで灰色粘土、-1.1ｍで緑灰色粘土であった。粘土から微砂が徐々に堆積する地層は湿地状堆積層の様相を呈しており、このことから当該地は基本的には現地形と同様に南隣接地よりも低く不安定な土地であったと考えられる。

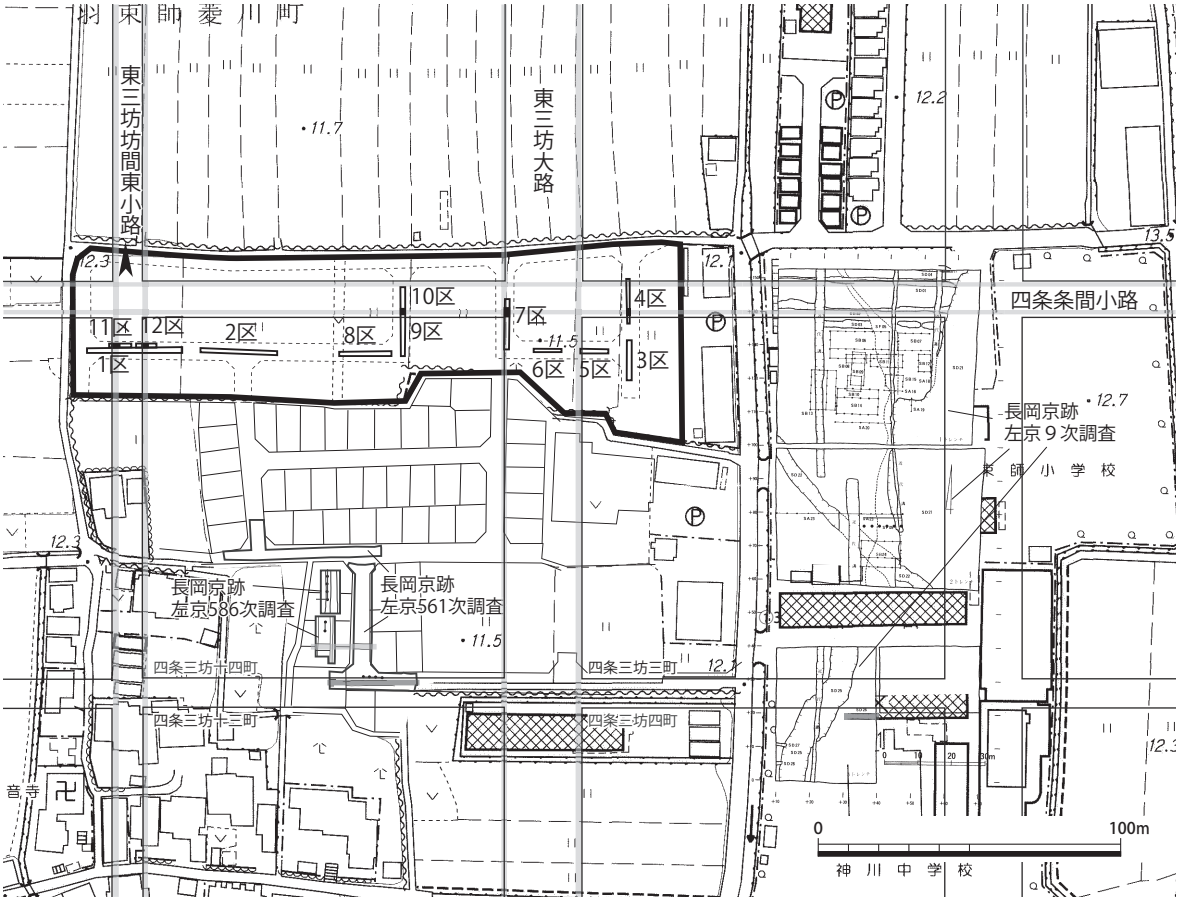
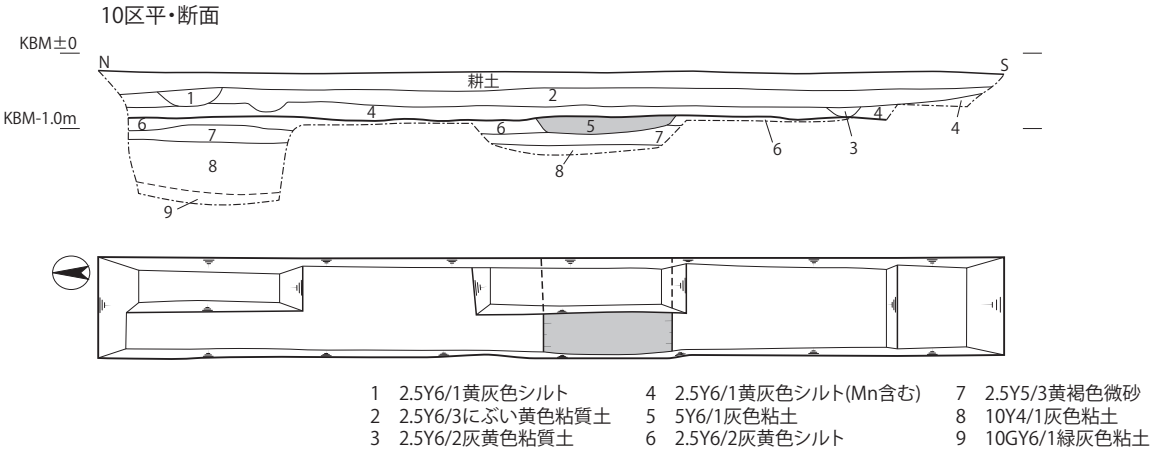
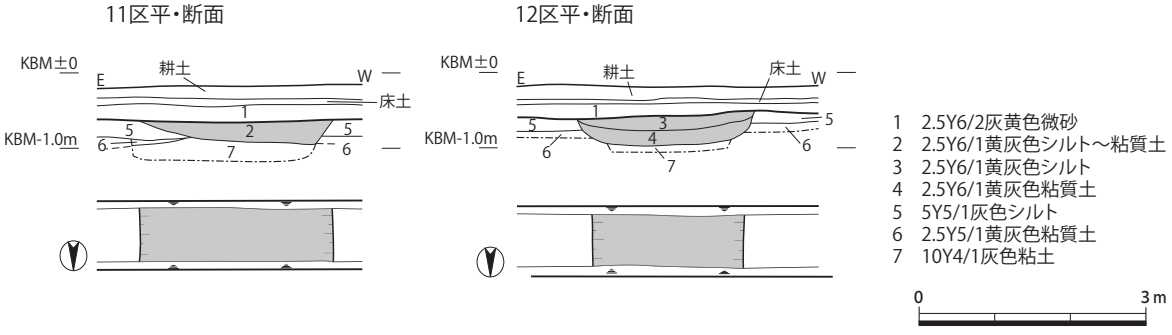


図73　長岡京跡条坊推定線と試掘調査区（１：2,500）



1　2.5Y6/1黄灰色シルト
2　2.5Y6/3にぶい黄色粘質土
3　2.5Y6/2灰黄色粘質土
4　2.5Y6/1黄灰色シルト(Mn含む)
5　5Y6/1灰色粘土
6　2.5Y6/2灰黄色シルト
7　2.5Y5/3黄褐色微砂
8　10Y4/1灰色粘土
9　10GY6/1緑灰色粘土



1　2.5Y6/2灰黄色微砂
2　2.5Y6/1黄灰色シルト～粘質土
3　2.5Y6/1黄灰色シルト
4　2.5Y6/1黄灰色粘質土
5　5Y5/1灰色シルト
6　2.5Y5/1黄灰色粘質土
7　10Y4/1灰色粘土

図74　10・11・12区平・断面図（１：100）

長岡京の条坊側溝は粘性の強い黄灰色シルトの上面で検出されたことから湿地状の土地に施工された可能性がある。なお、側溝以外の顕著な遺構は検出されなかった。

10区　GL-0.6ｍで東西方向の溝を検出した。幅1.8ｍ、深さ0.2ｍで埋土は灰色粘土であった。四条条間小路南側溝の位置に一致する。

11区　最初に調査を行った1区では長岡京期の遺構面よりも上層で検出を行ったため側溝を確認できなかった。4・7区の調査成果から、1区で検出を行った高さよりも下層に東三坊坊間東小路側溝の溝が遺存している可能性を踏まえ、改めて11・12区を設けた。11区ではGL-0.5ｍで南北方向の溝を検出した。溝は幅約2.5ｍ、深さ0.3ｍである。埋土は黄灰色シルト～粘質土であった。

12区　GL-0.5ｍで南北方向の溝を検出した。幅2.0ｍ、深さ0.4ｍで埋土は上層が黄灰色シルト、下層が黄灰色粘質土である。11・12区の溝の中軸線の東西間の距離（東小路幅）は10ｍであった。遺物は出土しなかったが東三坊坊間東小路の推定位置と一致することから長岡京の条坊側溝と考えられる。

以上のように今回の調査では、推定築地心に沿って各条坊側溝と考えられる溝を検出した。このうち東三坊大路および四条条間小路については発掘調査を指導し、現在調査にむけての協議中である。残りの側溝については、居住には不向きな湿地堆積層の上面で側溝だけが検出されたものであることから今回報告することとなった。

発掘調査を指導した7区では側溝から長岡京期の遺物が出土したものの、他の調査区からは遺物がほとんど出土しなかった。しかしながら各推定築地心に沿って検出されたことから長岡京期の条坊側溝は左京四条三坊内では環境が多少不安定であっても施工されたと考えられる。その詳細については発掘調査によって明らかになるのを待ちたい。

（赤松　佳奈）

註

1）『羽束師菱川城跡・長岡京跡』（長岡京跡第561次調査）、（公財）元興寺文化財研究所、2015

2）『長岡京跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告－Ⅱ　（財）京都市埋蔵文化財研究所、1977

3）「Ⅴ長岡京左京第586次（四条三坊十四町跡）・羽束師菱川城跡（2）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成28年度』京都市文化市民局、2017

Ⅲ-８　史跡・特別名勝　西芳寺庭園　№99

（４N007）

１．はじめに



図75　調査位置図（1：5,000）

本件は、令和３年度から実施している史跡及び特別名勝西芳寺庭園及び隣接地における試掘調査である。

西芳寺は、聖徳太子の別荘を天平年間に行基が寺に改め、「西方寺」を創建したと伝えられている。その後荒廃したものの、暦応２年（1339）に藤原親秀が夢窓国師を勧請し、名を「西芳寺」として禅宗に改め中興したとされる。

国師入寺後の西芳寺の庭園は、名園として名高く、国師に帰依した足利尊氏・直義兄弟を始め、歴代の足利将軍がここを訪れ、特に八代将軍義政は慈照寺（銀閣寺）造営にあたり、範を西芳寺に求めたことで知られている。

しかし応仁・文明の乱の際に焼き討ちを受け、

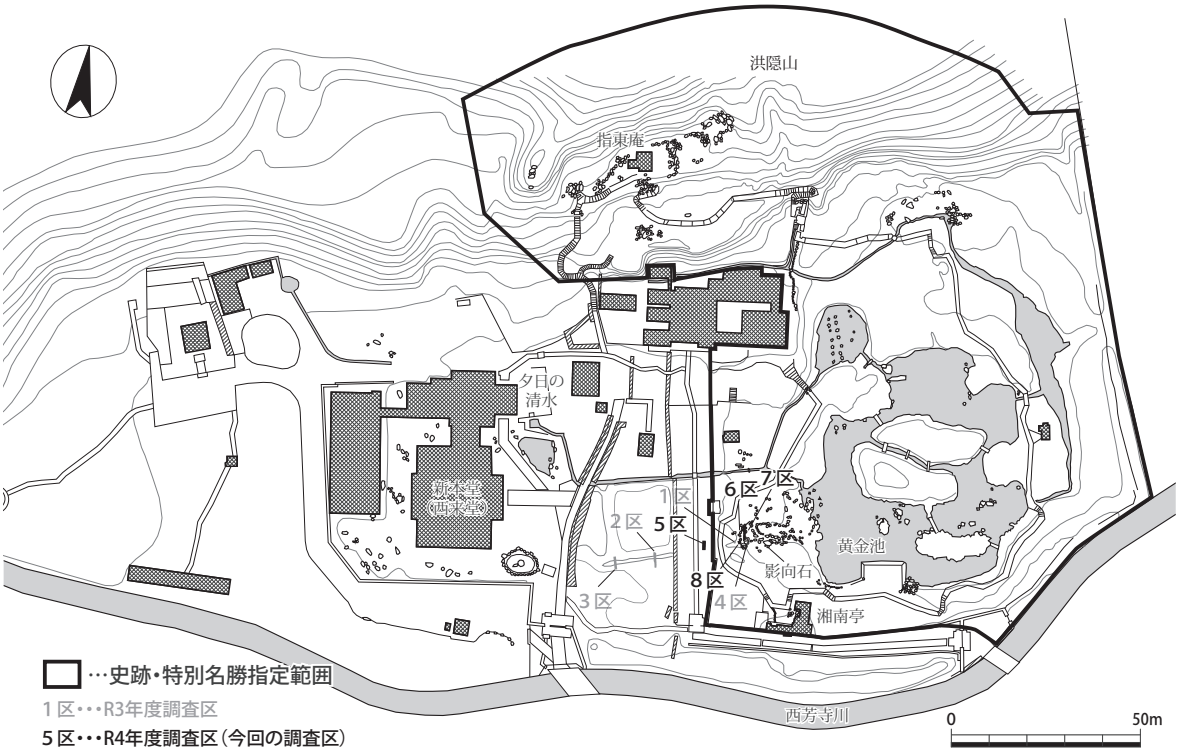


図76　調査区配置図１（１：2,000）

境内建物はほぼ全焼したことに加え、狭隘な谷間の扇状地上に立地する特性から、度重なる山崩れと洪水によって荒廃したことが記録に残る[1)]。享保19年（1734）発行の『山州志』には「近世山潰れ水溢れ半ば荒廃す」と記されている。

現在、西芳寺は境内一面苔に覆われ、「苔寺」の名で知られているが、これは長年の変遷を経た江戸時代後期以降の姿であり、当初は白砂青松の庭園として著名であった。

西芳寺では近年、湧水量の低下による黄金池の水位が低下していることに加え、温暖化に伴い庭園を覆う苔が衰弱しつつあることから、水量及び湿度を維持するための対策を講じる必要性が生じていた。

現在、園池の水源は境内西側の「夕日の清水」からの湧水に西芳寺川から汲み上げた水を合わせた導水路と、黄金池南西隅に所在する「朝日の清水」の湧水に因っている。しかし、応永27年（1420）に西芳寺を訪れた朝鮮の申叔舟が記した『日本栖芳寺遇真記』に「寺の中、渓流を林表に引き、之を准らして池となす」とあり、かつては、境内南側を流れる西芳寺川から水を引いていたことを示す記述が残されている。ここに記された導水路は、指定範囲西側に残る東西方向の凹みがその名残とされ（図77）、黄金池西側の影向石が据わる石組付近に注いでいたと考えられている[2)]。



図77　導水路跡の凹み（西から）

西芳寺では、開山1,300年の節目にあたる2031年に向けて、境内の保存修理を検討してお

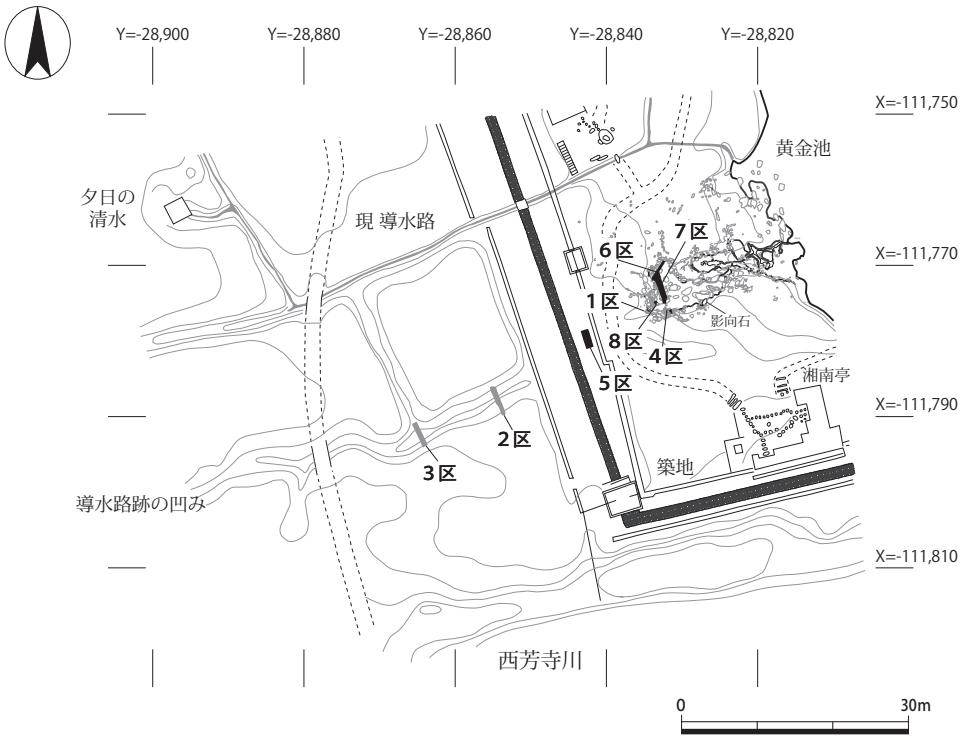


図78　調査区配置図２（１：1,000）

り、この凹みを利用して導水路を復元することで、黄金池の水位を安定させ、庭園内の湿度を保持する方針を示された。これに対し導水路跡の凹みは、史跡・特別名勝指定範囲外に位置するものの庭園に密接に関わる遺構であること、導水路復元にあたり遺構保全を図るため、本市において試掘調査を実施することとなった。調査は昨年度から実施し、今年度は２年目の調査となる（図76・78）。

昨年度の調査では、凹みに設けた２・３区にて新旧２時期の溝が存在すること、凹みがかつての導水路であったことを裏付け、影向石が据わる石組西側に設けた４区において、石組が室町時代に据えられた可能性が高いことを明らかにしている[3)]。

一方、水路の注口と想定した影向石西側の滝石組の滝口に設けた１区では、水流があったことを示す痕跡が認められなかったことに加え、２区の溝底との高低差の関係から、導水路の吐水口とすることは困難であることが明らかとなった。

上記の調査成果を踏まえ、今年度は導水路である溝の方向を見定め、影向石付近の石組への吐水口を明らかにすること、石組の一画からの湧水施設の存在が想定される地点の確認を行うことを目的とした。

調査の結果、昨年度調査の２・３区で確認した新旧2時期の溝が影向石付近の石組に向かって伸びていることを確認し、護岸石組の一部は南北朝時代に据えられたものであることを裏付けることとなった。

調査は５月23日から開始し、５月31日、６月３日には京都芸術大学尼崎博正教授、５月27日、６月１日には京都産業大学鈴木久男教授の指導を受け、６月３日に調査を終了した。調査面積は計７㎡である。



図79　挿石検出状況（北から）

２．遺　構

調査区は、昨年度調査の２・３区で確認した溝の東延長線上に５区を設定した（図76・78）。昭和13年（1935）の実測図に石組暗渠として描かれている地点に５区[4)]、湧水施設を想定した影向石北西の石組中央に６区を設定した。また、溝の注口を確認するため６区を南に拡張し、７区を設定した。さらに昨年度調査１区の断割及び滝石組部に８区を設定した。調査開始後、５区で新旧２時期の溝を確認するとともに、６区では江戸時代の礫敷きを認め、湧水施設が存在しないことが明らかとなった。したがって、溝の注口を確認するため、６区を南に拡張し、７区を設定した（図78）。

５区（図79・80、図版23）

層序は、表土以下、GL-0.12ｍで近世後半以降の整地

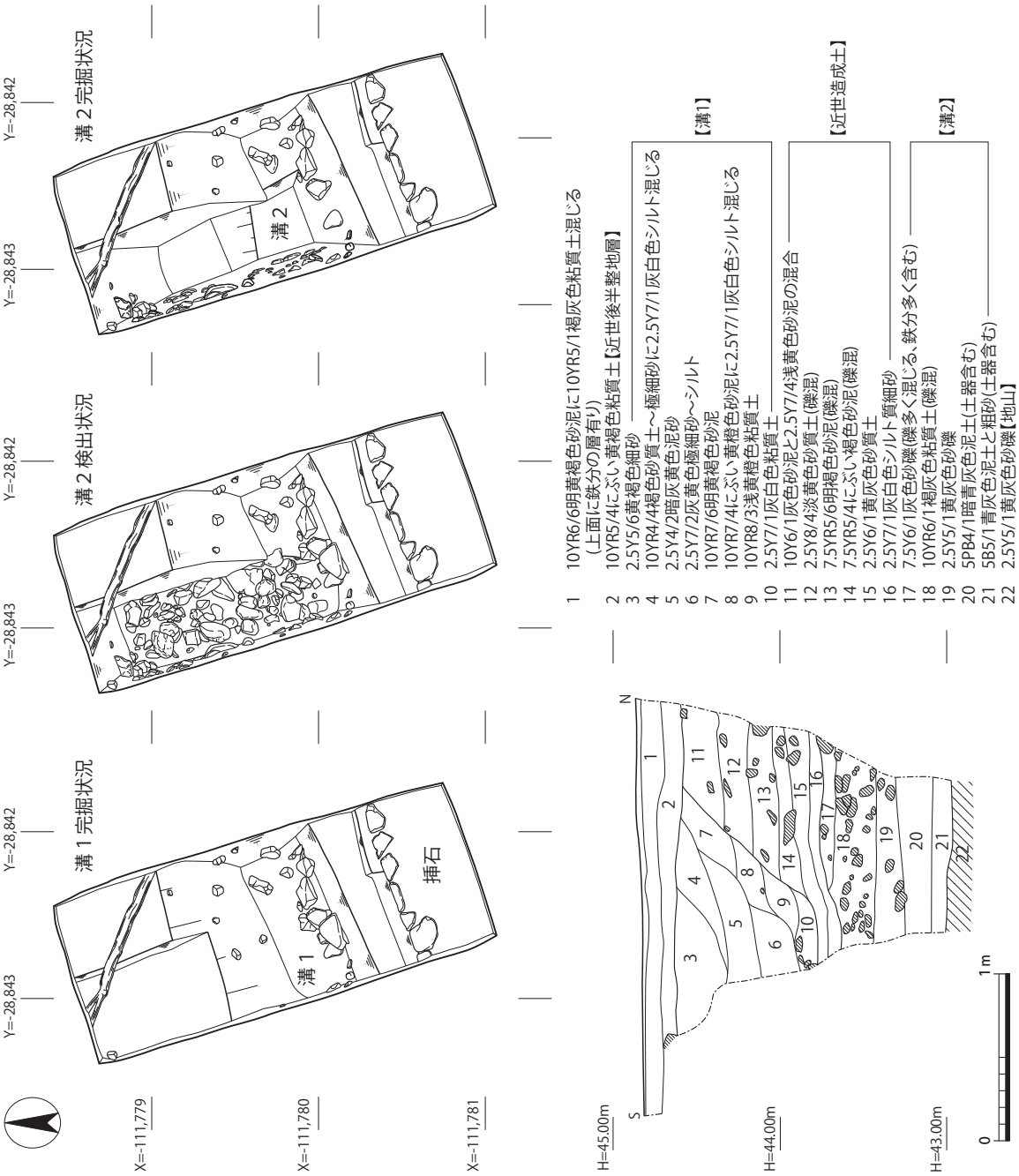


図80　５区実測図（１：40）

層、-0.22ｍで近世造成土、-1.1ｍで溝２埋土となり、-1.8ｍで黄灰色砂礫の地山となる。

挿石（図79）　近世後半以降の整地層上面で成立する北東から南西方向の石列である。長さ0.9ｍ以上でさらに調査区外に延びる。石材は径0.1～0.2ｍの扁平な河原石で、北側に面を持つ。参道に直交することから、参道に面した簡易な建物の挿石と判断できる。

近世造成土　近世後半以降の整地層直下で確認した造成土である（図80-11～16層）。礫混じりの砂質土を主体とする土で厚さ0.8ｍを測る。

溝１（図版23-１）　近世造成土上面で成立する北東から南西方向の溝である。挿石を保護するため、北肩のみの確認に留まる。幅は１ｍ以上、深さ0.85ｍを測り、さらに調査区外に延びる。溝底の標高は43.78ｍである。埋土は粘質土やシルトを主体とし、２度の掘り直しが認められる。遺

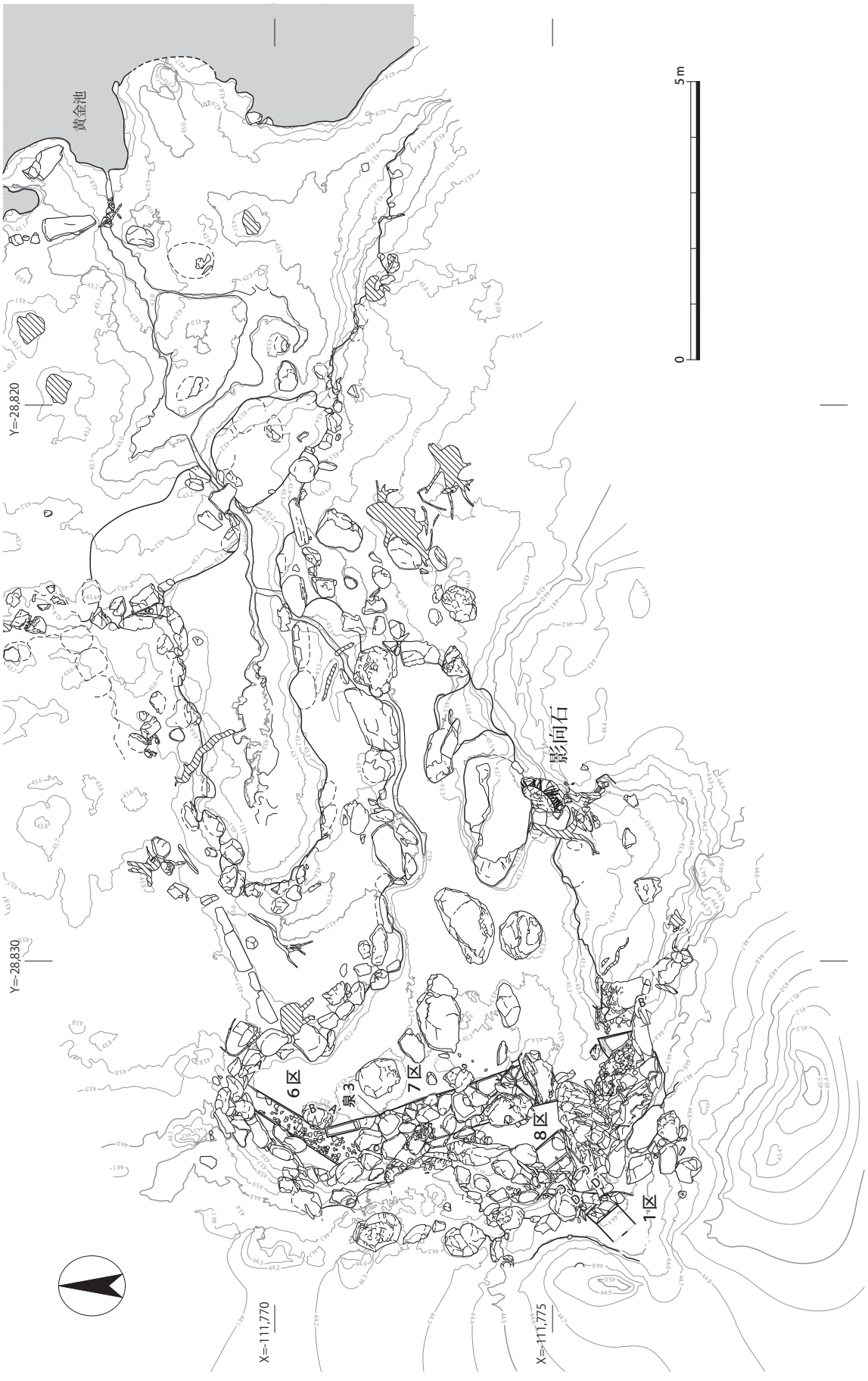


図81　1・6～8区平面図（1：100）

物は江戸時代の瓦が出土した。２・３区で確認した溝１と同一の溝である。

溝２（図版23-２・３） 近世造成土直下で確認した溝である。両肩とも調査区外に展開するため、流れの向きは不明であるものの、２・３区の溝２の延長線上にあたること、堆積状況に共通点が認められることから、東西溝と判断できる。幅は不明であるが、深さ0.8ｍを測る。溝底の標高は43.0ｍとなる。埋土の下層は、滞水した状態を示す泥土が堆積し、最上層には径0.15ｍを越える大型の礫が多量に混じる。礫の検出状況に規則性はなく、人為的な埋め戻しに用いたものと判断できる。遺物は少量であるが、下層の泥土から南北朝時代の土師器皿等が出土した。

１・６～８区（図81・82、巻頭図版１・２、図版24）

層序は７区で代表させる。腐植土以下、GL-0.08ｍにて灰色泥砂の近世以降の堆積土、-0.15ｍで灰黄色粘土の近世池底の礫敷、-0.2ｍで緑灰色泥土の整地層となる。調査区南端では、整地層の上面に厚さ0.02ｍの灰白色粗砂小礫混じりが残る。整地層上面にて泉３や護岸石掘方を確認した。整地層上面の標高は43.0～43.18ｍである。地山は確認できなかった。

６区（巻頭図版2-1、図版24-１）

礫敷き ６区全域及び７区北端にて確認した（図82-６層）。径0.05～0.1ｍの小礫及び平瓦が灰黄色粘土の中に敷き詰められており、止水を目的として施工されたものと判断できる。平瓦は江戸時代中頃以降の桟瓦片である。礫敷き上面の標高は43.15ｍとなる。

７区（図版24-１）

中世池底 調査区南端の断割部分のみで確認できる灰白色粗砂小礫混じりである（図82-７層）。厚さ0.03ｍを測る。護岸石掘方及び整地層を覆うことから、中世の池底と判断できる。池底上面の標高は43.20ｍである。

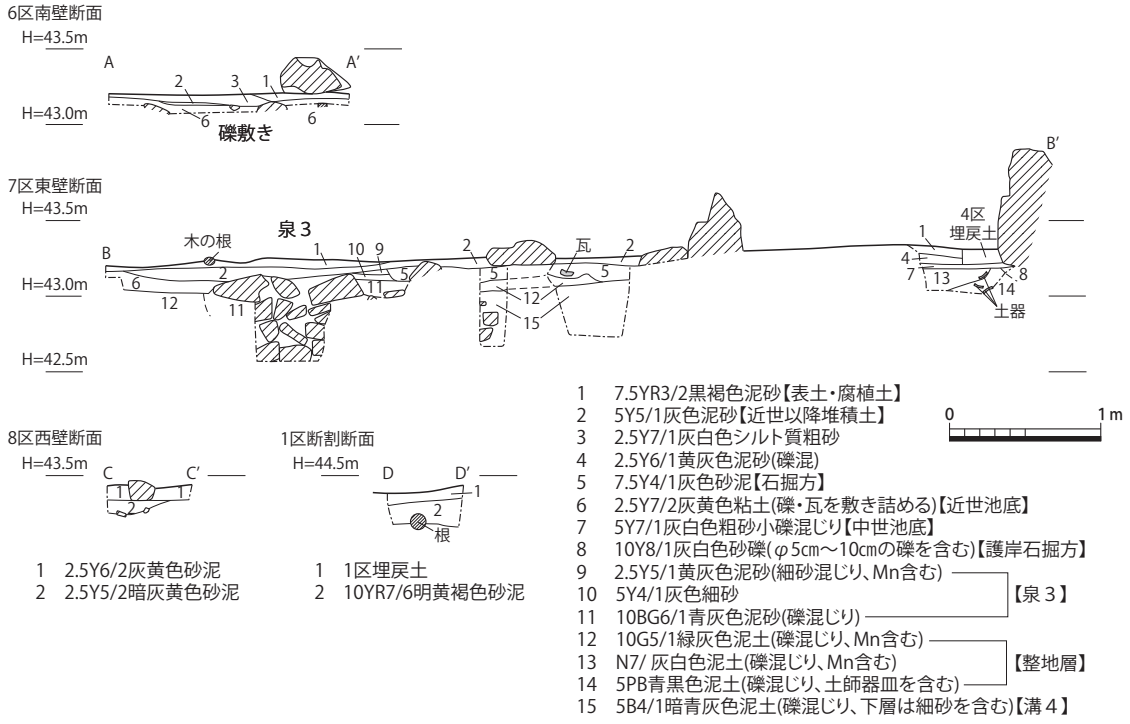


図82 １・６～８区断面図（１：50）

整地層　断割調査で確認した整地層である（図82-12～14層）。整地層上面の標高は43.19ｍで、厚さは最大で0.15ｍを測る。上面にて護岸石掘方が成立すること、上部に中世池底、下部に溝４が堆積することから、護岸石組を構築するために溝４を埋めた整地層と判断できる。調査区南端の断割部分（図82-14層）からは南北朝時代の土師器皿が一定量出土した。

泉３（図版24-２）　北半で確認した石組の泉である。整地層上面にて成立している。掘方は直径1.４ｍ以上を測り、石組の直径は1.1ｍの円形となる。深さ0.5ｍ以上を測る。現在も湧水が豊富で底の確認はできなかった。石組を構成する石材は径0.1～0.2ｍであるが、最上面には径0.3～0.4ｍの大型の河原石を円形に並べ、修景としている。埋土から時期不明の板状木製品が出土した。

溝４　断割部分で確認した。標高43.18ｍで検出し、深さ0.6ｍ以上を測るが、湧水が激しく底面は確認出来なかった（図82-15層）。５区溝２下層の堆積状況に近似する堆積状況から、溝と判断した。

護岸石掘方（巻頭図版2-2）　南端にて既存の護岸石掘方を確認した。整地層上面で成立し、中世池底である灰白色粗砂小礫混じりに覆われる（図82-8層）。埋土には小礫が多く含まれており、護岸石の据付石と捉えられる。

１・８区（巻頭図版２-３）

昨年度調査を実施した滝石組上部の１区東端の断割と下部に８区を設定し、水流の痕跡を求めた。いずれも水流の痕跡及び護岸等は確認できなかった。

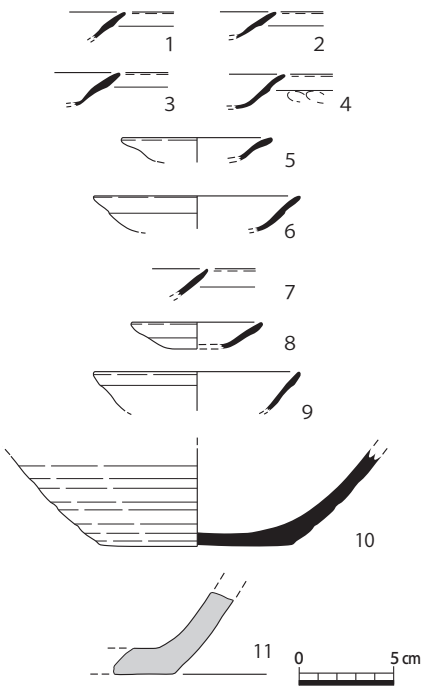


図83　遺物実測図（１：４）

３．遺　物

遺物は、南北朝時代から江戸時代にかけての土師器、焼締陶器、瓦類、木製品、石製品などが出土した。ここでは、５区溝２及び７区溝４から出土した遺物を報告する。

１～９は土師器皿である。１～６が皿Ｎ、７～９が皿Ｓである。溝２から出土した２・７を除き、溝４から出土している。１～３は、底部から体部の立ち上がり部の器壁が薄く、口縁部立ち上がり部はナデにより厚くなる。４は体部が押さえにより外反し、口縁部もナデにより外反する。５は口縁端部が肥厚し、やや外反する。口径7.8㎝に復元できる。６は口径10.8㎝に復元でき、口縁立ち上がり部外面に段を持ち、端部はやや外反する。７の口縁部は直線的で、端部はやや上方に屈曲する。８はやや器壁が厚く、口径6.8㎝に復元できる。９は椀型で、口径10.8㎝、器高は2.0㎝以上に復元できる。土師器皿は７Ｃ～８Ａ段階に属するものであり、14世紀中頃前後に比定される。10は東播系須恵器鉢である。内面は摩耗が著しい。底径10.0㎝である。11は滑石製の石鍋底部である。外面には煤が付着する。

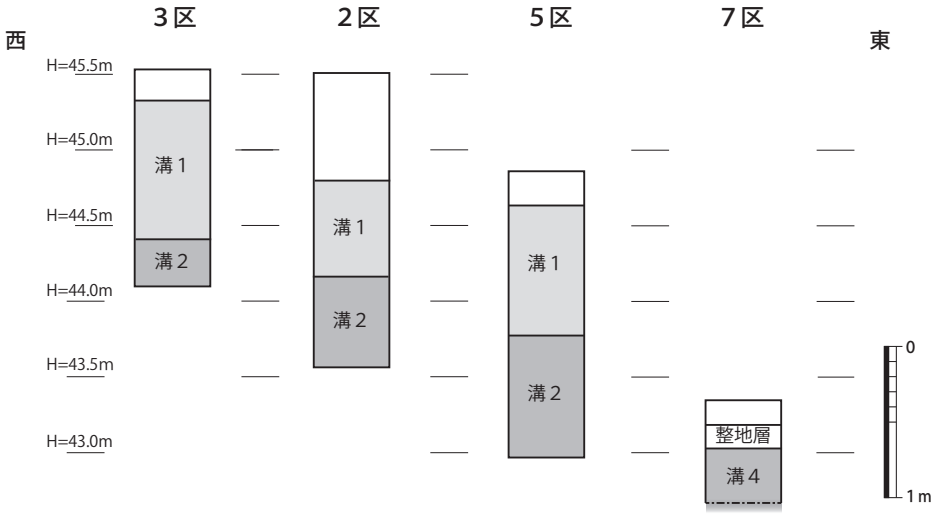


図84　溝１・２・４断面模式図（１：50）

４．まとめ

ここでは、今年度の調査から明らかになったことを整理し、昨年度の調査を踏まえ、まとめとしたい。

（１）導水路について

５区にて新旧２時期の溝１・２を確認した。溝１は溝２を人工的に埋め戻した後、江戸時代の造成土で嵩上げした後に、ほぼ同じ位置を踏襲して築かれている。溝１・２ともに滞水や流水の痕跡が認められ、昨年度２・３区で確認した溝と同一の溝であり、７区溝４も堆積状況から溝２下層と同一のものと判断できる。溝１・２ともに溝底の標高は、西芳寺川の上流側（西側）が高く、黄金池に向かって流れていたことがわかる（図84）。溝１は江戸時代後半、溝２下層及び溝４は南北朝時代に埋没しており、影向石が座る護岸石組は、同時期に溝４を埋めた整地層を掘り込んで据えられたことを確認できた。したがって、溝２は夢窓国師が入寺した1339年には西芳寺川からの導水路として既に存在しており、「寺の中、渓流を林表に引き、之を准らして池となす」と記された渓流の一部であると判断できる。江戸時代に築かれた溝１についても、溝２の位置をほぼ踏襲しており、西芳寺川からの導水路として機能していたと捉えられよう。

（２）影向石周辺の石組について

影向石付近の石組については、夢窓国師が築いたものとの評価されることが多い。今回の調査で、７区南端の護岸石組が南北朝時代の整地層を掘り込んで据えられており、同じ南半に位置する影向石付近の石組が当該期に据えられたものであることが明らかとなった。また、中世の池底も一部残ること、水分石と捉えられる石材も認められることから、水流が石組を洗っていたことは間違いない[5)]。南半の護岸石組は、影向石同様のチャートの巨石のみで構成されている一方、北半の護岸石は、チャート以外にも砂岩などが用いられており、その大きさも小振りのものが多い。今回、６区にて粘土に貼り付けた近世の礫敷きを確認し、止水を目的として施工されたと判断できることから、北半の石組は近世に大きな改変を行なった可能性が指摘できる。

（3）近世造成土について

２・３・５区において、江戸時代の厚さ0.5～0.8ｍの造成土を確認した。造成土は２～５層に分かれるものの、造成の単位と捉えられ、同一時期に施工されたと考えられる。西芳寺は、その立地から度重なる水害や山崩れの被害を受けており、影向石が座る石組より東側を嵩上げすることで、度重なる災害から園池を保全することを目的として施工されたものと判断できる。

（4）今後の課題について

令和３・４年度の調査によって、導水路を確認したこと、影向石付近の石組の一部は、南北朝時代に据えられたものであることを確認する成果が得られた。一方で未だ不明な点も多い。ここでは、今後に残された課題について述べる。

導水路であった溝１・２を通った水流は、影向石前の石組を通って黄金池に流れていたことは間違いない。しかし影向石西側の滝石組上面の標高が溝１の底面よりも高かったこと、１・８区にて水流の痕跡が認められなかったことから、現在みられる石組には水の注ぎ口が確認出来なかった。今後、影向石東側の石組にどのように水が注いでいたのかを解明する必要がある。また、影向石前面に水流が存在した場合、現在のような影向石対岸から石組の中に延びる岬状の園路跡の存在がボトルネックとなってしまい、水流を阻害することになる。したがって、園路跡は水流が途絶えた後に付加された可能性が高く、今後の保存修理にあたっては、園路跡の構築時期を探る必要がある。

（西森　正晃）

註

1）『西芳寺池庭縁起』の追記にある「当寺池庭修覆再興之年代」の項には、康正元年（1455）、文明17年（1485）、寛永年中（1624～1644）、元禄元年（1688）に洪水の記録がある。

2）『浄土の庭　太陽庭と家シリーズⅢ』森蘊・村岡正監修、平凡社、1980年等で指摘されている。

3）「史跡・特別名勝 西芳寺庭園」『京都市内遺跡試掘調査報告　令和３年度』京都市文化市民局、2022年

4）重森三玲・重森完途『日本庭園史大系 第三巻・鎌倉の庭』（株）社会思想社、1971年に掲載。

5）やや時代が下るものの、天文14年（1545）に比定される「洛外名所図屏風」（太田記念美術館蔵）に描かれた「さいはう寺の庭」には、「屋うかう石」（影向石）と付箋が貼られた石が認められ、それを拝む僧侶が描かれている。この石は、その形状から現在影向石の全面に座るチャートの巨岩に比定することが可能であるが、屏風には、僧侶と石の間に水流が認められ、その右手には小さな滝が描かれていることがわかる。

Ⅵ　試掘調査一覧表

【令和４年　１～３月（令和３年度分）】

平安宮

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
1	治部省跡	中京区西ノ京内畑町 10-8	3/14	GL-0.9m で浅黄色シルトの地山を確認。	11㎡	21K630
2	治部省跡	中京区西ノ京内畑町１、1-16、1-17 の一部	1/11	GL-0.6 mで明黄褐色シルトの地山を確認。	12㎡	21K386

平安京左京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
3	二条二坊七・八町跡、二条城北遺跡	上京区猪熊通丸太町下る仲之町 519 他	2/8 ～ 10	GL-1.0m で黄灰色粘質土の江戸時代遺構面、-1.1m で灰黄色粗砂及び明黄褐色シルトの地山を確認。**発掘調査を指導**。	91㎡	21H429
4	二条三坊二町跡	中京区釜座通丸太町下る桝屋町 155-2 他	1/14	GL-1.8 mまで現代～近世盛土、以下にぶい黄色砂礫。顕著な遺構・遺物なし。	30㎡	21H324
5	二条四坊二町跡、烏丸丸太町遺跡	中京区高倉通竹屋町上る坂本町 703	3/24	GL-1.5 mで明黄褐色砂泥の地山を確認。	53㎡	21H271
6	七条三坊八町跡	下京区八百屋町 264 他	1/4・5	GL-1.4 m以下で平安時代中期～室町時代後期の遺構面を複数確認。**設計変更し遺跡は地中保存**。**本文 18 ページ**。	77㎡	21H455
7	八条四坊二町、塩小路若山城跡	下京区東洞院通七条下る東塩小路町 556-10	3/7・8	鎌倉時代の遺構を確認。敷地西半を中心に**発掘調査を指導**。	101㎡	21H471
8	九条三坊九町跡、烏丸町遺跡	南区東九条上殿田町 48-2	1/13	GL-1.9 mまで現代盛土、以下、黄褐色砂礫。	28㎡	21H155

平安京右京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
9	一条三坊四町跡、御土居跡	中京区西ノ京南大炊御門町 32-32	3/10・11	GL-0.8 mで道祖大路西側溝を検出。**発掘調査を指導**。	128㎡	21H480
10	一条三坊十三町跡	右京区花園藪ノ下町９	3/16	GL-0.5m で平安時代の遺構が展開することを確認。**発掘調査を指導**。	23㎡	21H320
11	五条三坊三町跡、西院遺跡	右京区西院西矢掛町 10、11 の一部	1/12	GL-1.0 mで多量の土器片・小石を含む褐灰色シルト～粗砂、-1.15 m以下褐灰色シルト。ただし敷地の大部分が撹乱。顕著な遺構・遺物なし。	34㎡	21H390
12	六条二坊十一町跡	右京区西院南高田町１、２の一部	1/7	GL-0.5 mで旧耕作土の暗灰黄色泥砂、-0.7m で地山の明黄褐色シルト。遺構・遺物は確認できず。	56㎡	21H222
13	六条四坊十町跡	右京区西院月双町 102	3/4	GL-0.9 mで旧耕作土、-1.15 mで中近世耕作土、-1.4 mで古代包含層、-1.5 mで古墳時代前期包含層、-1.6m で黄灰色砂礫の地山。北へ向かって大きく落ち込む湿地状堆積を確認。	39㎡	21H566

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
14	円宗寺跡	右京区御室小松野町 18 他	3/15	GL-0.33m で 11 世紀の遺構面を確認。**本文 26 ページ**。	54㎡	21S537

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
15	栗栖野瓦窯跡	左京区岩倉幡枝町 641-17、641-18、641-19	3/31	現地踏査及び写真撮影。	0㎡	21S549
16	醍醐ノ森瓦窯跡	北区西賀茂中川上町 70-1	2/18	GL-1.95m で暗褐色泥砂、-2.2 mで灰黄褐色砂礫の地山を確認。顕著な遺構・遺物は確認できず。	10㎡	21S525
17	北野遺跡、北野廃寺	北区北野上白梅町 35-1	1/6	GL-1.7 mで黄褐色粘土質シルトの地山を確認。東西方向にのびる中世の溝状遺構を検出したが、削平が著しく残存状態は不良。	21㎡	21S449
18	上京遺跡	上京区今出川通新町西入弁財天町 326-2 他 8 筆	2/16	GL-0.7 mでにぶい黄褐色泥砂、-1.2 mで暗褐色シルト、-1.5m で地山の暗褐色砂礫。鎌倉時代の土坑や近世～室町時代の井戸等を検出。**発掘調査を指導**。	36㎡	21S430
19	御土居跡	上京区寺町通清和院町口上る 2 丁目北之辺町 394	3/25	GL-0.85 mでにぶい黄褐色砂～砂礫の河川堆積を確認。	33㎡	21S395

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
20	白河街区跡	左京区聖護院西町 21、21-34、21-35、21-94	3/23	GL-0.9 mで灰色泥砂を含むオリーブ黄色細砂、-1.2 mでオリーブ黄色細砂、-1.35 mでオリーブ黒色泥砂の中世整地層、-1.4 mで灰黄色微砂の基盤層、-1.6 mで明黄褐色細砂の基盤層上面で中世の遺構を確認。**設計変更し遺跡は地中保存**。	24㎡	21S641
21	寺町旧域、公家町遺跡	中京区関東屋町他	1/24 ～ 31	5 面の遺構面を確認。室町時代の集石土坑などを検出。**本文 34 ページ**。	30㎡	20H502

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
22	山階寺跡	山科区御陵中内町 2-1 他 7 筆	3/28・29	大部分が造成と既存建物解体に伴う撹乱。遺構・遺物は確認できず。	34㎡	21S435
23	四手井城跡	山科区厨子奥尾上 21-1 他 8 筆	3/9	GL-0.4 mで黄褐色砂礫に地山を検出。遺構・遺物なし。	47㎡	21S334
24	法性寺跡	東山区福稲上高松町 5- 2、5- 4	2/17	GL-0.62 mで弥生時代の遺物を含むオリーブ褐色泥砂、-0.82m で地山の黄褐色シルトを確認。顕著な遺構・遺物は確認できず。	17㎡	21S272
25	大宅廃寺、大宅遺跡、大宅廃寺境内瓦窯跡	山科区大宅鳥井脇町 6-1 ～大宅山田 6-1	2/1 ～ 4	GL-0.2 mで黄灰色泥砂、-0.3 mで近世造成土、-0.62 mで古代遺物包含層、-0.78 mで地山。**本文 45 ページ**。	86㎡	21S384

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
26	伏見城跡	伏見区桃山町正宗 39-6、36-42、51-4、51-5	2/24・25	大半が削平を受けていたが、一部で GL-0.5 mで浅橙色粘土ブロック混じりの橙色粘質土（伏見城期の整地土）、-0.6 mで明黄褐色砂質土（伏見城期の整地土）、-0.7 ～ -1.2 mで明赤褐色粘質土やにぶい橙色砂質土、浅黄橙色砂礫などの地山を確認。地山上面で柱穴 1 基を確認。	100㎡	21F485
27	法界寺旧境内	伏見区日野西大道町 9-1、10-1、11 の一部、82-1	1/17・18	GL-0.7 mで黄褐色粘質土の基盤層を確認、平安時代の溝、土坑などを確認。	128㎡	21S190

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
28	鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡	伏見区竹田田中殿町 95、103	2/28	鳥羽離宮跡に伴うと考えられる遺構を確認。**設計変更し遺跡は地中保存**。**本文 59 ページ**。	35㎡	21T640
29	鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡	伏見区中島鳥羽離宮町 4 の一部、5 の一部	3/22	GL-1.4 mで灰オリーブ色砂泥、-1.7 mで鉄分を含むオリーブ黄色微砂、-2.0 ～ -2.2 mで灰色粘土を確認。遺構・遺物は確認できず。	23㎡	21T536

長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
30	左京五条三坊十二町・六条三坊九町跡、六条大路跡	伏見区羽束師古川町 316、317	3/2	GL-1.47 mで中近世耕作土、-1.63 mで河川堆積、-1.78 mで地山。河川により遺構面は削平・消失。	37㎡	21NG434

【令和 4 年　4 ～ 12 月（令和 4 年度分）】

平安宮

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
31	左兵衛府、聚楽第跡	上京区大宮通出水下る家永町 762	4/22	GL-1.2 mで暗オリーブ褐色粘質土、-1.4 mで小礫混じり暗オリーブ褐色粘質土、-1.55 mでにぶい黄褐色シルトの地山を確認。大半が近現代の撹乱で削平される。	8㎡	22K029
32	主水司跡、二条城北遺跡	上京区竹屋町通千本東入主税町 1120 ほか 2 筆	5/18 ～ 20	GL-0.8 ～ -1.0 mで黄褐色泥砂の地山を確認し、地山直上で江戸時代の遺構を多数確認。**発掘調査を指導**。	140㎡	22K057
33	太政官跡、聚楽遺跡	上京区千本通二条下る東入主税町 1023	6/10	GL-0.5m で近世を遺物を含む暗褐色粘質土、-0.85m で地山の黄橙色砂礫・黄褐色シルト。顕著な遺構・遺物は確認できず。	12㎡	21K561
34	左馬寮跡	中京区西ノ京左馬寮町 1-4、1-15	11/14	GL-1.35 mで一部灰オリーブ色砂礫の地山。	10㎡	22K330

平安京左京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
35	北辺三坊八町跡、公家町遺跡	上京区京都御苑 3	12/15	GL-0.98 ～ -1.0 mで近世の整地土を確認。**遺構は地中保存される**。	2㎡	22H462
36	一条四坊十町跡、公家町遺跡、京都新城跡	上京区京都御苑 2 の一部	8/24 ～ 26	GL-0.1 mで大正天皇御大典の整地土 1 、-0.2 mで嘉永の大火（1854 年）によって焼失した御所の整地層 2 、-0.7 mで灰黄褐色泥砂、-0.86 mで鴨川洪水堆積層、-1.5 mで寛政 7 年整地層 4 、-1.6 mで京都新城の石垣検出面となる。**本文 4 ページ**。	54㎡	20H631
37	三条四坊八町、等持寺跡	中京区堺町通二条下る杉屋町 624、626、628、628-1	10/7	GL-1.5 mで近世初頭整地層、-1.8 mで中世整地層、-1.9 mで平安後期整地層、-2.1 mで平安中期整地層。**取扱い協議中**。	23㎡	22H300
38	四条一坊五町跡	中京区壬生坊城町 48-6、21-2、87	4/4・5	GL-0.5 mで灰色シルトの近世耕作土、-0.65 mでオリーブ色泥砂の地山。**発掘調査を指導**。	19㎡	21H694
39	四条四坊十六町跡、三条せと物や町跡	中京区麩屋町西入弁慶石町 37-1、2 ほか	9/9	GL-1.54 mで褐灰色シルト、-1.8 mで浅黄橙色シルト、-1.96 mで黄灰色シルトの地山。	48㎡	22H116

40	五条二坊十一町跡、烏丸綾小路遺跡	下京区吉水町地内	7/11・12/5	GL-0.65m で近現代整地土・焼土、-0.9m で近世～近代の整地土・河川堆積、-1.1m で近世初頭～前半の整地土・河川堆積、-1.7 ～ -2.5m で中世の整地土・河川堆積をそれぞれ確認。**本文 13 ページ**。	24㎡	21H075
41	五条四坊十五町（東京極大路）跡、寺町旧域	下京区寺町通綾小路下る中之町 585-1、585-2、574-3	6/2・3	GL-0.3m 以下で平安時代から桃山時代の遺構面を 5 面確認。**発掘調査を指導**。	62㎡	22H091
42	六条一坊二町跡	下京区中堂寺坊城町 62 ほか	4/28	近代整地土である黒色粘質土を挟み、GL-1.2 ～ -1.5 mで褐灰色粘質土及び褐色極細砂の地山に至る。遺構・遺物なし。	53㎡	22H037
43	六条四坊十五町跡	下京区寺町通五条上る西橋詰町 751 外	12/26	GL-1.48 mで鴨川の氾濫堆積層。顕著な遺構、遺物は確認できず。	16㎡	22H395
44	七条一坊十三町跡、東市跡	下京区御器屋町 30	7/25	GL-1.85 mでにぶい黄褐色砂礫の地山を確認。	5㎡	22H209
45	七条二坊十六町跡	下京区学林町 299、300、301	6/13	GL-0.4 mで鎌倉～室町時代の整地層である灰黄褐色粘質土、-0.62 mで黄灰色粘質シルト、-0.9 mで黄灰色細砂礫の地山。鎌倉～室町時代の整地層上面で室町時代と考えられる土坑を複数確認。**発掘調査を指導**。	29㎡	22H056
46	八条四坊八町跡	下京区七条通間之町東入材木町 473-1 の一部、475-2	4/27	GL-0.4 ～ -0.5 mで近代整地層、-0.8 ～ -2.05 mで洪水堆積層を確認。	38㎡	22H026
47	九条一坊九町跡、教王護国寺旧境内	南区八条通大宮西入八条町 438、439、439-1、439-2、439-5	7/21	GL ± 0 mで近代整地層、-1.0m で河川堆積を確認。**本文 24 ページ**。	34㎡	22H184
48	史跡教王護国寺境内、九条一坊十三町跡	南区九条町 1	12/5	GL-0.07 mで近代整地層を確認。	2㎡	4N055
49	九条二坊一町跡	南区西九条横町 23、28、29-1、39-2	6/29	GL-0.7 mで平安時代後期～中世遺構面、-0.9 mで平安時代遺構面を確認。敷地北辺では八条大路南側溝と推測される東西溝を複数検出。**発掘調査を指導**。	82㎡	22H142
50	九条二坊十三町跡、烏丸町遺跡	南区西九条春日町 7、5-1、5-2、4-1、9、10、11	5/30	GL-1.25m で旧耕作土、-1.75m で明黄褐色砂礫の氾濫堆積。	36㎡	22H009
51	九条二坊十三町跡、烏丸町遺跡	南区西九条春日町 7、5-1、5-2、4-1、9、10、11	5/31	GL-0.6m で黒褐色粘質土層の近世末～近代遺物包含層、-0.75m で黄灰色砂泥の中世遺物包含層、-1.3m で灰白色細砂、-1.5m で明黄褐色砂礫の地山を確認。	33㎡	22H051
52	九条二坊十三町跡、御土居跡、烏丸町遺跡	南区西九条春日町 1-1	12/12・13	GL-0.5 ～ -1.9 mで黄灰色細砂や砂礫の地山。地山上面で平安時代後期の落込みや柱穴を確認。**発掘調査を指導**。	103㎡	22H370
53	九条四坊七町跡、烏丸町遺跡	南区東九条西岩本町 39-4 ほか	7/13	GL-1.0m で小礫を含む灰白色細砂の洪水堆積層、以下洪水堆積層が続く。	23㎡	22H181
54	九条四坊九町跡	南区東九条東岩本町 15-3 ほか	9/5・6	GL-2.69 mで浅黄色砂礫。	42㎡	22H043

平安京右京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
55	三条一坊一・二・七・八町跡、壬生遺跡	中京区西ノ京星池町 230 ほか 6 筆	7/7・8	北東側は GL-0.75m で黄橙色砂礫の地山。一部では、地山直上で近代整地土、自然堆積を確認したが、盛土・撹乱の影響が著しい。南東側は GL-0.6 mで黄色シルトの近代整地土、GL-0.65m で灰オリーブ色シルトの地山。地山を切り込んで溝が形成されていることを確認。**発掘調査を指導**。	50㎡	22H010

56	三条四坊十一町跡	右京区山ノ内五反田町 17- 2、17- 3、17- 4、17- 5、17- 6	12/16	GL-1.65 ～ -1.94 mで黒褐色粘質土、-2.12 ～ -2.34 mで灰白色シルトや黄橙色砂礫の地山。遺構・遺物なし。	18㎡	22H365
57	四条一坊九町跡、壬生遺跡	中京区壬生神明町 1-4	12/2	GL-1.17m で耕作土の灰色シルト、その下の -1.29m 以下で地山を確認。顕著な遺構・遺物は確認できず。	11㎡	22H277
58	四条三坊九町跡、西ノ京遺跡	右京区西院金槌町 4-1、5-1、6-1、6-2	6/27	GL-1.72 mで灰オリーブ色粘土質シルトの地山を検出。一部では、地山直上に近世後期～近代の耕作土を確認。撹乱のため、顕著な遺構、遺物は確認できず。	50㎡	22H036
59	五条二坊八町跡、御土居跡、壬生遺跡	中京区壬生西土居ノ内町 12- 1	10/5	GL-0.2m で御土居盛土、-1.9 m以下西堀川を確認。	55㎡	22H283
60	六条三坊四町跡	右京区西院溝崎町 12-1 ほか	7/5	GL-1.42m でにぶい黄褐色シルトの地山を確認。**発掘調査を指導**。	34㎡	22H112
61	六条三坊六町跡	右京区西院西溝町 19-1 ほか	6/17・7/1・4	GL-0.9 mで中世遺構面、-1.0 mで古代遺構面を確認。**発掘調査を指導**。	196㎡	22H128
62	六条四坊十五町跡	右京区西京極葛野町 38	9/29	表層改良及び解体撹乱の直下、GL-1.9m で氾濫堆積層を確認。遺構・遺物は確認できず。	15㎡	22H135
63	七条一坊一町（朱雀大路跡）跡	下京区朱雀分木町 80 の一部	6/14・21	GL-0.55 ～ -0.6 mでにぶい黄橙色粘質シルトの地山、-0.7 ～ -0.8 mで灰黄褐色砂礫、以下、-1.6 mまで灰色細砂、明黄褐色細砂、灰黄色細砂を確認。	33㎡	22H068
64	七条二坊八町跡	下京区西石ヶ坪町 5 の一部、6-2 の一部	11/25	GL-0.7m で旧耕作土、-0.75m で褐色砂礫の氾濫堆積、-1.0m で灰黄褐色砂礫の氾濫堆積、-1.3m で黄灰色砂泥、-1.45m で褐灰色中砂、-1.6m で赤褐色砂礫の地山。	21㎡	22H327
65	七条三坊二町跡	下京区西七条八幡町 31・同区西七条名倉町 4-1	8/23	GL-0.65m で耕土・床土、-0.85m で地山のにぶい黄色砂泥。地山上面で溝３条、ピット１基を確認。	35㎡	22H203
66	八条一坊十六町跡	下京区西七条南東野町 47-1	5/16	GL-0.25 mのにぶい黄褐色シルトのベース上面で平安～鎌倉時代の土坑を３基確認。	24㎡	22H006
67	八条二坊五町跡	下京区梅小路西中町 28-1、28-2、28-3	10/6	GL-0.83 mで現代耕土（黒色シルト）、-1.03 mで床土（灰色シルト）、-1.20 mで黄褐色細砂、-1.34 mで黄灰色砂礫、-1.52 mで灰黄色砂礫。	14㎡	22H075
68	八条四坊四町跡	南区吉祥院向日東町 4	12/6	GL-0.9m で旧耕作土、-1.2m で床土、-1.3m で黄灰色泥砂、-1.45m で黄褐色粗砂混じり砂礫、明赤褐色砂礫の地山と思われる流れ堆積を確認。	31㎡	22H337
69	九条三坊九・十六町跡	南区吉祥院前河原町 7-1、2	7/26	GL-4.29 mまで盛土。	15㎡	22H100
70	九条三坊十六町跡	南区吉祥院前河原町 10 ほか	8/29	GL-0.9 mで時期不明耕作土、-1.1 mで整地層、-1.2 ～ -2.0 mまで黄褐色砂礫の河川堆積。	38㎡	22H050

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
71	史跡大覚寺御所跡、名勝大沢池附名古曽滝跡、嵯峨院跡	右京区嵯峨大沢町、北嵯峨八丈町、北嵯峨名古曽町	6/16・17	GL-0.1 mで天神島構築土を確認。	45㎡	3N087
72	観空寺跡	右京区嵯峨観空寺明水町 38	4/26	GL-0.2 mで明黄褐色粘質シルトの地山。近代以降の溝や土坑を確認。	32㎡	21S582
73	嵯峨遺跡	右京区嵯峨釈迦堂門前裏柳町 26-2、26-4、26-5、26-6	9/16	GL-0.3 mで暗灰黄色シルト～細砂、-0.35 mで灰色シルト、-0.4 mで灰黄褐色泥砂～明黄褐色砂泥の地山を確認。地山上面で室町時代の遺物を含む整地、-0.8 mで褐灰色泥砂の池状の堆積を確認。**発掘調査を指導**。	40㎡	22S126

74	嵯峨遺跡、清涼寺境内	右京区嵯峨釈迦堂藤ノ木町 29-2 の一部、29-3、29-4、29-5	10/17・11/7	2 区で東西方向に延びる溝状遺構 1 条、3 区で南北方向に延びる溝 2 条を確認。**本文 31 ページ**。	74㎡	22S285
75	嵯峨遺跡、嵯峨北堀町遺跡	右京区嵯峨中山町 37-4	6/9	GL-0.24m で近世の遺物を含むにぶい黒褐色砂質土、-0.6m で氾濫堆積。顕著な遺構・遺物は確認できず。	41㎡	21S753
76	史跡名勝 嵐山	右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 7-1、3	7/26	GL-1.3 mで近世の遺構面を確認。	5㎡	4N006
77	嵯峨野高田町遺跡	右京区嵯峨野南浦町 23-1、23-2	6/23・24	GL-0.2 mで褐灰色泥砂、-0.4 mでにぶい黄褐色泥砂、-0.6 mで鉄分を少量含む褐色砂泥、-0.9 mで暗灰黄色砂礫の地山を確認。褐色砂泥上面で古墳～平安時代の遺構を確認。**発掘調査を指導**。	62㎡	21S557

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
78	上京遺跡	上京区新町通今出川上る元新在家町 173-1 ほか 4 筆	7/28・29	GL-1.75 mで黒褐色細砂混じりシルトの江戸時代初期の整地層、-1.85 mで桃山時代の整地層、-1.9 mでオリーブ褐色砂泥の地山。**発掘調査を指導**。	86㎡	22S061

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
79	北白川廃寺、上終町遺跡	左京区北白川山田町 1-1	11/16	GL-0.4m で灰白色粗砂を確認。	16㎡	22S346
80	北白川廃寺、上終町遺跡	左京区北白川東瀬ノ内町 10-1	6/8	各調査区で盛土直下で遺構を確認。**発掘調査を指導**。	47㎡	22S107

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
81	六波羅政庁跡	東山区五条通建仁町西入五条橋東二丁目 1-1 ほか 2 筆	11/9	GL-1.0 ～ -2.3 mでにぶい黄褐色粗砂～砂礫の地山。江戸時代の土坑 3 基。	55㎡	22S241
82	六波羅政庁跡、音羽・五条坂窯跡	東山区建仁寺町五条下る一丁目東入芳野町 88 ほか	10/11 ～ 13	GL-1.8 mで窯跡を確認。敷地東側について**発掘調査を指導**。	107㎡	22S129
83	六波羅政庁跡	東山区大和大路通五条下る二丁目上梅屋町 189-9	6/6	GL-1.23m でレンガやガラスを含む近現代の灰色砂礫、-2.12m で室町時代の遺物片を含むオリーブ黒色砂礫、-2.66m でオリーブ黄色粘土・砂礫の地山。顕著な遺構・遺物は確認できず。	10㎡	22S118
84	六波羅政庁跡、法住寺殿跡	東山区大和大路通正面下大和大路 1 丁目 530、531、532-5、532-6、533-3・同区茶屋町 26-1、526-2	11/28	「六波羅政庁跡」及び「法住寺殿跡」に関わる遺構・遺物を部分的に確認。**発掘調査を指導**。	106㎡	22S446
85	芝町遺跡	山科区髭茶屋屋敷町 14-1、15-1	8/19	GL-1.0 mで明黄褐色砂礫の地山。	22㎡	22S229
86	大塚遺跡	山科区大塚野溝町 59	8/17	GL-1.1 mで褐灰色粗砂礫混じりの地山。顕著な遺構・遺物は確認できず。	3㎡	22S216

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
87	伏見城跡	伏見区桃山町島津 76 ほか 4 筆	8/1 ～ 9	GL-0.3 ～ -0.6m で造成土及び地山と思われる層序を確認。**発掘調査を指導**。	213㎡	22F219

88	伏見城跡	伏見区桃山福島大夫南町 89、98	5/6	GL-0.5 ～ -0.6 mにて伏見城期の造成土。造成土上面で土坑、溝を確認。	66㎡	21F607
89	伏見城跡	伏見区御堂前町 616-1 ほか	5/9 ～ 12・7/4 ～ 13	GL-0.25 ～ -0.35 mで砂もしくは土取り土坑を確認。**本文 52 ページ**。	251㎡	21F494

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
90	鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡	伏見区竹田西内畑町 61-1	6/7	GL-0.2m で現代造成土、-0.55m で耕作土のオリーブ黒色シルト。**遺構を地中保存**。	10㎡	22T110
91	下鳥羽遺跡	伏見区下鳥羽西芹川町 41-1	12/19 ～ 22	GL-1.42m で弥生～古墳時代の遺構面を確認。**取扱い協議中**。	33㎡	22S303
92	下鳥羽遺跡	伏見区下鳥羽北ノ口町 47、48、49	11/17・18	GL-0.25 mで黒褐色シルト、-0.35 mで黒褐色泥砂、-0.55 mで褐色粘質土の地山。地山上面で古墳時代の遺構を確認。**取扱い協議中**。	96㎡	22S403

長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
93	左京一坊四坊四町跡、東土川遺跡	南区久世東土川町 350-10	12/7・8	旧耕作土・床土、包含層、GL-0.85 ～ -1.0mでマンガン斑を含む明黄褐色粘質土の基盤層。基盤層上面で遺構が良好に遺存。**発掘調査を指導**。	84㎡	22NG179
94	左京三条四坊五・六町跡	伏見区久我西出町 13-12、13-268、13-167、13-169	4/6	GL-1.2m で長岡京期の溝跡を確認。**遺構を地中保存**。	65㎡	21NG635
95	左京四条三坊三・四・五・六町跡	伏見区羽束師菱川町 148 の一部、149-1、154、155-2	5/25・26	GL-0.25 mで中世耕作層、-0.4 mで中世以前の洪水砂、-1.2 mで弥生時代対応層、-1.4 mで灰色粘土質シルトの地山を確認。長岡京期遺構面は、氾濫堆積により大きく削平される。遺構・遺物は確認できず。	95㎡	22NG089
96	左京四条三坊九町跡	伏見区羽束師菱川町 485-1	7/22	GL-0.78 mで灰色泥砂の旧耕作土、-0.94mで湿地堆積、-1.54m で氾濫堆積を確認。	20㎡	22NG185
97	左京四条三坊十五町跡	伏見区羽束師菱川町 545 ほか	10/24 ～ 31	長岡京期の条坊側溝を確認。**発掘調査を指導**。**本文 64 ページ**。	221㎡	22NG384
98	左京四条四坊七町跡	伏見区羽束師菱川町 624- 1 、624- 2 、625- 1	11/10・12/9	GL-0.2m で耕作土、-0.45m で黄灰色シルト～粘土、-0.75m で黄褐色シルト（鉄分多く含む）、-0.85m で黄灰色粘土の基盤層。基盤層上面で遺構を確認。**取扱い協議中**。	34㎡	22NG088

南桂川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
99	史跡・特別名勝西芳寺庭園	西京区松尾神ケ谷町 56	5/23 ～ 6/3	GL-0.2 mで江戸時代の溝、-1.15 mで室町時代の溝を確認。**本文 67 ページ**。	7㎡	4N007
100	史跡名勝 嵐山	西京区嵐山中尾下町 32-5	10/17	解体撹乱により、顕著な遺構・遺物なし。	3㎡	4 N033
101	史跡名勝 嵐山	西京区嵐山森ノ前町 30-1、30-2、30-5	10/4	顕著な遺構・遺物なし。	15㎡	4 N028
102	上久世遺跡	南区久世上久世町 140-1 の一部、140-2	6/16	解体撹乱の下、GL-0.4 ～ -0.5 mで古墳時代の土師器細片を含む灰黄褐色砂質シルト（ベースか）、-0.5 ～ -1.7 mでにぶい黄橙色砂質土などの河川堆積を確認。遺構は確認できず。	40㎡	21S580
103	中久世遺跡、大藪遺跡	南区久世殿城町 481-1	6/20	GL-0.7 mでオリーブ褐色砂礫、-1.3 mで灰色粘土、-1.4 mで灰色粘土を確認。	7㎡	22S137
104	中久世遺跡	南区久世大藪町 51	12/1	GL-0.25m で中世耕作土の灰黄褐色シルト、-0.4m で無遺物層の明黄褐色シルト。中世以降の遺構を少数確認。	35㎡	22S314

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしないいせきしくつちょうさほうこく　れいわよねんど
書名	京都市内遺跡試掘調査報告　令和４年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・赤松佳奈・黒須亜希子 清水早織・松本千裕・佐藤拓・八軒かほり・上茶谷美保
編集機関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所在地	〒604-8571　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地
発行年月日	西暦2023年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
へいあんきょうさきょういちじょう 平安京左京一条 しぼうじゅっちょうあと 四坊十町跡、 くげまちいせき 公家町遺跡、 きょうとしんじょうあと 京都新城跡	きょうとしかみぎょうくきょうとぎょえん 京都市上京区京都御苑２の一部	26100	1 241 249	35度 01分 16秒	135度 45分 52秒	2022/8/24～26	54㎡	埋設管
へいあんきょうさきょうごじょう 平安京左京五条 にぼうじゅういっちょうあと 二坊十一町跡、 からすまあやのこうじいせき 烏丸綾小路遺跡	きょうとししもぎょうくよしみずちょうちない 京都市下京区吉水町地内	26100	1 712	35度 00分 02秒	135度 45分 07秒	2022/7/11・ 12/5	24㎡	下水道工事
へいあんきょうさきょうしちじょう 平安京左京七条 さんぼうはっちょうあと 三坊八町跡	きょうとししもぎょうくやおやちょう 京都市下京区八百屋町264他	26100	1	34度 59分 36秒	135度 45分 28秒	2022/1/4 ・5	77㎡	店舗
へいあんきょうさきょうくじょう 平安京左京九条 いちぼうきゅうちょうあと、きょう 一坊九町跡、教 おうごこくじきゅういだい 王護国寺旧境内	きょうとしみなみくはちじょうどおりおおみやにしいるはちじょうちょう 京都市南区八条通大宮西入八条町438他	26100	1 758	34度 59分 03秒	135度 44分 47秒	2022/7/21	34㎡	研修 センター

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京一条 四坊十町跡、 公家町遺跡、 京都新城跡	都城跡 邸宅跡 平城跡	江戸～ 安土桃山時代	土坑・石垣	陶磁器・瓦	京都新城跡の堀跡を確認。
平安京左京五条 二坊十一町跡、 烏丸綾小路遺跡	都城跡 集落跡	中世～近代	路面整地土 河川堆積	土師器・陶磁器	堀川通の路面整地土を確認。
平安京左京七条 三坊八町跡	都城跡	平安時代～ 江戸時代	溝・ピット 土坑・落込み	土師器・須恵器 瓦器・陶磁器 瓦	室町小路西側溝と内溝を確認。
平安京左京九条 一坊九町跡、教 王護国寺旧境内	都城跡 寺院跡	平安時代	溝		八条大路南側溝の可能性のある溝を確認。

報　告　書　抄　録

ふりがな	きょうとしないいせきしくつちょうさほうこく　れいわよねんど
書名	京都市内遺跡試掘調査報告　令和４年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・赤松佳奈・黒須亜希子 清水早織・松本千裕・佐藤拓・八軒かほり・上茶谷美保
編集機関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所在地	〒604-8571　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地
発行年月日	西暦2023年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
円宗寺跡（えんしゅうじあと）	京都市右京区御室小松野町18他（きょうとしうきょうくおむろこまつのちょう）	26100	892	35度01分35秒	135度42分55秒	2022/3/15	54㎡	宅地造成
嵯峨遺跡、清涼寺境内（さがいせき、せいりょうじけいだい）	京都市右京区嵯峨釈迦堂藤ノ木町29-2の一部他（きょうとしうきょうくさがしゃかどうふじのきちょう）	26100	937 860	35度01分25秒	135度42分55秒	2022/10/17 11/7	74㎡	高齢者施設
寺町旧域、公家町遺跡（てらまちきゅういき、くげまちいせき）	京都市中京区関東屋町他（きょうとしなかぎょうくかんとうやちょうほか）	26100	170 241	35度01分10秒	135度46分02秒	2021/9/3～6 2022/1/24～31	53㎡	水道工事
大宅廃寺、大宅廃寺境内瓦窯跡、大宅遺跡（おおやけはいじ、おおやけはいじけいだいかわらがまあと、おおやけいせき）	京都市山科区大宅鳥井脇町6-1他（きょうとしやましなくおおおやけとりいわきちょう）	26100	633 633-1 635	34度58分06秒	135度49分19秒	2022/2/1～4	86㎡	道路

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
円宗寺跡	寺院跡	平安時代前期	土坑・整地層	土師器・軒丸瓦・丸瓦・平瓦	円宗寺期の遺構・遺物を検出。
嵯峨遺跡、清涼寺境内	寺院跡	平安時代 室町時代	溝	土師器	
寺町旧域、公家町遺跡、	寺院跡 邸宅跡	室町時代 安土桃山時代 江戸時代	集石土坑 石組溝	土師器・瓦器	
大宅廃寺、大宅廃寺境内瓦窯跡、大宅遺跡	寺院跡 窯跡 散布地	白鳳時代 奈良時代	遺物包含層 土坑	瓦類	

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしないいせきしくつちょうさほうこく　れいわよねんど
書名	京都市内遺跡試掘調査報告　令和４年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・赤松佳奈・黒須亜希子 清水早織・松本千裕・佐藤拓・八軒かほり・上茶谷美保
編集機関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所在地	〒604-8571　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地
発行年月日	西暦2023年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ふしみじょうあと 伏見城跡	きょうとしふしみくみどうまえちょう 京都市伏見区御堂前町616-1他	26100	1172	34度 55分 56秒	135度 45分 45秒	2022/5/9 ～12・7/4 ～13	251㎡	店舗兼 住宅
とばりきゅうあと、とばいせき 鳥羽離宮跡、 鳥羽遺跡	きょうとしふしみくみたけだたなかどのちょう 京都市伏見区竹田 田中殿町95他	26100	1166 1167-1	34度 57分 13秒	135度 44分 57秒	2022/2/28	35㎡	事務所
ながおかきょうさきょうしじょうさんぼうじゅうごちょうあと 長岡京左京四条 三坊十五町跡	きょうとしふしみくはづかしひしかわちょう 京都市伏見区羽束師 菱川町545他	26100	3	34度 56分 00秒	135度 43分 00秒	2022/10/24 ～31	221㎡	宅地造成
しせき・とくべつめいしょうさいほうじていえん 史跡・特別名勝 西芳寺庭園	きょうとしにしきょうくまつおかみがたにちょう 京都市西京区松尾 神ケ谷町56	26100	A952	34度 59分 31秒	135度 41分 01秒	2022/5/23 ～6/3	7㎡	範囲確認

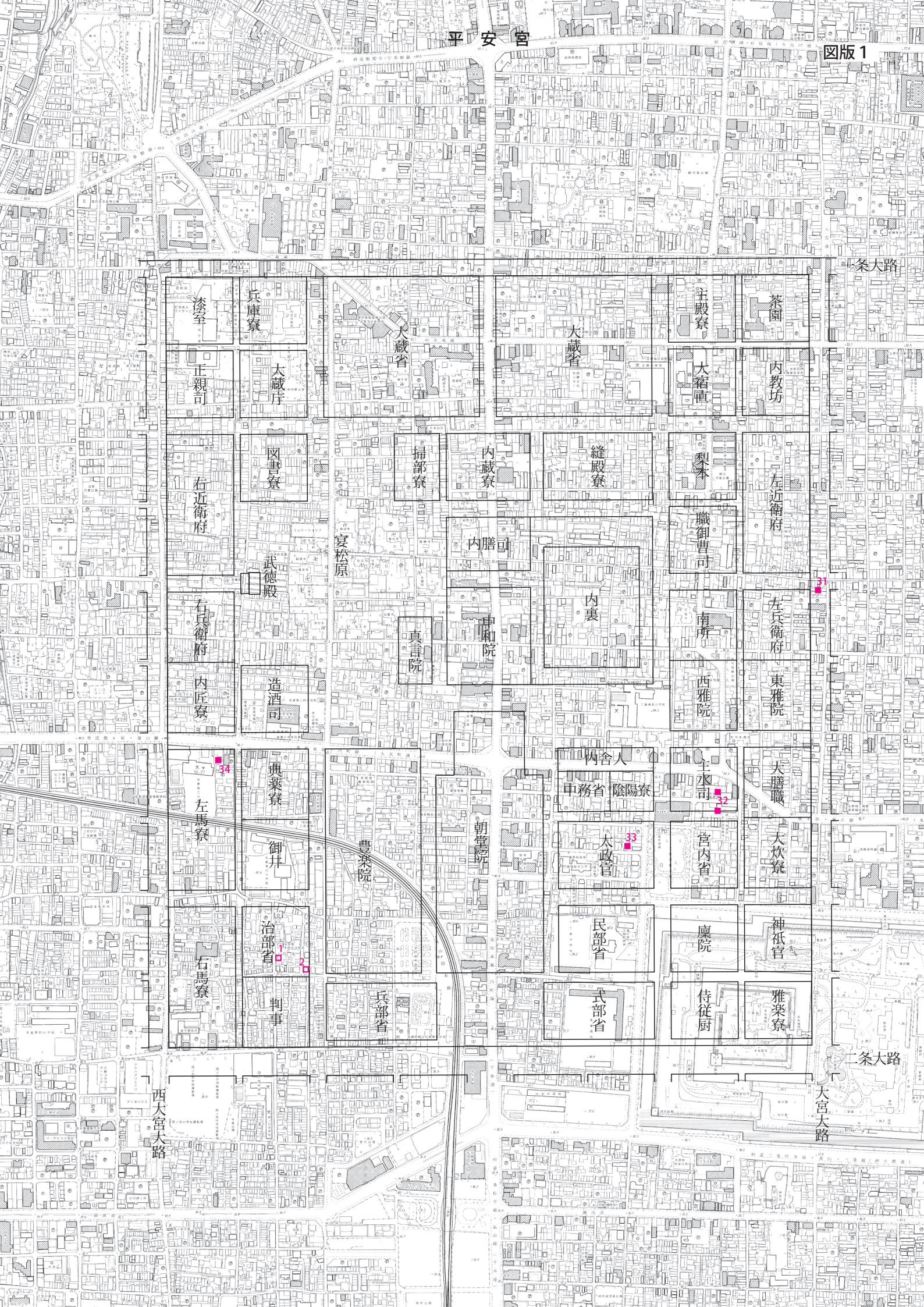
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伏見城跡	平城跡	江戸時代	土坑	土師器・陶磁器・瓦	土取土坑
鳥羽離宮跡、 鳥羽遺跡	離宮跡 集落跡	平安時代	溝 盛土遺構 落込み	瓦	溝及び盛土遺構は昭和56年の調査で確認した道路の延長部の可能性がある。
長岡京左京四条 三坊十五町跡	都城跡	長岡京期	溝（条坊側溝）		一部、発掘調査。
史跡・特別名勝 西芳寺庭園	史跡 特別名勝	室町時代	溝・泉 園池	土師器・須恵器 焼締陶器	

図　　版

凡　例

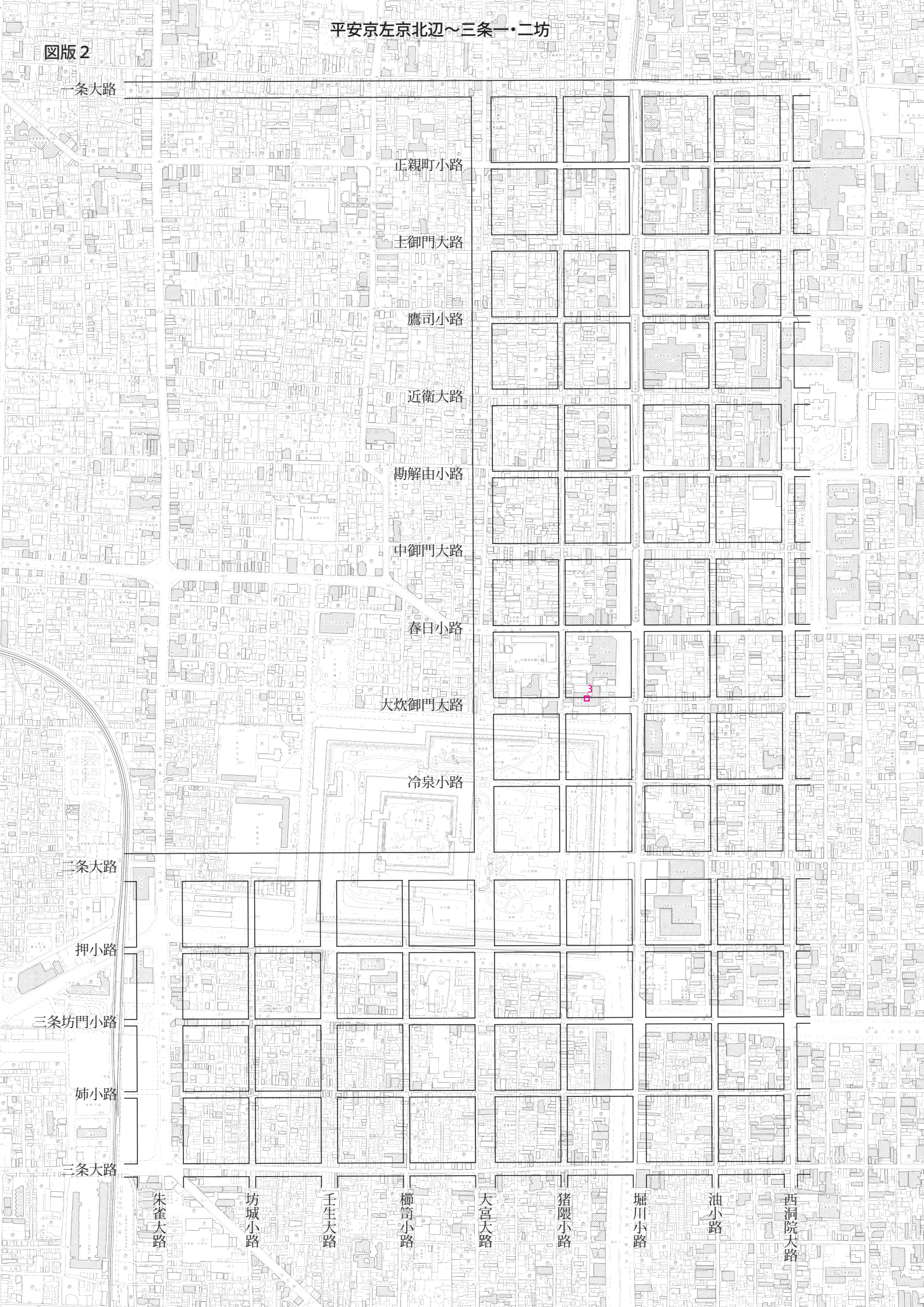
□　令和４年１～３月 (令和３年度）試掘調査地点

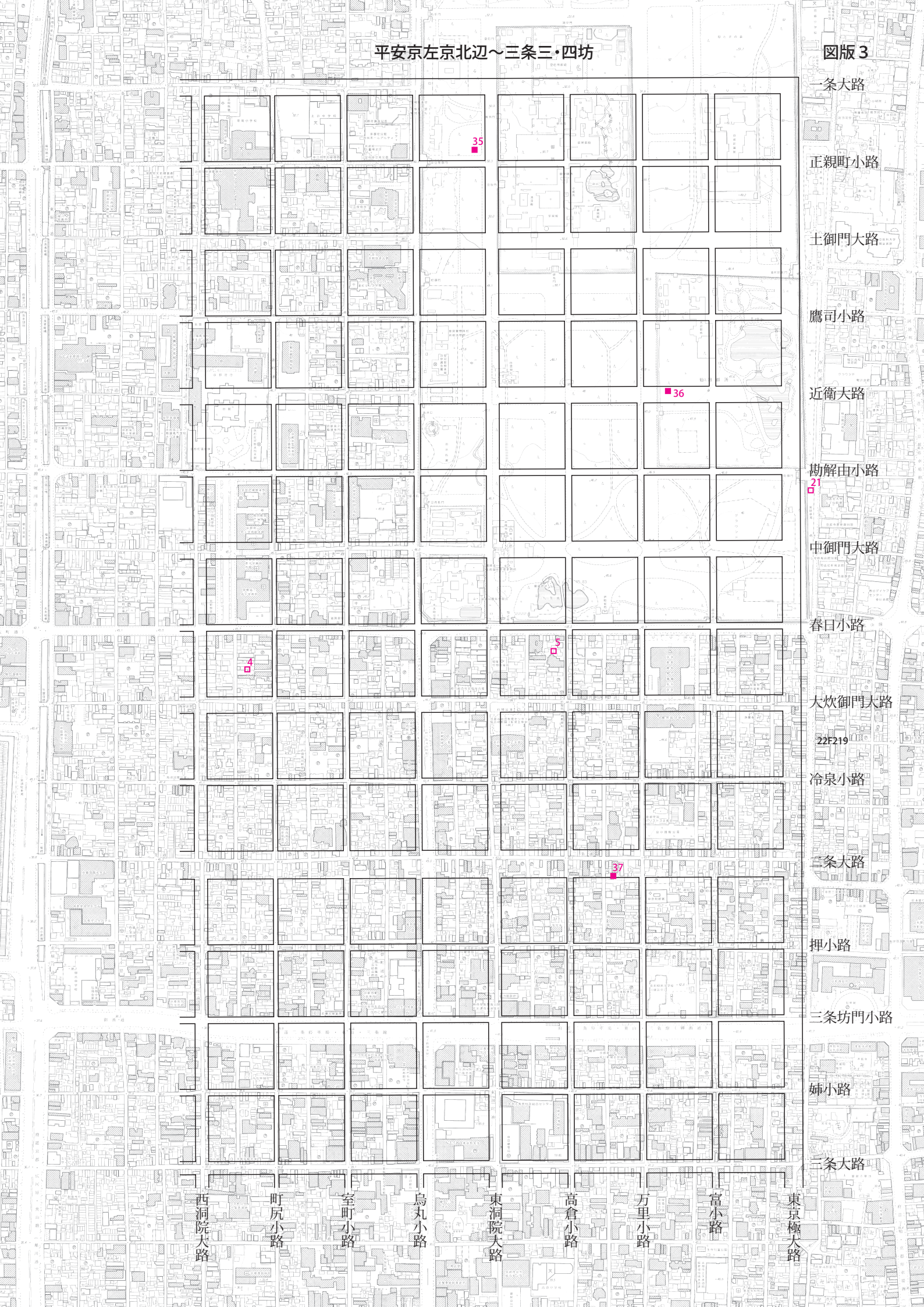
■　令和４年４～１２月（令和４年度）試掘調査地点


図版1
平安宮
一条大路
二条大路
大宮大路
西大宮大路
漆室
兵庫寮
正親司
大蔵庁
大蔵省
図書寮
右近衛府
武徳殿
右兵衛府
内匠寮
造酒司
掃部寮
内蔵寮
内膳司
宴松原
真言院
中和院
縫殿寮
内裏
主殿寮
大宿直
茶園
内教坊
梨本
左近衛府
職御曹司
南所
左兵衛府
西雅院
東雅院
内舎人
中務省
陰陽寮
主水司
大膳職
太政官
宮内省
大炊寮
民部省
治部省
判事
兵部省
式部省
豊楽院
朝堂院
御井
左馬寮
右馬寮
典薬寮
廩院
侍従厨
雅楽寮
神祇官
1
2
31
32
33
34

平安京左京北辺～三条一・二坊

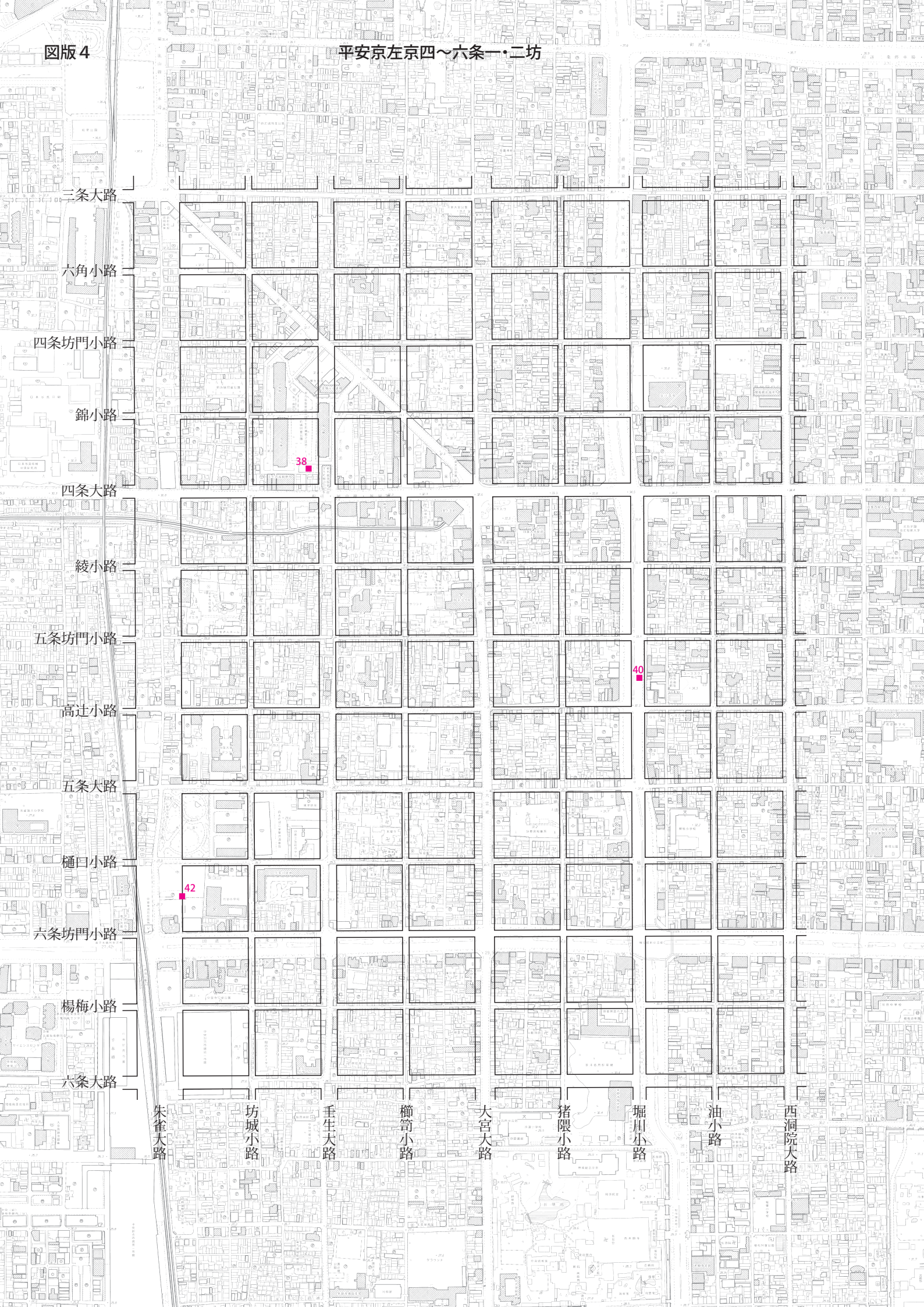
図版２



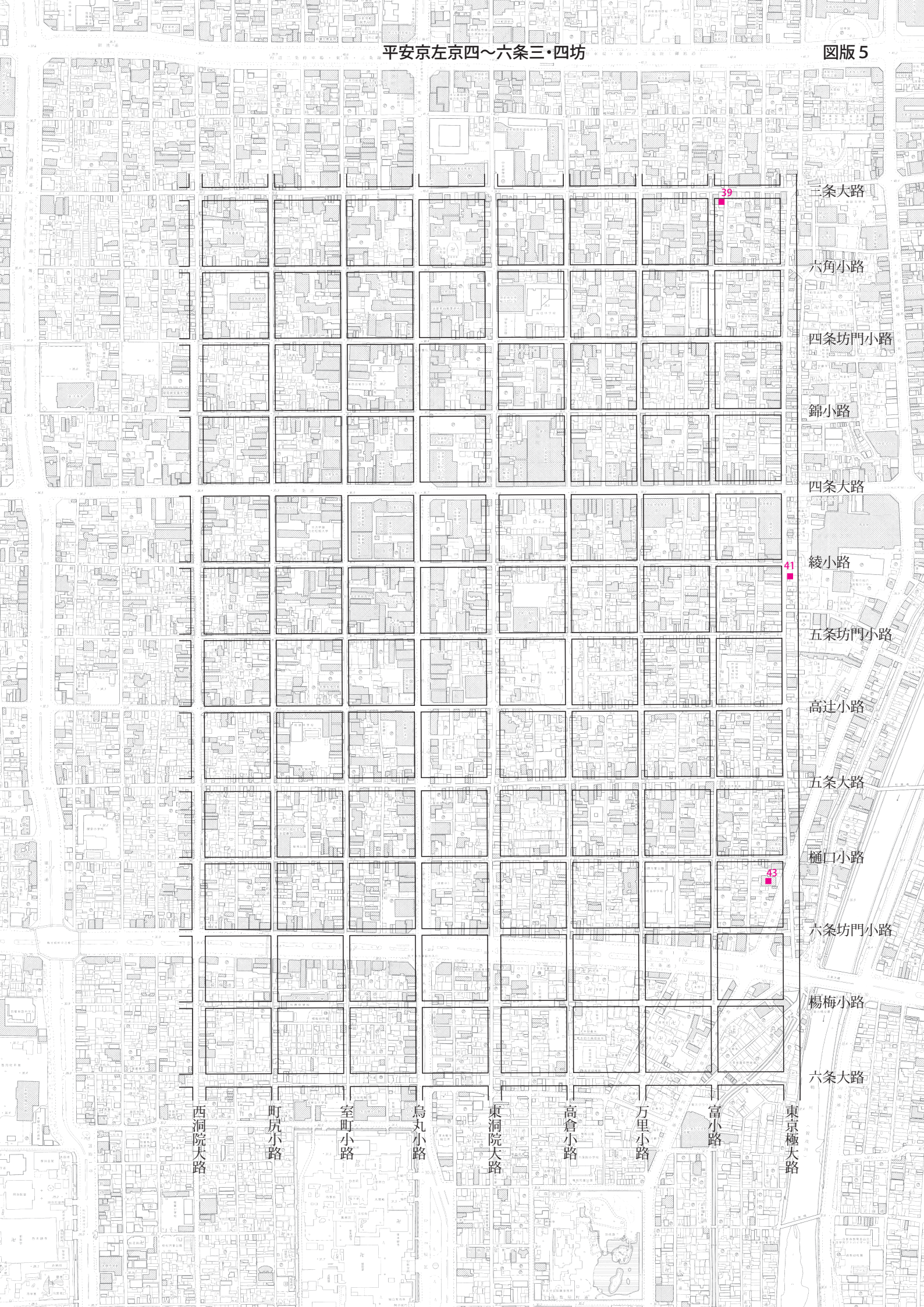

平安京左京北辺～三条三・四坊
図版３
一条大路
正親町小路
土御門大路
鷹司小路
近衛大路
勘解由小路
中御門大路
春日小路
大炊御門大路
冷泉小路
三条大路
押小路
三条坊門小路
姉小路
三条大路
西洞院大路
町尻小路
室町小路
烏丸小路
東洞院大路
高倉小路
万里小路
富小路
東京極大路
35
36
21
4
5
37
22F219

図版４

平安京左京四～六条一・二坊

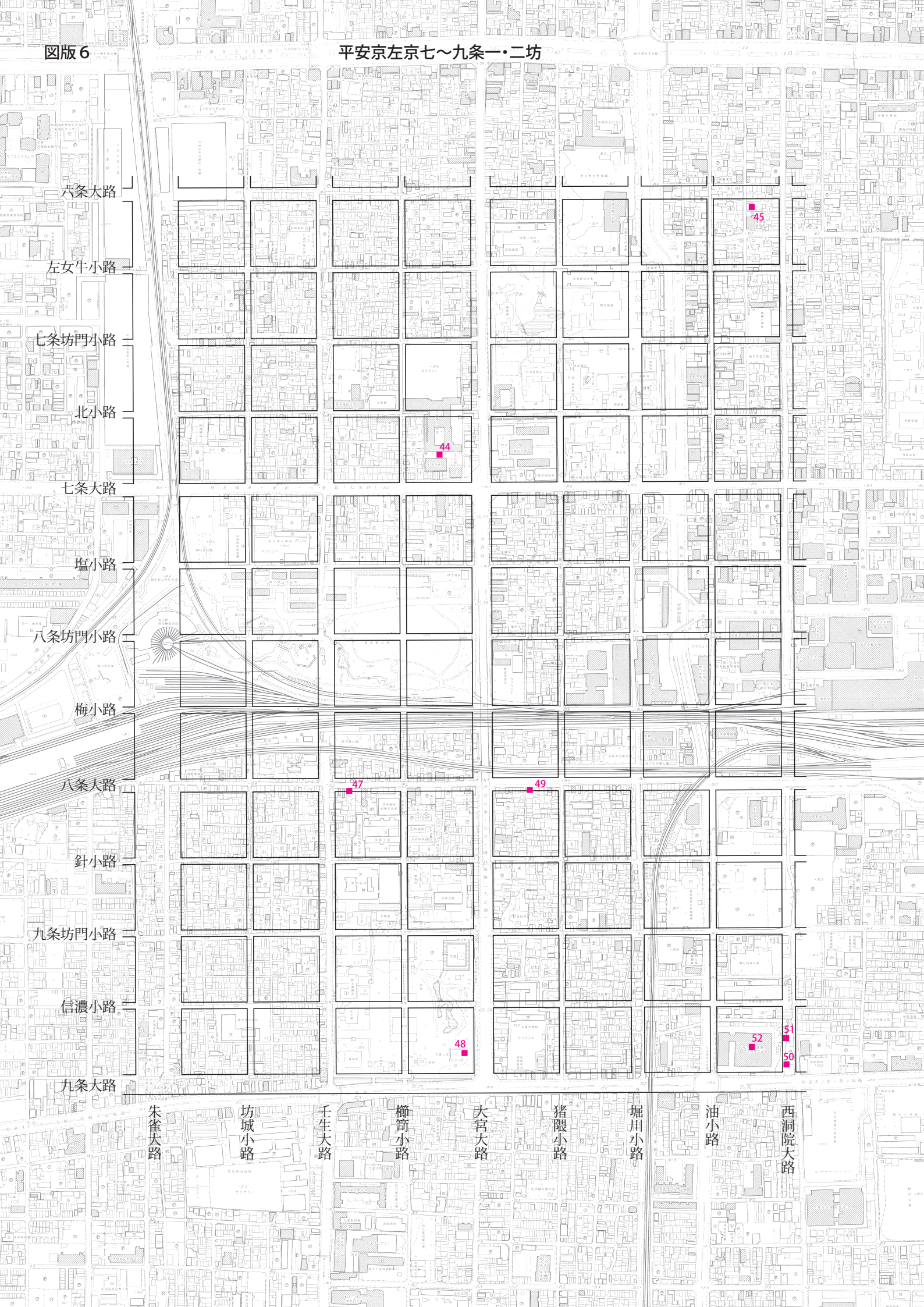


平安京左京四～六条三・四坊



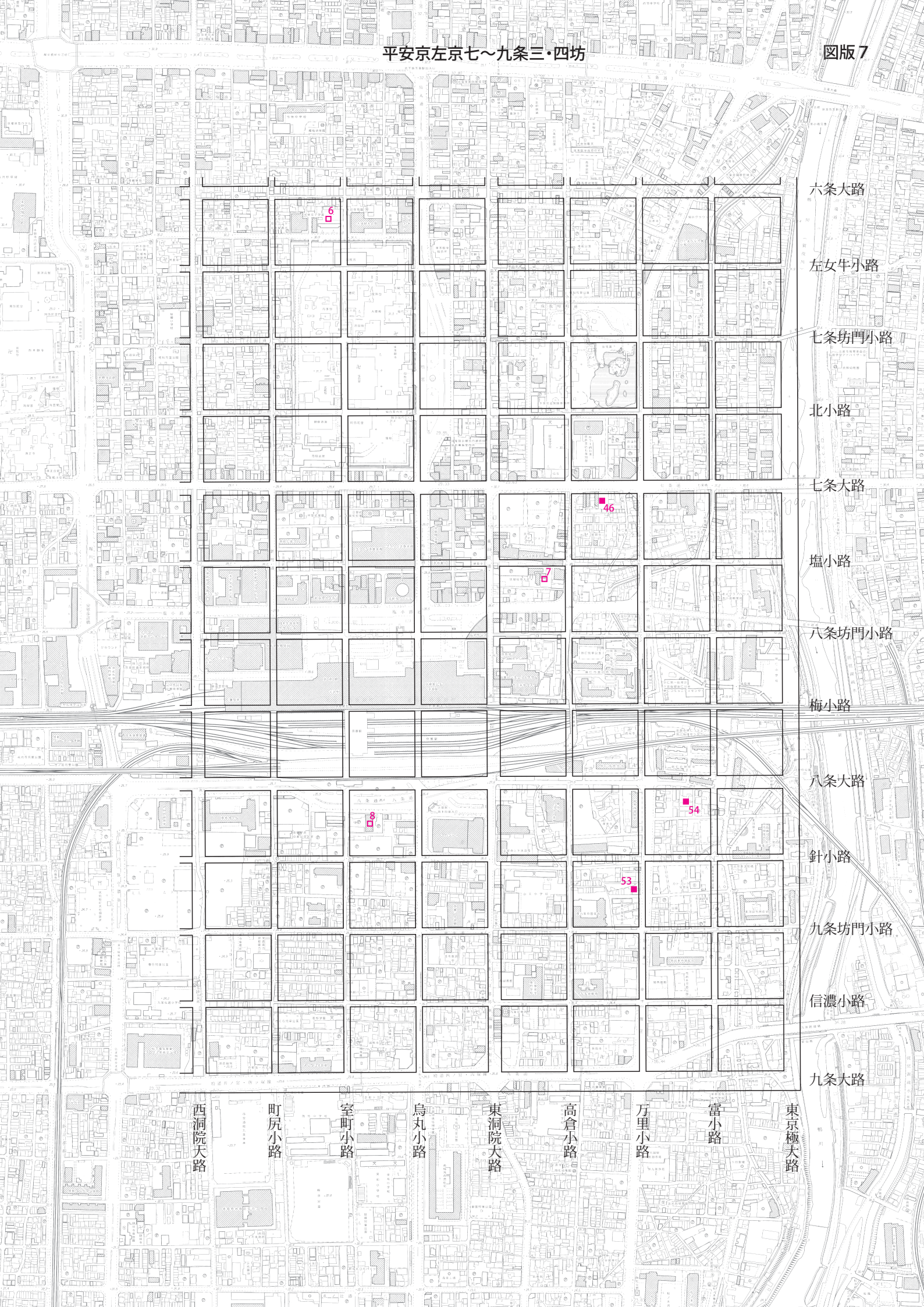
図版６

平安京左京七～九条一・二坊



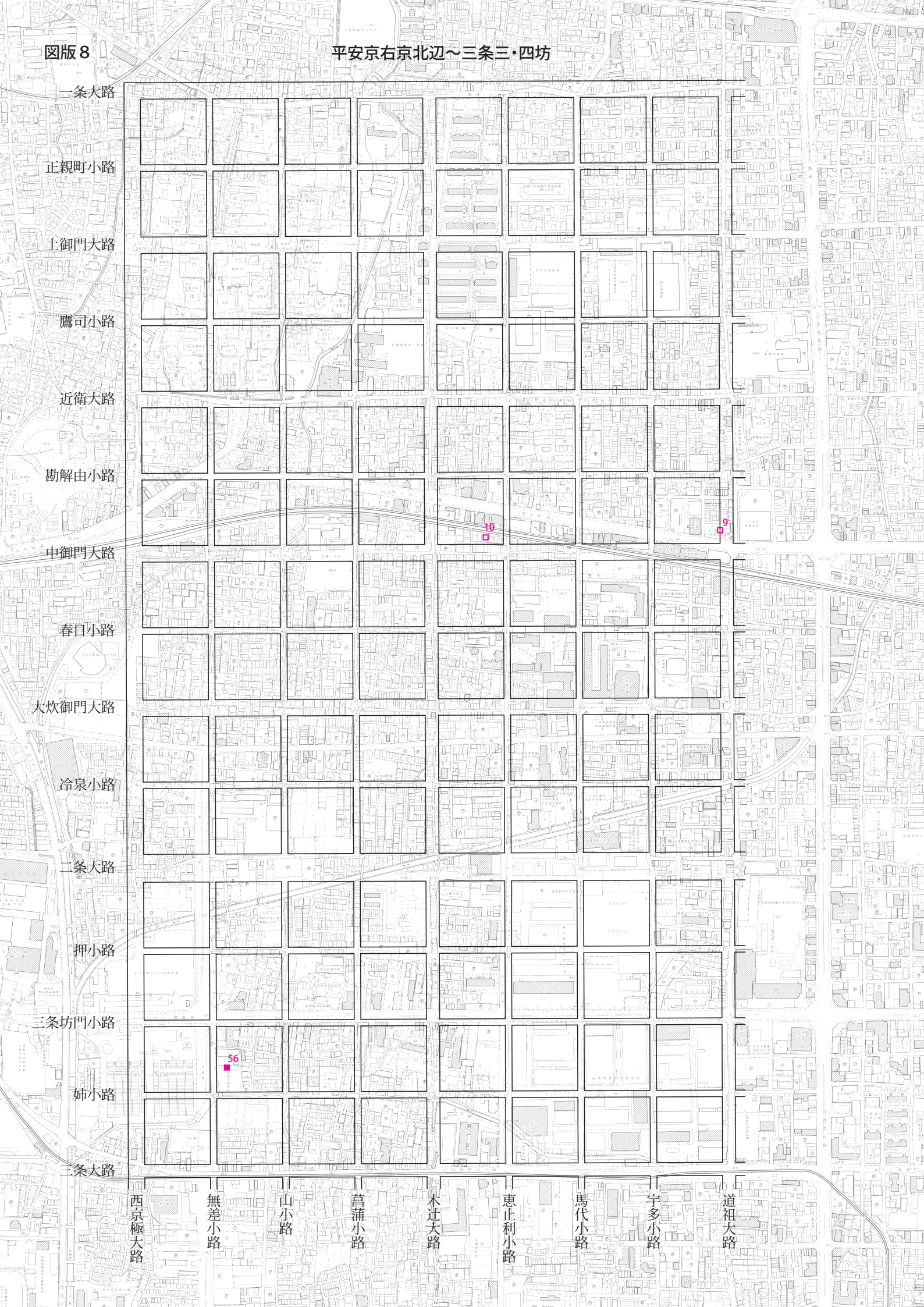
平安京左京七～九条三・四坊

図版7



図版８

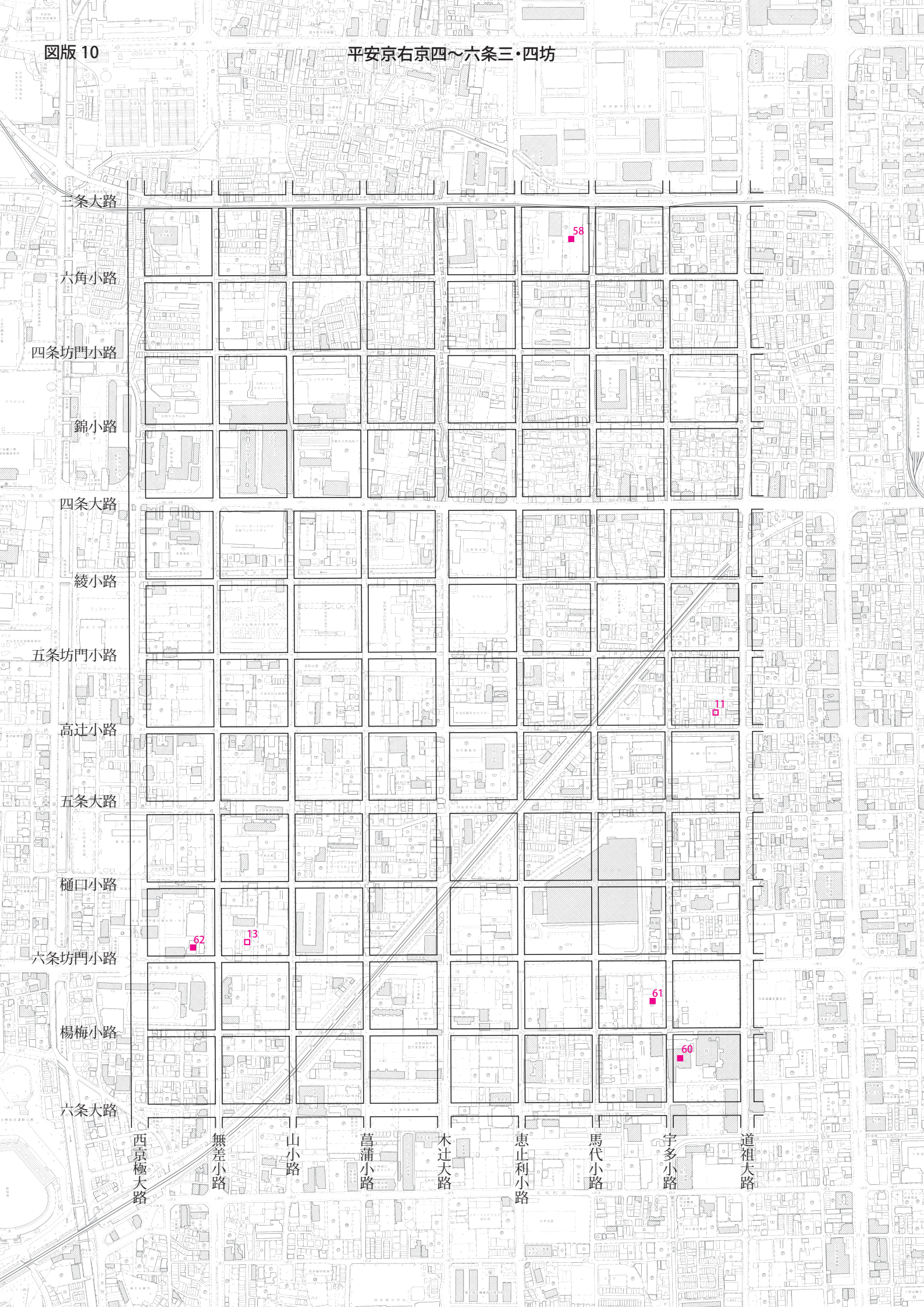
平安京右京北辺〜三条三・四坊



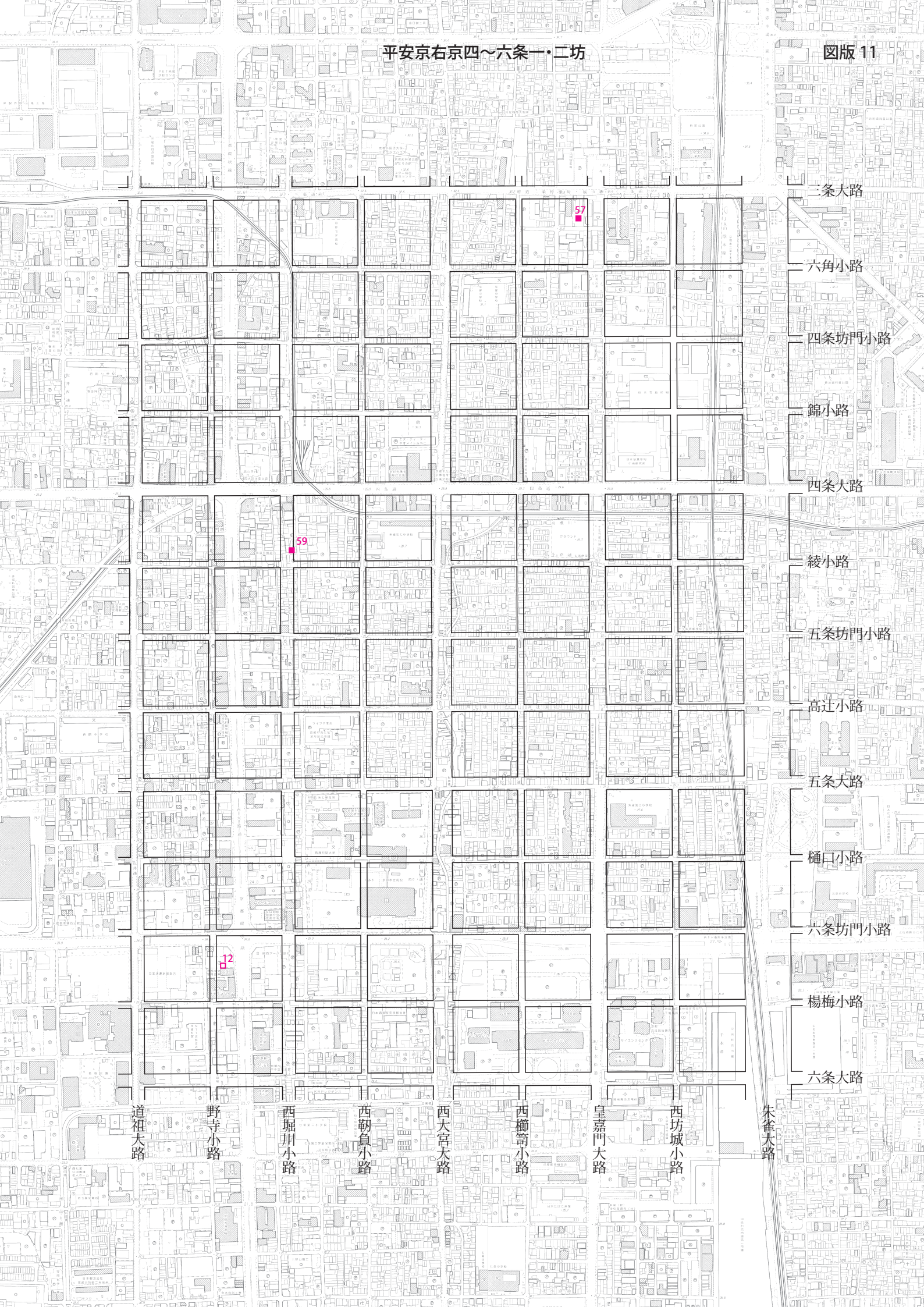

平安京右京北辺～三条一・二坊
図版９
一条大路
正親町小路
土御門大路
鷹司小路
近衛大路
勘解由小路
中御門大路
春目小路
太炊御門大路
冷泉小路
二条大路
押小路
三条坊門小路
姉小路
二条大路
55
道祖大路
野寺小路
西堀川小路
西靭負小路
西大宮大路
西櫛笥小路
皇嘉門大路
西坊城小路
朱雀大路

図版 10

平安京右京四~六条三・四坊

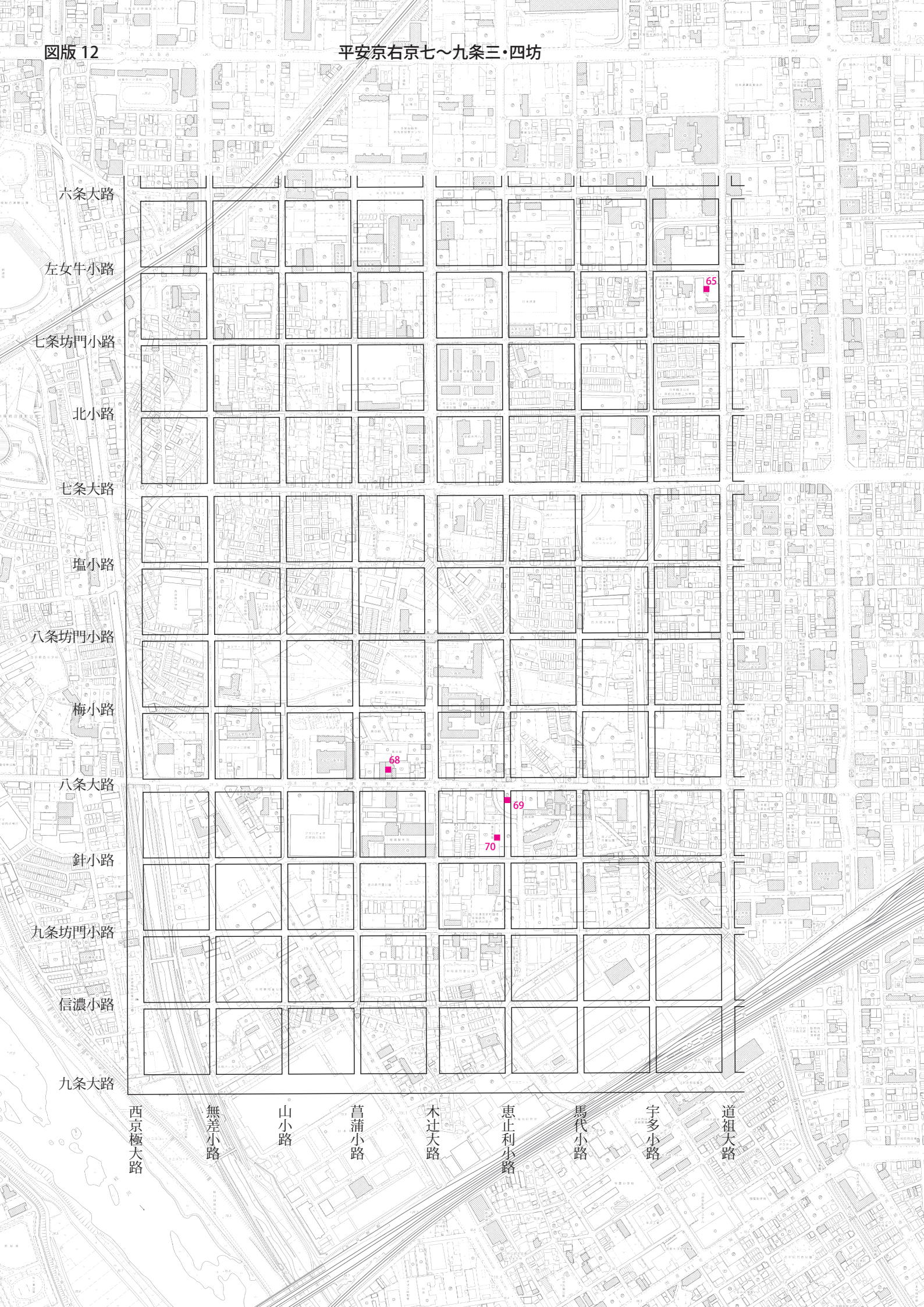


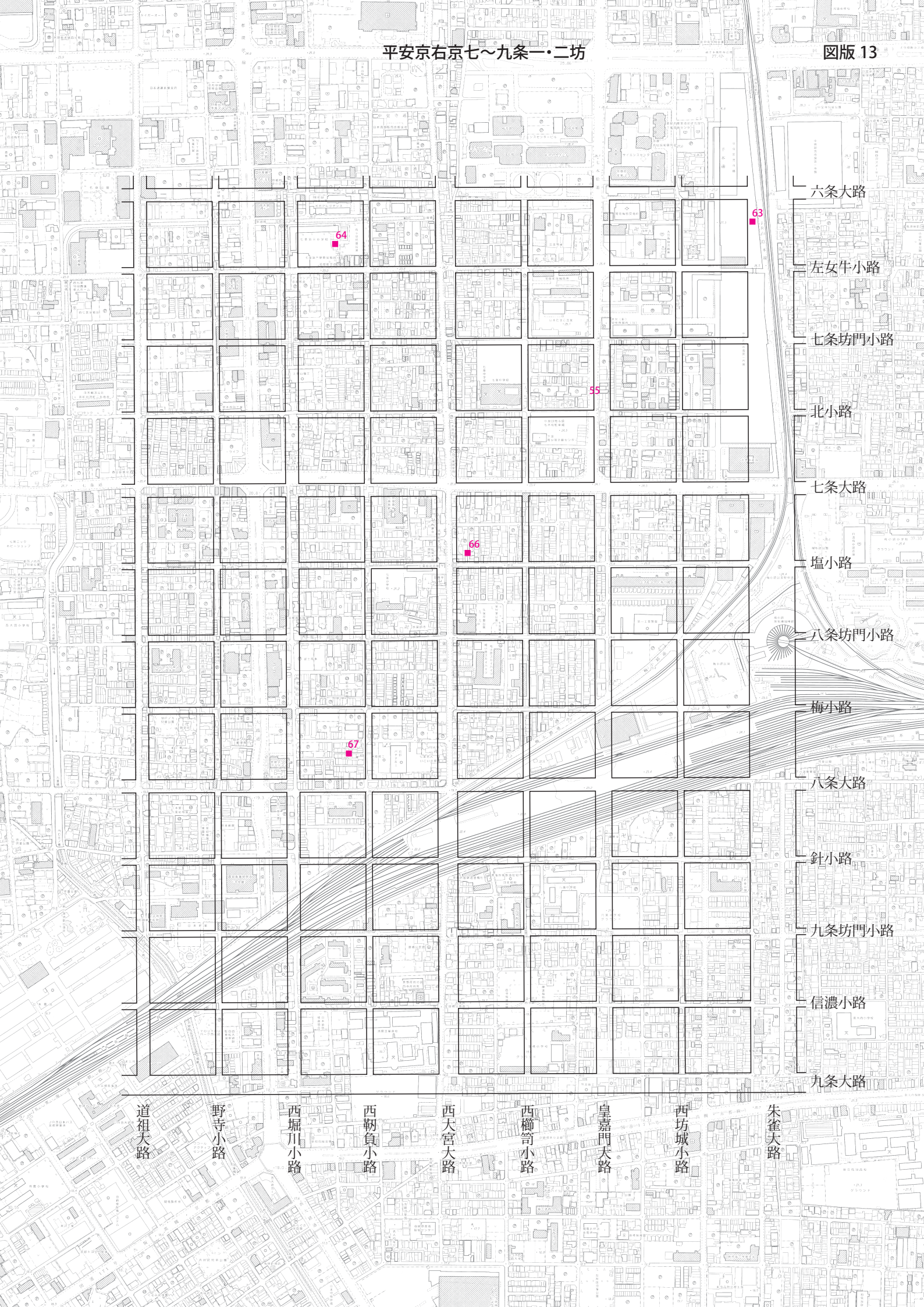
平安京右京四～六条一・二坊



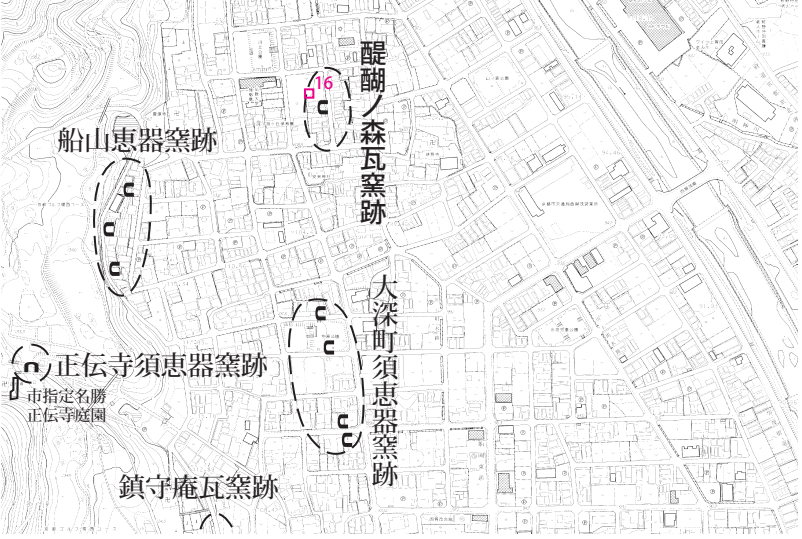
図版 12

平安京右京七〜九条三・四坊

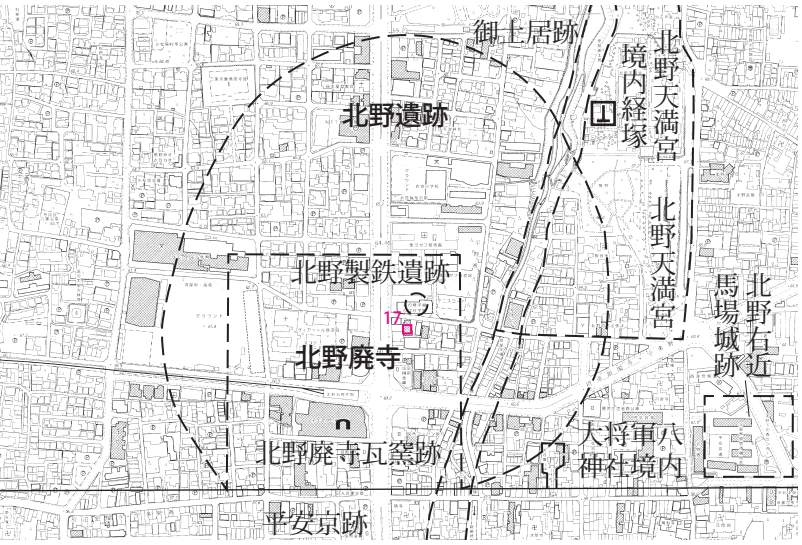


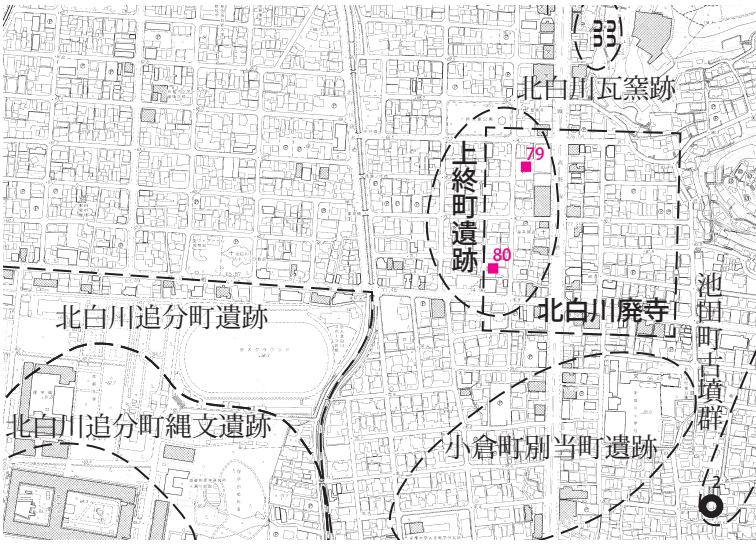

六条大路
左女牛小路
七条坊門小路
北小路
七条大路
塩小路
八条坊門小路
梅小路
八条大路
針小路
九条坊門小路
信濃小路
九条大路
63
64
55
66
67
道祖大路
野寺小路
西堀川小路
西靭負小路
西大宮大路
西櫛笥小路
皇嘉門大路
西坊城小路
朱雀大路

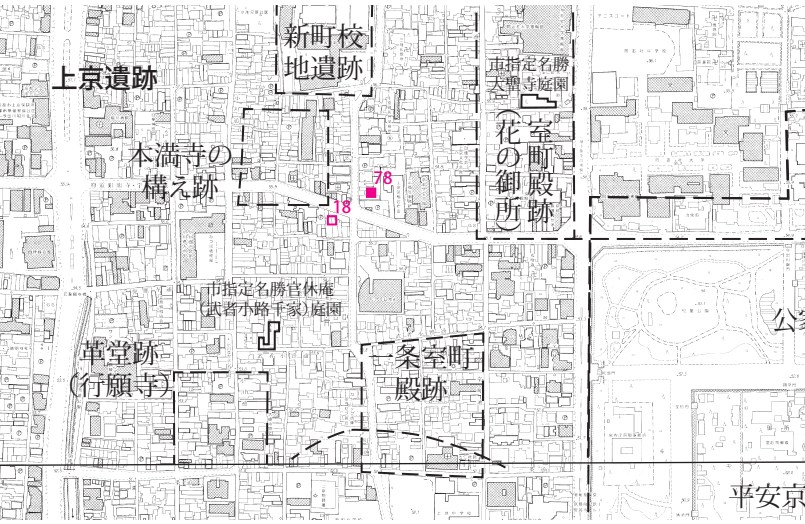

図版 14
観空寺跡
嵯峨院跡
史跡 大覚寺 御所跡
名勝 大沢池附 名古曽滝跡
北嵯峨 洞ノ内町遺跡
嵯峨七ツ塚
広沢西裏遺跡
遍照寺跡
長刀坂古墳群
山越古墳群
一本木古墳
大覚寺古墳群
清涼寺境内
広沢古墳群
遍照寺古墳
稲荷古墳
南野古墳群
阿刀神社
嵯峨折戸町遺跡
甲塚古墳
嵯峨遺跡
檀林寺跡
宝幢寺境内
御所ノ内町遺跡
市指定名勝 鹿王院庭園
史跡・特別名勝天龍寺庭園
臨川寺境内
嵯峨北堀町遺跡
嵯峨遺跡
西野町遺跡
史跡・名勝嵐山
蔵王神社 城跡
法輪寺境内
史跡・名勝嵐山
嵐山谷ヶ辻子町遺跡
嵯峨野高田町遺跡
松尾山古墳群
梅津犂原町遺跡
71
72
73
74
75
76
77
100
101

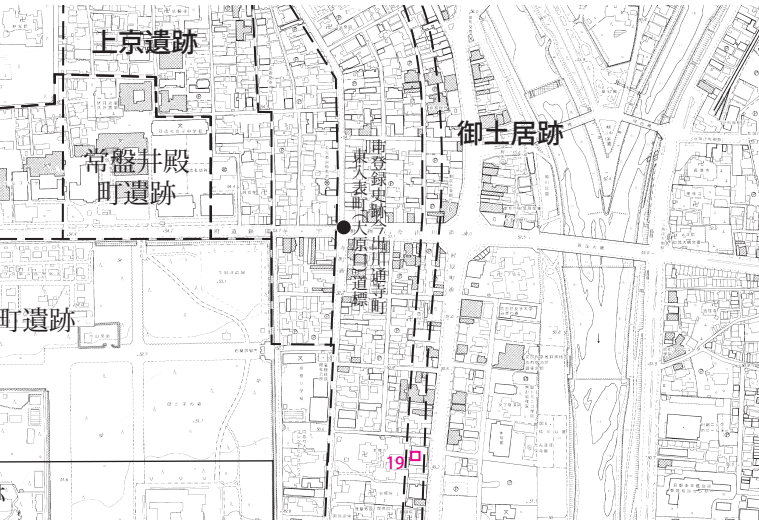

醍醐ノ森瓦窯跡
船山恵器窯跡
大深町須恵器窯跡
正伝寺須恵器窯跡
市指定名勝
正伝寺庭園
鎮守庵瓦窯跡


八幡古墳群
栗栖野瓦窯跡
元稲荷窯跡
東幡枝遺跡
図版 15
名勝円通寺庭園
史跡栗栖野瓦窯跡
円通寺瓦窯跡
南池田窯跡
南ノ庄田瓦窯跡
ケシ山遺跡
ケシ山
炭焼窯跡
幡枝古墳群
木野墓窯跡
ケシ山
古墳群
深泥池瓦窯跡


御土居跡
北野遺跡
境内経塚
北野天満宮
北野天満宮
北野製鉄遺跡
北野廃寺
馬場城跡
北野右近
北野廃寺瓦窯跡
大将軍八神社境内
平安京跡


北白川瓦窯跡
上終町遺跡
北白川廃寺
池田町古墳群
北白川追分町遺跡
北白川追分町縄文遺跡
小倉町別当町遺跡

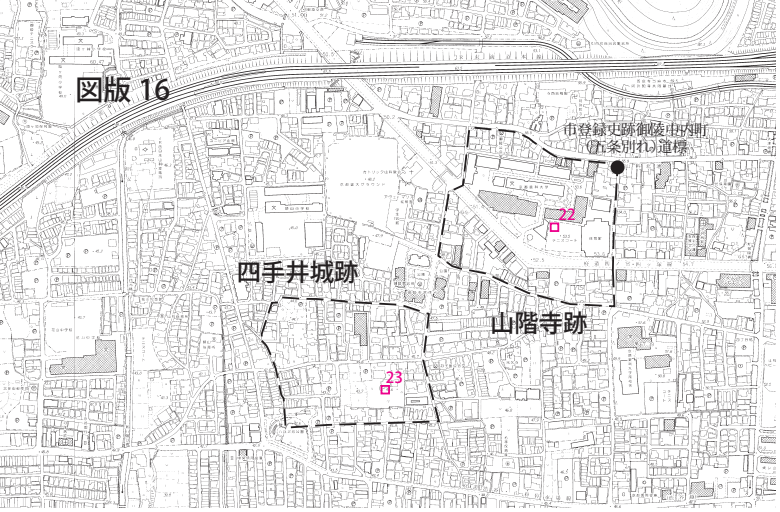

上京遺跡
新町校地遺跡
本満寺の構え跡
市指定名勝大寶寺庭園
室町殿（花の御所）跡
市指定名勝宮休庵（武者小路千家）庭園
一条室町殿跡
単堂跡（行願寺）
平安京跡

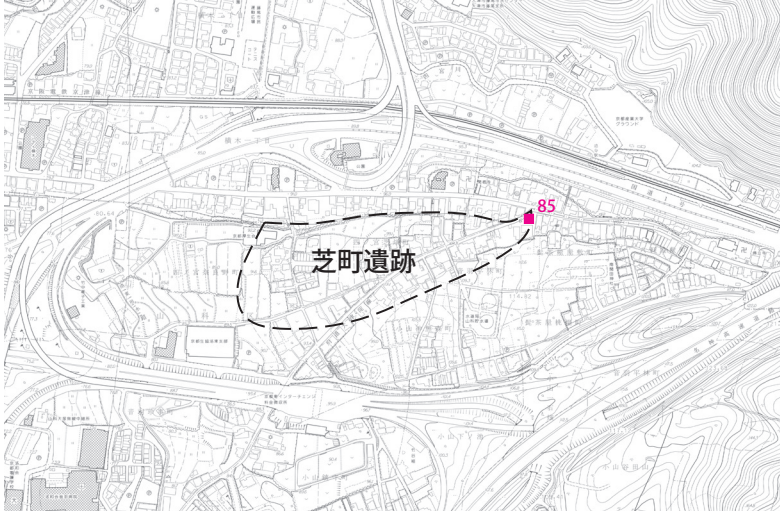

上京遺跡
常盤井殿町遺跡
御土居跡
南登録史跡今出川通寺町東入表町（六原口道標）
公家町遺跡

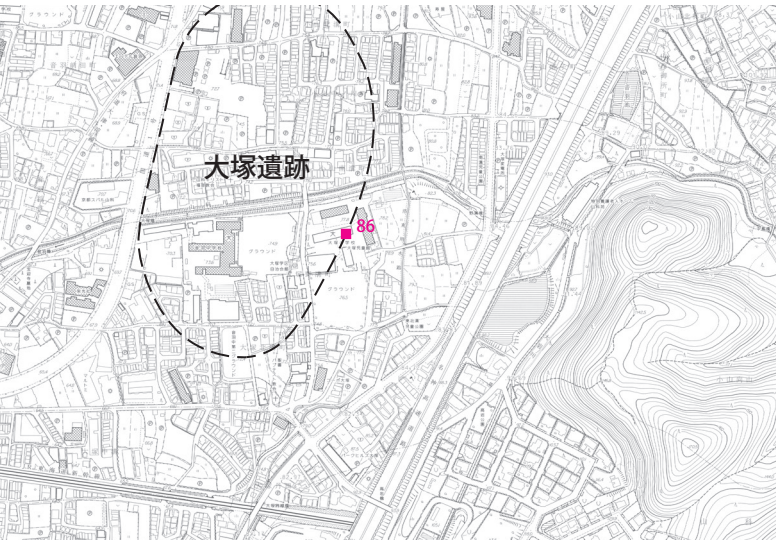

吉田上大路町遺跡
聖護院川原町遺跡
白河街区跡
史跡聖護院旧仮皇居
白河北殿跡
岡崎遺跡
名勝平安神宮神苑

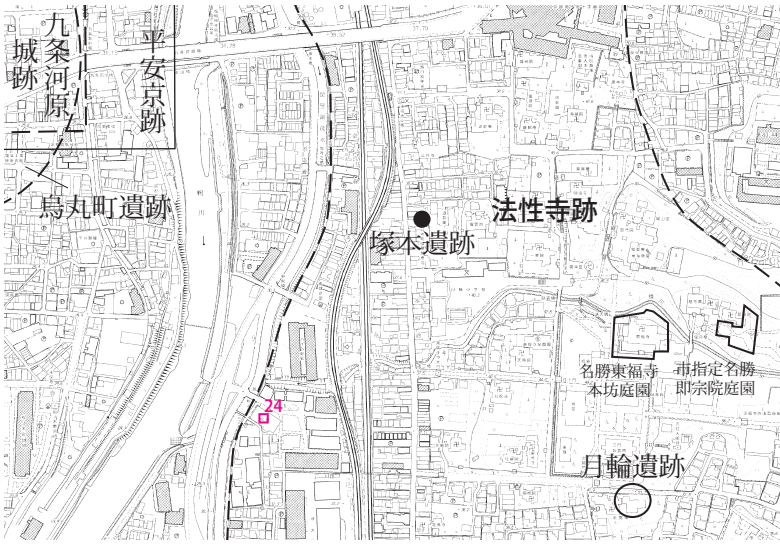

道仙窯
浅見窯
井野窯
音羽・五条坂窯跡
六波羅政庁跡
河井寛次郎記念館登り窯
方広寺跡
（馬町十三重石塔跡）
常盤町古墓
史跡方広寺大仏殿跡及び石塁・石塔
史跡方広寺大仏殿跡及び石塁・石塔
妙法院境内
鳥部(辺)野
法住寺殿跡

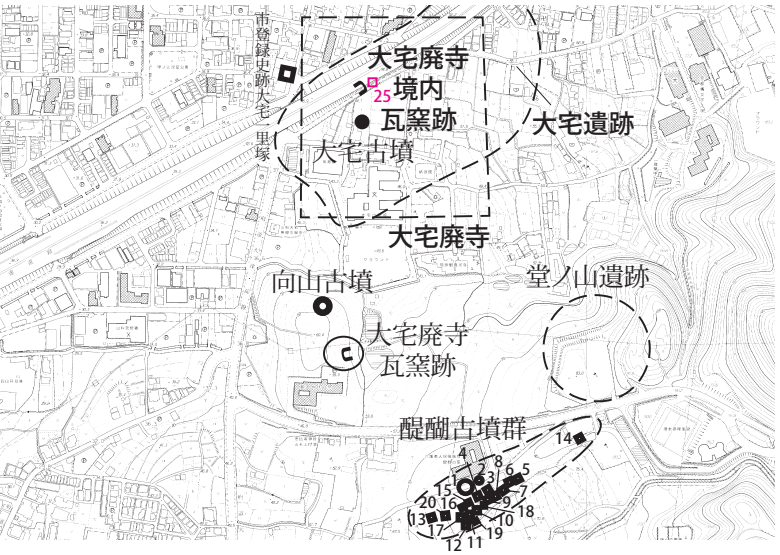
図版 16

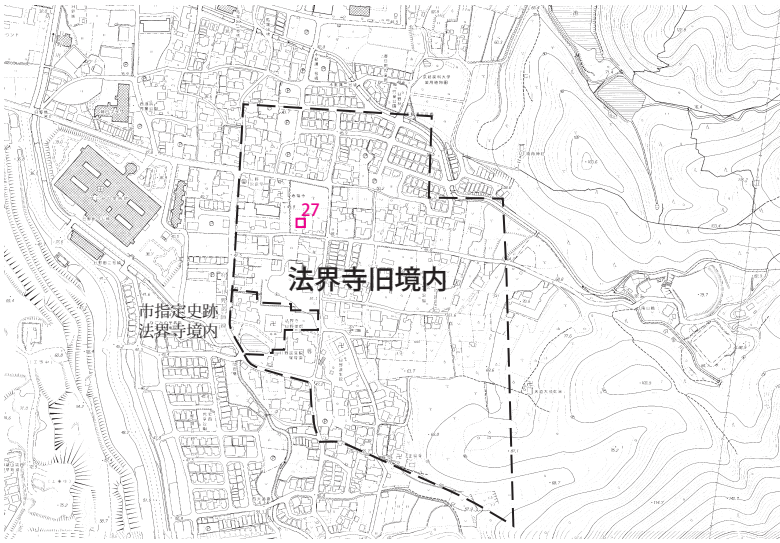

市登録史跡御陵中内町
(五条別れ)道標
22
四手井城跡
山階寺跡
23

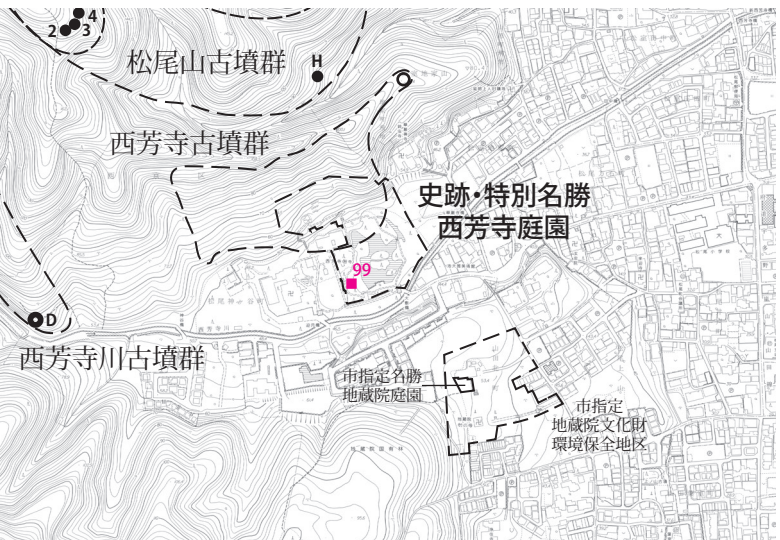

85
芝町遺跡


大塚遺跡
86


九条河原城跡
平安京跡
烏丸町遺跡
塚本遺跡
法性寺跡
名勝東福寺本坊庭園
市指定名勝即宗院庭園
24
月輪遺跡


市登録史跡大宅里塚
大宅廃寺
境内
25
瓦窯跡
大宅古墳
大宅遺跡
大宅廃寺
向山古墳
堂ノ山遺跡
C
大宅廃寺
瓦窯跡
醍醐古墳群

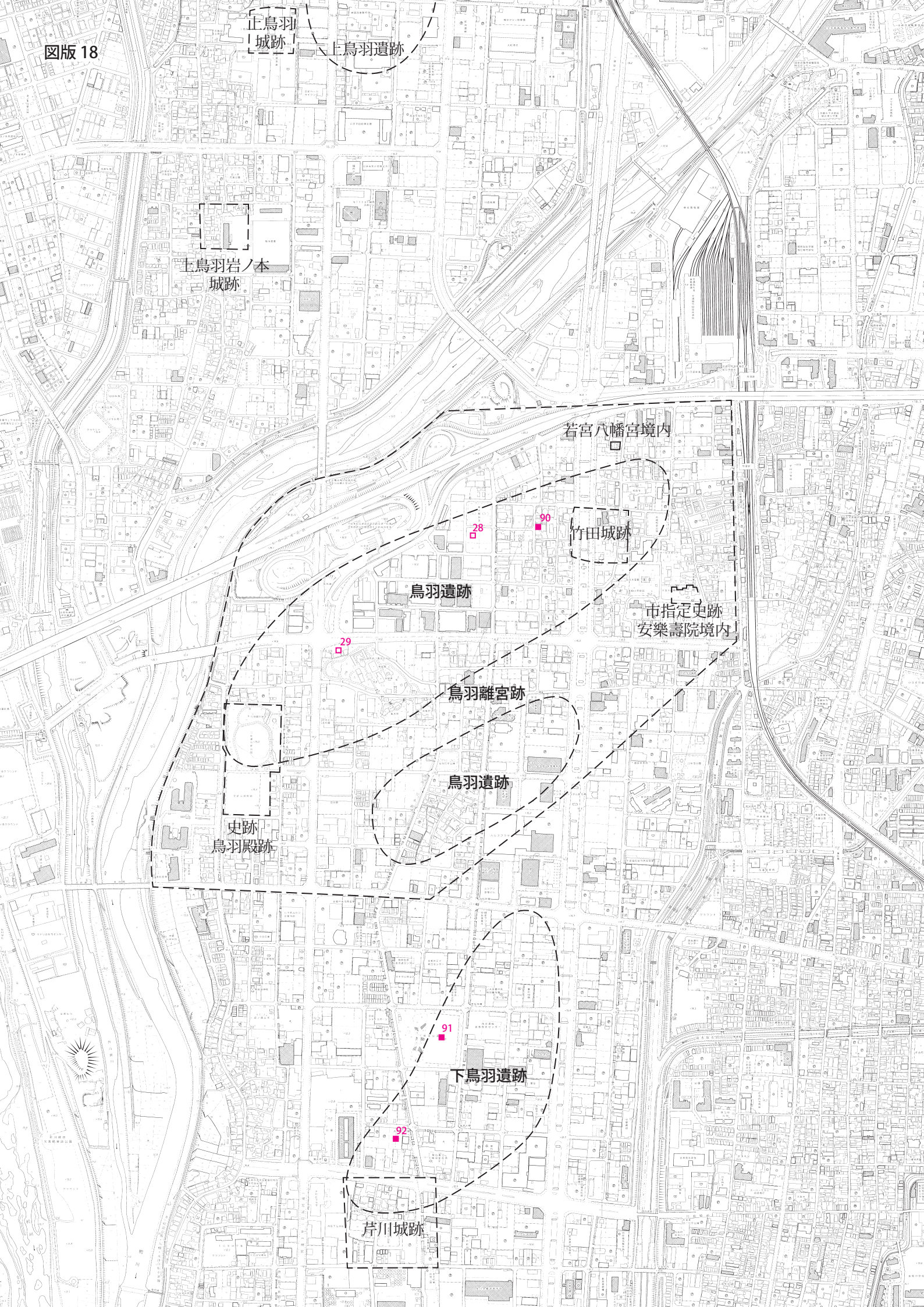

27
法界寺旧境内
市指定史跡
法界寺境内

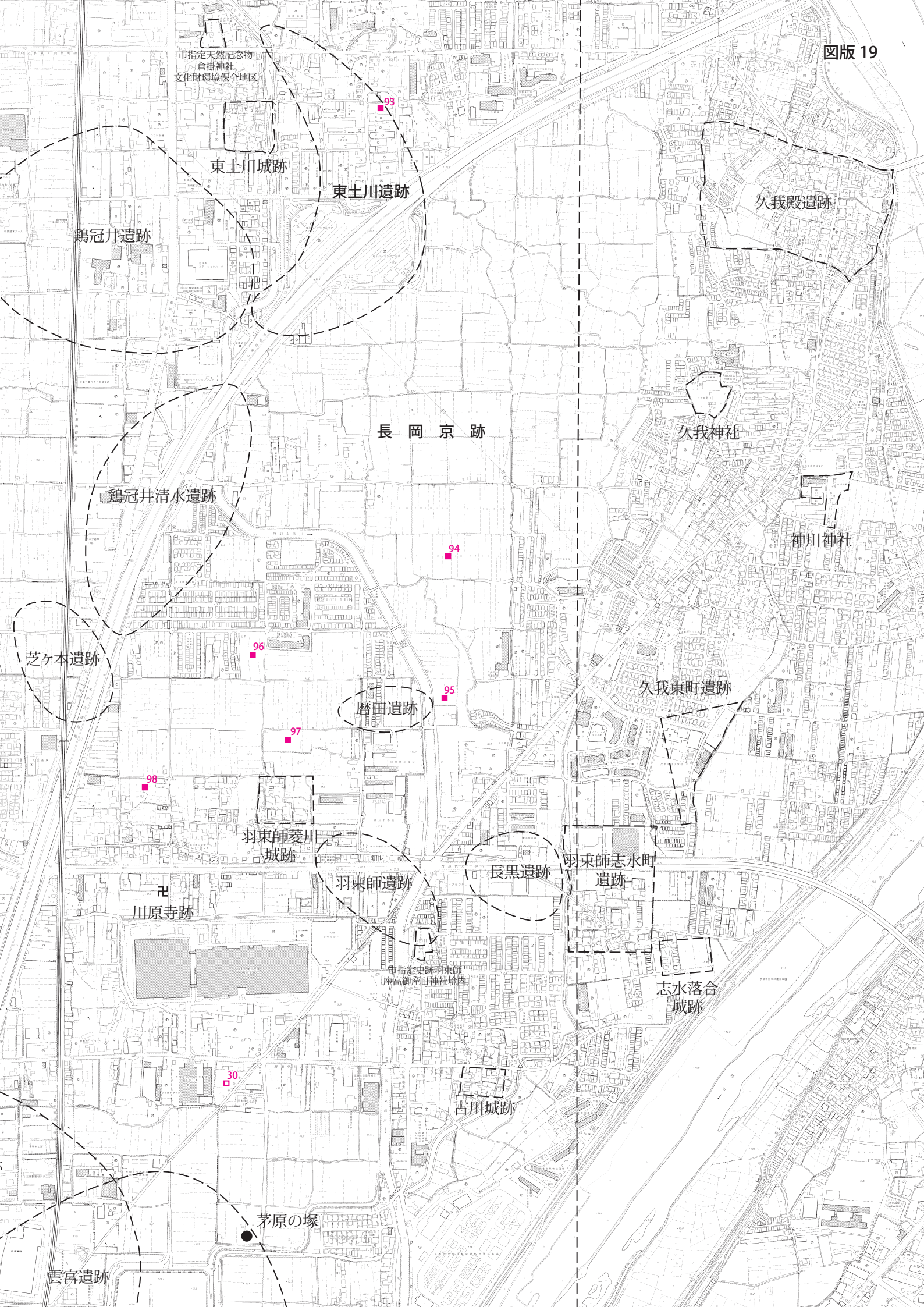

松尾山古墳群
H
西芳寺古墳群
史跡・特別名勝
西芳寺庭園
99
D
西芳寺川古墳群
市指定名勝
地蔵院庭園
市指定
地蔵院文化財
環境保全地区


上久世遺跡
102
綾戸國中神社
上久世
城跡

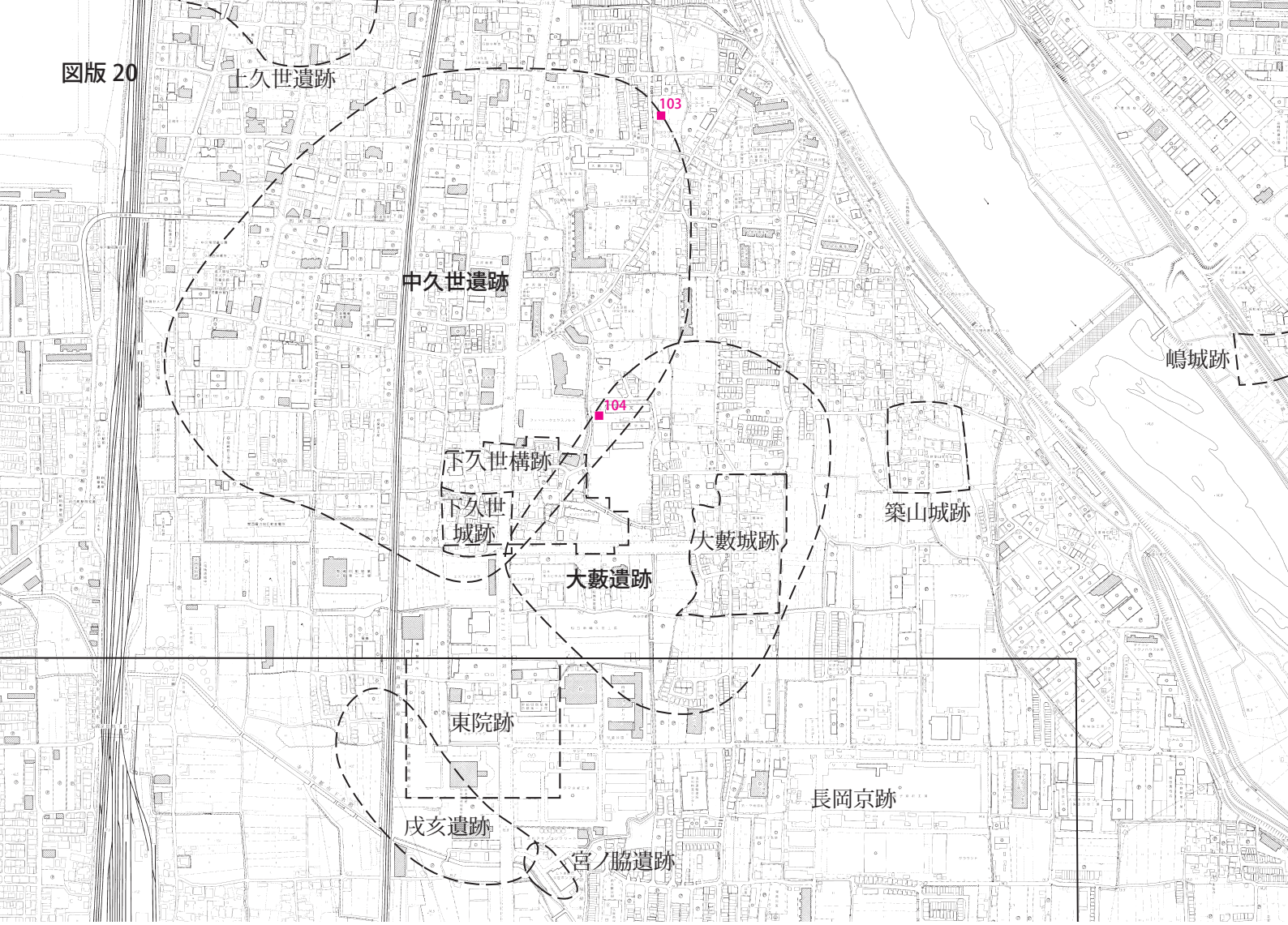

伏見城跡
桃山古墳群
（永井久太郎古墳）
福島太夫遺跡
（ ）
板橋廃寺
26
88
87
伏見城跡
金森出雲遺跡
御香宮廃寺
三淵氏伏見城跡
89
指月城跡
奉行前町古墳
泰長老遺跡
（ ）
桃陵遺跡

図版 18


正鳥羽城跡
上鳥羽遺跡
上鳥羽岩ノ本城跡
若宮八幡宮境内
28
90
竹田城跡
鳥羽遺跡
市指定史跡
安樂壽院境内
29
鳥羽離宮跡
鳥羽遺跡
史跡
鳥羽殿跡
91
下鳥羽遺跡
92
芹川城跡


市指定天然記念物
倉掛神社
文化財環境保全地区
93
東土川城跡
東土川遺跡
鶏冠井遺跡
久我殿遺跡
長岡京跡
久我神社
鶏冠井清水遺跡
神川神社
94
96
芝ヶ本遺跡
95
暦田遺跡
久我東町遺跡
97
98
羽束師菱川
城跡
羽束師遺跡
長黒遺跡
羽束師志水町
遺跡
川原寺跡
市指定史跡羽束師
座高御産日神社境内
志水落合
城跡
30
古川城跡
茅原の塚
雲宮遺跡

図版 20


上久世遺跡
103
中久世遺跡
嶋城跡
104
下久世構跡
下久世
城跡
大藪城跡
築山城跡
大藪遺跡
東院跡
長岡京跡
戌亥遺跡
宮ノ脇遺跡


史跡・特別名勝
龍安寺方丈庭園
龍安寺庭園
市指定史跡妙光寺境内
宇多野上ノ谷廃寺
鳴滝乾山窯跡
市指定史跡妙光寺境内
住吉山古墳群
市指定名勝
等持院の庭
龍安寺
御陵ノ下町遺跡
等持院旧境内
史跡仁和寺御所跡
市指定名勝
仁和寺庭園
円教寺跡
円乗寺跡
円宗寺跡
14
三瓦山古墳群
鳴滝藤ノ木町古墳
仁和寺院家跡
仁清窯跡
平安京跡
史跡・名勝
桂春院庭園
史跡妙心寺境内
名勝雙ヶ岡
双ヶ岡古墳群
史跡・名勝
霊雲院庭園
市指定名勝
雑華院庭園
花園遺跡
草木町遺跡
常盤御池古墳
仁和寺院家跡
常盤柏ノ木
古墳群
名勝雙ヶ岡
仁和寺院家跡
史跡・名勝
玉鳳院庭園
常盤馬塚古墳
史跡・名勝
妙心寺庭園
史跡・名勝
東海庵書院
庭園
史跡・名勝
退蔵院庭園



1　３区第２面　全景　（南から）



2　３区第３面　遺構検出状況　（西から）

図版22　　Ⅲ-３　寺町旧域、公家町遺跡



1　№２地点　暗渠１検出状況（南東から）



2　№２地点　暗渠１検出状況（北西から）



3　№２地点　暗渠１内部（北西から）



4　№５地点　暗渠２検出状況（北西から）



1　溝１完掘状況（西から）



2　溝２検出状況（北から）



3　溝２完掘状況及び５区西壁（南東から）

図版24　　Ⅲ-８　史跡・特別名勝　西芳寺庭園



1　６区西半及び７区全景（北から）



2　泉３湧水状況（西から）

京都市内遺跡試掘調査報告
令和４年度

発行日　２０２３年3月３１日
発　行　京都市文化市民局
編　集　京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
住　所　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町 488
TEL.（０７５）２２２－３１３０
印　刷　奥田印刷株式会社
TEL.（０７５）４４１－７０６０